

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 第二部 インタビュー（日本語訳）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-06-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀, サラン, ゲレル, ソヨ, ルマ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00000877">https://doi.org/10.15021/00000877</a>

第二部

インタビュー

(日本語訳)

## 解 説

### サランゲレル、ソヨルマ

フルンボイル市は内モンゴル自治区北東部に位置している、中国において最大の面積を持つ地方都市である。地理的に見れば、東経115° 31′ から126° 04′ まで、北緯47° 05′ から53° 20′ までのあいだに位置し、南は内モンゴル興安盟、東は嫩江を介して黒竜江省とそれぞれ隣接し、北及び北西はエルグナ河を境にロシア、西及び西南はモンゴル国とそれぞれ接している。東西630キロメートル、南北700キロメートルに達し、土地の面積は253,000平方キロメートルに至り、内モンゴル自治区総面積の21.4パーセントを占める。

紀元前200年頃の前漢朝から清朝にいたる2000年のあいだ、この地域において東胡、匈奴、鮮卑、室韋、キルギス、ウイグル、契丹、タタル、女真、モンゴルなどの遊牧民族が興亡した。豊かな資源のあるフルンボイルは、北東アジアの遊牧文化の発祥地であり、中国の北部で暮らしてきた多くの遊牧民族を育てた揺籃の地である。

フルンボイル市はモンゴル族を主体とし、漢族をマジョリティとした多民族地域である。中国の全国第6回人口調査(2010)によると、総人口は約255万である。そのうちモンゴル族が約24万人、エヴェンキ族が約29,321人、ダグール族が75,677人、マンジュ(満州)族が10万人であり、モンゴル族以外の少数民族が約26万人に達している<sup>1)</sup>。現在、フルンボイルには漢族以外にモンゴル、オロチョン、ダグール、ロシア、エヴェンキ、マンジュなど31の民族が生活しているが、ここではすべての民族を紹介することができない。今回は私たちの口述史に関連するブリヤート、バルガ、ウールドなどモンゴル系集団とエヴェンキ、ダグールなどの民族について簡単に紹介する。

## 1 インタビューに関連する民族の基本状況

20世紀前半は、フルンボイルにとって、政治的、社会的な情勢が激動して不安定な複雑な時代であった。フルンボイルの地域的特徴により、多くの民族集団と政権が頻繁に入れ替わり、政治情勢が非常に混乱し、いろいろな争いが頻繁に起きていた。当時、中国東北の軍閥、ロシア勢力、外モンゴルの新政府、日本占領期満州国など複雑な政治情勢がフルンボイルの各民族の人びとに不安な生活をもたらした。シネヘン(イミン川の支流。地図の①周辺)のブリヤートたちは、ちょうどこの時期に遷移してきたので、非常に困難で厳しい生活を過ごしていた。歴史文献にはその時代の重要な記事だけが記録され、人びとの日常生活と関連した詳しい内容は記されない。ただし、それはその時代を経験した人びとの脳裏に忘れえぬ思い出として残されている。私たちが早いうちにそ

れを取材して記録しておかなければ、その時代の一部の歴史的記憶は完全に失われ、どこにも見つからない永遠の秘密となり、この世から消えてしまうだろう。この肝要な時期に、こうした切迫した責任が課された私たちは2009年夏からフルンボイル市のエヴェンキ族自治旗（以下、エヴェンキ旗と略す）、新バルガ右旗などに赴きフィールドワークをおこない、高齢の方がたにインタビューし、口述資料を集めはじめた。最初はエヴェンキ旗のシネヘン・ブリヤートたちに対してインタビューをした。もちろん、少数のバルガ、ウールドなどのモンゴル系の人びと、エヴェンキ、ダグールなどの民族の高齢の方がたもインタビューの対象とした。

歴史記述と高齢者の話によれば、シネヘン・ブリヤートは20世紀初めにロシアから移動してきた。第1次世界大戦後、ロシアで「十月革命」が興り、やがてロシア帝政が倒れ、ソ連の新政権が成立された。それに伴い、ロシア国内には内戦が勃発し、非常に混乱した社会秩序が続いた。ロシア革命に敗れたロシア帝政の残留勢力がバイカル湖の周辺に遊牧していたブリヤートを襲撃し、また新政権へ武力抵抗をおこない、ブリヤートは戦争に巻き込まれた。ブリヤートはそういった内戦の混乱から避難するにあたって、官僚、宗教者、インテリ、地方勢力、長老たちが生きる道をさぐり、さまざまな方法を考えていた。一部のブリヤートは混乱する不安な場所から逃げ出し、故郷から移動する道を選んだ。トンケンのブリヤート、セレンゲのブリヤートの一部はモンゴルへ避難し、モンゴルのセレンゲ県、フブスグル県に移動してきた。アガ草原に暮らしていたアガ・ブリヤートの一部は国境を越え、フルンボイルのシネヘンに避難してきた。モンゴルへ移動したブリヤートは4,600戸に上り、16,000人に達し、セレンゲ旗、マラガイ・ウーラ旗、ハルハ・ゴル旗、オノン・ゴル旗、オルジーン・ゴル旗、ユルォ・ゴル旗という6つの旗を構成した。アガ地方のドゥマ〔草原議会〕に管轄されていたブリヤートの一部は、エルグナ河、ダライ湖、メネン草原、ハイラル河のあいだで遊牧していたため、その一部はフルンボイルの領域内で数年間居住していた。1918年、アガ草原の官吏であるバザリーン・ナムダグをはじめとする数人が移住について相談するためにフルンボイルにやって来て、当時のメイレン・ザンギ庁〔清朝の役所。メイレンは「梅倫」で防衛隊長、ザンギは「章京」でソム長。ソムについては以下の訳注参照〕の許可を得て、シネヘン河、イミン河などを調査した、と言われている<sup>2)</sup>。

ブリヤートたちはフルンボイルに移動してきてまもなく、1921年8月末、フルンボイルのメイレン・ザンギ庁から公文書が出され、シネヘン草原をブリヤートに分け与え、ブリヤート旗を成立させ、正式にフルンボイルに所属させた。当初、当該旗は約170戸、700人をふくんだ4ソム〔旗の下位単位〕によって構成された1つの行政単位であった。そして、ブリヤートたちはフルンボイルのメイレン・ザンギの管轄下に入り、中国に属するようになった。その後、ブリヤートたちは逐次増え、数年間で、シネヘン草原のブリヤートは約800戸、3,000人まで増加した。さらに、1929年、シネヘンのブリヤート旗

は東、西の2旗、8ソムに分けられた。当時、ブリヤートは次第に増え、約900戸、4,000人となった。現在、シネヘンのブリヤートは6,000人に達したと言われている<sup>3)</sup>。

現在、ロシア、モンゴル、中国にはおよそ50万人のブリヤートが国境をまたがって暮らしていると言われている。ブリヤートのなかには多くの「ハラ」と呼ばれる氏族集団がある。3大「ハラ」として「ボラガド」、「イキラド」、「ホリ・トゥメド」がある。彼らを、バイカル湖の周辺に暮らす地域によって西ブリヤートと東ブリヤートという2つに分ける習慣がある。ボラガドとイキラドは湖の西側と西南側で遊牧していたため、西ブリヤートと名づけられた。ホリ・トゥメドはバイガル湖の東側、東南側で遊牧していたため、東ブリヤートと呼ばれていた。現在、分散して暮らしている地域によって、それぞれトンケン・ブリヤート、アガ・ブリヤート、エレクト・ブリヤート、ボーハン・ブリヤート、セレンゲ・ブリヤート、バルガジン・ブリヤート、ホリ・ブリヤート、ハルハ・ブリヤート、シネヘン・ブリヤートと呼ばれるようになった<sup>4)</sup>。

バルガはモンゴル族の主な部族の1つである。「バルガ」という言葉の由来と意味に関する興味深い解釈や研究は多い。バルガのあいだで伝承されてきた物語によれば、「上古のバルガ人はオノン川とヘルレン川流域、フルン湖とボイル湖の周辺で遊牧し、その後、バイカル湖周辺へ移動し、そこに居住していたホリ・ブリヤートと合流したことで、バルガ・ブリヤートの集団が構成された。バルガとブリヤートは血縁関係を共有する同種の一部族である」。「私たちのバルガはモンゴル皇帝の母方祖父の一族である。母アランゴアは私たちバルガの子孫である」とモンゴル族のチンギス・ハーンの黄金家族と血縁関係を持っていることを強調する<sup>5)</sup>。一方、学者たちは、バルガの由来を7世紀に書かれた中国の『隋書』及び『旧唐書』の記載まで遡り、それが「拔也古」に由来したとしている。これはバルガに関する最古の記録であると判断されている<sup>6)</sup>。近年においてもまたもちろん、バルガの由来に関するさらなる考察はおこなわれている<sup>7)</sup>。また、バルガの由来に関する伝説や神話も多く伝承されている。たとえば、『ブリヤート・モンゴル略史』には、バルガはハクチョウ仙女に由来したという伝説が記されている<sup>8)</sup>。部族の起源を鳥や動物と関連させて考えるのは古代遊牧民の思考であろう。

バルガがハクチョウに由来したという「ハクチョウ物語」は、バルガ、ブリヤート、オイラドなどモンゴル系集団の中でよく伝えられている。この物語が伝承されたため、バルガ、ブリヤートたちはハクチョウが空を飛んでいくたびに、食べものの初物を捧げる習慣があり、さらに結婚式には、花嫁をハクチョウに拝礼させる習俗がある。

「ワールド」に関して、フルンボイルの他の諸民族は「イミンのワールド」や「ガルダン・ボショクトのワールド」と呼んでいた。フルンボイルでは各集団が居住地の名称によって相互に名付けられていることは興味深い。たとえば、「シネヘン・ブリヤート」、「イミン・ワールド」、「モリンダワー・ダグール」などである。イミンのワールドは「4オイラド連合」のジュンガル部のガルダン・ボショクト・ハーンに属していた。17世紀

末、ジュンガルが戦争に敗れ、さらにガルダン・ボショクト・ハーンが死亡したことでウールドたちは解散し、一部が新疆に戻り、一部がハルハ河に沿って、次第にフルンボイルに移動してきた。清朝の康熙42（1703）年に、初めてウールド旗が成立され、ジャサク・ノヤンという官職名が与えられた。ウールドはフルンボイルに移民してきた当時、約180戸、450人しかいなかった<sup>9)</sup>。私たちのインタビューによれば、現在フルンボイルには約750人のウールドが暮らしている<sup>10)</sup>。フルンボイルのイミン・ソムに暮らしているウールドのなかには、ソーハン、ガルヂド、ポーチン、オソド、シラスなど22の氏族集団（クラン）がある。私たちは、イミンのウールドの10数人をインタビューしたが、今回は2人の事例にしぼった。ウールド全般に関する調査や考察はさかんにおこなわれているものの、当地フルンボイルのイミンにおけるウールドに関する調査はまだ少ない。わずかに、2008年にモンゴル語で出版されたハダ・ラジドマ著『イミンのウールドたち』でイミン・ウールドの歴史、文化、生活習慣などが紹介されている。また、フルンボイルのウールド研究会が編集した『フルンボイル・ウールド文史資料』にも、フルンボイルに居住するウールドの歴史と文化が考察されている<sup>11)</sup>。

中国のエヴェンキ族は内モンゴル自治区フルンボイル市エヴェンキ旗、ホーチン・バルガ旗、モリンドワー・ダグール族自治旗、エルグナ右旗、オロチョン族自治旗、阿榮旗、扎蘭屯市、ハイラル市などに分散して暮らしている。調査によると、約3万人がいる<sup>12)</sup>。エヴェンキ族の名称はさまざまである。1958年、内モンゴル自治区人民委員会が「エヴェンキ」を公式な名前として公開するまで<sup>13)</sup>、エヴェンキのことは、各民族がそれぞれの慣習にしたがって名づけていた。たとえば、モンゴル族はそれを「ハムニガン」と呼んでいた。現在、モンゴル国ではまたこの名称が使われている。またマンジュ族はそれを「ソロン」と呼んでいた。ロシアは「ツングース」あるいは「ヤクート」と呼んでいた。エヴェンキは自称である。エヴェンキは、むかしから狩猟をおもな生業とし、森林のなかで暮らしていたため、自分を「林の中で暮らす人」という意味でエヴェンキという名前をつけたと高齢者が話していた<sup>14)</sup>。彼らは「林中百姓」と言われるようにそもそも森林のなかで暮らしてきたが、歴史の発展につれて社会と環境などの変化によって、エヴェンキ族の各集団が分散され、それぞれ牧業、農業、狩猟を経営するようになった。しかし、いまでも狩猟の生活から完全に離れてはいない。エヴェンキたちは長いあいだ離ればなれになって、たがいに連絡しなかったため、言語、文化、生活習慣などの面では大きな差異が生じ、現在は相互に交流することが難しくなっている。エヴェンキ語はアルタイ諸語マンジュ・ツングース語のツングース系に所属する。エヴェンキ族には自分たちの文字がない。遊牧で暮らす人たちはモンゴル語を使い、農耕で暮らす人たちが漢語を使っている、とあってよい。ソロン、ヤクート、ハムニガン、ツングースとさまざまな名称が付けられてきた彼らは、生業によって、「狩猟エヴェンキ」、「牧馬エヴェンキ」、「トナカイ民エヴェンキ」、「牧民エヴェンキ」と呼ばれ、地理的位置によっ

て、「上エヴェンキ」、「下エヴェンキ」と区別され、さらに居住地名によって、「ホイのエヴェンキ」、「オルグヤのエヴェンキ」、「メルゲルのエヴェンキ」と分類されている。また、ソロン、ヤクート、ハムニガン、ツングースのいずれもエヴェンキ族を指しているため、彼らの歴史、言語などに関する研究はその歴史を明確にすることに重要な意味をもつ。しかし、本書の目的はそうした研究ではなく、ブリヤート族の移動に関連した口述史である。

ダグール族はバイカル湖から東、興安嶺、黒竜江流域の広い草原に居住していた。17世紀末、黒竜江流域のダグールたちは清朝の軍事的な必要性やさまざまな原因によって、黒竜江を渡って、南に移動し、ノン江の流域へ引越してきて<sup>15)</sup>、清朝の八旗に所属した。清朝は雍正10(1732)年、ハルハ河、フルンボイルなどの辺境地区を守るため、プトハ地区からソロン、ダグール、バルガなどの集団を遷移させ<sup>16)</sup>、ダグールをザラムタイ河流域に居住させた。しかし、移住してきたダグールは、寒冷なザラムタイ草原の気候に慣れず、農業ができなかったため、10年後の乾隆7(1742)年に故郷プトハへ戻る許可を得た。そして、大勢のダグールたちが故郷に戻ったが、少数のダグールは様々な理由で故郷へ戻らず、ザラムタイ草原に残った。彼らは現在のハイラル地区に暮らすダグール族の先祖である。現在、ダグールたちは内モンゴル、黒竜江、新疆など3つの省・自治区に分散している。内モンゴルのダグール族は主にフルンボイルで暮らし、「ハイラル・ダグール」、「モリンドワー・ダグール」とも分類されている。ハイラル・ダグール族は昔から自分を「ダグール・モンゴル」と呼び、モンゴル族の生活習慣の影響を受け、さらに、モンゴル語を使っている、とインタビューに応じた高齢者たちは語った<sup>17)</sup>。また、ダグールは4つの地域集団に分かれていると言われている。2010年の国勢調査によると、中国国内のダグール族の人口は132,394人にのぼり、そのうち、フルンボイルには75,672人がいる<sup>18)</sup>。フルンボイル市のダグール族は清末、民国初期に移住してきた。現在、フルンボイルのモリンドワー・ダグール族自治旗、エヴェンキ旗、阿榮旗などで暮らしている。モリンドワー自治旗は中国におけるダグール族の中心地となっている。言葉はアルタイ諸語のモンゴル語に属する。ダグール族は漁業、牧業、狩猟などの伝統的な生業を営んでいる。

「ダグール」という呼び名は「宮殿」を意味する、とダグール族の高齢者が説明していた。ダグール族の先祖は定住して農耕をしていたため、「宮殿のある人びと」と呼ばれていた、という<sup>19)</sup>。ダグール族の起源について、物語、神話、伝説が多く伝えられてきた。モンゴル族を含む北の遊牧民のうち、ダグールには「ハクチョウ仙女」と「若い獵師」の子孫であるという伝説以外に、女真族の子孫、モンゴル族と同源、タタル族の子孫、唐時代の室韋の子孫などの説がある<sup>20)</sup>。インタビューに応じたある高齢者は、「昔はダグールという民族がなかった。ブリヤート・モンゴル、ウールド・モンゴルと言われているように、ダグール・モンゴルというモンゴル族の1つの氏族であった。1950年代に、

独立的な1つの民族になった。今、このように話すと、私たちダグール人たちは嫌がるが、実は、独立的な民族ではなかった。私たちは歴史を否定してはいけない。私たちはメルセ（漢字名は郭道甫）の時代まで（1930年代まで）は、ダグール・モンゴルとして活躍していたのだ」と語った<sup>21)</sup>。また、ある高齢者たちは、ダグール・モンゴルという呼称に反対していた。「私たちは女真の子孫であり、モンゴル族より前から独立的な民族として活躍していた。ただし、人口が少なかったため、仕方がなく、モンゴル族に所属した」と話していた<sup>22)</sup>。今回、私たちはエヴェンキ旗の中心地バヤントホイ鎮（南屯）とバヤンチャガン・ソムに暮らしているハイラルのダグールと呼ばれる数人の高齢者にインタビューしたが、本書にはブリヤート人について言及する1人の語りを採録した。

## 2 口述史にあらわれた歴史的事象

私たちがインタビューした高齢者たちは、心から私たちの取材に応じ、自らの考えや物語を語ってくれた。私たちはその本音を保つため、できるかぎり修正を加えずに記録した。ただし、「これを記録する必要がない、私がただ話しただけ」といった求めに応じて、インタビュー当時に記録しなかった内容もある。私たちは、高齢者たちを1人ずつ2、3度にわたりインタビューをし、前回の記録内容を確認、なかったものを加え、最後に、本人に読んでもらった。ある高齢者は、前回に本人が話した内容を読んだとき、「この内容を削除しよう、記す必要がない」と言い、私たちは言われた通り、その内容を削除したこともある。したがって、ここでいくつかの点に関して少し説明を加える必要があるだろう。

たとえば、日中戦争について、歴史文献にさまざまな資料が残されているが、戦時中の両国の庶民レベルの友好往来や親和関係について記述したものは、中国ではほとんど見つからない。しかし、高齢者たちは興味深い内容を語ってくれた。たとえば、日本の敗戦後、逃げ出した日本兵士が牧民の家に入ってきたとき、心を痛め、「同じ人間の子でしょう」と思い、追い出さず、負傷を治療したり、日本人が捨てた子や残された孤児を養子にしたりしたこと、あるいは、戦時に日本に留学した学生たちが生活などで困っていたとき、日本の庶民が関心を寄せ、できるかぎり助けていたこと、などがある。また、日本のスパイという罪を着せられると心配して、長年語っていなかった細かい生活史を高齢者たちは隠さずに話してくれたが、記録することは断った。私たちは本人の意を尊重してそれを本書に記してない。文化大革命の傷がいまだに消えてない証拠であろう。

また、日本占領期において、日本人がブリヤート人に特別待遇を与えていたということについて、ダグール、エヴェンキ、ウールド、バルガなど的高齢者たちは、日本人がブリヤート人に対して、特別な待遇を与え、軍事や政府に高官として採用し、細菌戦においてもブリヤート人に感染させないように、また日本が参戦した後も、ソ連と日本の



交戦から避難させるために、ブリヤート人をホーリン・ゴル [ホーリン川] へ移住させたと言っていた。この件に関して、かつての満州、中国、モンゴル、日本の資料に特別に記述されたものは見つからなかった。細川呉港が、日本占領期のフルンボイル時代を自ら経験したことのあるダグール族のソヨルジャブをインタビューして書いた本（回想録）の中で、ロシア革命のとき、バイカル湖の東からフルンボイルへ逃げてきたブリヤートと日本軍の関係に関して、「日本軍がそのブリヤート族を援助していた」と記している<sup>23)</sup>。これらの物語は、一般の人びとのなかでは日常茶飯のような話であるが、実はその奥には歴史的に注目される資料が隠されていると思われる。この件について、シネヘンのブリヤートは非常に慎重であって、できるかぎり自分とは関係のないような態度を取っていた。ある高齢者に聞いたところ、「日本人は私たちに特別な友好的な態度をもっていたはずだ。しかし、それは私たちを利用するためであっただろう。彼らの戦略だっただろうね。シネヘンのブリヤートはロシア語に堪能であったため、当時、それが彼らに非常に有益であっただろう」というのである<sup>24)</sup>。「当時のブリヤートのあいだでは医療に優れたラマ医者がたくさんいたため、細菌による疫病を予防することができ、ブリヤート人は疫病に感染されなかった」と説明していた。また、「日本占領期において、フルンボイル地域にとっては、シネヘンのブリヤート人と日本人は同じく外部から入ってきた人びとであったため、相互に依頼する必要があっただろう<sup>25)</sup>」と話した。さらにある高齢者は、「私たちブリヤート人は日本人と同じく非常に勤勉で苦難に耐える人びとであったため、日本人が関心を寄せていたかもしれません。さらに言えば、日本は日露戦争の時からロシアの情報を集めて観察し、彼らの侵入を警戒することを重視していた。ロシアから来た私たちブリヤートを誘い込むことは、ロシアの情報を集め、侵攻を防止する有益な方策であったにちがいない<sup>26)</sup>」、と主張した。実際、ロシアは、帝国日本が植民地を拡大しようとする長期戦略において敵であって、「大陸政策」というアジア大陸へ侵出するうえでの最大の障害物であった。そして、日本は清朝滅亡後の満州を守り、満蒙を独立させるという名目で、モンゴル人を懐柔し、王公官僚、ラマ層と積極的に連絡し、ロシアの侵略から守るための回廊を作る目的を持っていた<sup>27)</sup>。易顕石等中国の日本研究者が議論したように「中国の東北地区と朝鮮半島は資源豊富であったため、日口両国にとって軍事的な戦略の要地であり、地理的にも両国と隣接していたことから、当然、この地域は両国が略奪する「肥肉」になっていた<sup>28)</sup>」だろう。そして、1936年6月、日本は、「防国策」に「ソ連を第一敵対国」と決定した。ここから見ると、ロシア通であり、ロシア語に堪能な、ロシア革命による内戦から避難してきたシネヘンのブリヤートは確かにロシア事情に関する最高の「スパイ」、「偵察者」、「防衛者」であったにちがいがなかったろう。ロシアと深い関係を有するシネヘンのブリヤートを懐柔することは、日本にとっては必要であったし、可能でもあっただろう。私たちは、口述史を通じて、社会史や正史で無視された細かい部分や欠損を一部なりとも補うことができる、と期待し

ている。

細菌戦に関して、ノモンハン戦争のとき、日本軍がハルハ河にペスト菌を投入したという情報はあっても [田村良雄の回想が知られているものの、中国帰還者連絡会『新編三光』(カッパブックス, 1982) や同編『完全版三光』(晩聲社, 1984) で彼はハルハ河には言及していない], 細菌に感染したという住民の語りはほとんど記述されてこなかった。今回のインタビューを通じて、このペスト菌に関して民間に伝承されていた情報をつかむことができた。

また、歴史的人物に関して、たとえば著名な学者であるアグワン・ハンボ (1854-1938) に関する情報も民間に伝承されていたとは、インタビューの当初、思いもしなかった [日本では棚瀬慈郎『タライラマの外交官ドルジーエフ』(岩波書店, 2009) で知られている]。彼には自伝とそれに関連した「蒙蔵条約 (モンゴル・チベット条約)」<sup>29)</sup> があると、学界では知られていたが、そのほかに、自身の日常を記述した「日誌」<sup>30)</sup> があるということは何れも知らなかった。それに関する詳細な過程と情報は本書のインタビューで初めて発見されている。したがって、学術研究にとって重要な情報を提供できたと考えられる。「ブドゥーン・リンチン」[内モンゴルでは一般に大きな、成人の、という意味で肯定的にもちいられ、モンゴル国では一般に太いあるいは粗野なという否定的なニュアンスでもちいられる。両義的であるために、訳さずにそのままでもちいることとする]として知られたリンチンドルジ、および彼がシリングルにおいて樹立した「ブリヤート旗」に関する内容は、内モンゴルの近現代史においてほとんど知られていなかった非常に興味深い情報であると考えられる。当該旗の成立と解散によってさまざまな苦難を経験したブリヤートは、文化大革命等のいろいろな政治的・歴史的悲劇によって、当時の歴史を公的に語ろうとはしなかったし、語る必要がない、あるいは語る機会がなかっただろう。今回のようなインタビューをしていなければ、当時の歴史の詳細な部分は、時代の流れによって消失し、だれもどこからも発掘できなくなり、永遠の秘密として残ってしまっただろう。リンチンドルジとパンチェン・ラマ [本書では通例にしたがってパンチェン・ラマと訳出したが、現地の人びとは、4大活仏のうちパンチェン・ラマのことをパンチェン・ボグドあるいは単純にボグドと呼び習わしている], リンチンドルジと傅作義、リンチンドルジと徳王などの相互関係は内モンゴルの近現代史において注目すべき資料であろう<sup>31)</sup>。

9世パンチェン・ラマであるチョジニマ (1883-1937) は 1926年から1935年まで内モンゴルの各盟や地域において布教し、1931年秋、当時フルンボイルの指導者の1人であった凌陞 (1886-1936) の要請によってハイラルへ足を運び、バルガ各旗及びガンジュール寺に行き、巡礼者に功德を与え、またシリングル、ウランチャブ、アラシャンなどの地域に行った、という記録がある<sup>32)</sup>。しかし、その布教のあいだ、リンチンドルジが仏教に帰依し、またパンチェン・ラマの援助を受け、シリングルでブリヤート旗を成立

したこと、さらにパンチェン・ラマの財産として数千頭の家畜をフルンボイルから放牧してきたこと、パンチェン・ラマに随行したブリヤートのラマたちの運命等々の子細は歴史として記述されてこなかったが、民間に伝承され保存されていたのである [とくにツォクティン・ジャムス氏のインタビュー参照]。したがって、この口述資料は、近現代史、宗教事情史、宗教習俗、軍事・政治史を研究するに不可欠な補助資料になると確信する。

### 3 口述史に見る社会的特徴

私たちは、口述史の課題をもって、2009年から2013年かけて4回にわたり100人以上の人びとと会い、50人くらいの高齢者にインタビューをした。そのうち、ブリヤート、バルガ、ウールドなどのモンゴル系の高齢者以外に、エヴェンキ、ダグール、オロチョンなど的高齢者も含まれている。そのなかから24人の資料を選び、『20世紀におけるブリヤート人たちの移動：中国内モンゴル自治区フルンボイルにおける口述史』として準備した。本来はシネヘンのブリヤート高齢者に関する口述史を蒐集する計画だったが、フルンボイルに初めて赴き、フィールドワークをおこなうなか、「民族」と「氏族」構造の多様性の影響を考え、調査対象を広げた。多民族が雑居する現実には、多民族的中国において奇妙なことではない。私たちが調査したことのある新疆、青海、甘粛、および内モンゴルの各盟や旗で同様に諸民族が雑居して暮らしている。しかし、フルンボイルにおける諸民族間には、明確な民族区別、氏族区別などが存在しているものの、たがいに非常に友好的関係をもって生活している点がとりわけ興味深く、「和譜的」（調和的）な多民族的家族のように思われた。たとえば、私たちがインタビューした1人の高齢者は、自分の家庭に関して以下のように紹介している。「私の妻と子どもたちはエヴェンキ、私は半分のダグール、半分のモンゴルの血をもっている。私の父はダグールで、母はモンゴルであった」と自分の出自をはっきり説明していた。もう1人は、「私は半分のウールド、半分のブリヤートの血をもっている。私の息子は4分の1のウールド、4分の1のブリヤート、4分の1のダグール、4分の1は混血である」というように自分の出自を説明していた。また、ある高齢者は「夫はホルチン、私はバルガ、4人の子どもがおり、長女の夫はエヴェンキ、次女の夫はダグール、長男の嫁は漢人、次男の嫁はブリヤートです」と紹介した。

家族全員は各民族および氏族によって構成されているが、エスニック集団間の差別はまったくないように感じられた。この点は、他の多民族的地域と異なっているのではないかと思われた。こうした理由でブリヤートだけではなく、できるだけ各民族の方がたを訪問するようにした。

もう1つの興味深いことは、私たちがインタビューした高齢者の中で字を読めない人

がほとんどいなかった点である。彼らのほとんどは子どものときに日本語を学んだことがあった。このような事情は他の地域ではほとんど見られない。なお、インタビューを受けた高齢者のなかで最長老は1912年生まれの101才で、最も若い方は1945年生まれの68才であった。本書の内容は、ここに掲載した24人の個人史にとどまるものではなく、貴重な歴史的証言であることを確認するため、私たちは再び現地に赴いた。最後の追加調査のとき、ある高齢者はすでに亡くなられており、またある高齢者は外出中だった。それ以外の人びとには本書の原稿をチェックしてもらうことができた。彼らの誠意に深謝する次第である。

今回のフィールドワークを支援してくださった、フルンボイル市エヴェンキ旗土地管理局の局長ソーハン・トゥムル、中央民族大学修士課程在籍中のホワーサイ・バイガル、『民族文学』雑誌社編集者であるムンフチェエグらに謝意を述べたい。彼らの支援があったからこそ、私たちの仕事は順調におこなわれた。

サランゲレル（中央民族大学教授）

ソヨルマ（フルンボイル大学教授）

於日本国大阪国立民族学博物館

2013年初冬月吉日

## 注

- 1) <http://www.hljbrjsw.gov.cn/Index.html>（検索した日2013年11月2日）
- 2) Huwasai, W. Dulma, 2012 *Sineken-ü mör*, Öbür mongyol-un soyol-un keblel-ün qoriy\_a
- 3) 2009年7月14～24日にフルンボイルのエヴェンキ旗においておこなったフィールドワークによる記録。
- 4) 2012年11月20日、ウランバートルでモンゴル国国立大学教授ブリヤート人であるガントクタホをインタビューした記録。
- 5) 2012年8月15日のインタビュー記録。
- 6) 紀元636年から656年の間に編纂された『隋書』にあらわれた「拔也古」と、紀元940年から945年の間に編纂された『旧唐書』にあらわれた「拔也古」に依拠したと思われる。
- 7) Sh. Sungdui, 2005, *Erten-ü barγu yasutan*, Öbür mongyol-un soyol-un keblel-ün qoriy\_a, p. 9.
- 8) Bodungud. Abida, 1982, *Büriyad mongyol-un tobči teüke*, Öbür mongyol-un soyol-un keblel-ün qoriy\_a, pp. 4-5.
- 9) Chamhad. Rabjidma, 2008, *Yimin-u Ögeledcüd*, Öbür mongyol-un soyol-un keblel-ün qoriy\_a, p. 9.
- 10) エルデン、ノロヴスルン、ラジドマなどのウールドの高齢者をインタビューした記録。彼らの人口は国勢調査にも記されているが、彼らは独自に統計をとっている。
- 11) Hölün-Buir ögeled sudulul sudulgan-u neihemlig, 2008, *Hölün-Buir ögeled-ün soyol teüke-yin material*, Öbür mongyol-un soyol-un keblel-ün qoriy-a.
- 12) 涂格敦・林娜他 1988『鄂温克族資料選編』内蒙古人民出版社、第39頁。

- 13) 涂格敦・林娜他 1988『鄂温克族資料選編』内蒙古人民出版社, 第39頁。1958年3月5日, 内モンゴル自治区人民委員会第(5)字公文書。
- 14) 2010年8月16日のインタビュー。
- 15) 満都爾岡 1991『達斡爾族』民族出版社, 第2頁。
- 16) 中国国家民族事務委員会『民族問題五種叢書』修訂編写組 2008『達斡爾族簡史』民族出版社, 第3頁。
- 17) 2010年7月28日のインタビュー。一部の高齢者たちはこの内容に関して記録しておくことを断ったので, この解説では高齢者たちの名前を入れないようにした。
- 18) <http://www.hljbrjsw.gov.cn/Index.html> (2013年11月2日)
- 19) 2010年7月28日のオーラ姓のバラミド氏をインタビューした記録。バラミド氏は1934年の戌年生まれ。
- 20) 景愛 2013『遼金西夏研究』同心出版社; 彭謙 2000「契丹後裔達斡爾族」『神州学人』第11期; 阿爾泰 1992「達斡爾索倫源流考」『内蒙古社会科学』第1期。
- 21) 2010年7月28日のインタビュー。
- 22) 2010年7月28日のインタビュー。
- 23) 細川呉港 2007『草原のラーゲリ』文藝春秋, 第29頁。
- 24) 2010年4月20日のインタビュー。
- 25) 2013年5月24日, ドルジハンダ氏をインタビューした記録。
- 26) 2010年4月18日のインタビュー。
- 27) 黒竜会 1977『東亜先覚志士記伝』(中巻)原書房, 第287-288頁。
- 28) 易顕石他 1981『九・一八事変史』遼寧人民出版社, 第32頁。
- 29) 「蒙藏条約」とは1912年12月にアグワン・ハンボが3世ダライラマの代表として大フレ(現ウランバートル市)に赴き, ボグド・ハーンと結んだ条約を指す。もちろん, その条約は, 中国を含む国際社会の承認を得なかったため, 政治的な影響を与えてない。
- 30) 今回の調査において発見されたアグワン・ハンボに関するさまざまな情報は歴史文献に記録されているわけではない, とくに, アグワン・ハンボの自分に関する「記録」はだれかによって伝承されてきたようである。当面, 確実な情報を入手するのに先立ち, 「日誌」と名づけておきたい。
- 31) 2010年8月10日, チョクティン・ジャムス氏をインタビューした記録。
- 32) 李輝 2005「九世班禅在内蒙古宣化伝法の歴史功績」『中国蔵学』第2期。

## 1. ジャムス

### 紹介

ツォクティン・ジャムス [ツォクトの息子ジャムス] 氏は、オンゴド・ホアサイ姓 [姓については以下の本文参照] である。フルンボイル市エヴェンキ族自治旗のシネヘン・ブリヤート人である。私たちが取材したときには、すでに定年退職し、自宅で本を執筆していた。典型的なモンゴル人らしい、まるく日焼けした顔で、あわい色のフレームの眼鏡をかけた、中肉中背のお年寄りで、満面の笑みで私たちをむかえてくれた。旗の政治協商委員会の副主席であった、ツォクティン・ジャムス氏は、地元の有力者であるが、むしろ知識人という雰囲気であった。また、日本語の堪能なかたであった。私たちは互いに挨拶し、しばらく会話し、主題にうつり、聞きとりをはじめた。

2010年8月15日、フルンボイルのエヴェンキの南屯にあった自宅をたずね、インタビューをはじめた。その月の17日に、再度インタビューをした。2013年7月15日に3度目のインタビューをした。インタビュアーはサラングレル、小長谷有紀、バイガル、ソヨルマ。

### 生活史から

**Q:** あなたの経歴に興味をもってきました。あなたの生まれ故郷、幼少時のおもしろいできごと、氏姓、兄弟親戚、仕事などに関して私たちに聞かせてもらえますか？

**J:** いいですよ。私はいまちょうど定年になって、語るしか仕事がありません。経歴を紹介するまえに、わすれないうちに、1つ言っておきたいことがあります。いまあなたは氏姓 [ハル hal・オボク] と言いましたよね。昔、ブリヤートではオボクあるいはオトクと言っていましたが、ハルとは言っていなかったのですよ。いまになって、エヴェンキやダグールのまねをして、ハルと言うようになりました。もともとハルとは言わなかったのですよ。ハルというのはモンゴル語ではありません。一方、ハル・ゾブロン (苦勞) という言いかたはあります。しかし、これを氏姓には使いません。それは満州語です。

では、私はツォクティン・ジャムスというもので、1926年にシネヘンのオーノ川のほとりで生まれたそうです。寅年です。8歳のとき、つまり1934年から、父の学校に入学し、文字を学びました。父の学校と言うのには理由があります。私の父の名はツォクトと言います。シネヘンに越してくるまえに、すでに教養があり、文字を書ける人でした。父はロシアの宗教の中等学校を卒業するまで勉強し、チタの師範学校でさらに3年間勉強していました。ロシア語とモンゴル語のできる人でした。シネヘンに移動してきてから、若者たちにモンゴル文字やロシア文字を教えていたそうです。シネヘンに小学校を設立した父は、その学校の最初の校長でした。そして、私は「父の学校」と呼んでいました。基本的に学校に入るまえから、私は家で父から文字を教わっていました。1934年

から1938年まで、シネヘンの小学校で勉強し、卒業しました。そして、家で、1年くらいロシア語を独学し、1940年の初めにフフホトに行って、日本の学校に入りました。当時、1,000人あまりの学生のなかには日本人の学生もいました。1年間だけ勉強して、さらに徳王とよばれていたテムチグドンロヴの設立した学校に入学しました。そのときは、若かったので日本語をはやく覚えましたよ。日本学校で1年間勉強していたとき、日本人の家にホームステイしていたためかもしれません、非常にはやく日本語を覚えました。いまの私のこの日本語の基礎は、そのときにつくられたものです。さて、そこからさらにシリングルの西スニト旗に行って軍学校に入学し、さらに3年間勉強しました。その軍学校も徳王の政府が設立したもので、基本的に日本語で教えていました。軍学校であるため、たいへん厳しかったですよ。そこでよく勉強しましたよ。西スニト旗に1941年のはじめから行って3年間勉強し、1943年の末ごろにふたたびフフホトに行き、軍官学校に進学しました。それも徳王政府が運営していた学校でした。いまの内モンゴル医科大学の敷地でした。その学校にいたとき、私は初めて参戦しましたよ。

話すすと話が長くなりますよ。1945年に日本が敗戦したときに、徳王の勢力が弱くなり、傅作義の軍隊がフフホトを占領し、我々の学校も国民党が運営するようになりました。そして、我々は国民党に入りたくなかったので、モンゴル人学生たちを組織してモンゴル軍やロシア軍と連絡をとる準備をしました。なぜ情報がもれたのかわかりませんが、突然、我々の秘密が露見し、軍が我々を包囲しました。傅作義の軍はどれほどだったのでしょうか。我々はせいぜい100人あまりの学生兵でした。しかし、みんな銃を持っていたので勇ましかったです。我々は発砲しましたよ。私も20歳足らずの若者だったので、勇気がありました。銃撃戦になっているうちに、我々の校長先生が人を送って「生き残ろうと思うなら投降しなさい。そうでなければ、すぐ殺されますよ」と助言しました。それで我々は投降して、そのまま捕虜収容所に監禁されました。最初は戦争に参加した英雄の気分でした。

およそ半年間、監禁されたでしょう。徐々にたいへん苦しむようになりました。収容所では、食べものの質はとても悪く、しかも冬はとても寒かったです。我々の衣服も寝具も悪かったです。身体の中は空っぽで、身体の外からは凍えるため、多くの人が病気になり、伝染病が蔓延し、死者が出はじめました。私も病気になり、死にかけました。しかし、私は幸せ者ですよ。そこにちょうどわが地元出身の軍医のアユルトグイという人が幸いにも私を治療し、自分の宿舎にいさせて、暖かく看護してくれて、治してくれました。そして、死ぬ者が死んで、生きる者が生きていううちに、春がやってきました。これは1946年の春のことですよ。傅作義の兵隊が我々を釈放し、軍服を着させ、軍事訓練をさせたうえ、そのまま自分たちの軍に編入させたわけです。

そこで、収容所よりずっと自由になり、学生たちは故郷へ逃げる機会をえるようになったので、逃げ出しました。私も例の同郷の医者と、さらに3人の友人と一緒に、5人

で1946年4月中旬に逃げ出しましたよ。フフホトから歩いて逃げました。そして、そのまま何日もあるきながら、張家口にたどり着きました。とにかく、八路軍という良い人たちがいると初めて聞き、彼らをさがすつもりで逃げていました。そして、途中、村々を経ながら、張家口に着いたとき、幸い、ウランフー長官も張家口に着いていました。私はそこで初めてウランフー長官に会い、彼の話聞いたわけです。とても良い人で、明晰な語り口で、本当に偉大な人だなという畏敬の念が生まれました。そのとき、張家口に内モンゴル自治区連合政府が運営していた軍政高等専門学校、中国語で言えば「内蒙古軍政学院」がありました。我々をその学校に入学させました。そこに入学した2～3カ月後に、我々はみな軍隊に参加しました。そして、軍隊におよそ1年間いて、1947年の冬に、シリンドルジのリンチンドルジが反乱を起こしたので、それを鎮静しに行きました。ブドゥーン・リンチン [大きなあるいは太ったリンチン] という名をとどろかせたリンチンドルジについては、話がいろいろありますよ。それについては、あとで話してあげましょう。

それで、我々はシリンドルジに来て、西スニト旗の西側の農民の家屋を借りて、駐屯しました。フフホトの軍官学校での経験があったため、我々は一般の兵隊とは異なり、軍の指揮官という立場でした。そこに到着してまもなく、我々のウルジーオチルという司令官が私を西スニト旗に任命し、その保安隊を援護させました。私は西スニト旗にいたことがあり、よく知っているために、そちらに行かせたのです。私がそこにいるとき、かつて収容所で命を助けてくれた同郷の医者アユルトグイと2人の同僚と一緒に、リンチンドルジの反乱を逃れ、私のところに身を寄せて来て、保安隊に参加しました。2人の同僚は、バティン・ドルジ、サンジェジャヴというブリヤート人でした。そして我々4人のブリヤート男子は、リンチンドルジに従ってさまざまな苦難を経験したブリヤート人のことを心配し、シリンドルジに残った一部のブリヤートの人びとをシネヘン地方に帰還させることについて話し合いました。そのまま我々4人は軍隊から休みをとり、シリンドルジに向かい、シリンドルジ盟の長ツォルモンと面会し、事情を説明しました。良い結果をあげ、盟長の手助けで、我々は直接、東ウジムチン旗に行き、そこにいたブリヤート人たちを連れて移動させ、1947年の秋冬のあいだにシネヘン地方に帰還させました。これは我々の大きな成果と言えるでしょう。このブリヤートの人たちがどうして東ウジムチンにいたかという、こういうわけです。1947年の夏、リンチンドルジの軍隊の勢力は、バヤンフレーを出発し、ヘシグテンのダルハン・オールで「ブリヤート盗賊(ブリヤート強盗)」を鎮圧する準備をしていた八路軍と対戦したうえ、敗北して後退し、一般民衆たちを動員して、チャハルの砂丘のほうへ逃れるときに、八路軍は彼らを追いかけて、軍事力をもった人びとをさらに追い、家畜を連れて牛車に荷物を積んで逃避していた平民たちを包囲し、とどめました。そこから一部が逃げ出しました。一部は逃げ出せず、八路軍にとどめられました。そして、残ったブリヤート人たちが、さきほど私の



言った、東ウジムチンのブリヤート人たちです。力のある者は、家族と家畜を連れて逃げました。八路軍にとどめられて残った人びとのほとんどが、高齢者、女性、子どもでした。牛車で荷物を運んでいた人びとは合わせて200世帯700人程度あったでしょう。一部の世帯では、主人がウマに乗って逃げてしまい、妻子が残されていました。また、一部の世帯では、子どもたちがウマに乗り、家畜を追って逃れ、両親が子どもを失って残ったりして、別れ別れになった家族でした。残った家畜は、およそ10万頭はいたでしょう。それを軍隊の戦利品として国庫におさめたようです。家畜財産を失ったそれらの家族たちを東ウジムチンに移動させ、しばらくとどめました。ルハムスレンという人がいましたが、彼は一生懸命努力し、彼らをウジムチンに来させ、シネヘン地方に戻すなどの作業で中心的な役割を果たしましたよ。我々がこのブリヤートの人びとを移動させるとき、軍からの供給はありませんでした。道中食べる500頭程度のヒツジ、各世帯1頭の乳牛、そして小麦粉や糧食を我々が用意しました。自分たちの使用していた車を使って移動するとき、シネヘンからも10数人がウジムチンまでむかえに来てくれました。シネヘン政府から何人かの代表者がハローン・アラシャンまでむかえに来てくれました。そして、シネヘンに着いたとき、彼らの兄弟や親戚、知りあいたちが、ハル・ホジルトに集まってむかえました。身内親族が彼らをむかえました。親族のいない人たちは、シネヘン・ソムのほうから斡旋して移動者を地元の各家庭に配分しました。この秋冬が過ぎ、次の春までのあいだ、受け入れた家族たちが、彼らの衣食住を一時的に負担しました。そして、みずから徐々に自立するようになりました。リンチンドルジにつき従って行ったブリヤート人たちは、たいへんな困難に遭遇し、人畜財産の損失が大きかったのですよ。これに関してはまた別に話しましょう。

さあ、そうして私は1948年に、シネヘンで就職しました。なぜなら、その年、シネヘン・ソムが設立されたとき、私の父親が、ソムの幹部になるようにと私を軍隊に戻させませんでした。そして、私は軍隊に話し、ソムの幹部になり、ふたたび軍隊には戻りませんでした。

アビドという人は、シネヘン・ソムの最初のソム長になりました。それからおよそ5～6年、学校の教師、校長を勤めました。メヘルトの学校長を3年、シネヘンの校長を1年、バヤントハイの校長を1年、勤めました。そうこうするうちに、1957年に、教師の仕事から旗の教育局長を勤めるようになりました。局長としてまた10年勤め、1965年に旗の政治協商委員会の副主席を務めるようになりました。そうこうするうちに、例の文化大革命がはじまりました。まもなく、私の頭の上に、いくつかの罪名があたえられました。日本語を勉強し、日本学校に通っていたとのことで、「日本のスパイ」になりました。ロシア、モンゴル軍と接触しようとしていたとのことで、「ロシアのスパイ」「モンゴルのスパイ」となりました。職場から追放され、批判の対象にされました。そして5～6年批判されたと思います。そして、文化大革命のなかで、批判され17の黒い帽子

[罪名]の持ちぬしでした。死ぬ以外はほとんどすべて経験しました。70年代の初めに、冤罪がはれて、仕事に復帰し、旗の草原ステーションのネズミを駆除する仕事を命じられました。1976年に旗の牧畜局長になりました。1984年にふたたび正式に仕事に復帰させられ、旗の政治協商委員会の副主席に任命されました。それから1992年に定年退職しました。文化大革命のなかで、妻もまた「鬼の家族」となり、50元の月給で子どもたちを養ってどうにか暮らしていました。私はこういう歴史をもっている者です。1934年から日本語を学び10数年になりました。日本人の先生が教えていました。とにかく日本が我々を14年間占領していたため、我々は日本の管轄下にありました。河北の日本の勢力の管轄中枢是北京にありました。我々のシネヘンには日本の第8～第9師団がありました。1945年に数人の日本兵を殺したので、ボルズルートという場所に日本軍の遺骨をあつめて碑を立てました。プリヤートの人びとは日本語が上手ですよ。

我々は兄弟5人です。私に2人の姉がいて、私は長男です。私には2人の弟がいます。1人はモンゴル国にわたって暮らしました。もう1人の弟はツォグバトラフと言います。いま、内モンゴル農業大学の教授です。1962年にモンゴル国の農業大学を卒業してフフホトに就職しました。私のもう1人のモンゴルにわたった弟は、1945年の秋、モンゴルに行って学校に入りました。そして、そこで妻をめぐり、子どもが生まれ、モンゴルの国籍をとりました。私の父親は教師をしていて、知識人だったので息子をウランバートルに送りました。私の弟は卒業して、そこでそのまま教師となり、その後、東方のドルノド県に移って暮らしていました。そして70年代に亡くなりました。1979年に私の義父がウランバートルに行きました。私の義理の弟もそこにいます。1983年に私たちは初めてウランバートルに行きました。今年の7月にまたウランバートルに行き、プリヤート人たちの「アルタルガナ祭り」に参加してきました。3カ国のプリヤート人たちが集まって、すばらしい祭典になりました。

## 氏姓について

**Q:** あなたはさきほどハル・オボクについて説明しましたが、それについて説明してくれませんか？

**J:** ああ、そうですね。我々プリヤート人は現在、ロシア、モンゴル、中国の3カ国で暮らしています。ロシア領内に40万人あまり、モンゴル領内に4～5万人、我々のシネヘンにいるプリヤート人は1万人たらずです。およそ6,000人あまりという統計がありました。あわせておよそ50万の人口があるようです。モンゴル人たちはさまざまなオボグ・ヤスタン〔ヤスタンは直訳すると「骨をもつもの」で、根を意味するウンデスと連語で使われる場合は、民族を意味するが、オボグと連語の場合は、より下位の集団をさしているため、以下、氏族と訳す〕により形成されています。我々プリヤートもさまざまなオボグ〔以下、姓と訳す。クランに相当する〕をもっています。私はちょうどこれに関

して執筆しています。本が出版されれば差し上げます。昔、我々にはボラガチン（テンを捕る人）、ヘテムチン（リスを捕る人）がありました。そこを起源として2つの枝があります。1つの枝は、ボラガドであり、もう1つの枝はイヒレドと言います。ボラガドには7つの姓があります。フリミド、アルゴイ、フスル、ホロムチ、ブーベイ、アシュバード、イングドという7つの姓があります。イヒレドには8つの姓があります。チョノス、バサイ、ボール、アブザイ、ウズグ、ハンギルダル、エムゲニド、バハジェイという8つの姓があります。私の場合、ホリ・トゥメドの出身です。ホリ・トゥメド由来の11の姓があります。私たちのホアサイ、ガルゾード、シャライド、ゴチド、フブドグード（フブドゥード）、ツァガンゴード、ボドンゴード、バトナイ、ハルビン、ハルガナ、ホダイという11の姓があります。我々ブリヤートには、3つの大きな氏族がありました。ボラガド、イヘリド、ホリ・トゥメドと言います。それらをまた西ブリヤートと東ブリヤートと呼ぶことがあります。これは、バイカル湖のどちら側に居住していたかを基準に名づけたものです。ボラガド、イヒレドは、バイカル湖の西側、南西側に居住していたため、西ブリヤートと言って、我々ホリ・トゥメドはバイカル湖の南東側に居住していたため、東ブリヤートと呼ばれていました。いまは単に東西のみならず、多くの地域に分布した皆さんのブリヤート名ができました。分布している地域により、トゥンカのブリヤート、アガ・ブリヤート、イルクーツクのブリヤート、ボーハンのブリヤート、セレンゲ・ブリヤート、バルガジン・ブリヤート、ホリ・ブリヤート、ハルハのブリヤート、シネヘンのブリヤートとそれぞれ呼ばれるようになりました。ロシア領内にあるブリヤート人たちもみな一緒にいたわけではありません。基本的に、3つの行政区画に分かれて居住しています。ロシア連邦のブリヤート共和国にセレンゲ・ブリヤート、バルガジン・ブリヤート、ホリ・ブリヤート、トゥンカのブリヤートなどがふくまれています。他は別々の行政区画に管轄されているのですよ。イルクーツクのブリヤート人たちは、ロシア連邦のイルクーツク州のウスタ・オルダのブリヤート民族区に管轄されます。アガ・ブリヤート人たちはロシア連邦のチタ州に管轄されます。チタ州のアガ・ブリヤート民族のほかにもオノン、ボールジ、オルビヤナなどの地域に分かれて暮らしています。ブリヤート人たちのなかにはまた数少ないハルハ、ハムニガン、ツングースなどの氏族があります。簡単にいうと、このようなものです。詳しく言えば、ブリヤートの歴史は長くなります。

## シネヘン・ブリヤートの歴史について

Q: シネヘン・ブリヤートの歴史について話してくれませんか？

J: 我々シネヘンのブリヤートは北方から移住してきたブリヤートです。ロシアからこちらへ移ってきて、およそ90年になります。1910年代から20年代の初めに、ロシアから少しずつ移住してきて、このシネヘン川のほとりに定住しました。そして、シネヘンのブ

リヤートという名称が生まれました。ロシアからなぜ移住してきたかという点、第1次世界大戦後に、ロシアの革命運動がさかんになり、有名な「十月革命」が勃発し、帝政ロシアの政府が崩壊し、新しいソ連政権が定着したとき、ロシア国内はたいへん不安定な状況になっていました。仕方ないでしょう。1つの政権が交代するということは、そう簡単ではありません。ロシアの十月革命に敗れた帝政ロシア政権の残留勢力は、バイカル湖周辺のブリヤート地域を席卷し、新しい政権であるソ連政府に対抗して武力侵攻をおこない、ブリヤートの民衆が戦争に巻き込まれました。帝政ロシアの残留勢力は、熱い鍋に入ったように必死になり、イギリス、アメリカ、日本などの外国勢力にたより、ブリヤート人たちを略奪し、恐喝し、挑発し、新しい政権を転覆するための進攻をはじめたとき、ブリヤート人たちの内部でも、わけのわからないまま混乱が生じました。ブリヤート内部では、民族主義の一部の人たちが挑発を受け、汎モンゴル国を樹立しようと騒ぎ、ブリヤート青年たちを強制的に軍隊に入れて、牧民〔モンゴル語でマルチンを本書では一括して牧民と訳す〕たちに軍馬の放牧、食料の提供などの重労働をさせ、家畜財産を軍の食料として徴収するなど、ブリヤートの民衆を迫害しました。そのような状況のなかブリヤートの上層部、宗教のリーダーたち、知識人、地方の有力者たちは、それぞれ出口をさぐり、方法を模索していました。そして、一部のブリヤート人たちが戦乱、強盗を逃れて、故郷を離れて生きる道を求めるようになりました。こうして、トゥンカのブリヤート、セレンゲのブリヤートの一部がモンゴルへ移住し、モンゴルのセレンゲ県、フブスグル県の地域にたどり着きました。我々アガのブリヤート人たちの一部も国境をわたり、フルンボイルのシネヘン地方に移ったわけです。みんないちどきに移住したわけではなく、前後して少しずつ移住してきました。移住するまえに、人を派遣し、場所の確認などフルンボイルのアムバン〔「都統」。総督と訳す〕と相談をしました。モンゴルに移住したブリヤート人たちは、6つのブリヤート旗になり、セレンゲ旗、マルガイ山旗、ハルハ川旗、オノン川旗、オウルズ川旗、ユルオー川旗といった名前の旗になりました。モンゴルではおよそ4,600あまりの世帯、16,000人あまりが、移入したといわれていました。アガのドゥマに管轄されていたブリヤート人たちの辺境地方に分布していたボルジ、ダリ、ウリレンゲ、アガの世帯は、エルグネ川、ダライ湖、メネン平原、ハイラル川まで冬夏出入りしていたため、一部が数年にわたって滞留していました。そして、1918年に、アガ地区のバザリン・ナムダク・ノヨン〔ノヨンはモンゴル語で貴族の意。以下、公とも訳す。長官の意でもちいられることも多い〕をリーダーとした数人が移住の相談をするためにフルンボイル地方を訪れ、フルンボイルのメイレン・ザンギ庁の役人、大臣貴族たちと面会し、アガ地方の状況をブリヤート民衆の苦況を説明し、一部のブリヤート人たちの移入に関して、場所を求める相談に対して、メイレン・ザンギ庁もよろこんで受け入れ、彼らを連れてシネヘン川、イミン川ぞいの地方を見学させました。そのときに、ナムダク公は、シネヘン地方をたいへん気に入る、シ

ネヘン川からさほど離れないイミン川の東岸の1つの丘陵の上で下馬し、持ってきた供え物と身につけていた金の指輪で天をまつり、羊毛製のマントを広げておがみ、ここが我々ブリヤート人たちのふるさとになりますようにと祈ったそうです。そして、本当にシネヘン地方が我々ブリヤートのふるさとになったのみならず、我々の集団の名称にもなりました。いま、我々はだれでもシネヘン・ブリヤートと呼びます。バザリン・ナムダグ公は、本当に我々を引率して連れてきた人です。こちらへの移住、事前のフルンボイルとの連絡、場所の特定、すべての作業をみちびいたにもかかわらず、彼自身は来ることができなかつたのはとても残念なことです。こちらへ移住するまえに、病で急逝しました。妻子が移住してきました。息子にナムダギン・バヴーという人がいました。ナムダグ公の弟であるバザリン・アヨーシも家族とともに移住してきました。子孫はみな健在です。

正式にシネヘン・ブリヤート旗になったのは1921年です。1921年8月下旬に、フルンボイルのメイレン・ザンギ庁から公文書が発行され、シネヘン地方を移住してきたブリヤート人たちにあたえ、ブリヤート旗を設立し、正式にフルンボイルの構成民にしました。最初のブリヤート旗の長は、ラドナーギーン・アビド・オゴルダ〔満州語で長官の意〕という人でした。その人も、最初にナムダグ公と一緒にフルンボイルをおとずれ、場所をさがして移住先を請う作業に同行していた人です。ボールジのボドンゴード姓の者です。アガからこちらへ移住するブリヤート人たちのリーダーの1人です。最初は1つのブリヤート旗だけでした。なかに4つのソムにわかれ、ソムごとに、ザンギ、ハボン（副ザンギ相当）を任命し、行政管理の体制ができました。当時、最初に移住してきた合計170あまりの世帯700あまりの人口の旗だったそうです。そのなかに、旗が設立するまえから出入りしていた少数のブリヤート人たちもふくまれていました。そして、シネヘンのブリヤート旗に名指された土地があり、上に行政体があり、隣接する旗ができ、フルンボイルのメイレン・ザンギの管轄下に入り、中国領になったわけです。当時、最初に移住して来た人たちの多くはボールジ、ウリレンゲなどの地方の人びとで、アガ、オノン地方のブリヤート人たちは比較的になかったです。我々アガ、オノン地方のブリヤート人たちは、あとで少しずつ移住して増えました。何年かたつと、シネヘンのブリヤート人たちは800ほどの世帯、3,000人ほどに拡大しました。

さらに、1929年になって、シネヘン・ブリヤート旗を東西2旗にしたとき、ブリヤート人たちが北方から徐々に移住してきて、900世帯4,000人にまで増えました。そして、総督府から、ブリヤート旗を2つの旗、8つのソムにし、そのときミンデギン・ミジトが旗のオゴルダ（長）だったのを2つの旗のオゴルダに改正し、その下にそれぞれ2つのガリダ（副オゴルダに相当、現代ふうという副旗長）を設置しました。ジャムスランギーン・アヨーシという人が左翼旗のガリダになり、チョインピリン・ダシという人が右翼旗のガリダに任命されました。この歴史に関して現在、私は執筆中です。本がで

きたら、差し上げます。我々ブリヤート人たちがなぜシネヘンに移住したかという、さまざまな理由があります。歴史からみると、我々バルガ・ブリヤート人は、昔からバイカル湖から興安嶺の北麓にわたる広大な地域を移動しながら暮らしていました。そして、のちにソロンゴトのブーベイ・ベイルの息子ダイホンタイジが西トゥムドのアルタン・ハーンのパルジンという娘を嫁にむかえたときに、一部のホリ・ブリヤートの人たちがパルジン妃の嫁資として同行し、ダイホンタイジの所轄となり、フルンボイル地方に長年にわたって居住した歴史があります。さまざまな文献を読むかぎり、そうです。近代になって、アガ地域の辺境のブリヤート人たちは、フルンボイルに少しずつ移入し、定住し、進出していました。そしてロシアに騒乱が生じて、暮らしがおびやかされたときに、長年にわたって往来していた先人たちの伝統的な場所に戻ってきたようなものです。安定した生活をこのむブリヤートの民衆が、時代の騒乱に遭遇し、さまざまな革命運動に巻き込まれ、多数のんびとが逮捕され、冤罪にまきこまれ、迫害され、殺されるといった苦境にあい、生活の道をもとめて逃れてきたことは事実です。いま我々はシネヘン地方に安住して90年たとうとしています。3～4世代になりました。

**Q:**「シネヘン」という名前の由来はなんですか？ブリヤート人たちが来るまえからの名前ですか？

**J:**「シネヘン」という名前はブリヤートが来るまえに使われていた名称です。川の名前から、地方の名前として使われていました。この川は昔、タヒム川という名前でした。ガルダン・ボショクトのウールドたちが来たときに、この川をシネヘン川と名づけたそうです。1830～40年代のことです。それ以降、シネヘン川と呼ばれるようになったそうです。シネヘン川というのは、我々ブリヤート人たちが移住するまえ、ほとんど無人といえる状態でした。ヤナギの林や草が生い茂り、野生動物が繁殖し、水草がひとしくあり、鳥が飛びかい、人畜の影響がない、といった無人地域だったそうです。

**Q:**ガルダン・ボショクトのウールドたちは、シネヘン地方に暮らしていなかったのですか？

**J:**そうですよ。ウールドたちは18世紀からシネヘンに来て川のほとりに住み、およそ30～40年になったかどうかのころ、疫病が広がり、災難に遭ったそうです。伝染性のタルバガンのペストが広がり、ウールドたちは次から次へと伝染し、大勢が死にました。当時、医者や救命治療は整っていなかったもので、ペストの蔓延を迅速に阻止し、予防できず、そして死ぬ者は死んで、生き残った者がペストの伝染を恐れて、遠くまで移住し、イミン川の上流に移住し、シネヘン地方をさけて居住するようになりました。文献があると思いますが、私は見ていません。しかし、地方の口述史では広く語られています。世帯によっては家族全員が伝染して死んだので、他の世帯は感染を恐れて彼らに近寄らず、移動していきました。死者を悼む人もなく、死体を移動させる人もいません。ゲルは立てられたままで、家畜は放置されました。人がペストの伝染を恐れて手をつけず、

放置する以外方法がありません。寺院さえ、そのまま放置する以外方法がありませんでしたからね。

そして、シネヘン地方は無人になり、放置されて、長い年月が経っていました。我々ブリヤート人たちが居住してきたとき、シネヘン川沿岸にはあちこち人骨が家や車の残骸、放棄された日常用品の残骸がよく見かけられたと、お年寄りたちは言っていました。ブリヤート人たちがシネヘンに居住してから、ペストが広がって疫病が蔓延した歴史のある場所だと聞いて、一部の人は疑心暗鬼になったり、忌み嫌ったりして、ハルハ川まで移住した世帯もありました。多くの世帯が神仏にいのり、ラマに経を読んでお祓いをしてもらったり、燻煙で消毒し、除邪してもらったり、疑心暗鬼を払拭して、いままで暮らしてきました。当時、人びとの心が乱され、疑心暗鬼で移動しようとした状況のなか、ラドナーギーン・アビド長官がみずからムクデン [現在の瀋陽市] に行きサンジャー活仏に会い、ブリヤート人たちの遭遇、移住した状況、シネヘンのようす、人びとの疑心暗鬼と心の不安定な状態を説明し、支援を願い出しました。サンジャー活仏ロルブドルジは当時ムクデンにいて、ラドナーギーン・アビドの要望を聞いて「トイノギーン・トルドグ」という経を読ませるようにと助言したそうです。そして、アビド長官は至急戻って地元の8つの有名なゾドチ・ラマ [厄払い僧] をまねき、信者たちを招集し、イミン川の東側のソボログトという場所の北側に2つの大きなモンゴル・ゲルを立て、7昼夜にわたって法会を開いて「トイノギーン・トルドグ」を読経させ、お祓いをしてもらったそうです。そうして民衆の心が落ち着きを取り戻し、疑心暗鬼がおさまり、人びとの暮らしが平穏になりはじめたと、年寄りたちが言っていました。そのとき、本当に気から病になることがあってもおかしくないと思います。最初は数人のブリヤート人がさまざまな病気で亡くなっていたそうです。それが、あの伝染病のせいかも知れないと人びとはうたがっていました。当時、ブリヤートのラマ医たちは治療したり、読経で伝染病の広がりを阻止したりすることができていました。基本的にブリヤート人たちも長旅をし、疲労がたまっていたため多少病気にかかってもしかたがないでしょう。しかし、人びとは内心少々疑心暗鬼で心理的に不安定でした。人びとが病気にかかると、おのずと、あの伝染病が広がった過去の話の思い出し、警戒することが多いのです。

我々のシネヘンという地方はこのようにブリヤート人たちのふるさともなりました。シネヘンという名前は、ブリヤートより先につけられたものです。シネヘン地方の自然をのべると、イミン川とホイ川の合流点よりイミン川の両岸、東へシネヘン川の両岸ぞいの土地、南へウエドヘン、オーニーン川、西へホイ川ぞいの土地、このような広い地方です。

## シリントルのブリヤート人たちについて

Q: シネヘンのブリヤート人たちはシリントルへも移動したそうですが。そのことに関

して話してくれませんか？

J: それも大きなできごとでしたよ。このことを語るにはリンチンドルジという人のことを話さずには通れません。リンチンドルジとは、アガ地方出身のフブドグード姓のザイサン・ノヨン [官職つきの貴族] であるセレンジャヴの息子です。ロシアで教育を受け、ロシア語とモンゴル語のバイリンガルです。知識豊かなインテリでした。ロシアの旧政権が崩れ、ソ連の新政権が設立されたとき、リンチンドルジはすでにアガ地方で働いていました。しかし、ロシアの赤党 [共産党] を恐れて1926年ごろに家族を連れて一部のひととともにこちらのほうへ逃げてシネヘンに来ていました。彼自身は教育を受けており、仕事についていた人であったためプライドが高く、シネヘンに来てからも責任ある仕事につき、行政組織の官僚になるつもりでした。しかし、まず彼は遅れて来ました。シネヘン・ブリヤートのオゴルダ、ガリダ、ザンギの職はもうすべて埋まっていた、リンチンドルジにあてるポストはなくなっていました。そこで、リンチンドルジはなんとか上層部とうまく接して官職をあさろうとしましたが、シネヘンの役人たちは彼をさほど重視しませんでした。彼を参政させなかったため、彼は心中たいへん不満かつ不愉快で、他の道を見つけてなんとか自分の権威を発揮しようと狙っていました。ちょうどそのとき、1929年末にソ連の赤軍が満州里からハイラルまで侵入し、東北の鉄道を守っていた軍隊と衝突しました [中ソ紛争、中東路事件]。そのとき、東北軍の蘇炳文將軍の兵士たちはハイラルに駐屯していました。私は軍隊にいたので軍隊の状況をよく知っていますよ。その軍隊がソ連の赤軍との間に矛盾が生じて武力衝突になりました。この状況を察した我々ブリヤート人たちは緊張し、対策が見つからないと心配し、あせりはじめました。そして、この鉄道の紛争がリンチンドルジにとって好機となりました。彼は一部のんびりと根回しして動員し、赤党から逃れてすばやく南へ、興安嶺を越え、移動しなければなりません。また戦乱に巻き込まれるぞと呼びかけ、ほとんどすべてのブリヤート人たちが移動する騒ぎになり、移動しはじめました。冬の寒い11月に、幼い子どもたちを連れ、家畜、家財道具をもって移動するということはたいへんなことで、ほとんどの世帯が事態を理解しないまま、流れにまかせて騒ぎはじめました。このとき、私の父は友人たちと相談し、ものごとの真相をわからずに、冬の寒さのなか、旗民全体が移動することはありえないと、相談するためにナムスライン・オチルジャヴという人を連れてハイラルに向かいました。フルンボイルのアムバン庁 [清朝の役人で総兵官をアムバといい、その役所のこと。以下、アムバンは総督、その役所は総督府と訳す]、赤軍のリーダーをたずね、事態を確認しようと思行きました。そして、総督長官である貴福と面会し、ハイラルの鉄道の駅で赤軍のリーダーを訪問し、詳細を聞いた結果、彼らは「我々は東北の鉄道の件でハイラルに来た。田舎の民衆たちは我々には関係ない。恐れたり、移動したりする必要はない。我々は問題を解決すれば撤収する」と答えたそうです。そして、総督府からすぐ各地に情報を伝え、牧民たちに安心して地元で暮らすよう勧告しました。



私の父はナムスライン・オチルジャヴと2人で急遽、シネヘンに戻ると、人びとはすでに移動していました。1軒も残らず移動してしまったと私の父は話していました。そして、うしろから追いかけて、一番うしろの世帯にホジホンというところで追いつき、総督府の情報を伝え、さらに前方にいそいで情報を送り、人を派遣して布告し、恐れたり、移動したりする必要はなく、急遽地元に戻って安心して冬をすごすよう勧告しました。そして、オゴルダのミジドにも総督府の情報を伝えました。ホジホンからさらにホンゴルジ、フイテン、さらに興安嶺の頂上を越えて移動している世帯たちも情報を聞いて折り返し移動してきました。一方、リンチンドルジに引率されたおよそ70世帯たちは戻らず、さらに移動し、興安嶺を越え、南西方向のシリングルまで移動したわけです。リンチンドルジはひそかにほかのことを考えていたので、彼はついてきた世帯たちを懐柔し、さらに向こうへ移動しました。ミジド・オゴルダが公文書を出し、特別な人を派遣してその世帯たちを折り返し移動させようとしたのですが、彼らはリンチンドルジの顔色をうかがって戻りませんでした。それがシリングルのプリヤートのはじまりです。しかし、まだ話は多いのですよ。リンチンドルジというこの人のせいで、それらのプリヤート民衆はたいへん損をし、苦勞をしましたよ。それらの世帯たちがリンチンドルジについて移動し、興安嶺を越えて、南西方向へトゥシェート、ジャールド、アル・ホルチンのヤトゥート・チャガン・ノール、アル・フンドゥルン、西ウジムチンのエメーリン・ゴビを越えてヘシグテンのウラーン・ホーブルなどの地方に到着し、各地で追い出され、軽蔑され、当地の貴族たちに貢いで一時的に滞在を許され越冬し、夏をすごせるように請願し、たいへん困難のなか1年あまり各地を転々と移動しながら、1931年の春、シリングルのモドンギーン・シル [モドンガの丘] という場所に到着しました。モドンガ [ボドンガとも] というのはシリングルの西ホーチド旗の場所です。そして、またホーチド旗の王公貴族に多くの贈り物をおくって毎年税金をおさめますからと請願してそこに落ち着きました。そしてまた、「ボトンガギン・プリヤート」という名前をもつようになりました。「リンチンドルジのプリヤート」ともいいます。あとで、「プリヤートの盗賊」「プリヤートの強盗」とも呼ばれるようになりました。これはすべてリンチンドルジ1人のせいですよ。

1931年の春に彼らはシリングルに到着し、ようやく落ち着いたところ、その秋に活仏パンチェン・ラマがフルンボイルからの帰途、そこに立ち寄り、リンチンドルジがさまざまな方法を考えて、パンチェン・ラマと連絡をとり、一部のプリヤート民衆を連れて、道中むかえ出て、パンチェン・ラマをおがむと同時に、苦勞しながら移動しており居場所がなく困っていることを話しました。活仏を本心から信仰し、心から活仏のシャビ [弟子という意味のモンゴル語。活仏に帰属する牧民集団。一般に寺領民と訳される] になりたいと話し、請願しました。パンチェン・ラマもシャビになることをゆるし、当地の王公貴族、関係行政の長官に話をつけ、私のシャビになったこのプリヤート人たちに土

地を提供して居住させ面倒をみるよう命令していました。そして、シリンドルの王公貴族が何の障害もなしに、彼らにモドンギーン・シル、ホーリングルぞいの地方を供出して居住させると同時に、まもなくシリンドルのブリヤート旗という旗をつくり、リンチンドルジを旗長にしました。ブドゥーン・リンチンは、さまざまな方法を使って、最終的に自分の目的を達成し、行政官である貴族になりました。そして10数年間、彼は個人的に大いに権力をもち裕福に暮らしていました。

ブドゥーン・リンチンとして知られているリンチンドルジのほんとうの名前は、ドマ・セレンジャヴィン・リンチンドルジであり、フドグド姓です。幼いころからロシア学校にかよい、ロシア式の教育をうけました。南アガの出身で、彼の父セレンジャヴは、1914年ごろに数百人のブリヤート人をドイツの戦場に連れていき、壕をほる仕事をさせるために派遣するときリーダーだったそうです。また、もう1人、バルタシ・サンジェという人がリーダーをしていました。バルタシ・サンジェという人は1918～19年ごろこちらに出てきて、ハルハ川に移住してきました。そこからシネヘンには来ませんでした。サンジェの息子ソメヤという人がいて、かれはシネヘンに来ていたところ、1945年にハルハ [モンゴル人民共和国] の人が来て彼を捕まえていきました。もともとは、ハルハから逃げてきていました。セレンジャヴ、バルタシ・サンジェたちは1917年にドイツからロシアのブリヤートのアガ地方に戻ってきました。さらに1920年代の初めにセレンジャヴが一部のブリヤート民衆を連れてモンゴルに移住しました。そのときブドゥーン・リンチンには妻子がいたため、父についていきませんでした。1926年に妻子を連れてアガ地方から直接シネヘン地方に行きました。そこへ来てから知識人であるため、シネヘン・ブリヤートを支配する長になる意向があるにもかかわらず、フルンボイルのメイレン・ザンギ庁は認めませんでした。そうこうするうちに、1929年1月に鉄道事件が発生し、ロシアと中国の軍隊がハイラルから満州里 [本書では州の字で統一する] まで衝突しました。そしてブドゥーン・リンチンはその機会を利用し、およそ70世帯を連れてシリンドルへ逃げ出し、1931年春にシリンドル盟のホーチド王旗のモドンギーン・シルにたどり着き、1947年までの17～18年間そこで暮らしました。そして1947年にブリヤート人たちは逃げ散り、リンチンドルジは道中つかまりました。このことを詳細に語ればたいへん複雑です。私は本に書きました。リンチンドルジの逃げた道はシリンドルから北京へ、そこから五台 [山西省にある五台山。2009年に世界遺産に登録された文殊菩薩の聖地] に到着し、さらに内モンゴルへ逃げて、途中でつかまえられ、ハルハにおくられて、そこからロシアに送還され、最後にはロシアのチタの監獄にいたそうです。

1949年にリンチンドルジが北京からさらに逃げるとき、彼の妻は病気で身体の具合が良くないので北京の協和病院にいて、のちに人が来てシネヘンに戻しました。その後、シネヘンのとある親戚の家において、亡くなりました。リンチンドルジには息子と娘がいました。いまもいます。リンチンドルジの息子はユンドンドルジと言います。日本に行

って留学してきた人です。娘は日本人と結婚していました。リンチンドルジの婿は日本人でした。

1931年にリンチンドルジはパンチェン・ラマのシャビになり、パンチェン・ラマのハンボ〔寺院の行政管理者。高僧の一種〕たちとつねに関係をもち、1932年にリンチンドルジは、それらのハンボたちの手紙により、何人かをフルンボイルに派遣し、リンチンドルジはパンチェン・ラマに捧げる各旗の進物の家畜をまとめてシリングルへ連れてきました。そして、1936年にシリングルの各旗からパンチェン・ラマへの進物として捧げる家畜をまとめてチベットのほうへ送りました。リンチンドルジはホーリングルの北側に1つの小さな寺院を設立し、パンチェン・ラマの2人のハンボ、シネヘン寺院の何人かの有名な活仏、モドンガのブリヤートのおよそ30人のラマたちがいて、宗教儀礼をしていました。学校というものはなかったですからね。リンチンドルジは学問を大事にせず、一方、暮らしの豊かさを重視していたため、モドンガのブリヤート人たちの家畜と人口は、10数年のあいだにかなり増えていました。もう1つのことと言えば、彼らは特別旗パンチェン・ラマのシャビであるため、当時の地元の行政に何1つ税金を納めません。家畜を繁殖させてみずから使います。リンチンドルジの家畜財産というのは、数千頭ではおさまらず、各種の家畜を信頼する人に分けて放牧を委託していたそうです。彼みずから、年に1度、畜群を見まわり、記録していたそうです。家と家畜のない貧しい、親戚もない人びとがリンチンドルジの家畜の世話をして暮らしていて、そういう世帯がいくつかありました。一部のよく働く勤勉な人たちに家畜の放牧を長年にわたってさせて、嫁をとり、少しながら家畜を分けて家庭をもたせ、独立させていました。このような世帯がほかにもいくつかありましたよ。また、モドンギーン・シルというところは、広くて、牧草の栄養が高く、冬に風よけがあり暖かく、さまざまな雪害などの害が少なく、夏には洪水の被害がありません。そのため、家畜がかなり増えて、人びとは裕福な良い暮らしをするようになっていました。リンチンドルジにつきしたがって、およそ70世帯が行きましたよ。モドンギーン・シルに10数年いるあいだに、およそ100余世帯になり、人も増えて400あまりの人口をもつ旗になりました。もし、正しい道を選択していたら、さらによくなれたでしょう。

**Q:** それで「ブリヤートの強盗」という名前はどのように生まれたのですか？

**J:** それを話すとき長くなりますよ。リンチンドルジはシリングルに到着して、みずから旗を設立しましたが、シリングル盟の領内でした。一方、シリングル盟は、昔から日本のスパイ情報機関である善隣協会の影響のもとに基本的に入っていたので、地方の盟長や旗長の貴族たちはみないつか傀儡になっていました。そのため、計略家のリンチンドルジは当時のおもな権力をにぎっていた日本人たちに媚を売り、日本の特務機関と善隣協会の上層と密接な関係にありました。そうこうするうちに、1945年になり、日本の状況が厳しくなり、ソ連と日本の戦争が勃発し、ソ連の赤軍が突然進攻してきたとき、リ

リンチンドルジはロシア語を話すため、民衆から集めたヒツジや家畜をソ連の赤軍にみやげにし、味方につけて、その戦争に巻き込まれることなく、ブリヤート人たちには損害なく過ぎました。[それを聞きつけて] ジャルードのホーリングゴルにいた250世帯、1,000人あまりのブリヤート人たちはさらに移動し、モドンガに着き、リンチンドルジのブリヤートと合流しました。このようにして、リンチンドルジの勢力は増し、ソ連の赤軍のリーダーと強い関係をもっていました。

1946年の初めに、ウラーンフーが共産党の指導のもと、張家口に内モンゴル自治運動の連合会を設立し、シリングルの各旗に分会を設立し、党の方針を宣伝し、正しい道を指導しはじめました。リンチンドルジという人は機会をうかがい、利益を追求して生きる人です。当時のシリングル盟長であったツォルモンという人はみずからモドンガのブリヤート旗に向かい、リンチンドルジに政策を宣伝し、方針を明確に教えてやりました。しかし、リンチンドルジは、表向きは同意した態度を示したものの、裏ではやはり状況をうかがい、共産党と国民党のどちらが勝つか負けるかをみて、ひそかに各旗の王公たち、反対勢力と連絡をとり、機会をうかがい、裏切る準備をしていました。また1946年の秋、内戦状態に一時的な変化が生じ、国民党の軍事勢力が張家口、チャハル、多倫〔ドローンノール〕まで拡大し、八路軍が一時的に撤退した状況をみて、リンチンドルジはチャンス到来と見て、共産党から離れて国民党との関係をつくと公言しました。そして、民衆のなかで直接アメリカの支持を得てきわめて新しい武器をもち、装備の万全な何万もの軍隊をもっているため、「ヤギの毛皮を着た徒歩の八路」をまもなく駆除する、と宣伝していました。「八路四男子」と当時言われたブリヤートの革命家をつかまえることにしました。そして、その4人が逃げて、我々の仲間に加わりました。彼ら4人とは、アナンディン・アユルトグイ、バトイン・ドルジ、サンボーギーン・ルハムスレン、ルンドゥヴィン・サンジェジャヴの4人です。

そしてまたリンチンドルジは軍を組織し、ブリヤート民衆から青年男子を兵隊にし、その年の秋の末から近隣地域から人びとの家畜財産をうばいはじめました。シリングル盟の役場の数十頭のウマを略奪して、国民党に献上し、味方につけました。また、付近をうろついているはぐれた兵隊たちをつかまえて、武器と乗用のウマをうばい、畑を耕作する人たちの何十もの犁用のウシをうばってきて、自分の軍隊の食料にするなど、多くの略奪行為をしました。さらに、リンチンドルジは人を東スニトのベイリンスム〔貝爾寺〕に送り、そこにいた八路軍の駐屯地をおそい、武器をうばってきました。リンチンドルジはこのように、略奪行為を主導し、みずからもその年の秋の末に家財道具、財産を運んで北京に移し、国民党の大將軍傅作義をたよりました。当時、傅作義は北京を守備していました。リンチンドルジは財産や金銭をいくつかの馬車に乗せて北京へ運んだそうです。妻子をみな連れて行きました。ついていったブリヤート民衆を放棄し、「ブリヤート強盗」という悪名をかぶせて見捨てたわけです。リンチンドルジの武力がすで

に「ブリヤート強盗」として有名になっていたため、八路軍は彼らを殲滅する準備をしていました。そして、私が先に言った戦争が生じ、民衆は離散し、大きな損害にみまわれたのがそれです。「ブリヤート強盗」とは、こういうわけです。本当は、単なるリンチンドルジ本人と彼のわずかな関係者だけの嫌悪すべき行為がブリヤート民衆の名誉をそのように損なった次第です。リンチンドルジ自身は家族と一緒に北京に暮らし、やがて1949年に傅作義が投降して北京が解放されたとき、息子と何人かの側近を連れて財産をいくつかの馬車にのせて西のほうに逃げ、途中、八路軍に捕えられました。リンチンドルジは息子と一緒に内モンゴルを通じて北モンゴルに送還され、それからソ連に送られ、チタの監獄に監禁されました。息子はのちに監獄を出て1957年にシネヘンに戻り、もう1度結婚し、家庭をもちました。側近たちは内モンゴルに引き渡され、赤峰に監禁されたまま1950年代に釈放され、シネヘンに戻りました。

**Q:** 日本がシネヘンに進出したことについて話してくれませんか。

**J:** 日本人たちが我々のフルンボイルに入って来たのは、早いですよ。我々を14年間も統治しましたからね。1931年9月18日の事変以来、日本人たちはわが東北地域に公然と侵入してきました。翌年にハイラル、満州里といったフルンボイル地方全域が日本に支配されるようになりました。ハイラル市を日本軍の駐屯地にしたそうです。とにかく、わが東北地域に日本の関東軍という大きな軍隊が駐屯していました。偽満州国を樹て、軍によって支配し、すべてを日本が支配していました。わがフルンボイルの総督府を満州国の興安北省にし、新バルガ8旗を東西2旗にしました。ソロン東西2旗、ウールド、ブリヤート旗を統合し、ソロン旗と名づけました。また、エルグネ東西両旗を設立し、興安北省の管轄に6旗と満州里、ハイラル2市をもつようにしました。わがブリヤート旗はソロン旗に編入され、4つのソムになりました。旧総督府の官吏が、新しい省の政府の官吏になり、日本に支配された傀儡同様になりました。ブリヤート旗の最初のオゴルダは、ラドナーギーン・アビドで、彼の次のオゴルダはハルビン姓のミンデギーン・ミジド、その次の、日本が占領していたときのオゴルダは、ガルマギン・ウルジンという人でした。ウルジンのことを日本人たちはたいへん重用しました。直接、省の軍政府の司令にしました。とにかく日本人たちは、フルンボイルを占領して、多くの民族のなかからブリヤート人たちをとくに重視していました。ロシア、モンゴルのバイリンガルである若者たちを教育し、軍隊で彼らを重用していました。わがシネヘンのブリヤートの学校には日本人の教師がいました。名前はだれでしたっけ。カミバクシ [バクシは博士、先生の意] と呼んでいました。日本人たちはフルンボイルを14年占領したことについては、文献もたくさんあるので私は話をやめましょう。私は少なめに話しましょう。

## 風俗習慣に関して

Q: プリヤートの風俗習慣について話していただけますか？

J: プリヤートの風俗習慣は多いです。私は結婚式に関して少し話しましょう。プリヤートの結婚式のしきたりでは、「嫁を請う」ことがもっとも重要です。まず、嫁を請います。嫁を請うために、両親は出かけません。自分の氏族の親戚のなかで信頼できる良い人を送り、請わせます。それから相手の家の仏壇にハダク〔儀礼用の絹布〕を献上する儀礼があります。嫁を請うたあと、日を選んで、新郎側の両親がみずから出向くか、ほかの信頼できる人を送ります。また、3つめに母の乳のお返しにウマに乗せる儀礼があります。家畜を捕まえる儀礼です。4つめは、「バスガン・ザイフ」〔娘の訪問儀礼〕というのがあります。娘の訪問に際して、年長の者がリードし、何人かの若い男女が、嫁にいく予定の娘の友だちが同行し、兄弟親戚の家をまわって訪問します。もともと親族が遠いため、十数日行きます。いまでは近くに住んでいるため、それほど長くかかるものではありません。娘の訪問を終えて戻ったら、娘の大宴会をもよおします。娘の顔をかくして連れてきます。5つめはいよいよ大宴会になります。年長者をはじめ、両親と火をおがみます。祖先をおがませます。嫁は義父母側の名前を避けます。嫁は、義父母の火に毎年おがみます。6つめは、母たちがアンダ〔同盟〕するという儀礼があります。新婦の母および新郎の母2人がお茶を交換し、盟約します。この儀礼を結婚式のときに実行します。

ウマに乗せる儀礼および衣装を着せる儀礼というのがあります。新郎の側から良いウマを連れてきて、嫁を乗せてまわり、「嫁のウマは格好良いだろう？」とみんなに知らせます。衣装を着せる儀礼というのは、婿に衣服を着せる儀礼です。また、「嫁の訪問」という儀礼があります。日を選んで、月の初めに、嫁が実家に行き、1カ月あるいは20数日暮らし、ふたたび「ヒシグ〔恩恵〕」と言って、ヒツジのオーツ〔全体の肉、臀部〕、ウヴチュー〔胸の肉〕、酒、絹布、乳製品の贈り物と一緒に娘を戻します。そして「嫁のヒシグ」と言って、兄弟親戚を招待します。結婚式の司会者や祝詞を述べる人がいるものです。すべての儀礼に際して、縁起の良い言葉で祝福します。わがプリヤート人にはたいへん上手なユールルチン〔祝詞の語り手〕がいましたよ。

2013年7月15日、3度目の訪問に際して、ジャムス氏は「このまえのインタビューのときに何を話したか忘れたので、あなたたちの記録をもう1度見ましょう」と言った。私たちが記録を残すと、彼は一部、内容を修正した。

## 2. ノロヴスレン

### 紹介

ノロヴスレン氏はフルンボイルのイミンのウールド・モンゴル人である。生涯、モンゴル文化の仕事に従事し、著名な翻訳者、編集者である。また、優れた政治家、指導者でもあった。私たちが初めてインタビューをしたときには、北京郊外にある自宅で本を読みながら暮らしていた。お宅にお邪魔すると、知識人の書斎はすばらしく心地よく感じられた。机の上には新聞のほかにペンと紙が置いてあり、ついさきほどまで何かを書いていたことは明らかであった。彼は生まれ故郷のことをたいへん愛していて、情熱的な人である。娘に「イミン」という故郷の名前をつけ、つねに故郷のことを思っている、と言っていた。私たちが2度目のインタビューをしたときには、重病のため入院していた。起きられない状態であったにもかかわらず、私たちのインタビューをこころよく受け入れ、短い時間であったが、私たちに興味深い話と情報を聞かせてくださった。末娘のイミンが父親の看病をしていた。彼女は私たちに「私の父は人のことばかり考えている人です。いまはこんなに体力がないにも関わらず、退院する、私が退院しないと他の人が入れないでしょう。病院のベッドが少ない」と言っていると話した。

2010年の7月10日の午前中に初回のインタビューをし、2013年7月18日にふたたびインタビューをした。インタビュアーは小長谷有紀、サラングレル、ソヨルマ。

### 学生時代の生活史から

Q: あなたは私たちにご自分の経歴を紹介していただけますか? ご自分の生まれ故郷、幼少時のおもしろいできごと、氏名、兄弟親戚、仕事などについて話していただけますか?

N: 私の名前はノロヴスレンです。チベット名です。ノロヴとは宝という意味だそうです。スレンとは長寿という意味だそうです。本当はツェレンと言うそうです [チベット語で、スレンは守護の意、ツェレンが長寿の意]。しかし、我々はスレンと呼びなれました。私は最初に就職して内モンゴルにいたころ、同僚たちや地元の人びとは私の名前を略してノロヴと呼んでいました。のちに1957年7月に北京に転職してきてから、名前を略してスレンにしました。このように略している理由は何かという、まず中国語で呼びやすく2つの漢字となります。それから私の後半生のおもな目的は健康で長生きすることです。そのため長寿という意味の「ツェレン」という名前が適しているように思います。はは(笑)、冗談ですよ。私は卯年で、1927年の1月27日に美しいイミン川のほとりに生まれた者です。私はフルンボイル盟エヴェンキ旗のイミン・ソムの者です。昔はイミン・ソムを興安北省のソロン旗のアゴイト・ソムと名づけていました。わがイミン・ソムはエヴェンキ旗の南側に位置する純牧畜ソムです。私の先人たちは有名な4オ

イラドの1つである左翼ワールドの後裔です。わが先人たちの故郷は新疆にあります。清朝政権の「1,000世帯のワールドを1カ所に集めて住まわせてはいけない」という分離政策の被害により我々は故郷を離れ、遥かなる天山山麓から長い旅をし、山を越え、川を渡り、多くの困難を克服し、興安嶺の北、フルンボイルの草原に来て牧畜を営んだ歴史をもっています。

私の祖父はジグメドドルジという人でした。清朝時代にフルンボイルのワールドの世襲ザンギ〔清朝時代の官職で、漢字で書くと「章京」。「佐領」ともいう。旗の下部単位であるソムのリーダー〕でした。彼の祖先たちはおよそ32代にわたって世襲ザンギを勤めたそうです。清朝時代、旗のザンギには、選出されるザンギと世襲ザンギの2種類ありました。選出ザンギは本人の能力や才能を基準に選びます。世襲ザンギは祖先たちが政権に大きく貢献し、能力の高い家系の出身のため、子孫がその官職を代々継承する権利があります。私の祖父はたいへん有能な賢い人だったそうです。残念ながら病気で30代の若さで亡くなり、私の父はたった13歳のとき、祖父に代わってザンギを襲継したそうです。私の父の名前はジャミヤンと言います。彼は幼くして官位を襲継したため、まわりは彼のことを「小ザンギ」と名づけていました。私の父は小さいころから官位を襲継し、ものごとを知らないため、本当のザンギの仕事のほかの官僚たちが実行していたそうです。私の父はあまり勉強しませんでした。幼年から官僚になってまわりに甘やかされ褒められ、できあいのものを使って、わがままで、怠惰な悪い習性を身につけていました。そして、所帯をもつと、日常のすべてを私の母が1人でこなしていました。

そうこうするうちに、1938年から1939年のころ、日本人たちが来て私の父をその官位から降ろし、捕まえて監禁しました。何があったかという、私の父が管轄するソムのトド、マイマンという2人が、牧民のウシを盗んでハイラルで売りさばいて捕まりました。そして罪を追求されると、困ったあげくに、私の父の名前を言っ、この人が自分たちを煽動したのだと嘘をつきました。それで私の父が無実ながら捕まえられたわけです。のちになって地元の人びとがみな、私の父はそのウシ泥棒となんの関係もなく、冤罪を着せられた、と言っていました。私の父が刑務所に監禁されていたとき、私は学校にいました。ある日の授業中に1人の警察が来て私を呼びだして警察署に連れて行きました。私はそのとき何があったのかと思ってとても怖かったです。すると、日本の警察署の署長が私に、「我々は調べました。きみの父親は冤罪で逮捕されていました。我々はまもなく、きみの父を釈放します。きみは安心してしっかり勉強しなさい」と言いました。しかし、私の父は出てきませんでした。話によると、その警察署長が別の所に移り、新しい署長が父のことに真剣に対応しなかったのです。その後、追求する者もいなかったため、そのまま監禁されているうちに重い病気にかかり、起きあがれなくなったため、日本人たちがこの人はもうだめだと判断し、この人をもらいうけにくるよう家族に伝えました。そして、母は牛車で何昼夜もかけて刑務所から父をむかえ、家に戻る途



中で父は亡くなりました。父はついに家に戻れませんでした。そのころ私はたったの11歳でした。文化大革命のなか、例のウシ強盗の2人のうちの1人が、「当時、我々は小ザンギの名前を出せば我々を簡単に釈放するだろうと思って彼の名前を言いました。まさか小ザンギに災いをもたらすとはまったく思いもしませんでした」と話していたそうです。私は幼かったため、ものごとを知らないまま過ごしました。本当にウシ強盗の事件があったのかどうか、日本人が地元の権威を抑圧する方法であったかどうか知りません。私の母もこのことについて語りませんでした。今日まで謎のままに残りました。わが家の唯一の記録は1948年の春の野火ですべて焼失しました。そのため私はみずからの家の歴史、先人たちに関する詳細な歴史についてよくわかりません。とにかく没落貴族の家に生まれたことは本当です。

私の母の名前は海花（ハイホア）と言います。1900年生まれで、子年の人でした。母は貧しい家の娘だったそうです。母はたいへん勤勉で、優しい人で、ふつうの人ですが偉大な人でした。私の父と結婚してからは裕福な貴族である「ザンギの夫人」になりましたが、本当の裕福な貴族の暮らしはできませんでした。父が若くして亡くなったので、母は私たち兄弟6人を育てるために心身を尽くし、たいへんな苦労を経験しました。とくに忘れられないことと言えば、わが家の暮らしがそんなに苦しかったので母は歯をくいしばって2人の息子に必ず教育を受けさせると、私と弟の2人を学校に送って卒業させることを目指していたことです。「私はどれだけ苦労しても2人の息子に必ず学校を卒業させる。あなたたち2人は必ずしっかり勉強しなさい」と言っていました。しかし、弟は地元の小学校を卒業後、学業を続けることができませんでした。生活苦により、母と兄弟たちがみな力を合わせて私の学業継続を支えました。彼らの支えがなければ、私のいまはどうなっただろうといつも思います。私は小学校を卒業して師範学校に進学して卒業したあとに日本にわたって3年勉強しました。母は、「目のまへの困難を乗り越えてこそ幸せな生活が手に入れますよ。すべてに対して必ず辛抱強く対処しなければなりません」といつも言っていました。そして、私たちに対して、つねに努力し、忍耐強く、誠実で、人に優しく、人を助ける精神をもつべきだと言いつつ聞いて、そうするよう求めていました。

わが家の生活はたいへん困難でした。父が亡くなったときにわが家には5～6頭の大型家畜、10数頭の小型家畜がありました。家族6人をやしなうほかに、私を学校に行かせて教育を受けさせるのは、たいへん困難なことでした。母は文化大革命がはじまってまもなく1967年に亡くなりました。享年67歳でした。1967年10月に母の体調が悪化したという緊急電報が届いたとき、ちょうど内モンゴル人民出版社で、監房に監禁されて審査されるのを待っていました。私は休みを申請しましたが、「『黒い子ども』は故郷に帰っては行けない」と言われて帰してもらえませんでした。それで、私は母が病気を患っていたとき、そばにいて子の責務を果たすことも、命の最期の時間に挨拶することさえ

もできませんでした。これは私の人生においてもっとも遺憾なこととなりました。私は8歳から家を離れて進学してそのまま仕事に就いたため、母のそばに長くいられませんでした。私は年をとればとるほど母のことを思い、世話をしあげられなかったことを悔しく思っています。母の体調が悪くなったときに自分が帰れないことを知って母に一通の手紙を書きました。

手紙にはもっぱら、「お母さん、あなたの息子はいくら監禁されて審査を待っていても、革命に反対し、党に反対し、毛主席に反対するような行為をまったくしていません。お母さんは安心して病気を治してください。息子のために心配する必要はありません。30年あまり革命の仕事のなか、能力の限界のためにいろいろと過ちを犯したかもしれませんが、しかし、党と政府を裏切って、社会主義に反対し、国家を裏切って外国の勢力と連携して革命に反対する行為などまったくしていません。ですから、息子の問題は早晚必ず晴らされます。お母さんは心配する必要はありません」と書いておきました。あとで聞いた話によると、母はその手紙を枕の下に置いて、母を見舞いに来た親戚、友人たちに見せていたそうです。そして、母は命の最期の瞬間に息子の手紙を手に握っていたそうです。私は年をとったいまでも母のことを思います。

私の弟の名前はバドマジャヴと言って、1928年11月生まれで、辰年です。小学校のときに成績はたいへん良かったのですが、家の生活が苦しいため進学することができませんでした。小学校を卒業して地元に残って教師になりました。解放後に彼は小学校の校長、ソム長、ホルショー〔中国語で供銷社、物資供給組合のこと〕の主任などの仕事しながら、1988年に定年をむかえ、1997年1月に心臓の病気で急逝しました。私にはさらに3人の姉と1人の妹がいました。彼らはみな学校教育を受けられませんでした。ふつうの労働者、牧民であり、家庭をもって子どもたちを育てました。3人の姉はみな亡くなりました。いまは私の妹が健在しています。今年75歳です。兄弟6人のうち、いまは私たち2人だけが生きています。

私の場合、経歴として話せるものはあまりありません。よく考えれば、私は定年になって20年すぎました。言いたい、書きたいことが多いようです。私の友人たち、故郷の兄弟たち、地元の各行政機関の責任者たちは、私と会うたびに、「いまは1つの回想録を書くべき、あなたは我々の地元から出た有名人ですよ、わが旗の誇りですよ、モンゴル文化の発展のために生涯努力し、多くの功績をたてた人ですよ」と言われます。人によっては、「あなたはわがモンゴル文化に多くの先駆的な仕事を遂げて、我々の文化の旗手だ」とまで、おだてることさえあります。しかし、私は自分のことを知っています。私は1人のふつうの人間です。本当にいくつか先駆的な仕事はしましたけれども、それは私個人の能力ではなく、時代、社会が私ににあたえた機会だと私は考えます。私は、たいへん有名な偉大な運動に参加したわけでもない、人を驚かせる大きな功績をたてたわけでもない、血まみれの戦争に参加して死の危惧を経験したわけでもない、特別なことは

していません。私には天地に名をとどろかせた経験がありません。一生平凡に暮らし、ふつうに働いた者です、私は何を書けばいいだろう、とやってきました。しかし近年、過去の一部のことが心のなかに強く残り、目のまえに再現するようになりました。一部のことを遡って思うと、昨日のできごとのように鮮明に思い出されます。私の一生とは、実際に1つの時代の歴史であると思うようになりました。何1つ功名のためではなく、むしろわが子孫や次世代に1つの時代の歴史を伝えて理解させる責任という観点から私は書くべき、語るべき、残すべきものがたくさんあることに気づきました。そうではなければ、私はあなたがたのインタビューを受けません。過去にもさまざまな方がたが私にインタビューをしたいと来訪しました。そのとき、私は一切受け容れませんでした。

## 日本が統治した時代

1931年の「9.18」事変〔柳条湖事件〕のあと、日本の侵略者たちがわが国の東北三省を占領したことによって、わが内モンゴルの東部を占領し、興安東西南北四省を設立し、満州領の興安総省に管轄させました。それを契機に、わが東北地方のモンゴル人たちは日本の手落ちたわけです。当時、我々のソロン旗の旗長は地元出身者だと言っても、実権は日本人が握っていました。各ソムの実権も同じく日本人の手に握られていました。小学校で教えていた日本人も学校のすべてのことを支配していました。彼ら全員が日本の特務機関から派遣されて来たスパイたちでした。私が小さいときに日本人たちによる違法な占領に対して、我らの若者、知識人たちはたいへん不満で、日本と偽滿に強く反対する傾向がありました。1939年のノモンハン事件のあとに日本人たちが戦争のためにモンゴルと中国の国境に大量の軍隊を移動させ、ハイラルからモンゴルの国境までに1つの道路をつくりました。そのために漢人と朝鮮人を捕まえて道路工事に従事させました。それで、どれほど人命を損なったかわかりません。日本の警察は、人を逮捕し、なぐり、ののしるのが日常的になっていました。私が南屯の寺院に住みながら学校に通っていたとき、日本の警察官がその寺院に住んでいました。彼は食事代や部屋代を一切払わず、ただで食べて、飲んで、住んでいたにもかかわらず、横暴な態度をとります。彼は寺院のラマ僧をなぐり、ののしります。それで彼らは恨みに耐えられず、ある日ある若いラマ僧が年配のラマ医から下剤をもらってポーズ〔肉まん〕に入れてその日本人警察官に食べさせました。すると、その日本人警察官は下痢をしてげっそり痩せました。あとでその若いラマ僧がやったと知ってその日本人が問いかけたところ、そのラマ僧は「私はそのポーズをあなたのために作ったわけではありません。私は自分で食べようと作りました。少しさましてから食べて体調を整えようとしていました。しかし、あなたは聞かずに食べたので私は知りませんでした」と答えました。そして、その警察官がまたその薬を出したラマ僧に問い合わせしてみました。そのラマ医も、彼が体調を整えるために私から薬をもらいました、そのポーズのことを私は知りません、私と関係ありません、

と言ったそうです。これは小さなできごとでしたけれども、あの警察官の横暴な態度は少しおさまり、多少気を使うようになったそうです。「圧迫のあるところに反抗がある」とはその通りですね。

1935年から1940年のあいだ、私は実家からおよそ100キロメートル離れたソロン旗の中心である南屯に行って小学校で勉強していました。そのとき、わが故郷のイミン・ソムには小学校がなかったからです。南屯のその寺院に私の親戚にあたる1人がラマ僧でした。家の生活が困難であるため、学校の寮に入れませんでした。その寺院で親戚ラマ僧のところに寄宿しながら、昼間は学校に通って勉強し、朝晩はあいまにラマ僧の親戚のお手伝いを少ししていました。それで、寮と食事代を払わずにすむわけです。私が4年生の年にその親戚のラマ僧が亡くなりました。それで私はその寺院にいられなくなりました。そして学校のロンマオ（栄茂）という先生の家に寄宿するようになりました。この先生の本当の名前はハスバガナと言います。モンゴル人民革命党の党員で、中国に派遣されてきて革命の秘密活動を展開していた人でした。彼は教師の名目でフルンボイルの状況を探り、ソ連とモンゴル国にその情報を提供していました。私はのちになってそのことを知りました。彼は国が解放される直前に日本側に逮捕されて亡くなりました。

8歳で実家を離れ、よその軒下に寄宿しながら学校に通うとはどんなことなのかを身をもって経験していない人には理解しにくいでしょう。家のこと、母のことを思って夢のなかで泣いて目覚めていました。しかし、私は母の期待を裏切らないために涙を飲んで歯を食いしばって耐えきりました。小学校低学年のころ、私の成績はそれほど良くありませんでした。中より少し上でした。おもな原因は年が幼く、家を思うほかにまた遊び好きだったからでしょう。のちの数年間に成績は大いに上昇し、クラスのトップでした。そして1940年に偽満州国の優秀学生団のメンバーに選ばれ、日本の各地を見学しに行きました。その見学を通じて私は日本にたいへん興味を持つようになり、そして後日の日本留学の際の精神的基盤となりました。小学校の時代には、私には何も将来に関する夢がなく、ただ母に言われた通りに勉強に励み、大きくなったら偉い長官になって大金持ちになって母を支えて家族を養おう、と思っていました。それは私の家の状況がたいへん困難であったためです。家には労働力がありません。ただ、母が3人の姉を連れて山に行き、薪を積んでハイラルに運んで売りさばき、得られたわずかなお金で家を養っていました。あるいは母が他人に衣服をつくってあげるか、毛皮をなめしてあげながら、暮らしていました。のちに、弟が大きくなり、わが家のおもな労働力となりました。私は小学校を卒業して、もともと中学校に入ろうと思っていました。しかし、結果的にハイラルの師範学校の試験を受けました。その学校では国の費用で勉強することができ、寮と食費をすべて国から支給されます。また、冬、夏、二季の衣服も国から提供されます。それだけではなく、2年間の勉強を終えたあとに、仕事をあたえられます。小学校の先生になります。私の家の状況が困難であるため、私はそこを受験しました。そこで

勉強しているあいだに、1942年に私は15歳で母親の要求で、ある金持ちの家の娘と結婚しました。しかし、4年後に離婚しました。理由の1つはずっと一緒にいないこと、2つめは何も愛の基盤がないことです。そして、1946年に離婚したわけです。

1942年12月、私はもとの学校を卒業したとき、ちょうどワンギンスム〔王爺廟〕と言って現在のウランホト市にあったモンゴルを支援する機関から人がこのフルンボイルに派遣され、日本へ留学させる学生を選抜しに来ました。当時、私は、早く社会に出て仕事について家をささえたいという意向が強かったのですが、日本に行って引き続き勉強する良い機会を失いたくありませんでした。考えてみると、日本に行って引き続き勉強できるだけではなく、家に負担をかけない、また少しながら奨学金が得られます。こう考えた私は母に言わずに登録して受験しました。試験の結果が優秀だったため、1943年3月に私は日本に渡りました。日本に行くときに、私の父はまたそんな遠い異国に息子を行かせないと止めました。しかし、母に何度も説明して嘆願した末、やっと許してもらいました。

## 日本で勉強した日々

日本の東京に着いたあと、私は日本の盛岡市にある岩手師範学校に送られ、勉強させられました。その学校にはまたテンチャン（田昌）、プヤントクトフ、バヤンプラグなどのモンゴル人学生たちが勉強していました。彼らはみな大学の本科で勉強していました。私の場合は、大学の予科で勉強していました。同じく、岩手県の別の大学にも何人かのモンゴル人学生たちが勉強していました。我々はたまに約束して一緒に山に行って遊んだり、一緒につるんでぶらぶらしたりしていました。また、何人かのモンゴル人学生は、学校寮ではなく、小さな宿で暮らしていました。それで、我々はたまに彼らのところへ行って、自分たちで食事を作って食べていました。日本で勉強しているあいだも、私の生活はたいへん困難でした。日本語の基礎がよくないため、私はたいへん努力して勉強していました。私の先生と同級生たちは、私の面倒をよくみてくれ、私に対してとても親切でした。深沢登（ふかざわのぼる）という、日本人の同級生がいました。彼は私の親友でした。夏休みに私は家に帰れません。私の同級生が私を彼の家に連れて帰っていました。彼の家は田舎にあって、ご両親は農家の人でした。私を留学生、モンゴル人また息子の親友だと知って、私にたいへん優しく接し、私の面倒をよくみてくれました。まるで自分たちの息子と同じように接していました。私はその友だちの家で、その年の夏休みをそのように楽しく過ごしたのです。彼らの家におよそ20日間泊まったでしょう。そして、日本の田舎のふつうの農家の暮らしを知る機会が得られたわけです。当時は戦時中であったため、我々は日本に対して信頼がとてもうすく、おおいに飢えていました。日本の学生たちはまだましでした。彼らはあちこちから少し物資を入手して食べます。留学生たちはたいへん困難でした。当時、我々の学校に、1つ小さな医務室があ

りました。そこに、1人の年配の看護婦長がいました。彼女は、我々留学生たちの生活が苦しく、たいへんおなかをすかせているのを見て、同情して「有病」という証明書を出してくれました。すると、我々は病人食を食べることができるようになります。また、たまに私たちを医務室に呼んで休ませたり、あるいは食べものをもってきてくれたりしていました。私は、日本にいたときに支えてくれた善良な人びとをつねに懐かしく思い、深く感謝しています。残念ながら、私は2度と行けないでしょう。当時の学校の規律は非常に厳しかったです。就寝、休憩、食事、起床すべて決まった時間がありました。1分でも遅れてはいけません。軍隊のような感じでした。

日本で勉強していたときはちょうど戦時中だったため、勉強よりも労働によく参加させられました。日本の一般民衆は、我々にはたいへん親切でした。つねに、面倒をみようとしていました。とくに我々モンゴル人に対して非常に優しくかったです。しかし、政府の高官たちは我々留学生をたいへん警戒し、つねに見張っていました。留学生たちを会社に行かせないで、必ず田舎に行かせて農作業に従事させていました。1944年の夏、私を日本の北部にある北海道に派遣し、3カ月農作業に従事させました。1945年の2月になると、日本の権力者たちは外国人に対する管理を強め、日本で勉強している学生たちを専門ごとに分けて集めて一緒に勉強させるようになりました。我々の師範学校で勉強していた学生たちは新潟の第2師範学校に集められて、そこに居ました。突然、ある日、偽満州国の在日大使館から通知が届き、私だけに新潟の第2師範学校に行って勉強しろと命令しました。そのとき、私と同じ学校で勉強していた本科のモンゴル人学生たちはすでに先立って卒業していました。テンチャン（田昌）は、父親が重病になったため、休みをとって家に帰ってしまいました。実際、私1人だけ残っていました。私は大学の本科に入って4カ月勉強したのち、アメリカの飛行機が日本の国土を爆撃することが増え、学校もふつうに授業ができなくなりました。しかも、時間とか関係なく爆撃にあって死ぬ危険性がありました。そこで、私は方策を探って、家に手紙を書いたわけです。「母が重病にかかりました。早く帰ってください」と電報を至急送るように手紙で請願しました。やがて、本当にそのような電報が届き、私は学校と関連部署とに休暇を願い出て、1945年7月に学業を終えて家に帰ったわけです。私は日本において、2年間師範学校の予科で勉強し、半年本科で勉強しました。日本語はたいへん上手になりました。日本で勉強した2年半の期間にたくさんのことを勉強しました。もともと9月に学校がはじまります。しかし、8月に日本が敗戦し、私はふたたび日本に行くことができませんでした。

故郷に戻ってまもなく、ロシアの赤軍が来て故郷を解放しました。日本の統治下にあった地元の民衆はロシアの赤軍をたいへん暖かくむかえていました。しかし、彼らの一部の行為が民衆を大きく失望させました。規律なく散漫で民衆のものを略奪し、家畜を殺して食べ、女性と子どもをけがすなど、さまざまな行為が、共産党の指導する社会主

義国の革命軍であることの信用を失わせました。わが家の大小家畜20頭ぐらいの家畜をすべて彼らが奪って行きました。解放するために来た軍隊が略奪者になりました。民衆は恐れてほうぼうへ逃げ出し、隠れるようになっていました。わが家も山に移動して隠れていました。数日後に他家の人たちが、川をわたってロシアの赤軍が帰ったかどうかを見て来てと私に言いました。私がウマに乗って川のほとりに行くと、突然、川のなかから白い服を着たロシア軍が出て来て、何かいろいろ言いながら、手を振って私を呼びました。彼らもウマを連れていました。私は彼らのウマが痩せて歩けなくなったから、私のウマを盗ろうとしていると思って、あわててうしろへ逃げました。逃げていると、うしろから銃の音が聞こえました。ほかに何があったか知りません。家に帰ってウマの鞍をはずそうと鞍ひもをほどこうとしたら、私の片手がどうしても上がりませんでした。どうしたかと思ってみると、赤い血がモンゴル服の袖から流れていました。そして、私は手に銃弾があたったことに気づきました。幸い、肩をよけて当たっていました。もし、要所に当たっていたら、それで終わりですよ。母は私が負傷したのを見て驚きあわてて、すぐに牛車を用意し、赤軍の駐屯しているところへ行って、ロシア人医師に処置してもらいました。ソ連の赤軍のロシア人医師は私の手にペニシリンという薬を塗って、何度か包帯を交換して巻いて、私の傷は癒えたわけです。ロシア軍に撃たれて負傷したのにロシア人医師に治してもらったなんて、おもしろいでしょう。

ソ連の赤軍がわが地方に来てまもなく、モンゴル国〔当時、モンゴル人民共和国〕の騎兵が入ってきました。またわがソムに駐屯しました。モンゴル兵の規律はたいへん厳しかったです。彼らはソ連の赤軍がものを略奪していたことに対して大いに不満だったほかに、彼らのその不当な行為を止める努力をし、互いに矛盾が生じて銃撃になり、武力衝突になりかけました。我々は当時まったく中国語を知りませんでした。そのため、我々はモンゴル国の兵士たちが持っていた書籍と新聞雑誌を読んで、精神的な文化の需要を補っていました。モンゴル国の優秀な作家 Ts. ダムディンスレンの『白髪之母』、ナツァグドルジの『わが故郷』などの優秀な作品と我々はそのとき初めて出会いました。母語でそれらの美しい作品たちを読めることはたいへんすばらしいことでした。モンゴル国は我々より先立って文明化していました。

さあ、私の勉強していた状況はこんな感じです。1935年に最初に学校に入ったときから1945年の7月まで、私は合計10年半にわたり学校で勉強をしました。8年間は自国で勉強し、2年半は外国で勉強したというわけです。

## 仕事に就いてからの経歴

Q: あなたは日本から戻ってから、ふたたび学校に入学しなかったのですか？働いたのですか？

N: 日本から帰ってまもなく私は仕事に就きました。わがフルンボイルは1945年に解放

されました。ソ連の赤軍が来て日本が敗戦しました。この歴史を私は身を持って経験しました。しかし、これは世界に知られていることなので私が話す必要はないでしょう。わがフルンボイル地方はとりわけすばらしい草原です。私の生まれ育った故郷であり、また私が社会に歩き出した出発点でもあります。1945年8月に日本が投降し、10月にフルンボイル省政府がわがハイラル市に設立され、南屯にソロン旗政府が設立されました。1946年3月にソロン旗から教育の仕事を担当していたアビドを派遣し、わがイミン・ソムに來させて、当時のイミン・ソムの有力者たちと学校を設立することに関して相談しました。そして、トクトフ、セブジム、私の3人を教師として紹介し、推薦しました。そして我々3人が30人あまりの学童を招集し、イミン・ソムの最初の小学校を設立したわけです。当時はアゴイト小学校と呼んでいました。のちに、イミン小学校と名前を変えました。当時、学校の状況はかなり厳しいものでした。しかし、私たちはすべての困難を乗り越え、故郷の教育事業の最初の基礎をつくったと考えています。私はとにかく師範学校を出た者であるため、当然、教えるべきでした。

そして、1学期教えているうちに、仕事の需要により、ソロン旗政府に転勤したわけです。相前後して、総務課と民政課の課長として働きました。旗に転勤してから、著名な作家として現在、評価されているハダと親密になりました。祭日あるいは休日は、ハイラルに行って、ハダヤスルンの家に泊まったりしていました。彼ら2人は、わがワールドたちです。そのため、我々は親密な関係をもっていました。もう1つ言うべきことは、つねに私はハダ派のメンバーであると言われていたようです。本当のことを言うと、ハダ派とはどういうことかよくわかっていませんでした。

とにかく、1945年、フルンボイルは解放された当初、内モンゴルの管轄に入っておらず、ほとんど独立した自治区でした。当時、わがフルンボイルの一部の著名な知識人たちは次から次へさまざまなグループをつくり、さまざまな政治勢力が互いに闘争し、陰に陽にあらそい、政治的な空気はたいへん複雑でした。そのとき、ハダも1945年にハイラルで一部の青年を動員し、ハダ派という何らかの組織をひきいていました。それは、何も反革命的なものではありません。そもそも私は正式にその組織に入ったことはありません。しかし、私はつねにハダのところへ行って、彼と非常に親密な関係をもっていました。そのために、1948年以後、大小さまざまな政治運動のなかで、つねに私はハダ派のメンバーであるとみなされ、私が違うと言ってもまわりが信じてくれないでしょうから、「そうです」と認めていました。

1946年の8～9月、わがソロン旗にも内モンゴル自治運動の連合会の分会が設立されました。そのとき、私はメンバーに選ばれました。そして、1947年の春、私はウランホトに行き、内モンゴル人民代表会に陪席の立場で参加しました。

当時、我々の文化教育の水準は非常に低く、偽満州国の時代、各旗県に唯一の6年制の小学校がありました。ハイラル市には2つの4年制の高等学校がありました。1945年



12月にハイラル市のフルン小学校が設立され、翌年の1946年4月にハイラル第1中学校が設立されました。この中学校もおもにモンゴル語で授業し、当時としては内モンゴル自治区の唯一の中学校でした。その翌47年の冬、ハイラルのフルンボイル専門学校が設立されました。ハダは校長として働きました。学校の副校長はアンロヴ、ギンデンジャヴでした。そしてハイラルの第一中学校およびフルン小学校はみな、このフルンボイル専門学校に所属するようになりました。私は、その年の秋の10月に、ソロン・ソムから転勤し、フルンボイル専門学校で教えるようになりました。中等部で働きながら、付属フルン小学校に教師が足りなかったため、小学校にも行って教えました。そのとき、私は小学校に教えに行きましたが、フルンボイル専門学校の先生たちの宿舎で、ムンフナサンという専門学校の先生と1つ部屋に住んでいました。その先生はその冬に転勤してほかのところで一時的に働き、一冬、私は1人で住んでいました。

当時、学校で「一心」という運動が展開されました。突然、1つのできごとがあり、私は一生忘れることができません。同じくその冬の12月29日の夜、フルンボイル専門学校の学生たちが来て、私を捕まえて糾弾しました。私は理由を知りませんでした。彼らは「テムチグを利用して学校幹部のアンロヴ、ギンデンジャヴたちを打倒する運動をしたことを白状しろ」と私を批判しました。私はそのようなことをしていないので、していないと本当のことを言いました。しかし、彼らはますます激怒し、「本当のことを言わない、罪を自覚しない奴は殺されても自業自得だ」と太い木の棒と革のベルトでめちゃくちゃに殴りました。全身血まみれになりました。もし、いま私がやったと認めなかったら本当に殺されたでしょう。そして、私は「そうです、私が教唆しました」と仕方なく嘘をつきました。すると、彼らはさらに「おまえの背後にだれがいるかを言え、言わなければ殴るぞ。ハダか、ちがうか」と言いました。そして、すでに嘘を言ったと思い、「ハダです」と嘘をつきました。すると、「ああ、ノロヴスレンは我々の同志だ。ハダを打倒しよう」と言いながら、喜んで帰りました。こんな言葉を私の口から得るために、あのように殴ったのですね。あのテムチグというのは、専門学校の政治学科の学生でした。私たち2人は同じ地域の出身です。その冬、学生の宿舎が寒いと言って、私の隣に来てしばらく住んでいました。ハダは当時、フルンボイル専門学校の校長でした。しかし、その数日間、ちょうど学校を留守にしていました。ウランホトに会議に行っていました。私は強く殴られたため、翌日に熱を出し、全身に痛みが走り、起きることができず、横になっていました。

私は殴られて嘘を言ったため、たいへん心配し、とにかく内心不安でした。私は一生こんな嘘を言ったことはありません。私の嘘により、ハダに何らかの苦難がくるだろうと心配すればするほど、不安でした。そして、数日後に、私は直接、アイマフ〔盟という行政単位〕の指導者に会いに行きました。当時のアイマフの党書記はジャータイという人でした。私は、この一部始終をそのまま話しました。するとジャータイ書記は「学

生のあいだでそんな運動を展開してどうするのか。ハダは良い人です。私たちの良い同志です」と言いました。これを機に、ジャータイ書記に「私は内モンゴルの軍官大学に行きます。私を行かせてもらえますか」と願い出ました。ジャータイ書記はその場で許可しました。そして、ジャータイ書記の紹介で、私は1948年8月、内モンゴル軍政大学に行きました。この学校は、内モンゴルの労働組合が設立した幹部養成学校です。当時、ウランフーが校長でした。その学校に2つの分校がありました。1つはウランホトにありました。おもに職についている幹部たちを養成します。第2分校は、チチハルにあり、新しい幹部たちを養成します。私は最初、ウランホトの分校で3カ月勉強していました。その学校の敷地を内モンゴルの党学校が利用するようになったので、私たちはチチハルに移りました。その学校で勉強しているあいだに、私は革命の理論に出会い、共産党の幹部の革命的な立場をはっきりと理解しました。政治的な思想が急速に向上し、卒業するまでに私は共産主義青年団に参加する意向をもつようになりました。

1949年に学校を卒業してフルンボイル盟の政府に配属され、文化教育課に働きました。ここで仕事に着いてから私は積極的に働き、また、共産主義青年団に参加する申請書を書いて組織に進呈しました。盟の指導者たちも私に親切に対応し、私を呼んで話し、しっかり頑張って働くようにと励ました。しばらくして、ある夜政府のある幹部が私の家に来て、私と話し、青年団員の基準でみずから厳しく要求すべきであると励まし、私が書いて出せずに置いていた入団申請書を机の上から持って帰りました。そのリーダーは党組織の幹部であったことを私はのちに知りました。半年後、つまり1949年の冬のある日、突然、人が来て私と話してあなたはすでに共産党に入ったと正式に知らせました。私はたいへん驚く一方、たいへん喜びました。こんなに早く党に入るとは、まったく夢にも思っていないでし、私は（共産主義青年）団にも入っていなかったのです。直接入党するとは信じられず、驚きました。しかし、組織から私に、あなたの仕事に対する態度、能力、人柄、党と革命に対する認識をみて、我々はあなたを党員の条件に達したと見ています、継続的にしっかりと働いてください、と言われました。そして、私は1949年11月16日にゾリグバト、ギンデンジャヴの2人の紹介で党に入りました。ただし、当時、フルンボイルでは党の組織は公にはされていませんでした。私は、秘密裏に党に入りました。しかし、当時、団の書記だった人は、私が入党したことを知って、党の組織に対してたいへん不満でした。彼は団の書記でありながら入党していなかったのに、私が直接入党したから、不満なのでした。彼はその後、50年代に党に入り、中国人民大学を卒業してその大学に残って教鞭をとり、経済学の教授になりました。

1951年にわが党の組織が公開されたあと、私はようやく入党宣誓をしました。フルンボイル政府で1年半働いて、内モンゴル政府の文化教育課が紹介し、中国人民大学の教育特別養成科に行って8カ月間勉強しました。そのときの中国人民大学はソ連の支援で設立された大学でした。1951年6月に卒業しました。そして私を直接内モンゴル政府文

化教育課に残して働かせました。この間、1952年の秋、中国の芸術団と展覧会の代表団がモンゴル国へ訪問したとき、通訳として同行しました。同じくその年に妻のパムジャヴと結婚しました。パムジャヴはもともとハイラルのフルン小学校の速成クラスで勉強していましたが、病気のため学校を中退していました。彼女はたいへん聡明で、能力のある人です。私の仕事と生活をいつも手伝ってくれます。悩んだときは私を落ち着かせ、励ましてくれました。そして再来年には、私たちは結婚して60周年となります。この人生を一緒に過ごしてきたのです。私たち2人は。

さて、内モンゴル政府の文化教育課での仕事もそれほど長く続きませんでした。1952年の末に『内モンゴル教育』雑誌社に転職し、その雑誌のモンゴル語版の編集出版する仕事を担当するようになりました。それは内モンゴル自治区の教育委員会から発行しているモンゴル民族教育の最初の印刷物です。1952年3月に初版が誕生しました。それは内モンゴルがモンゴル語で発行した最初の雑誌の1つです。国内外で公開発行する雑誌でした。創刊から前後して『内モンゴルの小学校教師』、『教師の友』などの名前で発行されていました。その雑誌は当時の内モンゴル自治区の副主席ハフンガの提言で発行がはじまったものでした。雑誌の運営方針は（中国共産）党の少数民族政策の教育に関する政策を宣伝し、少数民族の教育事業を総括し、中小学校教師の教育指導などをするためです。

当時、私は若くて、経験不足のためたいへんなプレッシャーを感じていました。責任者たちは私にたいへん信頼を寄せていました。そのため私はこの任務を何も迷うことなく引き受けました。民族教育に少しでも力を捧げることが私これまでに努力して働いて来た希望だったのです。最初には雑誌を運営する資金が少なく、人材不足などの困難がありました。そのような状況のもとで我々のグループは一緒に上へは上層部の領導を頼り、下へは大衆を動員し、さまざまな手段をとって頑張りました。また、当雑誌の中国語発行室の多大な支援を得て、一緒に目のまへの困難を乗り越えて短い期間中に『内モンゴル教育』誌のモンゴル語版を初めてみんなに届け、モンゴル民族の教育史上に1つの空白を埋めました。私1人だけの功績でなくても私はみずから指揮して発行させました。ハフンガさんは私に対し、「結果が良ければあなたたちグループ全員の功績であり、悪ければあなたと私2人の責任になるからね」と言っていました。彼は内モンゴル自治区の副主席を務めていたときに、同時に自治区の教育庁長を兼任し、文化教育を担当していました。私の直属上司でした。私も頻繁に彼のところを訪ねていました。我々を大いに支持していました。

1954年10月に上層部が我々の『内モンゴル教育』誌のモンゴル版を内モンゴル人民出版社の編集課に付属させました。そして私はももとの雑誌編集室の全員を出版社に移して、引き続き、雑誌の編集に従事しました。出版社に行ってもなく、教科書、教材編集室が設立されました。編集室長にアサラグチが任命され、私は副室長に任命されま

した。副室長にはほかにラシドノロフ、ペレンレイなどがいました。あとでさらにデチン、オイロフたちが副室長に任命されました。私は主としてもとの雑誌を担当すると同時に、全室のメンバーの政治思想の仕事を分担していました。ここに働いていた期間中、私は教師たちの利用する教科書を何冊か編集しました。『教育学』、『心理学』、『学校の管理と指導法』などの教科書を私が校閲編集しました。党の仕事について、前後にして党支部の宣伝委員、組織委員、支部書記などを担任しました。

1954年8月から10月の間に、北京に行って、わが国の第1回人民代表大会第1次第1回会議の翻訳の仕事に参加しました。おもに筆訳と同時通訳を担当しました。そのときに行った私たちのメンバーに出版社社長のエルデントグトフとペレンレイ、セレンなどがいました。同じく1954年の末にわが国を訪問したモンゴル国の芸術代表団の接待と案内通訳の仕事を担当しました。1955年8月から10月の間にふたたび北京に行って、わが国の第1回人民代表大会第1次第2回会議の翻訳する仕事に従事しました。同じく筆訳と同時通訳の仕事に従事しました。1956年の初めに北京に行って、わが国の第1回人民代表大会第1次第3回会議の翻訳作業に従事しました。同じく1956年の8月から10月の期間に北京に行って、わが国の共産党の第8回代表大会の翻訳作業に参加しました。おもに筆訳と同時通訳をおこないました。

1957年2月に私は出版社の教材編集室から総編集室に移って、モンゴル語編集室のすべての本の編集作業に担当しました。私と一緒にペレンレイも移ってきました。それらの本には原著もあれば、翻訳したものもあります。1957年10月にわが国を訪問したモンゴル人民共和国の革命党の代表団の同行通訳を担当しました。そうこうするうちに、例の右派を弾圧するキャンペーンが展開しはじめました。わが内モンゴルでも全国と同様に展開し、同時にさらに「民族右派」という内容が付け加えられて内モンゴル独特の右派を打倒しようとするキャンペーンが繰り返されました。当時、わが出版社からまず非共産党員右派を吊るし上げました。のちに、党の内部からも吊るし上げられました。全国で有名な「民族右派」と言われたトヴシンさんがわが出版社から吊るし上げられました。彼はウランチャブからわが出版社に移って来て社長になってまもなくのことでした。1年も経過していなかったため何1つ発言していなかったです。1度だけ出版社を代表して全自治区の民族言語討論会に参加し、会議で上がった民族言語政策に関する意見をまとめた大会の講演をしただけでした。これによって「民族右派」になってしまいました。そのとき、わが出版社の多くはモンゴル人で、みな民族言語に関連した仕事に従事していました。そのため、民族言語に関する意見のすべてが具体的で、正確で、善意のもので、わが党の民族事業の更なる前進に有益な良い意見ばかりでした。しかしその時代の思想方針により「党に反対して攻撃した」とされ、それらの知識人たちがみな党と革命に反した右派として批判されました。私は翻訳の仕事で出張が多く、出版社で発言する機会がなかったため「右派」になって批判される災難から逃れることができま

した。

1958年から大躍進がはじまり、「三面紅旗」をかかげ、「共産主義社会」を急いで実現しようという時代になりました。当時、イギリスとアメリカに追いつくために、昼も夜も鋼鉄を鍛錬していました。工、農、兵全民をあげて鋼鉄の鍛錬に励みました。全国で鋼鉄の鍛錬が広がり、至る所に鋼鉄を鍛錬する高炉が建てられました。わが出版社も全国の民衆同様に鋼鉄鍛錬の運動に参加し、高炉を建てたものの、どのように鍛錬するかはだれも知りませんでした。地方では合作社の統合が進められ、大鍋から共産飯を食べる〔公共の資金で飲食する〕ようになっていました。1959年からわが国の経済が崩壊し、60年代初めの3年にわたった飢餓に見舞われました。1959年の廬山会議、1962年の七千人会議と、それぞれの時代の象徴となった会議によって政策がますます進行し、緊迫し、人びとの心はたいへん高揚していました。仕事に対しても当時の人たちは実直で本心から全力を尽くして働いていました。それで天と戦い、地と戦い、果てに人びとと戦いはじめたわけです。

1959年9月5日にわが出版社の地方の編集室を拡充するために、もともとの一般実用書編集室を3つに分け、政治理論編集室、生産技術編集室、文学芸術編集室として再建し、私を文学芸術編集室の長に任命しました。そして、私は内モンゴル人民出版社の文学芸術編集室の最初の主任になりました。副主任は、ペレンレイとダンバの2人でした。とにかく、モンゴル文学芸術の作品を母語で編集、出版する仕事はたいへん遅れていて、モンゴル人作家たちが母語で執筆することも少なく、モンゴル民族の文学芸術の発展を大きく阻害していました。我々の文学芸術編集室が設立されたあと、私たちはさまざまな措置をとり、出版情報の観点から、執筆陣をつくり、新しい力を養成するために努力し、当時の党の文学に関する政策の指導のもと、さまざまなテーマの一部のモンゴル作品を編集、出版し、民族の社会主義文学を発展させようと自分たちの労力を捧げて貢献しました。

私は文学芸術編集室の仕事を担当している期間に、『三国志』、『聊齋志異』、『獄中日記』〔ドストエフスキーの作品〕、『王若飛』、『トルストイ小説集』、『ゴリキー小説集』、『鋼鉄はいかに鍛えられたか』〔N.オストロフスキーの作品〕など国内外の著名な作品を計画的に翻訳し、編集、出版したほか、また、モンゴル人作家たちの200あまりの作品を編集、出版し、多くの読者に届けました。それにとどまらず、一部の中堅作家を養成しました。当時、私の編集、出版した一部の名作は、いまだに読者に注目され、社会的に評価されています。私は、友人たちの本棚にそれらの本を見るたびに、思わずうれしく思い、誇りを感じます。それらの文字や文章ごとに、私の汗がしみこんでいるのですよ。私は出版社の文学芸術編集室で働いていたときは、私の人生において民族の文化事業にもっとも正直に力を捧げた瞬間だったと、迷わず思います。私自身がもっとも満足すると同時に、みなさんも何より賞賛してくれます。また、わが内モンゴル人民出版社

にとって、モンゴル語書籍を編集出版事業およびモンゴル人作家の養成がもっとも盛んな時代でした。マルチンフー、ジャルガーフー、ナ・サインチョクト、ベ・ブレンベヒ、ア・オソル、ゲレルチョクト、チミドドルジなど当時の有名な作家たちとたいへん親しくなり、彼らに良い作品を書いて我々に出版させるように依頼し、彼らの執筆に適切な励ましをあたえていました。概して、文学の場合、読者たちは著者の名前だけを知っています。一方、編集者や校正者、出版者を知りませんよ。本当は、出版する側の貢献が非常に重要です。1人の著者の作品が社会全体に届く過程では、編集、校正、出版などたいへんな作業があるのですよ。一部の若い作家の作品を何度も直していました。チミドドルジさんの『黄河の波』という作品を校閲、編集するときに、私は何度もあって話し、出版しました。チミドドルジさんはみずから私に、「これは我々2人の作品になっていますね」と冗談を言っていました。マルチンフーの『広いふるさと』を私は人を集めて翻訳し、編集、出版しました。ベ・ブレンベヒの『人生の花火』をみずから校正して、出版させました。ベ・ブレンベヒは私より1つ年下の人ですよ。私はきちっと校正しました。たくさんありますよ。それを全部あげてどうなりましょう。もちろん、私1人でしたわけではありません。我々のグループでした仕事です。

私は1959年と1960年に、モンゴル国の5つの県の党と政府の代表団の通訳となり、モンゴル国を訪問したわが国の青年代表団の通訳として行きました。1960年1月からはじまった副総編集長として働きました。この副総編集長の証書は、当時の内モンゴル自治区政府の主席であったウランフーがみずから私に手渡したものです。私の証書番号は11245であったことをはっきり覚えています。副総編集長になって、おもに文学芸術編集室（文学と芸術）美術編集室を中心に、担当するようになりました。1962年に私は中国作家協会、内モンゴル作家分会のメンバーになり、まもなく理事に選ばれました。それも私が作家たちと会談し、出版する作品を選出し、編集するうえでたいへん有利な条件となりました。また、多くの若い作家たちと会って、彼らに良い作品を書いて出版社に持ってくるよう依頼していました。彼らにとっても、作品を出版させるために私を訪ねるのが容易になりました。協会の会合のときに会えますから。

## 文化大革命のころ

Q: あなたは文化大革命のころ大丈夫でしたか？大いに批判されませんでしたか？

N: それに関しても話しますよ。ちょうど時系列で私はいま話そうとしています。概して、わが国の1959～66年は特別な時期でした。わが新中国の新しい歴史上、特別に大きな成績をあげたと同時に、さまざまな困難が待ち構えていました。民衆が封建の圧迫から解放されて、幸福光明にであったのに、まもなくもう1つの災難に陥ったわけです。それがつまり、さきほどあなたが言った「文化大革命」です。その大革命のなか、私は政治面で冤罪をかぶせられ、精神面で迫害され、肉体面で殴打され、苦しませられ、生活

面で見下され、人格面で軽蔑され、全国の知識人と同様に黒い帽子をかぶせられ、たいへんな苦しみを味わいました。

60年代の初めに、毛主席の文芸創作問題に関する2つの指示が出されました。1つは演劇、音楽、絵画、舞踏、映画、詩、著作など各種の芸術の形式に多くの問題が存在します。関係者は少数です。社会主義的改革がさまざまな分野でまだ受け入れられていません。映画、演劇などと軽視してはいけません。一部の党員が封建主義、資産階級の芸術を宣伝しています。必ず、厳しく管理すべきである、と指示しました。2つめの指示は、各協会とそれに関連する新聞、雑誌に関するものです。運営している人たちは、党の政策を宣伝せず、工・農・兵に近づかず、社会主義の革命および建設を宣伝しません。それを強く管理しなければならないなど。私は、ちょうど文芸の仕事、出版情報の仕事を引率する仕事をしていたので、毛主席のその2つの指示を非常に明確に理解しました。そうこうするうちに、やがて、階級闘争が語られるようになりました。1964年から、文芸の思想整頓キャンペーンがはじまりました。内モンゴルの文芸の分野でも思想整頓がはじまりました。わが出版社も思想を整頓し、「四清運動」をはじめました。文芸編集室を仕切っていた私は、この運動の主たる批判的になりました。外国の作品を出版させたことで、つまり我々はモンゴル国の作品をかなり編集、出版したので、この運動のなかで、「内モンゴル人民出版社をウランバートルの支社にした、ウランバートル支社の責任者になった」と一部の人が強く批判しました。本当はモンゴル国の書籍を出版する仕事を私がはじめたわけではありません。私が文芸編集室を引率するずっとまえ、1951年に人民出版社が設立された当時から、モンゴル国の作者たちの作品は少しずつ出版されはじめていました。もし、本当にウランバートルの支社になったとしたら、人民出版社の責任者自身がそのウランバートル支社の責任者になったはずですよ。もし、これが功績だったとしたら、彼のものになるべきです。私の頭上にくるべきではありません。何か本を出版しようとするれば、まず出版社の責任者である総編集長が審査し、署名をして、内モンゴル党委員会の宣伝課に報告し、許可を得てから初めて出版することができます。私は、校閲、出版の仕事をしましたけれども、本当のところ決定権はありません。しかし、このことはいま罪になったので、私だけの頭上に下りてきて、出版社の責任者がみずから私を罪人にし、いろいろなかたちで冤罪に陥れ、8回にわたって審査したにもかかわらず、終わりませんでした。そして、上層の責任者たちがわが出版社に来て、現状を把握し、彼らの確かな指示のもとで、9回めの取調べをおこない、私のことをやっと見逃してくれました。本当は何もなかったのですよ。この取調べを経験して、私は内モンゴルの党委員会の政策研究所に選ばれ、「四清運動」の作業班に参加し、農村に行って仕事をしました。おもに地方の「四清運動」の資料を整理し、内モンゴル党委員会に上奏する仕事に従事しました。

ここで1つ言いたいことは、私を取調べしていたわが出版社の総編集長に関してです。

彼は、人格的に非常によくない人でした。まさに本当のことをいうと、わが文芸編集室に問題があったとしたら、大半の責任を彼自身をとるべきですよ。そうせずに、むしろ下で働いていた人を苦境に追い込むのはいかがなものでしょうか。とにかくそういう人間でした。功績があれば彼のものになってしまいます。けれどもまちがいがあれば他人に押し付けます。職場のなかでグループを作って、一部の人を味方にし、他の人と戦い、迫害します。あなたたちも知っているでしょう。あの「草原の小姉妹」2人を救出したのはハスチョローという人だったのですよ。ハスチョローをも彼は迫害し、どうしても仕事から追い出そうとしてとうとう田舎へ追放〔下放〕しました。ハスチョローの事件を話しあったとき、私は仕事から追放することを認めないという意見を述べました。しかし、我々の総編集長は私の意見を考慮しなかったにもかかわらず、「黒5類」〔5つの罪として一般に、反革命、内人党などの反政府的活動、地主や畜主などの裕福、資本主義的傾向、民族分裂主義を指す〕を擁護したと私をけなしました。私は定年になってから妻と一緒にフフホトの息子のところに行っていました。そのとき、ハスチョローはわざわざ私を訪ねてきて、当時のあなたに感謝していました、あなたは本当に正義の人だ、と話しました。私は当時、彼を擁護していたことについて、みずからだれにも言ったことがありません。だれが彼に言ったのかはわかりません。

あの総編集長は人を迫害するだけではなく、彼自身の私生活もよくありません。妻がつねに出版社に来て陳情していました。のちに離婚して2番めの妻をもらいましたが、とうとうまた離婚し、老後は気の毒な暮らしをしていたそうです。最初の妻から生まれた子どもの2人が変死して、自分は前世紀の80年代にパーキンソン病にかかり、孤独の苦しみを味わい、看護する人もなく、亡くなったそうです。ハスチョローは彼のことをずっと恨んでいたため、ある年の大晦日に彼の息子が酔っぱらって亡くなったのを、ハスチョローは正月の3日めに、彼家に行き、「あなたは人を迫害したから、これが報いです。息子が死んで当然」とののしったそうです。ハスチョローの恨みが大きかったのです。そうでなければ、70歳を越えた老幹部にそんな暴言をはかないでしょう。私は人の悪口を言っているわけではありません。だれでも、いつでも、人を貶めてもかまいませんが、もし他人を貶めたら、その害は結局、本人に戻ってきます。

文化大革命がはじまる直前、私の娘が病気になるって入院したとの電報が届き、私は休みをとって家に帰ろうとしても、わが出版社の責任者が休む許可をくれませんでした。そこで仕方なく私はウランフーの息子ブヘー長官を訪ねて、休みをとってハイラルの病院にいた娘の見舞いに行ったのです。本当は1963年の出版物の質を調べる運動、1964年の「四清運動」、1965年の運動で私を取り調べ、審査し、批判していました。1つの運動が一時的に過ぎ去り、しばらく落ち着いたときに、私には出版社の内部で監視するという方策がとられていました。こうして1966年6月に文化大革命がはじまってすぐ、私を停職させ、私をつるしあげて批判しはじめました。私は休みをとってハイラルに入



り、娘を見舞い、フフホトに戻ってくると、その夜から、私を批判しはじめたわけです。私にかぶせられた政治的な帽子〔罪状〕は、民族分裂主義者、現行反革命者、資本主義者、実権派、修正主義者、ウランバートル支局長、ウラーンフーの黒い根などとなります。そして、その日から私は独房に入れられました。1968年12月23日に、私を内モンゴル人民党の積極分子として監房に監禁し、およそ5カ月あまりの期間、審査し、殴打し、苦しめました。

文化大革命のなかで、私はおよそ8年あまりのあいだに出版社で批判され迫害されていました。この大革命のなかで私は経験しなかった苦難はありません。あらゆる苦難を身を以て経験しました。ののしられ、はたかれ、蹴られ、腰をまげて膝に頭をつけて立たせたまま殴られ、審査、殴打されたあとに出て行けと叫びながら蹴り倒されます。こうして頭が切れ、血と汗が出るのは日常茶飯事でした。何度もこのように血まみれになり、頭がまわり、目がくらくらして倒れたときに思っていました。なぜ、このように生きなければならないのだろうか？私はどんな罪をして私をこんなに苦しめるのだろうか？どうすればいいのだろうか？と思うとき、目のまえに2つだけ道がありました。1つは、何があっても歯を食いしばってがまんして苦難を乗り越える道。2つめは、この世を去ってこの苦しみから逃れることです。

私は内モンゴル人民党の積極分子という帽子〔罪状〕をもつようになり、生死のあいだにいるとき、本当に死にたいと思いましたよ。自殺しようという考えが芽生えました。考えてみてください。人間の命というものは、どれだけ大事なものでしょうか。しかし、このような大事な命を捨てるまでになるというのは、非常に堪えがたい苦難だと理解できるでしょう。実際、一部の人は自殺しました。しかし、私はそのようなたいへんな苦難をまえに自殺すれば、生まれ育ててくれた恩ある母に申し訳がたちません。苦難の暮らしを一緒に乗り越えてきた伴侶に申し訳がたちません。愛する3人の子どもたちにも申し訳がたちません。私が死ねば、私だけが苦難からとおざかります。しかし、わが家族は「罪を恐れて自殺した反革命者の家族」と一生、さらなる苦難に陥ります。こう考えた私は、どのような苦難があっても必ず耐え切って生きると決めたわけです。私の選択は正しかったことは現実が証明しています。いま考えると、本当に私の家庭、愛する3人の子どもたちが、私の命をすくったのです。彼らがいなければ、もしかすると、私はこの明るい社会を見ることなく、この世を去っていたでしょう。

中国政治を研究する、とあるアメリカ人研究者が、「中国の知識人たちは1949年以降、さまざまな運動で審査され、みずから報告し、罪を認め、相互に摘発し、疑い、批判し、闘争するなどの切れ目ない苦難に左右され、魂が出て行くほどおびえて、人間の本当の人格をすでに失っている」と定義したそうです。本当に私は釈放されたのかなと思うほどですよ。長期にわたる社会の圧迫、脅迫、孤独、度重なる自己批判を通じて、人びとは臆病になり、うたがい深くなり、もともとの性格が見あたらなくなってしまうもの

です。文化大革命のすべての年月のなかでは、私が批判され、問いかけられ、審査され、摘発され、罪を認めさせられてきました。ときによって、本当は自分の考えに反して、人間の本质に反して、嘘をつかなければならなくなっていました。たとえば、内モンゴル人民党員かどうか、いつだれが紹介して入ったなどのような問いに、殴られ、苦しめられ、肉体の苦難から一時的に逃れるため、私は「内人党です」と嘘をつくしか方法がなかったのですよ。私は内モンゴル人民党というものを知りません。しかし、「違います」というと、殴って殺されるので、嘘をつく以外何ができますか。しかし、私はほかの人に害をあたえ、他人を冤罪に陥れることはありません。党と社会主義に反したことはまったくありません。毛主席に反対したことはありません。

もちろん、私には仕事上の問題がなかったわけではありません。しかし、私は民族を分裂させる行為をしたことはありません。走資派、当権派〔資本主義の道をあゆむ実権派〕ということばがどういう意味なのかを私は説明できません。私のことを1人の小さな権力者だと言ってもかまいません。当時、私はわが出版社の責任者の1人でした。国の主席までつるしあげて闘争していたとき、私のようなこんなちっぽけな長がどうだというのですか。何でもないでしょうに。しかし、私が資産階級の道を歩いたかどうかは自分でわかりません。みんなが歩いていたなら、私も歩いていたかもしれません、と言うしかありません。この罪名が私の上につくかもしれません。他の罪名は本当に私には合いません。私の頭上に合うはずがありません。とくに内人党の積極分子という罪名は、想像もできないまっかな嘘です。しかし、当時はすべてがそのような嘘だったので、仕方ありません。自分をだまし、人をだまします。理由もないところにオポー〔土地神のよりしろとなる塚〕を立てます〔不条理のたとえ〕。

文化大革命がはじまった最初のころ、私は本当にその理由がわからずに迷い、信じられませんでした。とりわけ、私は自分のことを知っています。革命に参加した時代から毛主席の指示を聞き、毛主席の教えに従い、誠実に革命をする一心でした。なぜ、反革命者になってしまったのかと思うたびに、信じられない気持ちでした。私はやがて文化大革命に懐疑を抱くようになりました。なぜ、そのような革命の先輩たちが悪者になり、監禁されたり、殺されたり、したのでしょ？なぜ、毛主席に従って苦難を分かち合った人びとが、かえって毛主席の反対者になってしまったのでしょうか？実際にいくつかのことはまったく理解できません。1つは党の第8回大会の書類を否定した件。第8大会のおもな講演文を最終的に毛主席はみずから確認し、署名したのでした。当時、第8大会の同時通訳に加わっていたので、私は大会の演台に座り、一言一句修正し、確認したあとに署名したことを自分の目で直接見ていました。もし、その報告書がまちがっているとしたら、それは毛主席みずから反省すべきでした。どうして、劉少奇の過ちになってしまったのでしょうか。それが私には理解できませんでした。実際、これまでの経験から言うと、党の第8大会の路線は正しかったことが証明されています。2つめは「いく

つかの歴史問題に関する決定」に関してです。50年代に『毛沢東選集』を編集、出版するとき、上述の「決定」が選ばれたわけです。そのとき、一部の人が中央の決定を個人の著作集に入れるのが適切ではないだろうと指摘していたけれども、一部の人が中央の決定であっても、毛主席みずから原稿を作成したものであるので、入れるほうが正しいとみて、選集に入れました。しかし、文化大革命のなかで再版した『毛沢東選集』にはもともとの「決定」は外されていました。私は選集の翻訳をしていたのははっきりわかります。これが本当は劉少奇を倒す1つの方法だったわけです。

さて、文化大革命のなか、1966年から1973年の1月8日になるまで、私に仕事を辞めさせ、審査し、批判していました。1966年から1970年までに「黒い部屋」[監房]に監禁していました。出して批判して、さらに戻して監禁する。1971年1月に唐山にあった内モンゴルの学習班に送られて引き続き審査批判され、勉強させられました。そこにおよそ1年半いて、1971年5月に出所しました。そこから出て6月に、内モンゴルの5・7幹部学校というところに送られて、また1年半労働改造させられました。このように1972年の12月に改造から出てきました。

1979年6月12日に、内モンゴル自治区の出版業務管理委員会の党委員会から私を正式に名誉回復してくれました。文化大革命のまえ20数年間、私は一心一意に党と革命のために努め、全力で党と人民に力を捧げていました。しかし、それがまちがいになり、13年、迫害のもと、黒い部屋に監禁されました。私のもっとも精神的な若い時代がこのように無駄にさせられました。私を名誉回復するとき、すでに52～53歳になっていました。熱心に革命の仕事のために全力をささげて努力して働いたことが批判され、政治、精神、肉体、健康すべての面で苦しめられてすでに勇気を失い、やる気をなくし、仕事をする積極性がなくなって、飽きたと言ってもいいでしょう。文化大革命が終わって名誉回復され、発言権をもつようになってから、私は内モンゴルの党委員会に、田舎に戻って牧民になることを志願し、何度も繰り返し請願書を書き、本当に故郷に戻ってふつうの牧民になり、老後を静かに過ごしたいと思いました。しかし、内モンゴルの党委員会が私に休みをくれませんでした。

もちろん、迫害されて苦しんだのは私だけではありません。多くの革命者たちが命まで落としていました。私は幸いなほうです。生き残ることができました。概して、わが内モンゴルは、全国の文化大革命のなかでもひどいほうです。被害がもっとも大きかった地方の1つです。1966年5月に「前門飯店会議」が開催され、内モンゴルの文化大革命の幕が開きました。そして、その年の6月7日から7月20日まで43日のあいだに、国の副主席であったウランフーを排除しました。この裏には目的があり、かなり以前から準備されていたことです。引き続き内モンゴルの党委員会の書記であった奎壁[もとゴビという名前だった]、副主席であったジャータイ、ビリグバートルなどのモンゴル族の老幹部たちを1人ずつ排除しました。わがウランフー長官に「反社会主義、反毛沢

東思想、祖国の統一を破壊し民族を分裂させ、モンゴル独立をめざした修正主義者、内モンゴルのもっとも大きな走資・当権派「資本主義の道をあゆむ実権派」などの罪名をでっちあげました。そして、一部のモンゴル知識人幹部、党と政府の責任者たちは、その「一派」に入れられ、部局ごとに、逮捕され、監禁され、迫害されました。挖肅（ワースー）運動というのは、「ウランフーの黒い線の根こそぎ掘り出し、ウランフーの黒い毒を肅清する」ということの略称です。こうして、私たちはみなウランフーの黒い線になりました。こうして、この掘り起こし肅清する運動の展開過程で、「新内人党」というものが出てきました。

Q: 内人党というのは本当になかったのですか？

N: 内人党というのは、文化大革命のなかで、内モンゴル人民革命党にあてた略称です。「内モンゴル人民革命党」は、わが国の民主革命の時代の、民族の民主革命党です。その党が民主革命の展開過程のなか、中国共産党と連携し、共産党の指導を受け、多くのメンバーが中国共産党に入り、もとの党の歴史的な任務を終えたわけです。その党に関して、遠い昔にすでに歴史的な結論は出たのです。しかし、掘り起こし肅清運動のなか、過去に「内モンゴル人民革命党」に入っていた先輩革命者たちに対して先にメスを入れ、彼らを吊るしあげて、さまざまなことをでっちあげ、根拠のない無実の罪をつくりあげ、「新内人党」というものをでっちあげたわけです。そもそも、罪を掘り起こされて肅清される人たちが内人党というものに入れるものでしょうか。そんな名前を聞いたことさえない人びとをつるしあげ、拷問に対してもし「入っていません」「知りませんでした」と答えれば、殴打して苦しめます。もし、「だれだれに紹介されていつこの党に入った」「私もだれだれを紹介した」などとでっちあげさえすれば、苦しめられずに釈放されていたので、だれがこの苦しみから逃れようと思わない人はいるのでしょうか。そうして、嘘から嘘が生まれ、だれかれかまわず知ろうが知るまいが名前を出して、わが身を苦難から遠ざけようとする人が多くなり、掘り起こされ肅清される人がますます多くなって、やればやるほど範囲が拡大し、町から田舎まで、党、政、軍の幹部から一般農牧民まで、みなこの運動による批判対象となりました。

わがウランフー長官を内人党のもっとも大きなリーダーとして彼の黒い線、黒い路線というのを掘り起こし、我々をみな巻き込んだのです。1968年の末からはじまり、1969年4月まで、ワースー運動はもっとも大規模に行われ、展開のピークでした。共産党員のなかからつるしあげられた「黒い線」は、「公に共産党、陰に内人党」、より有害としてさらにきつい苦しみを味わわされます。ワースー運動のさなかにおこなわれていたリンチは人類の1つの大きな害ですよ。殴る、あぶる、貫く、刺す、さらにもっと邪悪な方法により人格を否定していました。一部の人の不完全な記録によると、およそ35万人が迫害され、冤罪となり、およそ2万人が殺害され、12万あまりの人びとが迫害され、障害をもつようになったそうです。私も迫害され、障害が残りました。私を殴っていた、

冤罪をかぶせていた、苦しめていた人びとがだれかはみな明白です。しかし、私はだれもけなしたり、うらんだり、していません。なぜなら、彼らの誤りではありません。その時代は、迫害されていた我々も、迫害していた彼らも、みな被害者です。社会、時代の強制のもとで、人間性を失ってしまっていたので、だれがだれをけなすことができるのでしょうか。現在、人をののしるときに「畜生」とののしる人がいます。私にしてみれば、この暴言は我々の家畜を軽蔑し、見下したことになります。もし、家畜が人間を食べたら、それは家畜がおなかをすかしていたからでしょう。けれども彼ら家畜は嘘をつけません。彼ら家畜は人間を食べるときに、何か1つでも人間を食べる理由をつくったりするわけではありません。したがって、人[を人として扱わずにそ]の肉を食べている人びとは、家畜にも及ばない。彼らを家畜とののしるのは、気の毒な家畜たちに失礼ですよ。さらに言えば、私自身が殴られて苦しめられて死ぬ寸前になっていたにもかかわらず、偉大な文化大革命の革命性を疑いませんでした。偉大な指導者である毛主席を固く信じていました。当時、殴ったほう、殴られたほう、全員が損害を受けたのですから、だれがだれをけなしますか。彼らと私はどんな清算をしますか。私はこう思って、だれに対してもいつも恨みをもっていませんでした。私を仕事に復帰させたあと、文化大革命の最中に私をよくなくって苦しめ罪をかぶせていた一部の人たちは、私のことをたいへん恐れていました。しかし、私は毛1本ほどのものさえ要求しませんでした。

### 仕事に復帰してから

Q: あなたをいつ仕事に復帰させたのですか？

N: 1973年私を仕事に復帰させました。しかし、正式な名誉回復はそのあとのことでした。1973年1月に内モンゴル党委員会が私を5・7幹部学校から直接移動させ、我々のもとの職場（内モンゴル人民出版社）に送り、副総編集長にさせ、職場復帰させました。当時、内モンゴル党委員会を「内モンゴル革命委員会の政治部」と呼んでいました。私を復帰させるという通知は、1973年7月12日付けの(73)79号の公文書でした。仕事に復帰してから、私は考えてみました。文化大革命で迫害されて死なずにすんだとともに、党とみなさんが光をあてて、私を信頼し、ふたたび職場に戻したので、私は残りの歳月を人民に、民族に、有意義な仕事をするために全力をあげて努力しようと決意しました。このように努力して仕事の成果で私は祖国、民族に対してつねに愛をもっている心を示したいと思いました。

私は職場復帰後、これまで同様、モンゴル語編集室と美術編集室を担当するようになりました。当時、文化大革命は終わったけれども、思想的な面ではまだ複雑な時代を過ごしていました。孔子を批判し、鄧小平を批判するなどの運動がつづいていました。四人組がさわぎ、周総理に罪を着せるようなことがつづいていました。そのため、私が出版社で働いてもっとも成果をあげた時代、あるいは民族の文化にみずからの力をもっと

もよく尽くした時代は、文化大革命のまえのおよそ20年間でした。仕事に復帰してから、私は出版社に3年勤めて1975年7月に北京に転職しました。これはもちろん国家の要請でした。中央民族翻訳局に転職するよう私に伝えたとき、私は喜んで受け入れました。なぜなら、1つはもちろん国家の要請を第一に考えるべきだからです。2つめに、私も20数年働いた出版社から移り、新しい環境で、新しい同僚との関係のなか、新しい仕事に従事することを望んでいました。私が北京に移ってきた翌年、つまり1976年は、わが国の歴史において非常に特別な年です。周総理が毛主席などの党と政府のおもな指導者たちが亡くなって、四人組がさわいでいたときでした。私の場合、1975年から1976年のあいだに、中央翻訳局の設立準備作業に携わりました。またモンゴル語翻訳課に人員を招集する仕事に従事しました。この仕事は1975年からはじめ、1979年までおよそ4年間つづきました。その数年のあいだに、3度の募集を通じて、翻訳スタッフをあわせて23人採用しました。人を採用する仕事はけっこう面倒なものですよ。人の翻訳、編集の技能をしっかりと調べないと、仕事をはじめるととても困難です。ただ、2つの言語の翻訳能力が必要となるだけではなく、編集、清書などの能力、また仕事に対する態度、性格すべてが関連しています。1976年末から1977年前半までの期間に、私は毛沢東選集の第5集を翻訳する仕事に参加しました。1977年8月から党の第11回大会の公文書を翻訳する仕事に参加しました。同じく1977年後半から1979年までのあいだに、私たちは共同で『レーニン選集』の第1集、『マルクス全集』第1・第2・第3巻の翻訳と校正の仕事をおこないました。

1977年の冬にわがルブサン長官が中央翻訳局に来て、モンゴル室の主任になりました。私は副主任を担当しました。そして、ルブサン長官を補佐して党組織の仕事をしました。私はみずから従事していた翻訳の仕事をするとともに、また政府のさまざまな重要な翻訳作業にも参加しました。これらには筆役と口役どちらもあります。1954年以降、私は前後して5回、政府代表の通訳を担当しました。政府代表の通訳で、モンゴル国に2回行きました。1957年以降、私は党と政府のおもな指導者、毛沢東、周恩来、李先念、ウランフーなどの指導者たちに国内外の来賓たちと面談するとき、通訳を務めました。1954年以降、何度も全国人民代表大会、党代表大会の翻訳ならびに通訳の仕事をしました。1975年に北京に転勤してきてから、私は党と政府の重要な公文書を翻訳し、それらの校正を担当するほか、組織、指導の仕事にも従事しました。もちろん、一部の翻訳作品を校正、編集、審査する仕事をしました。

本業のかたわらに私は郭沫若の作品、矛盾の作品、楊沫の作品などの中国の優秀な作品および評論を翻訳し、モンゴル読者たちに届けました。特に楊沫の「青春之歌」の全集を翻訳して内モンゴル人民出版社から1962年に初めて一万部を発行しました。そして読者たちの関心を強く引き、1978年にさらに一万部あまり印刷したけれども、またもや短期間で売り切れたそうです。外国の詩集作品とえば、フランスの著名な作家バルザ

ックの作品、インドの作家ブレイムチャンドの作品、そのブリヤート作家ホツ・ナムスライの長編小説などを翻訳して出版させました。そして読者たちにたいへん気に入ってもらいました。ちょっとした作品、ニュース、評論を翻訳して新聞と雑誌に刊行したのも多数あります。

私は1956年からウラーンフー長官の家庭教師を務めました。ウラーンフー長官の仕事のあいまをみてお宅にうかがい、モンゴル語を教えていました。文化大革命以前、私はこれに関して話そうともしませんでした。だれにも話してはいませんでした。まして、「教師」という言葉は考えたこともありませんでした。ウラーンフー長官が私を呼んでモンゴル語を教えてほしいと言われたので私はときどき行って教えていました。しかし、文化大革命のなかでこれが私のもっとも大きな罪となりました。反革命分子「ウラーンフーの家庭教師」という大きい帽子〔罪状〕を私にかぶせました。そして、私は今日「家庭教師」という言葉を初めて使っています。そうでなければ、私はふつうの1人の熱心なモンゴル人で、モンゴル語を勉強したいという人を手伝っていると思っていただけで、何か先生になっているなどとまったく思ったこともなかったのです。ウラーンフー長官はとても平穩で、たいへん善良な、広い心を持ち、伝統的なすばらしいモンゴルらしい性格をもつふつうの人でありながら、また先見性のある、賢明で、偉大な政治家、指導者の素質をもちあわせた人です。文化大革命後も、迫害され批判され、苦しんだことに関して一切話しはしませんでした。とにかく何ごともなかったように穏やかで、草原のような広い考えをもっているように私には思われました。私はウラーンフー長官にしばしば通訳をしていました。モンゴル国の来賓があるたびに通訳していました。

さあ、私は翻訳に関する仕事をかなり長年にわたってしました。しかし、私は文化大革命まえにした編集、出版の仕事をより評価したいです。私のその仕事が私に大きな苦難をもたらしたにもかかわらず、私は概してその仕事の成果をまちがいは見ていませんでした。とにかく、党と人民からあたえられた仕事をいやがりません。全力をもって働く性格です。党と政府の指示に無条件にしたがって実行する用意がつけねにある者です。そして、党の中央から、新旧交代して若い幹部たちを養成し、採用することに関する政策がはじまったとたん、私はおおいに支持してみずから上層の責任者に対して口頭と文書で、責任ある立場からしりぞき、若い人たちを任用させるよう上奏しました。しかし、仕事の需要があり、許可されませんでした。1988年の夏、ようやく私の上奏が認められ、定年退職しました。

Q: あなたはこんなに長年勤めたのですから、何か褒章をもらったことがありますか？

N: あるといえば、あります。1957年と1962年に2度、内モンゴル自治区のモンゴル語文工作の一等賞をもらいました。それ以後もさまざまな団体や協会に招かれて加入していました。たとえば、私は1980年代の初めから、中国翻訳協会の理事、副主任、北京市翻訳協会の副主任、内モンゴル作家協会のメンバーなど社会的な仕事に従事し、責任を

果たしていました。いまも私は社会に対して何か有用なことに呼ばれば、行くべきだと思います。体力のゆるすかぎり、私は必ず行っています。いまは、山が雪におおわれ、男は年齢におおわれています。意思はあっても体力がおよばないことがどんどん増えています。

## 定年退職後

Q: あなたは定年退職後、おもに何をしていますか？

N: 私は定年退職してから、かなり自由自在にしています。毎日、家で新聞や雑誌を読みます。テレビのニュースを見ます。また、ラジオを聞きます。また各協会の学会会議に参加します。上層機関の主催する活動に積極的に参加します。たとえば、年長者の老幹部たちを組織して旅行に行くとか、あるいは何か活動があれば、積極的に参加します。私は2000年に香港、マカオを見学してきました。また、定年退職してから、民族の言語、文字、翻訳の技術に関する資格審査の委員、民族の言語通訳、メディアの技能資格などを審査する委員会の委員を長年、勤めました。半世紀にわたって、わが国に天地の大きな変化が生じました。1946年に19歳で革命に参加しました。40年あまり働いて、1988年に61歳で定年退職しました。ふりかえてみると、考えることがたくさんあります。私のこの生涯というものは、本当に喜ばしく誇らしいばかりでなく、悔しく悲しいこともあります。私はふつうの牧民の息子で、このような高い教育を受け、国の高層幹部に養成されてきました。私自身の努力のほかに、党と人民の教育の恩恵だと自覚しています。私は、一生涯、革命の仕事のために努力した人間です。私の家庭は、私の仕事を全力で支えてくれました。私の妻バマジャヴは、つねに私をはげまし、家庭のすべての仕事を担い、3人の子どもを育て、私たち2人は幸不幸を分け合い、60年の歳月をともに歩んでいます。

私には1人の息子と2人の娘がいます。いま孫は合わせて4人になりました。息子の名前はウネンと言います。長男です。内モンゴル師範大学を卒業して、教師をしていましたが、のちに内モンゴル人民出版社に転職し、編集者になりました。上の娘トヤーは、高校を出て北京に就職しました。現在は休んでいます。下の娘はイミンと言います。大学を卒業して、前後してアメリカのグローバル企業やイギリスの会社などで勤めていました。いまは「聯想」[レノボ]という会社の本部で働いています。北京とアメリカのあいだを行き来しています。家はアメリカにあります。私の孫たちはみな学校に通っています。上の3人はみな大学生です。下の1人が小学校を卒業するところです。私は一生涯、誠実に生きることを原則にしてきました。いま、子どもたち孫たちにもそのように教えています。誠実に働き、人に優しく生きるべきです。名誉を追いかけ、個人の利益を求めることは、もっともよくないことだと私は考えます。私は一生涯、素朴、平穩、謙遜、勤勉に生きました。私は一生涯、酒をのまず、タバコを吸わず、麻雀をしません。



衣食をとくに追求しません。私は街を歩くのが好きで、スイス軍のナイフを集める趣味があって、脂肪が付いている肉を食べるのが好きです。ほかの趣味がありません。私はこのような者です。

人びとは、あなたが多くの先駆的な、革新的な仕事をした、民族文化の英雄だ、と高い帽子を着せてくれます [お世辞を言うこと]。これを私は簡単に喜んだりしません。私は革命に参加してから、本当に3回にわたって革新的な仕事に参加しました。これは私の幸せだと考えています。故郷の小学校の創立作業に私は最初から参加しました。『内モンゴル教育』雑誌のモンゴル版の創設作業に最初から携わりました。出版社のモンゴル文学芸術編集室の仕事にも私は最初から参加しました。中央民族翻訳局のモンゴル翻訳室の創建にも私は最初から参加しました。これらの先駆的な仕事に私は携わっただけではなく、本当に全身全霊で全力をしばって働きました。みずからの民族の文化事業に私は微力ながら捧げられたことが自分の幸せだと考えます。これらの先駆的な仕事に参加した中、苦悩、困難があったけれども、勝利と収穫の喜びも味わいました。まあ、私の一生はこのようなものです。

**Q:** あなたはモンゴル国の著名な知識人、作家 Ts. ダムディンスレン、B. リンチェンなどの通訳をしていたそうですね。彼らのことをよく知っていますか？

**N:** ええ。彼らがモンゴルの作家代表団と一緒にわが国を訪問したときや、私たちの側からモンゴルを訪問したときに通訳として同行しました。彼らのことを知っています。B. リンチェンさんは非常にユーモアのある方でした。車で移動している途中に、B. リンチェンさんはいつも2つの親指をまわしていました。そして私は、「あなたはどのようにもまわしているのですか？」と聞くと、B. リンチェンさんは「いいえ、私はこのようにもまわしますよ」といいながら内側にまわしていた指を外側にまわして、みんなの笑いをとっていました。そのような偉い方がたの通訳をするのは簡単です。多くのことを話しません。きわめてふつうの簡単な何句かで話を終わらせます。

万里の長城に登ってB. リンチェンさんが「この中国人たちに、私は故郷に戻って来たと伝えてください」と言って笑っていました。私は訳さずにやりすごそうと思っていましたが、笑っている彼のことを見て不思議に思ったようで、「なんと言いました」と確認して来ました。それで仕方なく「この景色はたいへん素晴らしい、私の故郷と同じですと言っています」と修正して話しました。現在なら、かまわず冗談を言っていると忠実に訳しても大丈夫です。しかし、その時代というのはたいへん敏感だったので何か1つでも政治的な過ちを犯すことのないよう気をつけなければならなかったのですよ。ふつうの状況なら、私は何であれば何と誠実に直訳します。わが中央の指導者たちも私のことを非常に信頼していました。私が内モンゴルにいたときは、通訳が必要などきはいつも私の名前が呼ばれていました。

### 3. 匿名

#### 紹介

ここでことわっておくべきこととして、私たちがインタビューした人はみずからの名前を公表しないように希望したため、彼（女）の意見を尊重し、名前を公表しないことを特別に記す（そのため、氏名のかわりにナスタン [年長者の意。以下はN] と記す）。

2010年4月20日と21日の午後に初インタビューをした。2011年4月17日にふたたびインタビューをした。インタビュアーは、サランゲレル、ソヨルマ。

**Q:** シネヘン地域に移動してきた経過およびシネヘンに来てからの状況、西へ移動したることについて話してくださいませか。

**N:** 私が自分で見て、聞いて、知っていることを話してあげましょう。フルンボイルのモンゴル人たちはもともとソロン旗やシネ・バルガ8旗、ウールド鑲黄旗などの17旗がありました。フルンボイルのメイレン・ザンギ庁によりまとめて管理されていました。そのうえ20世紀の初めにロシアから我々ブリヤート人たちが入って来たことで彼らをシネヘンに定住させ、シネヘン・ブリヤート旗として新たに1つの旗を加えて設立しました。このシネヘン・ブリヤート人たちが、いつ、どのように来たかについて話すとは長くなりますよ。もともと、1917年のロシア十月革命が労働者、農民階級を解放し、帝政時代の非ロシア民族に対する植民地主義の圧迫を撲滅しました。ロシアの管轄にあったわがブリヤート・モンゴル人たちもほかの少数民族たちと同様に台頭し、自由を手に入れました。ただし、白軍はやぶれましたが、彼らの残存勢力は自分たちの敗北をあきらめませんでした。むしろ死を恐れず、戦いをつづけて、最後の闘争をしていました。そして白軍残存勢力は、盗賊や国外勢力にたよることを考え、日本、アメリカ、イギリスなどの帝国と連合して、ソ連政府に対して武装襲撃をおこない、ブリヤート・モンゴル地域は戦争にまきこまれて、人びとは大いに混乱しました。この戦争はブリヤート・モンゴルの民衆のなかで厄介な事態を引き起こしました。民衆たちが目覚めた面もありますが、貴族や金持ち、ハンボ・ラマなどは革命の嵐を利用してさまざまな虚言を広め、民衆の心を大きくゆるがしました。おもな虚言は、「悪い時代がやってきた、ブリヤート・モンゴルが災難にまきこまれる」、この原郷から逃げ出すのが最高の方法だと宣伝し、信仰深い民衆のあいだに、さまざまな移動に関するうわさを流したそうです。真実をはっきり知らない、ふつうの素朴な牧民たちは、どうすればいいかわからず、混乱し、生活も心も不安定になり、ラマ僧たちの意図的な示唆を信じるしか方法がありませんでした。それゆえに、一部の人たちは故郷から逃げ出すことを考え、動きはじめました。

しかし、もう一部の人は虚言を信じることができず、「災難から牛車で逃げ出すことはできない」と、移住することを阻止し、反対したので、我々ブリヤート民衆のなか

でも見解の相違が生まれはじめました。もちろん、各グループの目的は異なりますので、示唆することと行為も異なっていました。一部の人たちの逃避には、自分たちの明らかな理由と目的があります。たとえば、例をあげて言うと、金持ちや上層貴族たちは、その指導権と地位を守り、自分たちの利益を守るために、自分たちに有利なように努めるはずで。当時、プリアートの貴族であったナマタグ・バルダノフらは宗教と政権を代表して、はるか離れたフルンボイル地方まで来て、フルンボイル地方のメイレン・ザンギ役所の総督や貴族たちを訪ね、フルンボイルに移住してくるについて相談し、場所を確認し、彼らから許可を請うていきました。

Q: 当時のフルンボイルに生活していた他のモンゴル人たちは、ロシアのプリアート・モンゴル人が移住していることに対して、受け入れましたか、嫌っていましたか？

N: もちろん、当時のフルンボイルのメイレン・ザンギ役所の貴族たちも一様ではなかったそうです。我々ロシアのプリアート・モンゴル人が移住することを一部の人は反対していましたが、ほとんどの人たちは強く支持していました。当時のメイレン・ザンギ役所の東庁の長を担当していた著名な知識人ツェンド公を代表する一部の高層貴族たちは大いに支持し、ツェンド公はみずからから我々が移住する仕事に携わっていたそうです。ツェンド公はたいへんなインテリであり、政治家でもあり、民衆のあいだで信頼の厚い、尊敬されている人でした。ロシアのプリアート人たちが移住してくることを支持するのは、理由のないことではありません。明確な目的や、もろもろの利益もあったのです。当時、大興安嶺の北部に広がる雄大な草原には人が少なく、空白地帯があり、盗賊がむらがり、危険なところだったそうです。同じ言語をもつプリアート人たちは同じくみなモンゴル民族であるため、フルンボイルのモンゴル人たちと生活習慣、宗教などは同じであり、かつ経営している畜産業の管理の方法もまったく同じなので、お互いに頼りになり、有利です。この広大な土地を親族のような人たちが共同で利用管理し、一緒に暮らせば、盗賊は減り、互いに有益であることは明らかです。当時、ツェンド公もみなモンゴル人でしたよ。モンゴル人のなかに、プリアート人、バルガ族がいましたが、ダゲール族という区別はなかったのですよ。ダゲール族という区別は最近認定されたものです。そして、フルンボイルに多くのモンゴル民族たちが一緒に暮らしていれば、内部では衝突が少なく、外部に対して盗賊などに力をあわせることができ、良いはずで

す。

このように、双方の見解が一致し、話が簡単にまとまり、最初に移住してきたプリアート人たちをシネヘン地方に安住させるよう協議し、1922年に160世帯700人以上のプリアート人たちが集団で移動してきました。その後、少しずつわずかに、あるいは数世帯で少しずつ移住してきました。ロシアのプリアート人たちのほかにも、ハムニガンたちも移住してきたそうです。

ロシアのプリアート人たちのあいだでは、移住して救われるという宣伝が大いにおこ

なわれていたと同時に、その地方では戦乱が絶えまなく続き、一般民衆が戦争に巻き込まれ、若者たちが白軍の残存勢力に捕らえられて、軍隊に徴用されているうちに、ソ連の赤軍に敗れて、殺される者が殺され、逃げだした者がその場で暮らせなくなり、モンゴルのほうへ逃げ出すか、1～2人でシネヘン地方に逃げてくるしか方法がありませんでした。こうして来たブリヤート人たちがまた多いのですよ。もう1つのことは、裏切り強盗と言われていた人びとです。タブハイン・ドガルが引率し、ウルジン [将軍]、ソドノムなどの人たちと一緒に、当時の反革命組織の1つを設立し、騒乱を引き起こし、最後は結局、革命軍に敗れて、殺される者が殺され、逮捕される者が逮捕され、残りが逃げてきました。この組織を日本は支持していたそうです。戦乱の時代のことはよくわかりませんねえ。

シネヘン地方はブリヤート人たちの新しい故郷になり、我々北のブリヤート人たちが前後して少しずつ移動して来ているうちに、人口が増え、シネヘン・ブリヤート旗の4つのソムにすべてを管轄させるのは行政的に難しくなりました。こうして、メイレン・ザンギ庁からブリヤート旗を左右両旗8つのソムに分配し、左翼旗の長にジャムスレンニー・アヨーシを任命し、右翼旗の長にチョインピリン・ダシを任命しました。当時、旗長をメイレン・ザンギ庁から直接名指しで任命してまいいた。シネヘン・ブリヤート旗のものと旗長であったミンデギーン・ミジドをオゴルダ [長官] にし、東西両旗の長にしました。ミンデギーン・ミジドより先にラドナーギーン・アビドがシネヘン・ブリヤート旗の旗長でした。アビドが亡くなり、その代わりにミンデギーン・ミジドを旗長にしました。ミジドはブリヤート人のハルビン姓の人です。

とにかく、ブリヤート人たちはシネヘンに移住し、移住してきたあと、メイレン・ザンギ庁の東庁長官であったインテリのツェンド公は、ブリヤート人たちに心を配り、場所をあたえる仕事に努めて大いに支持しました。ツェンド公の影響を受けて、他の官僚たちも積極的に動き、新しく移住してきたブリヤート人たちをむかえ、定着させる仕事が順調にすすみ、短期間内にシネヘン地方に新しい主人が安住することができました。フルンボイル地方の先住氏族たちもあたたかく歓迎しました。もともと、母方のおじ甥の関係のように親しいので、同じ氏族の分枝の兄弟のようであったバルガ・モンゴルたちがとくにあたたかく歓迎し、さまざまな面で支援をしていました。シネヘン地方も遊牧生活に適した美しい土地です。牧草の成長は良いだけではなく栄養が高く、わき水、河川が清涼で、森林が繁茂し、野生動物が豊富で、豊かな土地であったため、あたらしく移住してきたブリヤート人たちも短いあいだに新しい環境になれて、安住しはじめました。

**Q:**ブリヤート人たちは、いつなぜ、シリングルに移住してきたのですか？

**N:**それは少しあとで話しましょう。ブドゥーン・リンチン [大きなあるいは太ったリンチンというあだ名] というかなりあとで来た人が動員し、シリングルへ逃げ出したの

です。我々北のブリヤート・モンゴル人が、フルンボイルのシネヘン・ブリヤートに来て安住したあと、シネヘン地方の元の閉鎖的な状況と盗賊がむらがっていた状況に対して、メイレン・ザンギ庁が決定を出し、シネヘンのブリヤート旗を設立し、シネヘンのブリヤートに1つのソムの自衛軍を設立し、盗賊を駆除すると同時に、民衆の平和を保障しました。シネヘン地方は、無人の土地で素晴らしいところなので、盗賊がむらがり、新しく移住してきたブリヤート人たちの人畜に害をあたえるかもしれないので、この旗の軍を設立したことは、メイレン・ザンギ庁からの提案であり、これにより保護させていることは、役所が責任を果たしている1つのあらわれです。当時、軍の武器をメイレン・ザンギ庁が提供していました。その兵士たちがもっていたウマおよびその他のすべてをみずから供出していました。軍を設立してから、強盗を追い出し、地元は平和になりました。暮らしが安定するようになりました。ブリヤート人たちはシネヘンに移住してきてから、我々モンゴル人にとって良かったことの1つとさえ言えば、彼らは来るまえにフルンボイルの行政公文書はすべて満州語を使う習慣がありました。ブリヤート・モンゴル人は満州語を知りません。中国語も知らないで、政府にモンゴル文字を使うよう上奏しました。インテリのツェンド公たちの努力もあったでしょう、そして上の許可を得て、行政の公文書にモンゴル民族の文字をフルンボイルでこのように初めて使いはじめました。この歴史は満州清国時代のモンゴル文化史においてたいへん重要ですよ。とにかく私たちブリヤート人たちはロシアから来たため、ある面ではかなり進んでいたそうです。草刈りのときは家畜に曳いてもらう機械で草を刈ってまとめ、また手鎌も使っていました。ブリヤート人たちは勤勉で、忍耐強く、生活の要領がよく、賢い人たちです。家畜に草を刈って用意するだけではなく、柵や厩舎を建て、冬の寒さのために子畜が凍えることを防ぎ、弱い家畜に牧草をあたえて越冬させ、牧畜を発展させるためにさまざまな方法を使っていました。

ブリヤート人たちの特徴のもう1つは、新しいことに興味を持って覚える才能のある人たちで、たいへん勤勉であるため、興味があったことをすぐ覚えてしまいます。当時、一部のブリヤート人たちは優良品種の種畜を購入して、地元のウマやウシと交配させて品種を改良することを考えていました。それが成功し、フルンボイル全域に初めて優良品種が普及するようになりました。その反響は良く、ほかの兄弟民族の牧民たちのあいだで広がりました。のちにフルンボイル地方の主要な3つの優良品種のウマとウシを創り出す基礎をつくったと言えます。新しく進んだものを受け入れるという点で私たちブリヤート人たちは本当に特徴的です。しかも新しいものを自分たちの暮らしのなかで利用する面で長けています。彼らは1900年代から馬車を使っていました。また、ミシン、牛乳分離機も率先して使っていました。フルンボイルのほかのモンゴル人たちは当時、五徳を使っていますが、ブリヤート・モンゴル人たちは鉄製の煙突付きの、閉鎖式の鉄製ストーブを作って使いました。これもフルンボイルのほかの牧民のなかでまも

なく広がり、ふつうに使われるようになりました。

Q: 最初に旗が設立されたとき、ブリヤート旗には何世帯ぐらいありましたか？

N: 我々のブリヤート人たちはもともとシャマンを信仰していました。しかし、モンゴル全体に黄色の仏教〔チベット仏教のゲルク派。黄帽派〕が大いに広まったため、ブリヤート人たちもシャマニズムを捨てて、黄教を信仰しはじめました。17世紀のなかばから黄教がブリヤート地方に広がりはじめました。おもにモンゴルから戦乱を逃れてきたラマ僧たちがセレンゲのブリヤート地方に来て仏教を広げはじめたわけです。セレンゲのブリヤートに有名なガルダン・ダツァンという寺院があったそうです。私は宗教に詳しくない人間ですから、よく知りませんが、聞いたことを話してあげるくらいですよ、まちがっていたらあなたが文献を調べて訂正してくださいね。最初是我々ブリヤート人たちがフェルトの寺院を建てて法会を開いていたそうです。徐々にレンガの寺院を建てて、そして19世紀の30年代の末にブリヤート地方に30あまり、40近くの大規模な寺院をもつようになりました。そして20世紀の初めになるとダシチョインリンという1つの寺院だけで1,000人あまりのラマ僧をもつようになったそうです。当時、ロシア政府がブリヤート人たちの宗教を制限するようになり、寺院やラマ僧たちの数を制限していたそうです。しかし、信者たちの信仰というものは簡単に捨てられるものではないでしょう。ブリヤート人たちの生活様式、習慣、宗教面ではフルンボイルのほかの牧畜モンゴル人たちと差がないので、彼らはシネヘンに移住して来て、地元の原住民と何一つ行き違えと衝突がなく、仲良く暮らし、みずからの勤勉な両手と誠実な働きで快適な生活を作り上げ、新しい環境で良い暮らしをはじめることができました。これは、我々の宗教とも関係のあることです。我々北のブリヤート人たちはいまでもシャマニズムを信仰しているそうです。バイカル湖の西側のブリヤート人たちはいまでもシャマンを信仰しているそうです。とにかく、シネヘンのブリヤート人たち、新バルガたち、陳バルガたちの宗教は少し異なると昔、高齢者たちが言っていました。新バルガの人たちは、仏教をもっと信仰していたそうです。彼らのところには大小12の寺院があったそうです。もっとも有名なものとしてガンジュール寺院というのがあります。1780年に建設されたそうです。一方、陳バルガには1つだけ寺院があったそうです。かわりにシャマンがたくさんいたそうです。シャマンをたいへん信仰していました。新バルガたちがシャマンの祈祷儀礼を必要とするときには陳バルガのシャマンを招聘していたそうです。シネヘンのブリヤート人たちもまた仏教を信仰します。ラマ僧たちが大勢いました。バルガとブリヤートの習慣も似たようなところがあります。一部の姓が同じで、互いに親戚であり、通婚してはいけません。たとえば、シブシド姓、ガルゾード姓は新バルガ、陳バルガ、ブリヤートいずれにもあります。彼らはそれを1つの姓とみています。互に通婚すれば、血縁が近づくとして回避するのですよ。我々バルガ、ブリヤート人たちは、結婚するとなると出自をきわめて詳細に調べます。ラマ僧とシャマンを招いて出自を調べてもらうと

同時に、系譜を調べます。昔のソムのザンギ〔役職名「章京」、ソム長〕には当該ソムの住民たちの系譜が保存されていました。結婚するようになれば、ソムのザンギのところに行って系譜を調べます。ザンギは、毎年、その系譜を更新します。新しい人が生まれたり、新しい家が増えたりすれば、系譜に加えて清めるそうです。文字を知っている人たちは自分でわが家の系譜をもっていた場合もあります。多くの系譜はモンゴル文字で書かれていました。しかし、のちにまた一部の満州文字を知っている人の家庭では、満州語で書いて保存していたこともあります。残念ながら、文化大革命のなかでそれらの系譜はすべて焼失しました。

Q: プリヤートの一部がシリングルに移住したそうですが、それはどういう理由で移住したのですか？いま、話していただけますか？

N: ええ、いいですよ。あなたはブドゥーン・リンチンという人について聞いたことがあるはずです。北方ロシアから逃れてきたプリヤートの貴族セレンジャヴィン・リンチンドルジという人でした。我々はみな、「ブドゥーン・リンチン」と呼びます。彼がシネヘン地方に対して不満をもつようになったのには理由があります。彼は自分の利益のためにあらゆる機会を見逃さない人でした。そのリンチンドルジをリーダーとした一部の反対勢力が、新しい居場所での新しい暮らしを開始したプリヤート人たちの平穏な生活を、どうしても破滅させ、個人的な目的を達するべく活動しました。もともとは帝政ロシアの時代に敷いた東北の鉄道の事件でした。東北の軍閥とソ連のあいだに意見の相違が生じ、仲が悪くなり、1929年に武力衝突になり、ロシア軍がハイラル市まで侵入してきた事件がありました。このとき、わが地方の牧民たちは、また戦乱になると恐れ、どうすれば良いのかわからず、呆然としていました。一部の世帯たちは恐れて家畜を連れて南興安嶺を越えようとしていました。リンチンドルジをリーダーとするプリヤートの数人の貴族や富裕な人たちがこの機会を利用してハンボ〔寺院の行政管理者、高僧の一種〕たちと連携し、牧民たちをそそのかし、シネヘン地方の一部の牧民たちをだまして連れてシリングルへ移動し、興安嶺を越えてシリングル地方に移動していきました。このときリンチンドルジが連れていったプリヤート人たちは70～80世帯、およそ500人いました。これらの民衆は、ブドゥーン・リンチンたちのそそのかしに陥ったふつうの牧民たちでした。戦争におびえてどこに行っても何をすることもわからず、まよっていた人びとをリンチンドルジがだまして連れて1929年の冬にシネヘンを発ち、興安嶺を越え、トゥシェート、ジャルドなどの地方を經由し、シャルフルチンのヤトート・チャガン・ノール〔湖〕、アル・フンドゥルンなどの地域で冬を過ごし、春を過ごし、さらに西ウジムチンのエメーリン・ゴビ、ヘシグテン旗のザイリン・ゴビ、ウラーン・ホーブルなどの地域をとおって、各地の貴族に進物を献上し、一時的な場所を請いました。土地を惜しむ人たちに追い出され、嫌がられ、厳しい季節を苦しく耐えきり、落ち着ける場所をさがして移動しながら、1931年の春にようやくシリングルの管轄地について、シリング

ル盟の西ホーチド旗のモドンギーン・シルという場所に到着して、一時的に滞在しました。セレンジャヴィン・リンチンドルジは絹や錦などの高級な進物をもって西ホーチド旗の王スンジンワンチグを訪ね、土地を請いました。そして、とにかく毎年、400白銀元をおさめるように約束し、モドンギーン・シルに落ち着きました。しかし、地元の王公貴族たちは、リンチンドルジと彼の連れて来た人びとを歓迎しませんでした。むしろ、冷たく対応し、いろいろな理由をつけて税金を取ると脅して、自分たちの地方にいさせたくないことをしばしば明示していました。牧地を惜しみ、あちこちに追い、あらを探して困らせ、税金を取るべく因縁をつけて、傲慢な態度で接し、さまざまな障害をあたえていたので、リンチンドルジはまた何らかの機会を狙っていたのではないのでしょうか。そうこうするうちに、幸いなことに、まもなく1931年の秋、パンチェン・ラマ9世がシリシリングルに行幸し、読経していました。リンチンドルジは好機到来とみていろいろと考えた末、パンチェン・ラマに同行して通訳していたブリヤート人のハンボであるダシドルジらと接触し、パンチェン・ラマを訪ね、シネヘンから連れてきた人びとをパンチェン・ラマのシャビ〔帰属民〕として献上するという目的を達成しました。それ以来、リンチンドルジは、この宗教的な名目に依存して、パンチェン・ラマのシャビという侵害されない名義を利用して、シリシリングルに落ち着く土地を手に入れただけではなく、権力と地位も手に入れました。そのうえ、パンチェン・ラマがフルンボイルに行って奏経したときに信者たちが献上した大量の家畜や財産のうち、家畜をフルンボイルに置いていったそうです。およそ8,000頭あまりの小型家畜、牛馬1,000頭近くあったのを、1932年にリンチンドルジは、人を派遣してシリシリングルに連れて来てパンチェン・ラマの群れとして放牧し、利益を得ていました。のちに1936年にリンチンドルジは、活仏〔パンチェン・ラマ〕の畜群をウジムチン、アバガなどの旗の領地から集めた彼の家畜群とあわせて、10,000頭を越える群れにして、青海にたどりついたそうです。当時、活仏の家畜群を送りにいった人が生きていましたよ。リンチンドルジの派遣したサンピリン・ツェヴェン、ジャムスレンギーン・ビゼヤー、ヨンドンギン・ツェデヴなど7人です。ほかの旗の人たちと活仏の2人のハンボと、もう1人のチベット貴族、合計20数人が、10,000頭あまりの家畜を連れて、数カ月にわたって青海の領地に到達したそうです。

リンチンドルジが活仏のシャビ旗になってからは、シリシリングルの王公貴族たちもパンチェン・ラマのシャビや使用人、パンチェン・ラマの家畜群を追い出して阻害するわけにはいなくなりました。ありえないでしょう。そして良い牧地を使い、16～17年間、いました。

パンチェン・ラマは1931年、フルンボイルまで行幸しました。ちょうど日本が〔中国〕東北地方に侵入しているときでした。パンチェン・ラマ一行が帰途に乗った列車が、鉄道の閉鎖により、動かず、寄進された家畜群を連れて帰ることができず、フルンボイルに残りました。パンチェン・ラマの信者たちが寄進した金銀財宝を70頭のラクダに載せ



られないほど積んで持って帰ったといわれています。帰途、シリングルに立ち寄っていました。リンチンドルジはパンチェン・ラマの影響力をこのように利用し、シリングルに独立した1つのプリアート旗をつくり、みずから旗長の座につきました。彼の目的はそれだったのですよ。

Q: シリングルにも1つプリアート小学校があったそうですが、それもリンチンドルジがつくったのですか？

N: それは日本人たちが来てからのことです。日本の侵略者たちがシリングル盟を占領したとき、リンチンドルジの地位はますます堅固になりました。もともと彼はプリアート旗長になり、シリングルの貴族と同様な権力と地位をもっていました。そのうえにまたパンチェン・ラマのシャビ旗〔直轄領〕という特権旗の長です。彼は偉そうにする人です。そのため、日本人が来て、リンチンドルジには特別待遇をあたえ、彼の地位をますます堅固にしました。それは日本人たちにとっても有利だったのではないですか。あのプリアート人学校にはちゃんと理由があるのですよ。シリングルにあった日本の「善隣協会」という協会のあったところにありました。同じ敷地内にありました。「善隣協会」は1933年に設立されました。また日本の特務機関とも言われていました。いまのシリンホトにいました。当時はバンディダ・ゲゲン・ヒード〔貝子廟〕と言っていました。もともとシリングル盟庁は東スニトにありました。日本が来てから、たぶん1940年にバンディダ・ゲゲン・ヒードに移ってきました。あなたのいうその学校は、プリアートの子どもたちで構成された小学校でした。けれども、1つおもしろいことに、その小学校の20数人の子どもたちと一緒に、もう1つ20余歳の青年たちで構成された特別クラスがありました。10人ぐらいの若者たちがいたと思います。最初、その学校の学生たちは、それらの若者たちと合わせると30数人の学生がいたでしょう。その学校は、リンチンドルジがつくったというよりも、日本人たちとリンチンドルジが協力してつくった、スパイ養成学校だったと言えるのではないかと私は思います。どうしてかという、それらの20余歳の10数人のプリアート青年たちは、ふつうの学生ではなく、いま思うと、日本人たちがきっとロシア・モンゴルへスパイ活動させるために養成していた特別なクラスのようなものでした。彼らは次の年度がはじまるときには来ませんでした。その後、彼ら青年たちをふたたび見ることはありませんでした。思うに、たぶん、どちらかの国にスパイとして行かせて、命を落としたか、どうしたか、わかりません。日本人たちにとって、当時モンゴルへ送るスパイはたいへん重要な意義がありました。1921年にモンゴルの革命が勝利したあと、モンゴル国にいた日本のスパイ活動は基本的に停止していました。リンチンドルジが日本人の力にたよって権力と地位を手に入れ、日本人たちもリンチンドルジを利用してプリアート学校を設立するという名目でスパイを養成し、ソ連とモンゴル国に対するスパイ活動を強化していたのではないのでしょうか。プリアート青年たちはロシア語を知り、またモンゴル語も知り、言語の条件が良いため、スパイ養成に適し

ていたことはいうまでもありません。ロシア、日本、中国3カ国の協定どおり [1941年に締結された日ソ中立条約を指していると思われる]、日本人たちはロシア [ソヴィエト連邦] を頼って独立したモンゴルに足を入れることができなくなりました。それで、ブリヤート人をスパイに養成するのがもっとも確実かつ便利な方法だったことはまちがいありません。

しかし、そのブリヤート学校を単なるスパイ学校であったと言っははいけません。学校の幼い子どもたちに、一般的な中小学校の授業を教えていました。成績の良い子は多くのことを学びました。学童のすべての経費、食費、衣服費、使う筆、紙などすべて公的に支給されます。それでも自由意志でみずから来る学生は多くありません。シリングル盟庁がバンディダ・ゲゲン・ヒードに移ってきたあと、盟庁もとの学校が、ブリヤート小学校と合併し、「シリングル盟モンゴル振興中学校」になりました。こうして、2つの学校の学生たちをあわせて最初40~50人の学生がいたと思います。あとで増えて100人あまりになりました。牧民たちを強制して彼らの子どもたちを学校に入れていました。そうでなければ、遠くはなれていて、子どもたちが幼いため、子どもたちを学校に入れたがりません。もちろん、時代が不安定だったので、突然戦争になり、離散しないように気をつけてもいたでしょう。

Q: その学校の先生は、モンゴル人でしたか、日本人でしたか？

N: 日本人もいました。モンゴル人もいました。学校を最初に合併したときに、吉村と大島という2人だけ日本人の先生がいました。その2人の日本人の先生はたいへん良い先生でした。のちに、もう2人の日本人の先生が来ました。そのほかモンゴル人の先生も4~5人ほどいたと思います。けれども、モンゴル人の先生はしばしば入れ替わっていました。新しく来た先生をまだ覚えていないうちに、ほかのところに転職してしまうから。校長はモンゴル人でした。校長はサンドウーレンという、とても良い人でした。のちにウネンデルゲルという人が校長になりました。ウネンデルゲルは学識豊かな人でした。モンゴル語、中国語のバイリンガルでした。また2人の日本人医師がいました。1人が主任医師で、もう1人が看護婦でしたか。学校の子どもの風邪をなおす、小さな医務室のようなものがありました。その2人の日本人医師がつねに働いていました。

Q: シネヘンのブリヤート人たちはまたホーリングルに移動したと言いますが、その移動をあなたは知っていますか？

N: 知っていることは知っています。シネヘンのブリヤート人たちは1度ではなく3度、興安嶺を越えて興安嶺の南のホーリングルに達しました。このことは、日本の特務機関が直接関与していた、と言われていています。どうして移動させたのかと言うと、日本人たちがシネヘン地方を開けてもらい自分たちが利用する計画があった、といううわさがあります。このうわさは本当だろうと私は思います。なぜなら、シネヘンは自然に恵まれた美しい場所です。栄養の高い草と水に恵まれた、美しい場所です。日本の関東軍が指

令を出すとき、フルンボイルのシネヘン地方の家畜を戦乱から救出し安全な場所に移動させる、というきれいなことばをしましたが、本音はシネヘンのブリヤート人たちのためではなく、むしろ自分たちの利益を考えて決めたことでしょう。シネヘンのブリヤートが3度興安嶺を越えたことを言うなら、最初、1941年に偽満州国の将校であったダンバをはじめ、10数世帯のブリヤート人たちが興安嶺を越えて、黒竜江省のドゥルベド旗の領域に移動したそうです。その次に、ソドノム、ホルホンをリーダーとした70あまりの世帯が興安嶺を越えて直接、ホーリングルに着いたそうです。最終回は、1945年の夏、170あまりの世帯700～800人、50,000頭あまりの家畜と一緒に移動し、またもや直接、ホーリングルに行きました。黒竜江省のドゥルベド人のところに行った世帯たちはまもなくまた西へ移動し、ホーリングルに行って、あとの2回に移動したブリヤート人たちと合流したそうです。初回の10数世帯は道を知らないため、黒竜江省のドゥルベドを通っていったようです。2回目はソロン旗に働いていたサムラという日本人が興安嶺を越える道をみずから行って調べてブリヤート人たちを連れて行ったそうです。

ホーリングルに移動したブリヤート人たちは全部でおよそ250世帯1200人くらいになり、70,000あまりの家畜をもつようになって、またシリングルにいたブドゥーン・リンチンのところにいたブリヤート人たちのところに移動していき、合流したそうです。そして、シリングルには合わせておよそ350世帯1400人の130,000あまりの家畜が集合していたそうです。この数字は文献上にあると思います。あなたたちで照合してください。私の記憶はまちがっているかもしれません。このときの移動にはブリヤート人たちはたいへんな苦労を経験しました。五畜を連れて、牛車に家財道具を積み、密林の興安嶺山を越えるとき、木が道を遮断すれば木を切り倒し、水と泥が道を遮断すれば切り倒した木を敷いて道をつくり、何日もかかって移動してきたと、話していました。これについては、ブリヤートの有名な尊敬される人であったウルジン・ガルマエフ、シネヘンの旗長であったセレン、課長であったツォグトなどの人びとがよく知っていました。彼らは、一部が移動し、一部が移動に反対し、みずから経験した人たちです。ウルジンは興安嶺北省の軍区の司令から、のちに王爺廟、現在のウランホトの軍官学校の校長、中将までのほりつめた人です。とても偉い人ですよ。彼はみずから見本になって移動しはじめた人です。そして、シリングルでリンチンドルジのもとに集まった人たちがのちにたいへんな苦難を経験しました。最後に1947年の秋、おそらく10月に、フルンボイルのシネヘン地方に戻ってきたときには、せいぜい700あまりの人が残っていたそうです。およそ半分以上の人がリンチンドルジのせいで、戦争で命を落とし、離散しました。西へ逃げてウジムチン、バヤンノール、アラシャン、エジネ、甘肅、青海まで散り散りに逃げいき、生き残ったブリヤート人たちは、国が解放されてから党の恩恵により、シネヘン地方に徐々に戻ってきました。

Q: リンチンドルジはブリヤート人でしたか？

N: リンチンドルジはブリヤート人です。帝政ロシアの時代に彼はペテルブルグの騎兵学校で勉強していました。のちに、ロシアの十月革命のあとでブリヤート地方の民衆を動かして、外へ逃避させる工作をし、そしてシネヘン地方に移動して来た人です。彼はシリングルにきてパンチェン・ラマの影響力を利用して居場所を見つけて、その後は日本ともつながりを持っていました。のちにはまた密かに国民党と連携して反革命的な活動をしていました。最後に共産党と敵対し、反革命分子となりました。

リンチンドルジは1,400あまりの人のなかから青年男女皆を武装させ、またおよそ300人の青年たちを武装軍事力にしました。そしてリンチンドルジは武装したブリヤート人たちを連れて反乱を起こし、解放区の牧民たちの家畜財産を略奪すると、革命者たちを殺害するというたいへんな罪を犯し、党と革命に反抗しました。真理は必ず勝ち、民衆の利益に反した人たちは最後に必ず敗れます。1947年6月から内モンゴルの解放区のモ漢連合軍は協力してリンチンドルジを3方面から包囲して戦った末、リンチンドルジらは抵抗できず南へ逃げて、ヘシグテンの西側にある砂地にたどり着き、そこで激しい戦闘がはじまりました。そして、リンチンドルジの率いたブリヤート人たちをおよそ20日にわたって追撃し、大半のブリヤート民衆と彼らの家畜を救出しました。しかし、国民党の援護により、リンチンドルジはおよそ300人を連れてドローンノール [多倫] の周辺に逃げました。リンチンドルジは部下を動員しておきながら、自分は家族とともに金銀財産をもって北京に行って隠れていたそうです。

まもなくドローンノールを解放する戦争でリンチンドルジが生きてままで捕まえられ、残ったおよそ300人の人たちは散り散りになり、正藍旗の砂丘地帯を通過して、西へチャハル盟を経由してウランチャブ盟に入り、途中バヤンノールのウラド前旗で一時滞在し、地元で牧民に鞍を作ってあげたりして生計を立てていたそうです。のちに、少しずつ進んで甘肅、青海まで行き、かなりの数の人がエジネ旗に着いてテムチグドンロヴ [徳王] の軍隊に加わり、その後、全国が解放されたとき、彼らの生存者が前後して少しずつ、最終的にシネヘン地方に戻って来たそうです。勤勉なブリヤート人たちは、シネヘン地方に戻ってくると、短い期間で暮らしを立て直し、経済の新しい発展に非常に早く適応し、全面的にさまざまな面で向上発展しています。とは言っても、本当は、リンチンドルジは、妻子や側近と一緒に北京に着き、傅作義をたよっていましたが、1949年に国が解放されると、彼は西のほうエジネへ逃れ、徳王と合流する途中で捕らえられ、ロシアに送られ、監禁されたまま亡くなったそうです。リンチンドルジは台湾へ逃げるために金銀を積んでいる途中で捕まえられたと、一部の人は言います。どのように言おうとも、彼の選んだ道がまちがいであったのでしかたありません。ブリヤート人たちは文化を大事にするので、非常に早く1948年からシネヘン小学校を設立し、いかなる困難も乗り越えて子どもたちの教育を最優先にしていました。いま現在、シネヘンには小学校のほかにもう1つの小学校が設立されました。シネヘン小学校を卒業したブリヤートの知識人と

いうと、内モンゴル師範大学生物学部教授のアヨーシン・ジグメドドルジ、内モンゴル大学モンゴル言語文学学部教授のバトミン・ダワーダグワ、内モンゴル農業大学の教授ツォグバダラフのような先輩たちがいるほかにも、若い研究者、知識人たちが輩出しています。

Q: いまシネヘン地方のブリヤート人たちはどれくらいになっていますか？

N: いま8,000人くらいに達していると思います。これに関して私は最新の文献を見て話しましょう。勝手なことは言えません。数年まえに7,000人あまりの人口だと言っていたように思われます。またかなりの人たちがロシアへ帰ってしまったのですよ。ロシアのウランウデには、ひとまとまりのシネヘンのブリヤート人たちがいますよ。

### 歴史的な人物に関して

Q: あなたはブリヤートの昔の知識人アグワン・ハンボ [ドルジーエフ] について詳しくと聞きました。彼について話してくれませんか？

N: いいですよ。彼は非常に聡明な人だったそうです。寅年生まれで、虎のような聡明な人だったそうです。そして、13世ダライ・ラマの先生に相当する賢人です。なぜかと言うと、まず1つはアグワン・ハンボがダライ・ラマに政治と宗教を運営する方法に関して教えていたそうです。側近の参謀だったそうです。2つめは、アグワン・ハンボは年齢的に13世ダライ・ラマより上の人で、親子のような年齢差があるとアグワン・ハンボが自分の記録に書き残しているそうです。13世ダライ・ラマは子年で、1862年生まれの人だと思います。1933年に57歳の若さで他界しました。アグワン・ハンボから20数歳年下だったので、彼はアグワン・ハンボを先輩とみて信頼し、尊敬し、たいへん親しくしていたそうです。アグワン・ハンボは寅年で、1854年生まれの人だと思います。私はこの2人に関して少し調べたのですよ。なぜかと言うと、私はアグワン・ハンボの有識さを大いに尊敬しています。彼はわがブリヤート人であり、長生きをしました。1938年に85歳で亡くなりました。彼は13歳からラマ僧になって、教典の勉強をし、宗教哲学に詳しくなった人です。19歳のとき、西チベットのデボン寺に行き、15年間教典を勉強し、ルハラムバ [チベット仏教顕宗における最高の学位ラーラムバ] をとったそうです。それから36歳のとき、ラサに行き、たった14歳であったダライ・ラマの先生になり、とても親しい関係をもつようになりました。アグワン・ハンボは、宗教哲学に精通したほか、ロシア語、モンゴル語、チベット語、日本語など多言語をあやつり、国際関係を熟知した政治家でした。また英語も話せたのではないのでしょうか。たいへん頭がよく、思慮深く、学識のある人だったのですよ。13世ダライ・ラマのロシア、モンゴルなど多言語の訳者、宗教政治の参謀でした。

アグワン・ハンボは当時のロシア領のブリヤート・モンゴル人であるため、当時のロシアの状況、独立しているモンゴルの状況、内モンゴルの状況、中華民国の状況をよく

知っていたので、ダライ・ラマに重要な政治的な情報を提供するほかに、彼の政教、政策において決定的な助言をあたえていました。アグワン・ハンボの確実な情報により13世ダライ・ラマは、ロシアの支持がモンゴルの独立に影響をあたえたことを良く理解していたので、それをまねて、ロシアと密接に連携し、チベットの独立をめざし、モンゴル国と親密な関係をもつことをのぞむようになりました。概して、アグワン・ハンボは世界をまわった聡明で、見識があり、国際関係に長けた人だったと言われていすよ。彼の影響で、13世ダライ・ラマは宗教のみならず、政治活動にも積極的になり、国際関係について、つねにアグワン・ハンボに相談し、世界の状況をよく知っているアグワン・ハンボを大いに信頼し、自分に代わって協談するために他の国々に派遣していました。アグワン・ハンボの自身の記録というのがあったそうです。おそらく紛失したでしょう。

1888年の子年からイギリスの軍隊がチベットに進攻したのですよ。そのとき、世界の状況をよく知っていたアグワン・ハンボはダライ・ラマに進言し、「我々は軍隊を出して戦争をしても勝てません。商談することを考えてください」とたびたび進言したにもかかわらず、聞いてもらえず、イギリス軍と戦争をしました。そして何度も進言し、最後にとうとうダライ・ラマは、アグワン・ハンボの賢さを本当に敬服し、彼の政策に頼り、彼の進言を受入れ、1904年の夏にラサから密かに出て、アグワン・ハンボの保護のもと、モンゴルに向かいました。これに関してアグワン・ハンボは紀行文を書いたそうです。かれらは青海を経由し、甘肅を通って、エジネ川をわたって、モンゴルのイフ・フレー(ウランバートル)に向かって数カ月かけて到着したそうです。

清国政府は、アグワン・ハンボとダライ・ラマをしっかりと監視する一方、生活の面で大いに支援し、金銭財宝をたくさん寄付していました。イフ・フレーでジャヴツェンダンバ活仏と面談し、モンゴルのガンダン寺に滞在し、アグワン・ハンボがダライ・ラマのすべてのことを調整していました。13世ダライ・ラマは、第1に、東へ清の皇帝と連絡を取り、みずから訪ねることを考えていたそうです。第2に、西へロシアをたよって連絡をとり、支援をもとめる考えもありました。第3に、一時的にモンゴルに滞在し、イギリス軍の手から逃がれるために、モンゴルに行きました。これらすべての構想と計画はすべてアグワン・ハンボが考え、助言していました。イフ・フレーでは、ダライ・ラマが多くの信者につねに拝まれており、毎日信者たちと会う以外、すべて清国政府のスパイが監視し、何もできなかったそうです。イフ・フレーにあるロシア領事館に行くと、ロシアと連絡を取るすべてのことをアグワン・ハンボがみずから実行し、1906年3月にアグワン・ハンボがダライ・ラマの特権代表としてロシアに向かい、サンクトペテルブルクに行くと、ニコライ2世と面会し、西チベットの状況、ダライ・ラマの考えをすべて伝え、チベットへの支援を願い出ました。13世ダライ・ラマの希望も伝えました。ニコライ2世にはチベットを支援する気持ちがあっても力がおよばなかったことをアグワン・ハンボは記録しました。ニコライ2世の顔には笑うでもなく泣くでもなく、何一

つ適切なことばを發することなく、アグワン・ハンボを長く待たせていたと、記録を残したそうです。当時、ニコライ 2 世にどんな困難があつてそんな顔をしていたのかというと、まず第 1 に、彼はチベットに関してイギリスと衝突が生じることに神経をとがらせていました。第 2 に、清国の政府と南北モンゴルを分けることを考えていたため、チベットに手を出し、「元も子も失う」、両手が空になることにロシアは神経をとがらせていました。第 3 に、ロシアは当時、日本に敗れたのでチベットを支援する力がありませんでした。第 4 に、ロシア国内では日常的に騒乱が発生していたため、対外支援よりも内部を安定させることが緊要でした。第 5 に、イフ・フレーにある清国代表のアンパン〔総督〕に疑われることをとても警戒していたそうです。このように、アグワン・ハンボはロシア訪問の成果を得られませんでした。彼はロシアに 1906 年の春から 1907 年の初めまで滞在し、ロシア皇帝の好意的な言葉を得られないままに、ダライ・ラマに呼ばれてダライ・ラマの側に戻ってきました。ダライ・ラマはイフ・フレーを發ち、五台山に着いてから、アグワン・ハンボと一緒に 1908 年申年の秋、北京に向かいました。道中、アグワン・ハンボは、彼の外国の知り合いや政治家たちをダライ・ラマにひきあわせて、チベットと親密な関係を結ぶことに関して大いに努力しました。ロシア、アメリカ、日本の上層部たちにダライ・ラマを引き合わせ、通訳してチベットの国際関係においてアグワン・ハンボはたいへん重要な役割を果たしていました。ダライ・ラマは 1909 年の冬にチベットへ戻るとき、アグワン・ハンボはふたたびロシアに向かい、サンクトペテルブルグに行って皇帝と会いました。アグワン・ハンボの手助けと助言がなければ、ダライ・ラマはチベットに戻って長く滞在することはできなかったでしょう。清国軍の脅迫のもと、ダライ・ラマは 1909 年 10 月 25 日ふたたびラサに戻りましたが、2 カ月もいられませんでした。1910 年戊午の 2 月下旬に (21 日)、インドへ逃れました。アグワン・ハンボはロシアに行って、さまざまな外国の支援を求め、チベットの安全、ダライ・ラマの権力を保証するための方法をさぐっていました。

そして、1 年後、1911 年 10 月ごろ、中国内地で有名な辛亥革命が勃發し、1912 年 1 月に南京で中華民國の臨時政府が樹立されました。チベット地方に清国の軍隊とチベット人たちとのあいだで戦争になり、たいへん不安定となりました。ダライ・ラマがインド、イギリスの力を借りて、ネパール国の進軍を請い、チベットの戦争を終結させ、清国の軍隊はチベットから撤退しました。これに関してアグワン・ハンボは、ネパール政府と接触し、彼らを動員し、清軍に撤退するよう進言してもらつて仕事をしていました。アグワン・ハンボの外交関係は幅広く、各国の外務大臣と親密な関係をもっていました。このように 1912 年子年の 12 月 4 日に日本の友人である矢島保次郎と一緒にインド・チベットの国境に行き、13 世ダライ・ラマをむかえてチベットに向かいました。アグワン・ハンボはダライ・ラマをむかえてラサの戦乱がおさまるまでラサに戻りませんでした。冬の 12 月にようやくラサに来て、1913 年丑年からはじめてチベット政府、宗教の大整理を

おこない、さまざまな新しい政令を布告しました。これについてはアグワン・ハンボの発想と助言が大きく取り入れられ、一部の政策に決定的な影響を及ぼしました。また、1913年丑年に定めた「モンゴル・チベット条約」は、アグワン・ハンボの直接の努力、みずからの参加によって作成された条約です。おもにチベットとモンゴルのボグド・ハーン政権が相互に支援し、独立を認め合うような内容の協定でした。

中華民国の政権が安定し、モンゴル国独立運動のとき、アグワン・ハンボはイフ・フレー、サンクトペテルブルグなどの重要なところを何度も往来し、それぞれの内外状況を詳細に理解し、時代の状況を観察し、チベットの独立に関してダライ・ラマの権力を適切な地位をモンゴルで認めてもらうなど非常に神経を使って努力していました。モンゴルがボグド・ハーン政権になり、独立を宣言したとたん、ボグド・ハーンにチベットとの強い関係を結ぶように進言し、モンゴル・ボグド・ハーン政権の最初の大使アムガランをチベットに派遣させました。同じくダライ・ラマにモンゴル国の独立過程におけるロシアの重要な影響を話し、それを参考にして、ロシアとの関係を強め、チベットをどのように運営するかについて、重要な助言をあたえていました。アグワン・ハンボは深慮遠謀の政治家でした。文人、知識人、宗教家であったことを彼の一生の活動が証明しています。彼はモンゴルとチベットを結び、ダライ・ラマの権力を固めたモンゴル・チベット連合国を樹立することまで構想していたというわさがあります。9条からなる「モンゴル・チベット条約」もアグワン・ハンボが考え、起草しました。しかし、これをいま公に言うてはいけなんでしょう。アグワン・ハンボの日記というのがあったそうです。彼が逮捕されたあと、一部の人が見たというわさがあります。しかし、一部の人の話によると、アグワン・ハンボを救出するために、その日記を燃やしたそうです。かつてはこれについて話してはいけなかったのですよ。チベットとモンゴルの関係とか、条約とか、13世ダライ・ラマとか、どれもたいへん重い政治的な内容をもっているものですから。話してはいけません。いまは少し平穏になりました。けれども、わかりませんよ。いつ、どんな運動がやってくるか、まえて知る方法はありませんよ。

アグワン・ハンボは1905年、巳年にブリヤート語に適したワギンダラ文字を創出し、実用化させていました。これもモンゴル人たちの文字史上において1つの重要なポイントとして残されることですよ。アグワン・ハンボは文化・歴史に関して大いに注目し、多くの文献を集めていました。彼に関して私の書いたものがどこかにあるかと思います。あとで探してみましょう。見つけたらあなたたちにあげましょう。いまはもう私には使えないと思います。目が悪くなり、文字が読めなくなって、何もできなくなりました。いまや無用な人間になっているのですよ。あなたたちに少し知っていることを話してあげることができます。それでも、気をつけなければなりません。あれこれ無節操に話して、子孫に不利益をもたらしてはいけませんよ。いつ、どんな運動がやってくるか、だれが想像できますか。歴史はあなたたちには必要です。しかし、人をまきこむ必要はあ



りません。あなたたちは、私の話したことを他の資料と照合し、必要なものを取り、要らないものを捨ててください。私も年を取って、忘れてまちがったことを話したかもしれません。あなたたち、気をつけて使ってください。

## 4. ハンダ

### 紹介

ハンダ氏は、シネヘンのブリアート人である。第2次世界大戦のとき両親とともにシネヘン地方から移動し、ホーリングルを経由し、西に向かい、はるかなるエジネ地方にたどりついて暮らしていた経歴をもつ人である。私たちがインタビューをしたときすでに74歳になったと言っていた。しかし、たいへん知識があり、新しいことの好きな人であった。地元の人びとは彼女のことをカンダと呼ぶ。しかし、本人は私たちにハンダと自己紹介したので、私たちはここで両方を使った。

私たちは2010年8月17日に初回のインタビューをし、2013年7月16日にふたたびインタビューをした。

インタビュアーは、サランゲレル、ソヨルマ、小長谷有紀。

### 生活史から

**Q:** さて、あなたの経歴を紹介していただけますか？自分の故郷、幼少時のおもしろいこと、姓、兄弟親戚、仕事などについて話してくれるようお願いします。

**H:** 私の名前はハンダと言います。ツァガンゴード姓です。氏名を苗字付きで言うと、トゥールタル・サンパニー・ダムディンの息子バトスフの次女ハンダと言います。もともとドルジハンダという名前でしたけれども、定着しませんでした。単にハンダと呼ばれてきました。丑年生まれで、1937年3月8日生まれたそうです。現在の、国際婦人デーに生まれたのですね。私には2人の兄、1人の姉がいます。私の両親から、我々12人が生まれたそうです。もともと両親には子どもが定着しないので、よそから1人の息子を養子にしたそうです。すると、そのあとに自分たち息子が生まれ、息子2人になりました。そうこうするうちに私の祖父の兄が「お宅にはすでに2人の息子がいるから、1人を私にください」と請うたそうです。それで、自分自身の子どもを養子に出しました。私の2人の兄というのがかれらです。2人の兄の前にまた4、5人の子どもが生まれて夭折したそうです。2人の兄の次に3人めにセムジドという姉がいました。4人めが私です。5、6人めが2人の息子でした。2人とも亡くなりました。1人は2歳のときに亡くなり、1人は7歳のときに亡くなりました。7人めは私の妹ドゥルマでした。ドゥルマを養子に出しました。8人めはドゥルマジャヴと言いますが、また養子に出しました。ドゥルマジャヴは一番下の妹です。この一番下の妹はウラド中旗にいたとき、ハリヨンというところで生まれました。

1945年の夏、祖父母、母方のおば、そして両親の4人の子どもと一緒に、ホーリングルへ移動しました。当時、わが一番上の兄が17歳で、私の一番上の姉は11歳で、私はやっと7歳で、私の弟バトボルドは5歳でした。私たちは牛車で興安嶺を越え、道中、合

計54日かけてホーリングルに着きました。私たちは170世帯、700あまりの人びと、10万頭の家畜と一緒にいったそうです。牛車で行くというのは、最初は楽しかったのですが、長旅は本当にたいへんでした。ハマル峠を越えるとき、まったくたいへんでした。わが家は合計12台の牛車で行きました。興安嶺の森林というのは繁茂していて、その繁茂さに驚かされました。先頭の人が木を切り倒して道を開きます。そうしてたいへんな思いをしながら、どうにかこうにかホーリングルに着きました。我々がホーリングルについて4～5日しているうちにロシアの赤軍が来ました。ロシアと日本が戦ったそうです。ロシア軍というのは人を殺さず、イヌを殺します。私の父はロシア語を話すことのできる人だったので、ロシア兵たちと雑談していました。ロシア軍を私たちはマンガド〔化け物を意味するモンゴル語〕軍と呼んでいました。そして、ホーリングルで10数日滞在して、さらにシリングルに移動し、秋にウジムチンに着きました。ウジムチンにガヒル寺、ヌンナイ寺、というのがありました。そこにハルハ軍が来ていました。ある日、マンガド軍がうちの家畜を追っていったのでハルハ軍に報告すると、ハルハ軍のシャグダル長官が行って取り戻してくれました。当時は、つねに戦乱になっていた時代ですよ。私たちは何がわかりますか。みんなについて移動ばかりしていました。当時、私たちはロシアを「マンガド」といい、中国人を「バールー軍〔八路軍〕」とっていました。1947年の冬、さらに移動してチャハルの砂丘を越えて、多倫の北側にシャンディーンゴル〔上都川〕に着いたら、八路軍が来ました。さあ、どうしようとしていると、八路軍が家に入ってきました。銃をあてられて「手をあげて外に出ろ」と言われて、私たちは手をあげて出ました。そうしてそこから、無事に脱出しました。そこから行ってタイブス旗に着きました。さらに張家口に着いて、アメリカ人という人たちが私たちを助けてくれました。いまふうに言うと、宣教師たちのグループでした。私たちに食べもの、医薬品、衣服、靴などの物資を無料で提供していました。「キリスト教を愛せよ、聖書を信仰しましょう」と言っていました。私たちは道中さまざまな地方を通過しました。もっとも損害が多かったのは、タイブス旗にいたときです。私たちはタイブス旗のマルガイ寺に着きました。タイブス旗で大半の家畜財産を失いました。その先は、少ない家畜を連れて行きました。張北にも行きました。張北というのは、張家口の北側にあります。そのように移動している途中で、2人の弟が亡くなりました。

私たちブリアート人は学問を大事にします。道中、子どもたちに文字を教えます。ボリン・バト、サンジャギーン・ダルザ、ジュグデリーン・ドガルなどの人たちが文字を教えていました。モーニ山〔陰山山脈〕側にわたって、ウラド中旗のハリョートにいたとき、徳王の軍隊が西へ通過する一行と遭遇しました。そこからさらに、エジネの領域に入って、ゴロナイ川に着いたときに、カザフの強盗が来て戦い、1人の年寄りを殺し、何人かの子どもを奪って行きました。そのとき、徳王の軍隊が拐子河に駐屯しました。それからさらに行きながら、1949年にエジネ川に着きました。エジネ旗に着いて、

そこで1955年まで居住しました。ブリアート人たちが住んでいた土地に1958年から宇宙開発基地が建設されました。エジネにはおよそ50近い世帯がたどりついていたでしょう。そして、そこで生まれた子どもも多くいました。ゴロナイ川にいたとき、私の祖父が亡くなりました。私の姉はエジネで、ジャールドからエジネに幹部として派遣された人と結婚しました。彼らは3人の子をもちました。主人はのちにアラシャン西旗に転勤し、書記になり、1964年の洪水で亡くなりました。1965年に姉は子どもたちとともに故郷に帰ってきました。

## 学校生活から

**Q:** あなたは学校に通っていませんでしたか？

**H:** 私は文字を全部覚えていました。制度的な学校に通う機会がなかったのです。私はエジネに着いて、1952年の秋、そこから蘭州の学校に行きました。西北民族大学で勉強しました。当時、4人のブリアート人がその学校で勉強していました。ジグジド、セベルマ、私の姉セムジドと私です。私は蘭州の学校を卒業して、エジネに戻って、旗の婦人連合会で勤めていました。私の姉は結婚しました。そして私の両親は、どうしても故郷に帰りたと思っていたにちがいません。私に「地元のモンゴル人と結婚してはいけません」ときっぱり決めていました。それで私はそこで結婚せず、戻ってから結婚しました。1955年に、私たちはシネヘン地方に戻ってきました。帰ってくる時、エジネにいたブリアート人たちは3つに分かれて、帰ってきました。大人数なので、そのように分けられました。私の両親は1954年にシネヘン地方に戻りました。彼らは最初のグループと一緒に帰りました。その次のグループは、1954年の末かなあ、帰りました。私は最後のグループと一緒に帰りました。1955年に帰ってきたとき、列車の1つの車両はすべてブリアート人たちでした。私たちは蘭州から列車に乗って西安に着きました。ふたたび、西安から北京について、また北京からハルビンにつき、ふたたびハルビンから汽車でハイラルに帰ってきました。当時、直行列車はなかったと思います。私はそのように乗り継ぎながら帰ってきました。

私はエジネで初めて就職し、良かったです。最初に就職したときに、月給63元をもらってました。当時の63元というのは大金でした。エジネには3つの川があります。当時、ドンド川を遮断しようと大工事になっていました。私たちブリアート人たちは、ドンド川を遮断する工事に参加して、かなり儲けました。お金と家畜をもつようになりました。エジネに着いて一部の家庭がテントに住み、アナー「壁がなく屋根棒のみで立てたテント式住居」で暮らしていました。エジネ地方の貴族ルハワンジャヴ長官という優しい性格の人がいました。私たちシネヘン地方から来たブリアート人たちを見舞って、何か困ることがあれば教えてくださいと言っていたそうです。1949年にエジネ旗が平和的に解放されたとき、私たちはそこにいました。ルハワンジャヴは貴族のままでした。

地元に戻ってきて、1956年に私は嫁に行きました。私の夫はボリーン・ジグメドという人でした。蘭州の西北民族大学で1年半勉強して、家長がシネヘン地方に帰るときと一緒に帰ろうとして、1954年に先に帰ってきていました。ジグメドは地元に戻ってきて、シネヘン西ソムの政府で働いていました。団（共産主義青年団）の仕事をしました。また、副ソム長にもなりました。のちに、ソムの獣医ステーションの責任者を勤めました。そして、1990年に病気で亡くなりました。私たち2人には5人の息子と、2人の娘、あわせて7人の子どもがいます。娘の1人を養子に出しました。わが家はウラド後旗にいたときにはロボンチャムボ寺〔阿貴廟、内蒙古自治区バヤンノール市〕にいて拝んでいました。私はエジネにいたとき、正式な国家公務員でした。エジネから戻ってきてからは国の仕事につきませんでした。シネヘン西ソムのホルボー・ガツァで牧民になりました。のちに、夫ジグメドが幹部なので、私の戸籍は牧民から変わって都市住民〔中国語で城市居民〕になりました。すると、いまになって、牧民たちに生活保障として毎月100元あまりをくれるようになりましたが、私は牧民であっても戸籍上、都市住民なので、このような生活保障金もなくなってしまいました。

私は1952年にエジネから西北民族大学の幹部養成クラスに行って勉強し、1952年9月から1953年4月まで勉強しました。それは高等学校の卒業に相当するものです。私はとても勉強熱心な人間です。大学に勉強したいとつねに思っていました。そして、のちに通遼の民族大学の通信教育を受け、1988年に大学の本科を卒業した証書を手にいれました。私は通信教育を受けていたとき、宿題をすべて自分で書いて送って、卒業しました。私の西北民族大学卒業証書はいまもあります。私は大切に保存しています。学校設立60周年記念のとき、私にも通知が来ました。しかし、私は行くことができませんでした。行きたいと思いましたが、行けませんでした。

## 5. ルハム

### 紹介

ルハム氏は、シネヘンのブリヤート人である。とても優しい性格の持ち主で、その声はおだやかで、典型的なモンゴル人の母親であった。私たちが訪ねたとき、9歳の孫娘と2人でいた。「おお、どうしよう、お客さんが来ているのに、お茶とかありますか、孫よ」とあわてて起きて、乳茶をつくり、お菓子を出して私たちを歓待した。私たちがどこから何をしにきたのか、まだまったく話していないうちに、ルハム氏は客人をむかえる伝統的な習慣で私たちを歓待してくれた。私たちがインタビューするとき、彼女はエヴェンキ旗の中心、南屯にいる息子の家で、2人の孫と一緒に住んでいると言っていた。

2010年8月17日の午前中に初回のインタビューをした。インタビュアーは小長谷有紀、サラングレル、ソヨルマほか。

### 生活史から

**Q:** では、あなたは私たちに簡単な履歴を話してくださいますか？自分の故郷、幼少時のおもしろいこと、姓、兄弟親戚、仕事などすべてを話してくださいますか？

**L:** 私の名前はルハムと言います。未年生まれで、今年80歳になりました。ボーハイ・ホアサイ姓です。1931年に生まれたものです。私の父の名前はセデヴ（ツェデヴ）と言います。私が13歳のとき、父は亡くなりました。私の母はバルジドという名前の人でした。亥年生まれの人でした。セデヴ、バルジドというのは私を産んだ母の両親でした。本当のことを言うと、私は母方の祖父母の手によって育てられたのです。私には4人の兄がいました。いまは皆いません。4人の兄というのは、私を産んだ母の弟たちでした。私の生母はセレンドゥルマと言います。私は幼いとき、両親が離婚したので、母の両親に養子に出されて育てられたのです。私の父の名前はバトジャルガルと言います。私の生母は、離婚して別の人と結婚し、南のホーリングル、シリリングルに移動して行ってふたたび戻ってきませんでした。1945年に移動して行きました。母はそこで亡くなり、継父が戻ってきてシネヘンにいました。1人の養子をもっていました。彼も亡くなりました。私の父もほかの妻をもらい、1943年にシリリングルに移動して行きました。そしてのちに戻ってきて、シネヘンにいました。父は再婚して息子と娘2人をもちました。息子はいま70歳過ぎています。その妹は亡くなりました。息子は私を姉と観て、私たちは兄弟のように行き来しています。

私の父が生きているとき、私はつねに挨拶していました。私の父と結婚した継母はジュグデルという人で、ふつうの良い人でした。私は父を訪問するとき、泊まったりしていました。私を養子にして育ててくれた祖父母は、1,000頭のヒツジをもち、70～80頭のウシをもつ豊かな家でした。1945年、私は15歳で嫁にいきました。私の夫の名前はジ

ヤンチヴィーン・バドマと言います。ボドンゴード姓です。卯年で、1927年に生まれた人でした。私たち2人はこのシネヘン・ソムのフフ・オスンというところで結婚しました。1945年8月に日本が敗戦し、私はその年の11月に嫁に行ったわけです。義父はジャンチヴという人で、息子が10数歳のときに亡くなっていました。そして、私が嫁になったとき、義母は他の人と再婚していました。義母の名前はセジブです。義父の名前はジャムスと言います。私の夫は上に2人の姉がいて、その家の1人息子でした。私が嫁に行ったとき、嫁ぎ先の家には70～80頭のウシ、10～20のヒツジ、1頭の種オスの馬群がいました。1種オス馬群と言えば、10頭ほどのメスウマと1歳、2歳馬あわせて、およそ20頭のウマがいたと思います。そんな家でした。私は嫁に行ったとき、実家から1頭の乗用馬、1頭のメスウマ、20頭ほどのヒツジ、ヤギ、2頭の子連れのメスウシを嫁資としてもってきました。私の両親は1,000頭の家畜をもち裕福でしたが、私の4人の兄を結婚させ家畜をみなに分けあたえたので、私が嫁に行ったときは、それほど家畜はありませんでした。

私たち夫婦2人に10人の子どもが生まれました。5人は幼いときに亡くなりました。5人が残り、大きくなりました。そうして長男は車の事故で亡くなりました。また娘も1人、病気が治らず亡くなりました。いま、3人が元気に生きています。デンベレルというのは現在の長男です。家族でロシアに移住しました。かなり以前に行きました。行ってすでに20年になります。1991年の初めに行きました。息子のデンベレルは午年で、1954年に生まれました。いま50歳を越えています。彼の妹はバドマハンダと言います。丑年で1961年の生まれです。本当は子年で1960年12月に生まれた子ですよ。それをうしろにずらして丑年にしました。彼女の弟がバヤルです。戌年、1970年生まれで、今年ちょうど40歳です。私はいまバヤルの家で暮らしています。バヤルはソムの農業機械ステーションで働いています。私の嫁の名前はソノルと言います。亥年で1971年生まれです。いまは無職で家にいます。わがバヤルには男女2人の子どもがいて、息子は18歳、娘は今年9歳です。私はいま旗でこの2人の面倒を見ながら暮らしています。

私の夫バドマは、旗でホルショー [中国語で供銷社、物資供給組合のこと] に勤めていました。私の夫は日本時代に学校に行っていて、教養のある人でした。日本時代に、ハルビンの中高等学校を卒業して、戻って仕事をしていました。そして、私たちは結婚したわけです。

私の祖父母は1,000頭の家畜をもち裕福でしたが、4人の息子に配分し、5人の娘に分けあたえて、家畜が減ったので、裕福の部類には入りませんでした。文化大革命のとき、何もなかったです。富裕層や貴族と言われて迫害されることがありませんでした。ふつうに過ぎていきました。

私の嫁ぎ先の祖先たちは、ロシアのブリヤートのアガのウリレンゲ地方の人たちだったそうです。私の長男デンベレルは、祖先の地に行くと言って、ロシアに行って、いま

ウランウデに住んでいます。レストランを経営し、プリヤート・ボーズ〔肉饅頭〕を提供しています。私は2008年に行ってきました。デンベレルの妻は、ニマーというシネヘンのプリヤート人です。彼ら2人はここで結婚して子どもが大きくなってから、ロシアに行きました。いま、レストランを経営してうまくいっています。「プリヤート・ボーズ」は、ウランウデでたいへん人気があるそうです。わがシネヘンから行った多くの人たちがレストランを経営しています。プリヤート・ボーズをつくって、たいへん有名になっていると話していました。暮らしは豊かでよくやっています。

私は一生涯、牧民をしてきた者です。50年代に人民代表になり、ソムと旗の会議に参加していました。働き者だったからでしょうか、人民代表になっていました。ソロン旗の祝賀行事になり、人民代表を舞台に立たせると言われました。当時、私は20歳だったか、21歳だったか、それくらいでした。舞台に出るといのでとても恥ずかしかったことは忘れられません。



## 6. レグジマ

### 紹介

レグジマ氏はフルンボイル市エヴェンキ旗シネヘンのブリヤート人である。幼少時に戦争を経験したと話していた。彼女は1947年にリンチンドルジの反乱に巻き込まれて故郷から移動し、両親からはぐれ、苦難を経験したブリヤート人たちの1人である。レグジマ氏はブリヤート人たちの3度にわたるホーリングルへの移動に参加した1人でもある。そのため、彼女の生活史は物語のようなものであった。

2010年の8月15日にフルンボイル市エヴェンキ旗の中心、南屯にある本人の家で初回のインタビューをし、翌16日にふたたびインタビューをした。2013年7月15日に3回目のインタビューをした。インタビュアーは、サランゲレル、ソヨルマ、小長谷有紀。

**Q:** あなたはご自分の姓、ご両親、兄弟親戚、故郷、幼少時の暮らしの状況について私たちに話していただけますか？

**L:** 私はウフォーレイ姓で、1932年5月1日に生まれたものです。両親は北のロシアのオノン川に住んでいたそうです。でも私はここに来てから生まれました。私の父の名前はデムチグスレンと言い、卯年の人でした。母の名前はダリマと言い、午年の人で、母は父より3つ下でした。私には1人の弟がいて、私たち2人はともに養子です。弟の名前はナムスライと言い、すでに亡くなりました。ナムスライの子どもからも2人はなくなっています。いま、3人の息子と1人の娘がいます。

私は幼いころ、母がウシを搾乳するときに子ウシをひっぱってあげていました。当時、わが家には、20頭程度を搾乳していたことを思うと、そうとう裕福な家でした。60~70頭ほどのウシがいました。移動するとき牛車で移動します。200頭ほどのヒツジがいました。私のおじさん（母方の弟）一家と一緒に暮らしていました。2軒の家のウマを合わせると、2頭の種オスの群れでした。およそ30、40頭の馬があったでしょうか。

私は12歳で小学校に入って勉強し、1945年の春、14歳で学校をやめました。どうして学校をやめたかというと、私はもともと南屯にあった日本の学校に行っていました。当時はソロン右翼、ソロン左翼、ウールド、ブリヤートを統合してソロン旗と言っていました。この旗にブリヤート人がたくさんいました。私は14歳で学校をやめ、家に帰って家畜を放牧しました。19歳で嫁に行きました。この間、物語のような生活を経験しました。私は14歳のとき、両親と一緒に家畜を連れて興安嶺に移動し、ホーリングルにたどり着きました。ホーリングルについたとき、状況が変わり、日本が敗戦したので、私たちはブドゥーン・リンチンを追いかけてさらに向こうへ行きました。ブドゥーン・リンチンは一部の世帯を連れて、とっくに移動し、シリングルのボドンギーン [モドンガギーンとも]・シルに着いていました。そこに行ったブリヤート人たちはとても良いと聞いて

ていました。当時は幼かったので、何がわかりますか、何もわかりません。ただ両親について、彼らの行くところならどこへでも行くだけです。

私たちはシネヘンからホーリングルに行く途中、60～70の世帯が移動したと思います。幼いながらも、初めはホーリングルの牧草地在いらしいと思って行ったものです。私たちより先に40年代の初めに、数世帯が移動し、ホーリングルに到着して放牧していました。当時の有名な人たち、有力者たち、たとえばガルマリン・ウルジンリーダーとした10数軒の家が移動していたそうです。彼のあとからまた多くの世帯が移動してきて住んでいたと思います。彼らの牧地の様子を見るために行った人が戻ってきて、とても良い場所で家畜が増えて、移住して行った人たちはとても幸福に安住していると宣伝したため、多くの人びとが移住することになり、それでわが家も移動したそうです。しかし、わが家が移動して到着した3日目に、ソ連の赤軍が入ってきて、全家畜を奪って行きました。それで、私たちはすでにそこにいたホーリングルのプリアート人たちとブドゥーン・リンチンをたよって、ボドンギーン・シルにたどりつきました。ふたたびホーリングルからボドンギーン・シルまで数日間移動しました。当時、私は子どもでした。そのときの子どもたちは何も知りません。人の言に従って行くだけです。いまの子どもたちとは違います。いまの子どもたちは賢いですからね。

当時、私たちは家畜を失っていたので、ボドンギーン・シルに着いて、シリングルの人びとの家畜を放牧し、ちょっとした仕事をしてなんとか2年間暮らしていました。そうこうするうちに、もう1つ大きな騒動になりました。「八路軍が入ってきたよ」と言われるようになり、シリングルのボドンゴードの人びとは蒋介石の味方だったので八路軍と戦って抵抗しました。私たちはそれでその騒乱を避けて、そこからさらに向こうへ移動して行きました。ちょっとした家財道具を牛車に積んで、あわてて移動しました。私は移動する荷物を見張りながらウマに乗って牛車のうしろから進みました。母は荷車に乗って行きました。女たちは年寄りと幼い子どもたちを連れて荷車を追って行き、男たちは乗馬して家畜群を追い、別行動をしていました。そうこうするうちに、人びとが、ウマに乗っている人は牛車について行くなど言い出し、ウマに乗っていた私に家畜群のほうへ行けと言いました。それで、乗馬のまま父をさがしに行きました。行っているうちに父を見つけました。しかし、母とははぐれて2度と会えませんでした。1947年の春でした。私はようやく16歳でした。移動の道中は大騒乱になって、人畜が騒ぎ、殺しあいになり、逃げる者は逃げ、捕らえられる者は捕らえられたでしょう。私たちは一生懸命、先を急ぎ、夜になって人、畜、家、車を数えると、私の母がいません。私の母は荷車ごといません。生きているのか死んでいるのかを知るすべもありません。みな全員が命からがら逃げているのでだれに聞いてどこから母をさがすというのでしょうか。戻ってさがしたり、聞いたりすることもできません。さらにすすむという1つの道しかありません。ほかの方法がありません。それで、私は父と一緒に他の人たちと先を進み、数日

間移動して、張家口に着いて冬をすごし、ふたたびその先、陰山山脈に着いて、しばらく暮らしました。包頭の西のバヤンノール盟のウラド西，東，中の3旗を通過して、よその家で使用人になりながら生きていました。そこに3年いました。同行していた人びとはさらに西へ行きました。父が重い病にかかり、私はその先へ行けませんでした。バヤンノールのウラド旗は、陰山山脈の2つの岩山のあいだにありました。私はその家に行って家事手つだいをしながらなんとか暮らしました。のちに、トルガという家で使われていました。その家には30頭近くのヒツジ、10頭のヤギ、20頭程度のウシがありました。地元では比較的裕福な家でした。そこで使われて1年あまりしてから、あとからもう数軒のブリヤート人がやってきたという情報を聞きました。そして父が私に「おまえは、そのブリヤート人たちを見つけて、とにかく挨拶してこい」と言い、私を行かせました。私はもっていた唯一のウマに乗って、人びとをさがして挨拶してきました。さらに西へ逃げてから断続的に戻ってきて、お互いに頼りあっていた数軒の家でした。同じく故郷を離れ、病弱で苦しんでいる人びとは、互いを思い合い、互いに助け合うことだけを考えていたでしょう。彼らは私の状況を聞いて、私たちのところに来なさいと言っていました。困りはてていた私はとても暖かく思いました。そして戻って父と一緒にその数軒の家のところへ行くことにしました。私は使われていたトルガの家に理由を話し、同郷のブリヤート人たちのところへ行くと話しました。そして、私が行くとき、工賃として2頭のヤギと1頭のヒツジをくれました。トルガの隣家の娘と知り合って、とても仲良くしていました。そして、その家も私に1頭のヒツジをくれました。私は最初の日にトルガの家から1頭のウマを借りて、寝具などちょっとしたものを借りて、自分たちの唯一のウマに父をのせて、例のブリヤート人たちのところに来ました。翌日、トルガ家のウマを返し、例の2頭のヒツジと2頭のヤギを結んで連れて、丸一日かけて父のところに戻りました。そして、そこで10数日いるうちに、父が亡くなりました。父は「私が死んで1人娘を異郷に残すことになるのだね」とつねに心配していたので、とにかく私を同郷の人たちに会わせたいという思いを果たせたようです。そこに1人のブリヤート僧侶がいたので、お経を読んでもらい、父を無人の地に埋葬しました。他人の土地に明葬〔遺体を野ざらしにすること〕してはいけないと、ラマが言いました。父は重い病にかかっても治療を受けられなかったので、50数歳の若さで亡くなりました。私はそのとき18歳だったと思います。あの数軒のブリヤート人たちは、逃げ出した人たちが少しずつ戻ってきて、6～7軒になっていました。それらの家族のなかに、母方の親戚の家もいて、やはり向こうへ行って戻っていました。私はその家にいました。その家の奥さんは厳しい人でした。私をつねに他人扱いしていました。私は、母の養子だったため、母方の親戚の奥さんは「本当の血のつながりの親戚ではない」と厳しく接し、私をつねに叱っていました。彼女がそれほど厳しく接して他人扱いしていたので、その6～7軒の家々の年寄りたちは私をつねにかわいそうに思って、私のことを心配してくれていま

した。その数軒のブリアート人たちのなかに、母息子2人の家がありました。息子の名前はドルジです。ある日、例の年寄りたちが私を呼んで、あのドルジと結婚しなさいと勧めました。本当に私のために考えて助言していたのがそれです。当時、私は嫌でしたけれども、「おまえは両親のない独り身だ。あの親戚の家であれほど嫌われ、他人扱われて苦しむよりも、この子と結婚し、自分の家庭をもったほうがいいだろう」と言って、そのドルジと結婚させました。さあ、そして私は19歳で人の家の嫁になり、あの親子と一緒に暮らすようになりました。そうこうするうちに、ある日、あるブリアートのお年寄りが、陰山からベドゲル寺院におがみにいってそこで数人のブリアート人であって話してきたそうです。彼らの話から、思わず、母がシネヘンに生きて帰ったという情報を聞かせてくれました。母の情報を聞いて、いてもいられなくなるようになりました。母が活着していると知ってからというもの、どうしてふつうにいられましょう。いられるわけがない。すでに1951年になっていました。私はふるさとへ行きますと、家族に言いました。夫と義母も同意し、味方になってくれて、一緒にふるさとに帰ることになりました。そして、その足でバヤンノールにあった小さなほるゲルを人にあげて、身につけていた金の指輪で1頭の去勢ウシと交換しました。そしてもともとあった1頭の去勢ウシと合わせて2頭の去勢ウシと、1頭のメスウマをもちました。夫と義母と私の3人でシネヘンに帰る旅に出ました。2頭の去勢ウシを車につけて、ちょっとした家財道具や食べものなどを積みましたが、本当は積むほどのものもありませんでした。そして2人が牛車に乗り、1人がウマに乗って出発しました。3日かけて包頭市に着きました。そこからは列車に乗って5日かけてハイラルに来たのです。バヤンノールから包頭に行くとき、すでに妊娠していました。しかし、自分で気づいていませんでした。道中、牛車にゆられ、また飢えと凍え、疲労のせいか、出発して2日めにおなか痛くなり、出血し、流産しました。そのときは、薬もありません。道中、休むこともできません。それで、痛みと疲れに耐えるうちに、子どもを失いました。その後2度と子どもを産めませんでした。包頭に来て、2頭のウシと1頭のウマを売却し、そのお金でハイラル行きの列車の切符を買いました。そうして、ハイラルに帰ってくると、母が馬車でむかえにきてくれました。母も、父と私の2人の情報を知らず、長年、孤独に苦しんでいたのです。親戚から12歳の息子を養子にして2年たち、私が帰ってきたときには14歳になっていました。私は20歳のとき帰ってきて、母に会い、14歳になった大きな弟ができたのです。そしてシネヘンに戻り、母について家に行き、母と弟と暮らし、夫と義母と別れました。もともと仕方なく彼らと暮らしていたのです。道中、流産で私の身体もとても悪かったです。そして、別れてそれぞれの道をあゆむことになりました。その14歳の弟というのは、私の弟ナムスライのことです。

そして、私たち3人はおよそ6～7年間一緒にくらして、1957年に正月に母が亡くなりました。そして弟ナムスライと2人残されました。もともと母はシリングルからこち

らに戻るとき、家畜財産など何もなく、家人と離ればなれになり、シネヘンに帰ってきて、少し落ち着き、家畜といえば2頭のメスウシだけ持っていました。その2頭のメスウシが増えて、1957年には7頭のウシになっていました。また3頭のウマ、10頭のヒツジをもつようになっていました。母、弟ナムスライ、私たちは、人の服をつくったり、乳をしぼったり、家畜を放牧するなどの仕事をして、子ヒツジ、子ウシをもらって、かなりの家畜をもつようになりました。3人で働いていたため、かなりのものもちになっていました。母を亡くしてから、同じく1957年の末に、私はさらにバルジルという人と結婚しました。私はその家に弟ナムスライを連れて嫁ぎました。当時、私の身体はかなりよくなかったです。最初の子どもを流産し、病気になり、子宮に障害が残り、子どもを産めません。バルジルは、私が病弱で子どもを産めないことがまず気に入らず、弟を連れてきたことがまた気に入られません。いつも怒って喧嘩します。そして、この状況を改善する方法をさぐり、バルジルの親戚から1人の息子を養子にもらいました。1959年に1歳になった子を養子にむかえました。また、弟ナムスライを結婚させて、独立させました。それでもバルジルと私たち2人は合わなかったのです。1961年に仕方なく離婚しました。バルジルと離婚して、私は弟の家に戻っていました。弟は1959年に結婚し、もともと母と私たち3人が暮らしていたゲルに住んでいました。私がバルジルと離婚したもう1つの理由は、子宮に疾患があり、生理がとまらなくなっていました。当時、治療してもらえる方法ありません。それで、私は弟のところに行って、温泉で治療しました。私の胃腸もよくありませんでした。あまり食べられませんでした。それで実の兄のところに行って治療しました。のちに、寺院に行ってラマ僧に脈をとってもらい、薬を飲んで、15日で多少よくなりました。

私には実の両親から兄弟7人がいました。2人の兄、2人の姉がいて、いまはもうみな亡くなりました。下の3人のうち、もっとも上が私です。2人の妹がいます。1人はシヴェー・ガツァーで牧民になっています。もう1人はシネヘン西・ソムで牧民になっています。私の病気が重いとき、実の兄が生きていました。バルジルと離婚して、およそ5年間あちこちに行って病気をしっかりなおそうとしましたが、それほどよくなりませんでした。そして1966年にゲンデンジャムスというラマ僧と結婚しました。私は子宮に疾患があり子どもを産めないで、結婚して半年たって、ゲンデンジャムスの親戚からウルジーバトを養子にむかえました。そして息子と3人で1967年に北京に行き、手術をし、子宮を切除しました。ちょうどそのとき、弟ナムスライに娘が生まれました。その娘はノロヴジンと言い、ちょうど1967年1月15日に生まれました。そして私は、1歳をすぎたとき、1968年に弟から娘ノロヴジンを養子にむかえました。1966年に結婚し、ウルジーバトを養子にむかえて3人で北京に行き、私は病院に5カ月入院し、病気をなおすために手術を受けました。当時、夫は病気をなおしてもらうことが何より大事だと言って1頭のウマを1000円で売って、それをもって北京に行ったわけです。北京で私た

ち息子と3人で食べて飲んで5カ月住んで800元使って、病気を直しました。そして残った200円でたくさんものを買って帰りました。当時のお金は本当に値うちがありました。当時、1台の馬車の牛糞や乾草を売って、10数元をもらって、そのお金で穀類、小麦粉などさまざまなものを買って帰っていました。1袋の小麦粉は5円で、のちに値上がりして8元になりました。物価は安かったのですよ。お金の価値がある時代でした。いまは本当に5元などお金ではなくなってしまったのですよ。

私の夫ゲンデンジャムスの故郷は、ウイドヘン・ガツァーです。ウイドヘンという川の名で地域を名づけました。北側にわき水があります。息子ウルジーバトを夫の親戚から養子としてもらいました。ほんとうに幼いときに養子にむかえました。

私の養母は仕事に厳しくしっかりしていて、よく叱る人でした。また裁縫が得意で、私は母から裁縫を教えてもらいました。下手に縫うと、母は私をたたきます。それで私は母を恐れて裁縫が丁寧にできるように学びました。母はしっかりしていた人です。父はおだやかな善良な牧民でした。本当に、故郷に帰ってくるができなかったのは、なんとも残念です。

私の母は、例の1947年の秋、向こうへ移動する道中、八路軍に追いつかれて、人びとの一部は連れ戻され、その後シネヘンまで連れ戻されました。それらの連れ戻された人びとと一緒に母は帰ってきて、父と私は先へ逃げ出ていきました。そして、迷い込み、互いに見つからなくなり、父は異郷で亡くなりました。母は私たちがどうしているか、死んだのか、生きているのかさえ、まったくわからず、情報を聞ける人もおらず、家族と子どもから突然そのように離れて1人になり、人影をみつめて何らか情報があるかと待ちながら暮らしていました。両親とは最後まで会うことがありませんでした。

**Q:** バヤンノールのウラド中旗にいた数軒の家はその後どうしたのかご存知ですか？地元にもどれましたか？

**L:** ウラド中旗にいた6～7軒の家族はのちにみなシネヘンに戻ってきました。彼らのなかにボーライン・ボドという年寄りがいました。彼は戻ってきてまもなく亡くなりました。ウルジーン・ジャルサライという家がありました。ボルという家がありました。センベル、ルンバニというのがいました。私たちはみな故郷に戻ることができました。ただ、帰郷後には、あまり連絡しあわなくなったので、彼らの子どもはいますが、まったくわからなくなりました。彼らがどういう情報でシネヘンに戻ってきたのかも、興味深いはずですが。シネヘンに戻ってきたことだけを知っていますけれども、どうやって戻って来たか知りません。詳しく聞きませんでした。戻って困窮していた人びとは、あちこちなんとか生計をたて、大いに汗をながして働いて、たちなおりました。そのため、私たちはお互いのことを探したり、聞いたりできずにいました。

**Q:** あなたのご主人はラマ僧だったのですが、いまもラマ僧ですか？

**L:** そうです。私の夫は小さいころからラマ僧になり、寺院で経典を勉強していました。

そして文化大革命になり、ラマ僧たちを解散させ、還俗させ、家に戻ってきて結婚もせずになりました。私たちが知り合って結婚したとき、彼は40歳まえでした。38歳でした。知り合ってから、私は経験したことを話し、病気のことすべて話しましたよ。夫は私に持病があることを知り、「大丈夫、私たちは治療しましょう」と言いました。そして私たち2人は結婚し、彼の親戚から養子をもらったのが、それです。私たちは結婚して2人の子どもをもらいました。娘のノルジンは弟ナムスライからもらいました。ノルジンは未成年で今年42歳、1967年生まれです。もともと田舎で家畜を放牧していました。夫が死んでからハイラルにやってきて生地を売って裁縫をしています。ノルジンの兄のウルジーバトは卯年で現在48歳です。わが息子は、バータリン・バトムフという人から日給50円で雇われ、材木を伐採してあげて逮捕され、罪人として5年の計が言い渡され、刑務所に入りました。そして、私たちは人に頼んで、4～5万円をわたして2年減刑してもらいました。そして、3年収監された末、出てきました。妻はセンペルマと言います。ウルジーバトが帰ってきたとき、妻は家に入れてくれなかったので、いまはあちこち行って人の家の仕事を手伝っています。妻には3人の子どもがいて、家畜が少ないので、他人の家の家畜を放牧しています。当初、息子のウルジーバトが結婚するとき、家財として7頭のウマ、およそ30頭のウシ、50頭前後のヒツジをあたえて独立させてやりました。そして3人の子どもにめぐまれた良い家庭でした。長女ツェンゲル、丑年で26歳、盟の芸術学校を卒業しました。2番めの息子は卯年で24歳、末っ子は巳年で22歳。長男は結婚しました。娘と次男が母親と一緒に田舎にいます。

私の夫ゲンデンジャムスはラマ僧です。今年83歳です。辰年です。1928年に生まれ、ボドンゴード姓の人です。シネヘン・ソムの北部のアムジというところで生まれたそうです。父はラドナジャヴという人でした。いま生きていれば100歳を越えています。母の名前はセムジドで、ハルガナ姓で、卯年の人でした。母は94歳で亡くなりました。

私たちシネヘンのブリヤートについてジャムスが本を執筆しているといううわさがありました。ジャムスはとても教養のある人です。あなたたちは行って挨拶し、聞いてみませんか。ジャムスの妻のドウルマは裕福な家の娘でした。ドウルマは実の両親から兄弟が多く、それで幼いころ、バルホジンという裕福な家に出向いて、「私はあなたたちの娘になります」と言って娘になったという話があります。ジャムスの妻ドウルマは、性格がよく、たくさんのことを知っている良い人です。聞けばたくさん教えてくれます。

## 習慣について

Q: オボー祭りに参加しますか? オボーについて話していただけますか?

L: 私は寺院の行事やオボーの祭りには行きます。ほかの祭りには参加しません。シネヘンの寺院の行事に行くと、進物を捧げておがみます。寺院にはモンゴル医がいました。寺院のラマ医は高い技術をもっていました。シネヘン寺は昔からありました。ブリヤ-

ト人たちが北のほうから移住してきたとき、ラマ僧がふくまれていました。それでもなく、シネヘンの寺院を建て、私の夫がラマ僧になっていたときはおよそ300人のラマ僧がいたそうです。のちに文化大革命になり、寺院が壊され、ラマ僧を追い出しました。ラマ僧たちは牛鬼蛇神とされて迫害され、逮捕されていました。時代がよくなってから、1985年の秋に、シネヘン寺を再興し、法会をもよおしました。

オボーをまつる祭りで、競馬をし、人びとを驚嘆させます。また16人の力士が相撲をとります。そして、表彰し、たいへんなお祭り騒ぎになります。ブリヤートにも火をまつる習慣があります。しかし、火をまつる家はまつりますが、まつらない家はまつりません。わが家では火をまつりません、まったく火をまつる習慣はありません。私は衣服を上手に縫います。小さいときに母から教わりました。ブリヤート婦人服、帽子をすべて縫います。



## 7. マンジルマ

### 紹介

女性。子年，1936年生まれで，最初のインタビューのとき75歳であった。陳バルガ旗（いまの新バルガ西旗）の正黄ソムの出身。ゴシド姓である。ブリアート人と結婚し，ブリアートの嫁になった。

2010年5月27日に北京でインタビューし，7月29日にフルンボイルのエヴェンキ旗の中心，南屯でふたたびインタビューした。2013年7月15日に3度目のインタビューをし，以前にインタビューした内容で欠けていた部分を聞いて，確認した。インタビュアーは，サランゲレル，ソヨルマ，小長谷有紀。

### 生活史から

Q: あなたの自分の祖先，両親，兄弟親戚から，自分の幼少時，おおよそ一生の生活の状況について話していただけますか？

M: 私の幼名は「モーヤマー（悪いヤギ）」でした。かなり大きくなるまでこの名前を使っていました。当時，わが家のヒツジを放牧していた1人の年寄りがいました。その人は，私のことをとてもかわいがってくれていました。そして数年間，わが家でヒツジを放牧してから，実家に戻るとき，「わが娘にこんな醜い名前をもたせてはいけませんよ」と，ラマ僧を尋ね，私に名前を請うてきたそうです。ラマ僧のくれた名前がマンジルマという名前です。それから私はこのマンジルマという名前を使うようになりました。私は子年です。1936年に生まれ，今年75歳（2010年現在）で，陳バルガ旗（現在の新バルガ西旗）の正黄ソムの出身，ゴシド姓です。私の父はマグサルといいます。寅年の人でした。1914年生まれです。私の祖父はドガルジャヴィーン・ビャンバという人でした。父が17歳のとき，王爺廟に行き，軍官学校で3年間勉強したと話していました。母の名はセイです。同じく寅年の人でした。私たちは両親から4人兄弟が生まれました。私は長女です。私の妹はジャヴズマという未年の私より7歳下の人で，1943年生まれのはずです。彼女の下の子をウランフーヘンといい，酉年で，1945年生まれです。その下の子はジャルガルと言い，辰年でした。1952年生まれかな。こんな4人の子どもです。2人の男の子が生まれて亡くなりました。1人の息子を養子にもらいました。名前はダシツェレンです。辰年の人でした。今年（2010年）亡くなったばかりです。

私の母に1人だけ兄がいました。そのおじは，名前をシャギニーというラマ僧でした。ほかには兄弟がありませんでした。一方，父には兄弟が大勢いました。一番大きいのは，ネヒートという姉です。その下にドマという男で，亥年で，モンゴル文字を知りませんが，ロシア文字をわかる人でした。運転手になり，あちこちいろいろなところへ行っているうちにロシア人たちと関係があった，ということです。それで，ロシア文字を覚え

たと思います。その弟はジャンバといい、またもラマ僧になっていました。その次の3人の息子は養子に出していました。3人のおじたちの名前は、タワー、ドルジ、ペレンレイといいます。何年だったのか知りません。養子に出したあの3人のおじの子どもたちはみな健在です。みな私と同年代です。父は日本の騎兵軍の長官をしていました。マグサル少尉と呼ばれていました。どれほどの地位の長官だったのか、私にもわかりません。ノモンハンの戦争で、軍の指揮官（少尉）として参加していたそうです。当時、いまの人びとが中国語で話しているのと同様に、その時代の人々はみなロシア語を話していました。父は1945年に退役し、地元に戻ってきて、しばらくソム長を務めていました。私の祖父もソムのザンギだったそうです。ドマおじはたいへん手の器用な人で、鍛冶屋でした。ロシア語をよく知っていました。ロシア人と商売する人でした。当時、グライノール湖のほとりて家屋を建て、魚をとり、他の人のウマに蹄鉄をつける仕事をしていました。と同時に、家畜用の草刈りをし、要領のよい、賢い人でした。そして、相当の家畜をもっていた裕福な家になっていました。私の父は、日本語、モンゴル語、中国語を知る教養の高い人でした。私も小さいとき日本学校に通っていました。しかし、たった2年間通っていました。当時、私は7歳でした。1951年に私はハイラルの第1中学校に入学し、勉強していました。当時、ハイラルの人口は少なく、通学するとき、私たち以外にあまり人をみかけませんでした。その学校の学生たちはブリアート、バルガ、ダグールなどの子どもたちでした。ハイラル市は、いまのようなものではなく、たいへん静かで人が少なかったのです。

私の夫の名前は、シャルフです。養子です。もともとはブリアート人です。しかし、養子先の両親はバルガ人です。夫の養父（私の義父ですよ）の姓がなんだったのか、よくわかりません。聞いたこともありません。これまで。西旗〔新バルガ右旗〕屈指の裕福な家だったそうです。この家に北のロシアから2人の子どもをつれたある女性がやってきて、ヒツジの放牧を手伝っていたそうです。私の夫は、その女性から1937年に生まれたそうです。私の夫は私より1つ年下でした。実の父はロシアへ追放されたと言われていました。はっきりはわかりません。私の夫は、母の胎内にあって移住して来たのかどうかわかりません。またほかのうわさもあります。夫の実母の名前はニマーという人でした。たいへん長生きしました。91歳になって亡くなりました。夫の姉がいまも健在です。今年、87歳です。子年で、名前はトンタルです。兄はアヨルザナという人がいました。何年だったかわかりません。すでに亡くなりました。弟はルハムスレンで、午年です。私の夫の養父の名前は、ボルフーといい、非常に裕福な家でした。私の義父の家は非常に裕福でした。私の義父は亡くなる時、日食になり、白昼、暗くなったそうです。1936年5月1日に義父のボルフーが亡くなったそうです。その年、義父のヒツジの群れは増えて、2万頭に達していました。義父が生きていたときには、夫をまだ養子にしていなかった。まだ生まれておらず、母のおなかのなかにいたそうです。義父の

体調が悪くなり、みずからの死期を悟っていました。家人に、これらの家畜はおまえたちには多すぎると言って、500頭ずつ分けて寺院に寄進しました。五台山にはおよそ2000頭を寄進したそうです。金銭をおおよそ分けて、あたえていました。たいへんな金持ちだったので精密に計算することはありませんでした。家畜を各寺院に寄進し、最後に家人に9000頭のヒツジをのこしました。当時、家には4人いたようです。義父母には、ツェヴェン（セベン）という息子がいました。その息子は少々頭の弱い子だったそうです。そのように家畜財産を寄進して分け、数を少なくしてから義父が亡くなる時、妻に「あなたは、私がか畜を使つたと怒っていますか？私たちを空っぽにしたと思つてないでしょうね？9000頭あれば十分です」と言つたそうです。そのとき、私の義母は「そんなこと思つていません。どうしてそんなこと思つてでしょうか。1年以内に息子を見つけてあなたの名義で養子にします。家畜を管理させて、家系をつづけます」と言つたそうです。そして、1人の優れた占い師のところに行き、占つてもらつた結果、その占い師が「あなたの家系の運命の息子を、北から来たある女性が産んでくれる。7歳まで結婚式には参加させるな。人に見せることは避けよ。あなたのような多くの人を使つている裕福な人の親戚ではない。ほかのことは避けなくてもいい」と言つてくれたそうです。北のロシアから2人の子どもを連れたブリヤート人がやつてきて、ヒツジの放牧を手伝つてたつて言ひました。その女性が翌年の1月8日に出産し、男の子を産みました。それが私の夫ですよ。つまり、1937年の1月8日に生まれたそうです。そして、例の占い師に言われたとおりに、私の夫を義父の名義で養子にむかえ、ボルファー・シャルファー「[[褐色の子]」の息子「黄色の子」という名前をつけて、家系を継承してもらうようになりました。義父は前年の5月1日に亡くなり、翌年の1月8日に生まれたそうです。夫の生まれた日に、義母（ボルファーの妻、夫の養母）は、金のシャガイ〔ヒツジの踝骨〕を宿営地から拾つた夢を見たそうです。そして、この子はわがボーゴン〔家系を継承するという意味〕の子だと、たいへん喜んだそうです。もともと占つてくれた人に聞いたそうです。すると、その占い師は「私はとつくに言つたでしょう。あなたたちのボーゴンの子を1人の女性が産んでくれる」と言つたそうです。そして、わが夫を育て、生母に大量の家畜をあげたそうです。わが夫の実父について、一部の人のうわさによると、わが夫はもとフルンボイル盟の長官をしていたドガルジャヴの息子と言われている。実際に、夫はドガルジャヴと少々似ていましたよ。ドガルジャヴ長官は、当時、義父のところに来て家庭教師であつたと言われている。彼らは教養ある良い人でした。ドガルジャヴ長官は今年ちょうど100歳になり、100歳の誕生日を祝い大きな祝賀会を開きました。私たちは行けませんでした。のちに、ドガルジャヴさんの妻が私と会つて「うちの主人の祝賀会にどうして来なかつたのですか？主人の年の福のお菓子を味見すべきでした」と入れ物をひっかきまわして私に飴をくれました。ドガルジャヴさんの妻は85歳で、小柄な白い老人です。

Q: あなた自身は何人の子どもがいますか？

L: いま私には6人の子どもがいます。もともと8人産みました。長女はトンガラク、酉年でした。弟はデルゲル、丑年でした。残念ながら、この2人の子がすでに亡くなりました。もういません。彼らの次の子がジャルガルです。戌年です。ジャルガルに娘がいて、ルハムスレンといい、いま、ロシアで教えています。その次の子が、ツァガンフー、卯年です。彼の娘がソドといい、いまフランスにいます。その次にアディヤという娘がいて、辰年です。アディヤの妹がソヨルマ、未年です。息子がハンガイという名前で、アメリカで学んでいます。娘はハナスといいいます。夫はトゥムルといい、私たちの婿としてここにいます。彼が私たちの面倒を見ています。ソヨルマの妹はツェツェグマといいいます。戌年です。弟はトゥゲメルという男の子がいて、子年です。その息子がイシドルジといい、娘がウーダムという名前です。トゥゲメルの妻はサロールといい、うちの嫁です。

私は小学校に通っていました。ハイラルの中学校から10年制を卒業して家に戻っていました。そして、1958年に結婚しました。当時、21歳でした。夫は学校を卒業するとき、学校のほうから直接、上の学校に進級させようとしていたのですよ。しかし、夫は「広い草原に戻って、ウマとり竿をにぎる牧民になるぞ、私は」と言って、学校には行きませんでした。夫を当時、ジャラン屯の獣医学校に進級させようとしていました。けれども行きませんでした。当時、ちょうど集団化が開始され、家畜財産を配分しはじめました。夫の母は1人になっていたので、仕方がありませんでした。しかし、夫はのちに就職し、道路交通局に10数年務め、仕事を仕切っていました。そのあとで人民代表大会常務委員会の主任を務めていました。

私が嫁に行ったとき、夫の家はたいへん裕福でした。結婚当時、私の義父母の家（嫁ぎ先）には50～60個の銀椀がありました。銀の塊もありました。階級を認定する運動がはじまったとき、これらのものをどうしたらいいかわかりません、隠す方法もありません、親戚や他人あるいは学校の子どもたちに少しずつ、1つ2つあげます。壊して音を出すこともできません。豊かで物持ちだと言われることを恐れます。掛け布団の絹のカバーなどを少しずつ切り裂いて人にあげます。反物のままあげると金持ちだと言われることに神経を使います。カワウソやテンの毛皮など高価なものも燃やして捨てました。もし、そうしなければ、金もちがものを隠したという罪になります。人がもらってくれなければ、水に流します。私は結婚するとき、金銀の装飾を何重にも身につけていました。10本の指に隙間なしに指輪をつけていました。当時、金の価格は9元でした。金はいまのように高価ではありませんでした。結婚したとき義母は60歳でした。そして私にチングレク〔移動用の車輪付きのタンス〕の銀の鍵を渡しました。金銀の装飾品がタンスいっぱいがありました。文化大革命のさなか、「牧主」と批判されました。またそのうえ夫は有能な人でしたので、ハルハの歌を聴いて、歌詞と楽譜をメモして歌っていまし

た。そんなことをしていると人びとは、こいつの思想はまちがっている、ハルハの歌を歌っている、ひょっとするとハルハのスパイかもしれない、と強く迫害しました。当時、私たちは財産金銀を守るどころか、どうやって命を守るかと、おそれていました。家畜財産について質問されたとき、祖母は、子どもたちを面倒なことに巻き込まれないようにと考え、すべてを自分の身に振り向け、「家畜財産はすべて私が管理している。息子と嫁は知りません」と主張していました。実際には全家畜財産の管理は私たちがしていました。義母はまったく関知せず、家計のことはあなたたち2人自分で決めなさいと言っていました。しかし、罪に陥れられることを避けるために、身体を張るような、そんな優しい心をもつ人でした。夫も母を本当に尊敬する人です。夫は多少酒を飲んだりしていました。1度、少々酒を飲んだあと、母が「わが息子よ、酒などのんでどうするのか。母に心配をかけて」と言いました。夫は母に向かって「そうですか。お母さんがそんなに心配するなら、私は今後心配かけません」と言いました。本当にそれ以降、義母が生きているあいだ、夫は2度と酒を飲みませんでした。夫はそのようにたへん聡明な人でした。母親のことをたいへん敬愛します。夫の養母の名前は、デンセマと言います。デンセマの姪にツェレンドルマという人がいました。わが夫と小さいときから一緒に育った人です。書記をしていました。いま60歳過ぎです。夫が亡くなってから4年あまりたちました。2006年か2005年に亡くなりました。ようやく70歳になっていました。生きていてもおかしくありません。

夫の実母はニマーという名前の人でした。息子と娘を連れて北から来たそうです。その娘は、夫の姉ですよ。名前はトンタルといい、今年87歳のブリヤート人です。トンタルの娘はセヴジドといい、セヴジドの娘はトヤーという名でいま北京にいます。仕事は、ハルハ [モンゴル国] と商売しています。セヴジドの夫はガイヒと言います。ガイヒは、アルバジン先生の妻の弟です。セヴジドの妹セヴジドマはシネヘン西ソムの婦女保健センターに勤めています。もう1人の妹がドガルマといい、フルンボイル盟病院のモンゴル医の看護師です。いまいるのがこの3人の子供です。(トンタルの) 息子はダシバルダンと言います。ロシアに行っていました。ロシアの軍の司令官でした。かなり出世していました。ちょうど文化大革命のとき、こちらにきて、母を連れていこうとしましたが、スパイとうたがわれ、逮捕されました。そして数年間、刑務所でいたぶられ、文化大革命後に刑務所から出てシネヘンに来て暮らしました。のちに、嫁をもらい、2人の息子をさずかりました。長男がバヤル、次男はバヤサフラン。バヤルはロシアに行きました。そこである裕福な家の家畜を放牧しているそうです。バヤサフランは母と一緒にこちらにいます。母の名はブデトです。ダシバルダンは50歳前後で亡くなりました。彼はこちらに来るまえにロシアにも妻子がいました。残念ながら北へ帰れませんでした。ここでたいへんな苦しみを味わいながら、亡くなりました。文化大革命というのは本当にたいへんでした。無実の人をつかまえてこのようにいたぶりましたよ。私は彼らと親

しくしています。私が体調をくずしたとき、ドガルマが来て薬を出してくれます。トンタル姉さんはおよそ10数歳のとき母について来たようです。当時、弟の面倒をみていたのだから、けっこう大きかったと思います。トンタル姉さんにアユルザナという弟がいました。いまはいません。アユルザナ兄さんは、よそから2人の息子を養子にむかえました。その2人の養子も現在いません。父より先に亡くなりました。プレヴとはルハムサンルハムサンの弟です。アユルザナ、シャルフシャルフ、ルハムサン、プレヴの4人は、1人の母の異父兄弟でしたよ。アユルザナは自分の弟のブルブから2人の息子をもりました。ブルブにはさらにバター、ダンダルという2人の息子がいました。ブルブの4人の息子がいままな亡くなりました。2人の息子の嫁がいました。バトの妻に2人の娘がいて、ダンダルの妻に2人の息子がいます。

夫の生母ニマー婆さんは、のちにバハン・ドルジという人と結婚し、ラムサンという息子が生まれました。夫の異父兄弟にあたります。夫の母がロシアからこちらに来たとき、トンタル姉さんの下の、おくるみしていた赤ん坊をロシアに残してきていました。のちに捜して見つかりました。その娘には10人の子どもがいたそうです。それらの子どもたちはいまロシアのチタ市とウランウデ市にいます。ニマー婆さんはロシアからたぶん1934年か1935年に来たと思います。ロシアからこちらに来ていたとき、途中、とある場所で昼の休憩をしてきたとき、多くのプリアート人たちが殺されたと話していました。その場所の名前をいま私は知りません。忘れしました。

私の父には2人の妻がいました。私の母は正妻でした。下の妻はハリヨンという人でした。子どもを産みませんでした。私の妹ウラーンフーヘンウラーンフーヘンを養子にもりました。また私の弟ダシツェレンダシツェレンを養子にもりました。ニマー婆さんの姉の娘がいまも生きています。私たちと同世代の人です。彼女は、昨年、西の寺におがみに行った帰り道に立ち寄りました。名前は知りません。その息子がビャンバスレンビャンバスレンといいます。何何スレン何何スレンでしたっけ。子どもたちの名前はみなスレンがついています。子だくさんのお年寄りです。

私が小さいとき、子どものいないロシア人の年配の夫婦の家にいさせられていました。彼らはロシアへ戻るとき、私を連れていこうとしましたが、私は行きませんでした。私はそのころ、日常会話をロシア語ですべてわかるようになっていました。その2人の高齢者とロシア語で会話できていました。いまはまったく忘れしました。

私の義父が一時かなり酒を飲むようになっていた、と義母が話していました。家に客が来ると、母に「あなたのお茶が出るまえに、私が酒を出しておきましょう」と言って、酒を注いでいました。のちに、義父が自分で酒をまったく飲まなくなりました。酒をやめるとき母親に次のように話したそうです。「私は名誉のある人でありながら、なぜこんなに酒におぼれるのだろう。お母さん、あなたは私を酒で育てませんでしたよね」と言って、酒をきっぱりやめたそうです。それからまったく酒を飲まなかったそうです。

私の義父ボルフーは、もともと何もない貧乏な家の息子だったそうです。当時、義父が9歳のとき、西旗からハイラルに来て商売をする人につきしたがって、歩きながら川をわたるとき、その人たちの車の軸にしがみついて、川をわたり、彼らについて、彼らが車につけていないラクダの面倒をみてやり、その代わりにたくさん菓子、飴をもらい、それらを田舎にもってかえって、菓子を欠いている家にもって行って少しの報酬か毛皮をもらっていたそうです。もらった毛皮あるいは少しのお金で、ふたたびハイラルに行く人について行き、川をわたるとき、人の車の軸にしがみついて渡り、ハイラルに着くと毛皮を売り、そのお金で田舎の人びとが必要とするブラシ、糸と針、菓子などを買って、田舎にまた持ち帰り、自分でこのように少しばかり商売しながら、生きていたそうです。義父は当時、たった9歳だったそうです。9歳からこのように商売し、自分の両手で働き、金持ちになった人だそうです。義父はまた努力家で聡明で、ものごとを緻密に考える賢い人でした。ヒツジの毛を刈るときに、ヒツジの足をしばらずに迅速に毛を刈ることができていたそうです。それに周りの人びとは感服していたそうです。商売が少しずつ大きくなり、のちにロシアやハルハと頻繁に商売するようになりました。このようにみずからの力と汗で豊かになってきた人です。何1つも祖先から家畜財産の基礎がなかったそうです。そして、最後には2万頭の家畜をもつ、屈指の金持ちになったそうです。義父は生きていたとき、2万頭のヒツジを10数世帯に分けて放牧させていたそうです。そして、ちょうど出産期にこの10数家族を転々と歩き回り、各家族で一泊し、泊まった夜に生まれたヒツジをその家の分としてのこし、それ以外は自分のものにして、さらに先を行きました。ヒツジをまとめて一緒におかないそうです。1人の姉がいました。その姉は離婚して戻っていません。その姉もたいへん聡明な人だったそうです。義父が小さいとき、当時のある金持ちの家にはいたそうです。その家は貧乏になったのか、ほかに何があったのかわかりませんが、とにかくその家の弓の形の焼き印を自分の家畜につけたそうです。私の義父の家畜には、弓の形の焼き印がありました。その金持ちの家を離れるとき、そのヒツジの寝床から、ヒツジの糞を一握り持ち帰り、その糞をまつたそうです。だから家畜が増えたのじゃないかしら？義父はのちに北京、五台などをまわって商売もやっていたそうです。そして北京、五台の寺院に寄進した物資、家畜、財産、金銭、あちこちに支援したり貸したりした金額をすべて記録していました。ボルフーの帳簿という紺色の表紙のノートが家にありました。中に家畜、財産を記録していたでしょうね。文化大革命のとき、義母はわが息子に害になることを恐れて、紺色の帳面を燃やして捨てました。いま思うと本当にもったいなく思います。あのノートがあったらなあと思うのですけれど。

うちには金銀財宝がたくさんありました。家にはものが数えきれないほどたくさんありました。当時、銀椀だけでも50~60個ありました。革命がやってきたとき、それらをどうすれば良いのかわからず、学校の子どもたちにあげていました。絹の生地を小分け

して人びとにあげていました。絹や錦などさまざま財宝を桶に入れて川にもって行って流していました。そうしなければ、金持ちの財産は多いと言われて、罪がさらに重くなると恐れていました。その時代というのは恐ろしかったです。義母は私たちのことをたいへん心配し、これらのモノがわが息子に災難をもたらすと、ものを捨てることを惜しみませんでした。私は爪ほどの大きさの金を隠しました。それを隠す場所が見つからず、たいへん困っていました。見つかったら、本当にたいへんなことになりますよ。それでもなんとか隠しきりました。時代が落ち着き、80年代の初めごろだと思います。その金を出して、夫に、ハイラルの銀行にもって行って換金してきて、と言いました。夫は金を隠しもっていたと言われることを恐れて換金しませんでした。

当時、わが家には家畜財産が豊富にあったので、貧しい人たちによくあげていました。義母が非常に優しい人で、貧しい人びとをよく助けていました。私たちも貧しい人たちにたくさんものをあげていました。文化大革命になったとき、裕福な人は悪者扱いされましたよ。当時、私たちを批判したとき「良い金持ちというのはいてもいいですか？ いてもいいなら、この家は良い金持ちでしたよ」と言っていたそうです。

私の実家は、それほど裕福ではありません。私の両親の家はふつうにくらせる家でした。またロシアと多少商売していました。父は軍の司令官でした。

## 習慣について

Q: あなたは金持ちの家に嫁いだとき、盛大な結婚式をしましたか？ 結婚式に着いて話してくれませんか？

M: 昔の習慣どおりしました。この習慣は複雑です。話すと長くなります。あなたがた、飽きませんか？



## 8. ナムスライ

### 紹介

ナムスライ氏は、高齢にもかかわらず聡明で、多くの情報をもっている人であった。私たちは2013年7月15日に初めてインタビューし、2013年7月16日に再度インタビューをした。インタビュアーは、サランゲレル、ソヨルマ、小長谷有紀。

### 生活史から

Q: あなたのご自分の経歴から、幼少期をどのようにすごしていたかについて話してくださいませんか？

N: 私の名前はナムスライです。ガルゾード姓です。1922年に生まれ、今年88歳です。私は85歳になったとき、子どもたちが年祝いをしてくれました。シネヘン生まれで、中くらの暮らしの牧民の家に生まれました。わが家は10～20頭くらいのウシと、40～50頭のヒツジと、7～8頭のウマをもつ、そんな家でした。裕福な家だと、1,000頭、2,000頭の家畜をもち、数百頭のウマをもつ家もありました。一方、家畜をもたない貧しい家もありました。私の生まれた場所は、シネヘン・ソムのこちら側です。私は一人っ子でした。当時はみなモンゴル・ゲルで移動していました。妻の名前はドガルマです。私たちは子どものころからの知り合いです。私たちの家は近く、3～4 kmほどの距離でした。そして私たちは1953年に結婚しました。

Q: 結婚するまえのことを話していただけませんか？学校に行きましたか？

N: 1933年にわがシネヘン・ブリヤートには小学校が設立されました。地元の有識者、民衆が設立しました。当時、この地域には日本が来ていました。私たちはモンゴル・ゲルのなかで授業を受けていました。1軒のゲルのなかに多くの子どもがいました。家からウマに乗って来ていました。朝、8～9時ごろに来て午後2～3ときに授業が終わって、ウマに乗って帰っていました。モンゴル文字、算数、日本語を教えていました。日本人の先生が、モンゴル・ゲルで日本語を教えていました。「あ、い、う、え、お」から教えて、モンゴル語だと「ア、エ、イ」から教えて、勉強しました。算数は1、2からはじめて、四則演算などを学習しました。当時、私たちには4年生までのみ教えていました。私は8歳のとき入学しました。日本語を勉強していました。「イヌ、ノホイ [モンゴル語で犬の意]」「ウシ、ウヘル [モンゴル語で牛の意]」「ウマ、モリ [モンゴル語で馬の意]」を忘れられません。私の妻も日本語を勉強しました。5～6年生まで勉強しました。そのとき、教室に肖像などはかけていませんでした。ただのモンゴル・ゲルでした。

Q: 当時、小学校に教科書はありましたか？

N: 「さいた、さいた、サクラがさいた」という小さな本があり、上に旗（はた）がついていました。

Q: それなら、日本で使っていた教科書と同じです。学校を卒業してどうしましたか？

N: 小学校を卒業して、数年間家にいました。家にいたと言っても、また中学校でも勉強しました。そうこうするうちに、1945年になりました。私はそして1945年にウランバートルに行きました。私たちはみずから望んで大勢で行きました。私たちを国から中等専門学校で勉強させました。私たちを国民党側から送りました。そこで私は財政学院で3～4年勉強しました。經理の専門を勉強しました。学校を卒業して2年あまりそちらの牧畜省で經理の仕事をしました。当時、ウランバートルで勉強した人たちは必ず、そこで2年働く義務があったので、2年働きました。そして、一人息子なので、実家がどうなっているのかわからず、年をとった両親がいるのでどうしても帰りたいと願い出て、1952年に戻ってきました。戻ってきて、旗政府の牧畜局で働きました。フフホトでもいっとき短期的な教師養成クラスで勉強しました。そしてそこで10カ月教えました。のちに、旗に戻ってきて、シネヘン・ソムのソム長の仕事をしました。そして、ソムではおよそ25年働きました。1981年に人民公社が解散されました。そのとき、徴収された家畜が返還されました。私を旗の人民代表大会常務委員会で副主任の肩書きで、働かされました。そこで、2任期6年務めました。1986年、60歳になって定年退職しました。

Q: 文化大革命のときは、どんな感じでしたか？子どものとき日本語を勉強したり、ウランバートルにも行ったから、たいへんだったのではないですか？

N: 文化大革命のとき、私は40数歳でした。それで通り過ぎました。私1人が日本語を勉強したわけではありません。みんな勉強していたのでかまいません。資本主義の階級の道をあゆんだと言っていました。しかし、自分でどのような道かはわかりません。私は社会主義の道をあゆんでいると答えていました。モンゴルにわたったこともそれほど大きくとりあげられることなく過ぎました。モンゴルのスパイだと少し言われていましたが、そのような事実がないので、たいしたことにはなりませんでした。

定年退職してから、家にいます。しかし、ただじっとしてたくはありません。昔、私たちはここで弓を射て遊んでいたものでした。そこで、私は若者をあつめて弓を射るスポーツを広める活動をはじめました。自分が弓を射ていたのですが、年をとってできなくなりました。私が教えた射手たちは60～70人います。もともとドヴィーン・トゥールデルというブリヤートの貴族がいたそうです。その貴族は、昔、ブリヤート人は14歳になると弓の訓練を受けなければならないという命令を出したそうです。それ以降、ブリヤート人たちは弓矢に強くなったそうです。

わが家は、合計33人になりました。私自身には7人の子どもがいて、みな学校に行きました。大学の本科に行ったのが3人。3人は高等専門学校を卒業しました。1人は牧民です。孫たちの1人は、旗の中学校で働いています。もう1人の息子が田舎で獣医の仕事をしています。1人の娘がラジオ局に勤めています。もう1人の娘がソムで働いて、定年退職しました。1人1人を話すと、長女ナンサルマ、午年、1954年生まれ、いま牧

民をしています。長男バヤルト、申年、1956年生まれ、いま西ソムの獣医を勤めています。3人めがノミンという娘で、戌年で、1958年生まれ、いま西ソムの婦女連合会の主任を務めています。4人めがイミンという娘で、亥年で、1959年に生まれました。いまフルンボイル市のラジオ局で編集者になっています。5人めがナイダンという息子で、辰年、1964年生まれで、現在、エヴェンキ旗の中学校の教務主任を務めています。彼の娘がホウランと言って、現在、上海の経済大学で勉強しています。6人めは、ナイラルという息子で、未年、1967年生まれで、1991年に内モンゴル師範大学の政治教育学部を卒業しました。現在、シネヘン学校の校長を務めています。7人めが末っ子、一番小さく、ナチンという息子でした。亥年、1971年に生まれました。モンゴルに行きました。彼には2人の娘がいます。長女はアナルといいます。上海外貿大学の国際貿易専科で勉強しています。アナルは申年で、1992年生まれです。妹はエイレンという名前で、酉年で、1993年に生まれました。上海科技工程大学美術芸術学院の美術設計専科で勉強しています。小中学校はモンゴル語で、ハイラルで勉強し、高校はモンゴル国へ行き、そこから直接試験を受けて上海に行きました。彼らはモンゴル国籍をとりました。私の孫たちはたいへんよく勉強できます。

Q: わかいころ、ウランバートルに行ったとき、ウランバートルはどんな街でしたか？

N: 当時、ウランバートルはそれほど発展していませんでした。2階建てはあることはありました。しかし、近代的な建物はありませんでした。地元の木の家があり、泥の家があり、レンガの家があり、3～4階建てのビルもありました。当時は、それなりに美しいと思っていました。私が学生だったとき、そこには寮がありました。そこに住んで支給された食事を食べていました。自分のお金をつかわず、国から衣服も配給し、春夏秋冬の衣服をすべてあててくれます。私自身にはお金がなく、支給されたものを着て、支給されたものを食べていました。何を食べていたかという、肉やスープがあります。肉は豊富にありました。また、黒パンがあります。ほかにあまりものはありませんでした。乳茶、白い油（バター）もあります。野菜は少なかったですが、学校にいるあいだに、私たちはみずからジャガイモ、白菜、ニンジンをつくっていました。土壌がよいので、よく育ちました。中国人もいました。彼らは市場で野菜を売っていました。

Q: 当時、何人でウランバートルに行きましたか？

N: 内モンゴルから私たち200～300人行きました。シネヘンから行った者は、私のほかにも3～4人いました。私はシリングルからそちらへ行きました。シネヘンからジャムスレンという人がいました。チョクトのジャムスの実の弟です。彼は国立大学を卒業して、残って教師になりました。またチミドルジという人がいました。ラドナのアムガランの弟です。のちに、医者になりました。彼らはそちらで大学を卒業し、就職して帰ってきませんでした。ナムジルツェヴェンは、私と一緒にいました。彼は内モンゴル大学の先生になり、有名な学者になりました。トゥムルツェレンという人も有名な学者に

なりました。彼は、そこで就職して帰ってきませんでした。同級生たちは、ハルハ人も内モンゴル人も一緒にいました。しかし、内モンゴル出身の同級生が多かったのです。一部は帰国しましたが、一部は帰国しませんでした。ハルハ人の同級生もいました。それでも、私は1952年に戻ってきてから、あまり連絡をとりあいませんでした。こちらにきた人たちにも学者、上層幹部になった人もいます。私は学校を卒業して、そこで2年間はたらいっているあいだは経理補佐をしていました。おもに、収支の帳簿をつけていました。毎月の結果報告というのがあります。毎月の予算どおりにお金が来ます。それを各部署に分けあたえます。統計を記録し、財務省に報告していました。国の帳簿などを監査する特別な人たちもいます。私は経理補佐で、上には総経理というのもあって、課長がいます。省の大臣もいます。頭上に大勢の上司がいました。1952年に帰国すると、私は田舎にいたいのです。私をあちこちキリル文字の先生にしたりしていました。しかし、田舎の実家には年をとった両親がいます。北京、フフホトのような大都会には行きたくない。田舎をまわる仕事がいいと思い、旗の牧畜局で働きました。私の妻も学校を卒業して同じ職場ではたらいっていました。そして、私たちは簡便な結婚式をあげ、7人の子どもをさずかりました。

**Q:** あなたの子どもたちはどこで生まれましたか？ 病院ですか、田舎ですか？

**N:** 最初の2人は病院で生まれました。残りの5人はみな田舎で生まれました。私たちの田舎には診療所があり、助産婦がいました。最初の2人が生まれるときは、私たちは南屯で働いていたので、子どもたちが病院で生まれました。その次からは田舎へ転職しました。

**Q:** あなたの幸福な生活を聞かせていただきました。ありがとうございました。

## 9. ナンサルマ

### 紹介

女性。戊年，77歳（2010年現在）。ブリヤート人のデルデゲル・ガルゾード姓である。祖父はアユーシュといい，父はワシリーというロシア名をもっていた。そして，フルネームをアユーシギーン・ワシリーン・ナンサルマだと私たちに自己紹介した。母親はボーハイ・ホアサイ姓で，セレンペリーン・ジャムスレンギーン・ミデグマという人であった。ナンサルマ氏は生涯，文化教育の仕事に携わった人であった。彼女はブリヤート人であるが，ウールド人と結婚し，ウールドの嫁になったので，ウールド方言で話しているうちに，いまはブリヤート方言を忘れたと言っていた。教師であるため，できるだけ標準語で話そうと努めて，実際にブリヤート方言を話していなかった。

2010年5月7日北京で初めてインタビューし，7月29日にフルンボイルのエヴェンキ旗の中心，南屯でインタビューした。2013年7月17日にふたたびインタビューした。

インタビュアーはサランゲレル，ソヨルマ，小長谷有紀。

### 生活史から

Q: あなたの先祖，両親，兄弟，親戚をはじめ，自分の幼少時など，一生どんなふうに住生活したかという状況を話していただけますか？

N: 私たちの先祖の歴史は多いです。私の父はワシリーというロシア名をもつブリヤート人です。酉年でした。1921年，ロシアのブリヤートの元の故郷を出てモンゴル国を経由し，フルンボイルにやってきたそうです。私の父は元の故郷にいたときに，ロシアの白軍にいて，大戦争になり，父はその戦争に参加したと言っていました。つまり，第1次世界大戦に参加した人です。戦争が終わって，父は軍をやめてアギン・ドマに所属していたウリリング地方に戻ってきたころ，アガ・オノンのブリヤート人たちは移住することになり，たいへん不安定な状況にありました。そして，父は故郷を離れて，ハルハ[モンゴル人民共和国]に来て何年か暮らしたあと，1921年にここフルンボイル地方に来ました。私の父の生まれ故郷はウリレンゲだそうです。ウリレンゲ地方から，おそらく1918年にハルハへ出てきました。そして，父はハルハに来て妻子もちになりました。ハルハからここフルンボイルに来るとき，1人の義理の兄と一緒に来ました。ハルハでもらった妻もブリヤート人でした。義理の兄ガルマーギン・バトというブリヤート人と一緒に来ました。ガルマーギン・バトはここで長く暮らして，ここで妻をもらい，3～4人の子どもがいたでしょう。やがて亡くなりました。父の弟はツァーガンという人でした。ハルハに残って，ハルハの革命に参加し，スパイの仕事をしていたそうです。フルンボイルにたびたび来ていました。何度も来てスパイ活動をしているうちに，1944年にフルンボイルにいた日本軍に捕まえられて殺されました。わがツァーガンおじはロシ

ア語、モンゴル語が上手であるため、モンゴルの革命に参加してスパイの仕事をしていたそうです。殺されるまえに、私の兄がここにいる、会いたいと言っていたそうです。ツァガンおじの妻子がモンゴルにいました。娘はソミヤーといいます。私の姉にあたります。モンゴル国のドルノド県の牧民でした。1986年にフルンボイルに父親の親族をさがしてわが家に来ました。ソミヤーには3人の娘と2人の息子がいて、みな牧民でした。彼らの家はツァガン・オボーの近くでした。ソミヤー姉の家の近くにあるツァガン・オボーというのは、モンゴル国ドルノド県にあるソム [行政単位] です。私の息子ゲレルトがたずねて行って親族一同と知り合ってきました。のちに、ソミヤー姉も娘を連れてわが家に来ていました。ソミヤー姉の2人の息子はエンフアムガラン、エンフトゥブシンという名前です。娘はエンフマー、エンフメンド、ドウルマというのだそうです。5人の子どもがいます。ソミヤー姉は亡くなりました。子どもたちがいます。彼らもやって来て私に会って帰りました。私の父のふるさとウリレンゲというのは、ロシアのチタ州の南にあります。ここフルンボイルに近いです。

私の父はモンゴルに来た当時、妻とのあいだに子どもがなく、養女がいました。のちに、その妻が養女と撮った写真をわが家を送ってきていました。それを文化大革命のとき、私の母が恐れて燃やしました。モンゴル国と関係をもっていると疑われることを警戒し、スパイなどといわれて捕まえられることを恐れて燃やしたそうです。母は当時、父よりもまえに別の人と暮らしていて、離婚していたそうです。その人とのあいだに1人の娘がいます。私にとって異父姉です。母はその人と離婚して父と結婚して最初に生まれた子どもが私です。私は1934年生まれです。母の名前はメデグマ、酉年で、父より12歳年下でした。あの異父姉の名前はルハムジャヴといい、卯年で、私より7歳上でした。私の名前はナンサルマで、戌年です。私の妹はドウルマといい、丑年でした。姉ルハムジャヴ、妹ドウルマの2人はすでに亡くなりました。私の弟はツェudevといい、辰年の人でした。彼も亡くなりました。妹バダマーは戌年で、私より12歳年下でしたが、57歳で亡くなりました。一番上の姉、ルハムジャヴは2010年に83歳で亡くなりました。長生きしました。私の下の兄弟たちは、若くして逝ってしまいました。

母の父(母方の祖父)は、ツェレンピリーン・ジャムスランという人でした。私は幼いとき、母方の祖父に会っていました。母の母(母方の祖母)はダリマといい、色白な年寄りでした。私の母の弟(母方のおじ)がやって来て祖母を連れてエジネに移動して行ったそうです。南へ行ったそのおじをダグワーといいます。彼は私の母の弟で、エジネに行きました。親族を訊ねて行きました。のちにフルンボイルに戻ってきました。しかし、私はいつ移動したか、正確な時代を知りません。当時は2度にわたって南へ移動しました。2回目が、ブドゥーン・リンチンが連れて行った、1944年の夏でした。先に行ったのを私はあまりよく知りません。1945年におじがきて、フルンボイルで私たちと会いました。あとで戻ってきました。エジネに行って戻ってきたおじの長男をツェレン

ダグワー、次男をチャダラーといい、娘をナンジルマといいます。2人の息子と1人の娘がいたのです。

父にはもう1人の妹がいました。彼女はツェベグといいます。そして、よそに養子に出されて亡くなったそうです。父の妹ツェベグの息子はバトムフといい、寅年の人でした。今年、85歳で満州里の息子のところにおいて、息子のバトオチルが満州里市でレストランを経営し、商売しています。バトムフの弟がバトワーといいます。彼には3人の息子がいて、みな牧民です。本当のことを言うと、バトオチルはバトワーの息子です。バトムフには自分の子がなかったので、弟から息子を養子にもらったわけです。さきほど言った、私の父のよそに養子に出した妹ツェベグは、人が養子にもらっていました。あのおばツェベグの弟も養子で、ツェレンダシといいます。のちに、ツェレンダシの娘はドガルマといい、教師をしていました。父の父、アユーシュ祖父は、たいへん裕福な家だったそうです。当時、家畜が多くてたいへんだったので、少し家畜を減らそうと考えて、多くの家畜を売りました。すると、家畜を売った情報をタタール強盗たちが聞いて、アユーシュには絶対にたくさんのお金があるだろうと推測し、協議して略奪してきたそうです。強盗たちが家に入ってきて、アユーシュをつかまえてしばって、「お金がどこにあるか、言え」と言われても、祖父は言わなかったそうです。そして祖父をかなりいたぶって殺したそうです。父によると、祖父アユーシュがタタールに殺されたあと、父のことを父のおじが世話していたそうです。そのおじがどういう名前だったのか、私は知りません。アユーシュ祖父の弟だったと思います。

父はフルンボイルに来て数年のあいだ独身でした。何1つなく、貧しい独り身でした。そして、父はフルンボイルに来て、イミンにいる1人の裕福なエヴェンキ人の家畜の世話をしていました。その金持ちの名前はセデンダンバといい、エヴェンキ人でした。セデンダンバの家には、ダシという年寄りが住み込んで家畜を放牧し、家財の管理をしていたそうです。また、彼の牧民だったツェレンジャヴというブリヤートの年寄りがいました。その年寄りから父は1頭のウマを借りて乗っていたそうです。そうこうするうちに、そのウマがハル・ホウジルトというところの湖の塩水を飲んで中毒死しました。父はセデンダンバにそのウマを弁償するため、このエヴェンキ人の家の牧民になりました。おそらく、母と結婚して1933年にそのウマを借りて乗っていたのでしょう。その後、1949年になるまで、15～16年、その家の家畜を放牧しました。のちのちまでその家との関係はよく、親しくつきあいました。父はたいへん聡明な人で、勤勉な人だったので、その家の信頼を大いに得ていました。そして、また、場合によっては家畜財産の管理を一部任されたりしました。父はその家で最初、ウシの放牧をしていたそうです。父がその家のウシの群れを受け取った当時、その家のウシはおよそ600～700頭に達していました。父は責任をもってそのウシの群れを放牧し、1,000頭に増やし、「鉄の五徳の祭り」[家畜の増殖を祝う儀礼]をしたそうです。ウシは繁殖が遅いので1,000頭まで増やすのはた

いへんなことなので、その家はたいへんよろこび、近所の人びとを招待し、鉄の五徳の祭りをし、盛大にまつたそうです。当時、ウシが増えて1,000頭に達して「鉄の五徳の祭り」をもよおすという家は、たいへんめずらしいことだったそうで、ほとんどなかったそうです。いまなら、まったくないでしょう。いまは「鉄の五徳の祭り」をおこなう習慣も忘れられました。あなたたちがこのように聞かなかつたら、思い出さないのですよ。いまはそういうことをもうしないから。

当時、そのエヴェンキ人の家が私たち一家の着る服、食料と家畜をくれていました。しかし、賃金は渡していませんでした。私の父は彼らの家畜を放牧し、信頼されたため、のちに父は下で人を使う権利をあたえられました。1,000頭のウシを放牧するのはたいへんなので、下に何人かをやとって共同で放牧していました。一部のウシを貧しい家に放牧させるよう自分で決めて、しばった乳を自分で使ってかまわないから数をしっかりチェックしながら放牧するように頼み、ウシを放牧させながらその貧しい人たちを助けていた、というわけです。私の知るかぎり、1年に2～3人、ウシの仕事を手伝ってもらっていました。のちに、わが家はその家のウマも放牧するようになりました。何百頭ものウマを放牧していました。ヒツジも1,000頭に達していました。ヒツジを共同で放牧していたのはジグジドというブリヤート人の家でした。

1945年にロシアが入ってきて、ハル・ホジルに居すわり、人びとの家畜をつかまえて屠殺して食べたりしていました。ロシア人たちは、イミン川の西岸からきました。父はたいへん聡明な人だったので、ジグジドと一緒に、畜群をイミン川の東岸に渡河させ、ロシア人の手に入れられないよう逃がしました。

1949年に、その家の家畜を十数年放牧したということで、私の父に1種オス馬群をあたえました。1頭オス馬群というのは、7～8頭のメスウマと当歳子馬、2歳子馬をあわせておよそ20数頭のことです。ウシは7～8頭あたえました。また60～70頭のヒツジもあたえました。父は15～16年間はたらいた賃金をいくらかと計算しませんでした。良い関係をもてたので、互いに信頼し、もらったものを受け取りました。さて、そこからはじまって、みずからの家畜をもつようになり、生活が向上しました。当時、父は何も不満がありませんでした。後悔もありませんでした。財産としてくれた家畜をもらってみずからの生活を開始しました。金持ちセデンダンバは生前、私の父の命の恩人だったのですよ。父は恩返しのできる聡明な人でした。だから、父はその家で十数年、賃金など言わずに働きました。セデンダンバも聡明で良い人でした。彼は私にシャラガ〔淡黄色〕毛色のウマをくれました。そのウマはとても賢いウマでした。家畜というのは本当に賢いのですよ。ある年、私は川のほとりでヒツジを放牧していると、ウマはハル・ホジル、イミン川の西岸にいました。当時、強盗や戦争が多かったため、馬群に番人がいました。そうしてあるとき、私のシャラガ〔ウマ〕を強盗がとっていきました。すると、そのウマが川の東岸にあった家に戻ってきたのですよ。東岸にあった家を見つけ、帰



ってきたのですよ。なんて動物でしょう。ある朝見ると、私のシャラガが戻ってきて、ゲルの家で横になっていました。近くに行って起こすと、血尿を出していました。私はその財産としてもらったシャラガを忘れることができません。プリヤート人たちがイミンにやってきて以降、2度にわたって南へ移動したでしょう！2度目に南へ移動していたとき、父が移動しようとするのでブドゥーン・リンチンがやってきて「あなたは怪しい人物です。あなたの弟は日本人に捕まえられました。あなたは移動してはいけません」と阻止しました。それで移動しませんでした。本当のことを言うと、移動しなかったことがよかったです。なぜなら、当時の状況はたいへん複雑で、移動したプリヤート人たちはいろいろな地域を渡りあるいて、さまざまな苦難を経験し、もっていた家畜財産を失い、さらに人びとの命にも大きな被害に遭ったのです。のちに、一部の人びとがフルンボイルに戻ってきたときには、まったく赤貧の状態です。どうにか帰ってきたのですから。

父が怪しい人物だと言われた理由を言うと、ツァガンおじと関係があります。日本人たちがツァガンおじをつかまえて殺すまえに、おじは「わが兄がここにあります。会わせてほしい」と言っていたそうです。そして、日本の工作員が、その兄とはだれであるかを探しまわり、セデンダンバの家をたずね、おたくにワシリーというロシア名のプリヤート人がいますか、何か秘密工作をしているのを見ましたか、とセデンダンバに質問したそうです。そのとき、金持ちセデンダンバは、日本人に対して「います。彼は私の家畜を放牧して7～8年たっています。何1つ怪しい活動はしていません。とても良い人です」と言って擁護してくれました。日本の工作員はまた「そのワシリーの弟は、ハルハ〔モンゴル人民共和国〕のスパイとして来て、捕まっています」というと、金持ちセデンダンバは、「ワシリーに弟がいるかどうか、私たちにも言っていない。私たちにも弟がいることを彼は知りません。もともと、ワシリーという名前でした。名前を変えたことはありません」と、良いことをいって擁護してくれたそうです。金持ちセデンダンバはこのように父の命をまもり、恩があるので、父は十数年文句をいわずに使われたわけです。本当は、父は何1つ怪しいことなどしていなかったのです。ハルハにいたときに、ハルハの革命に参加しろと言われたものの、父は、参加はしないと思ってフルンボイルに来たそうです。フルンボイルに来てから、何1つ怪しいことはしていなかったけれども、セデンダンバが何か好ましくないことを言おうものなら、日本人たちは父を捕まえてたいへんな目にあわせたことでしょう、と父は言っていました。セデンダンバの娘はツェベルマーといい、80歳を越えて、昨年亡くなりました。養子にももらった息子が家畜財産をなくしていました。セデンダンバの家系をのちに、使用人だったダシさんが継ぎ、ダシの息子はブレンといいます。ブレンには2人の息子がいました。長男をトゥデブといい、兵役に就いて、突然、病気で急逝しました。次男をミデブといい、セデンダンバの家系を継いでいます。しかし、ミデブのからだもよくなく、病気で。も

とも、下の息子ミデブをセデンダンバの養子に出そうとあとを継がせていました。ミデブの2人の姉が健在です。養子先の姉のツェベルマーは亡くなりました。セデンダンバの実の娘です。セデンダンバは若くして亡くなりました。おそらく、アヘンを吸って亡くなったでしょう。フルンボイルでは日本人がやってきてから、アヘンが流行しました。アヘンの商人がいたそうです。富裕な人びとにアヘンが贈られ、それに興味をしめしているうちに、禁断症状に陥ったのでしょう。セデンダンバはおそらく日本語を知っていたでしょう。日本人が出入りしていました。セデンダンバは私たちと話すときにはモンゴル語で話していました。

**Q:** 当時、裕福な家の家畜を放牧するのに、賃金として何をもらっていましたか？衣服などをあたえていましたか？

**N:** 父は当時、フルンボイルに来て、裕福な家の家畜を放牧していたときに、賃金の代わりに衣服をもらうことなく、布地をもらっていました。母は器用な人で、裁縫の上手な人でした。ブリヤート・ブーツも上手に作っていました。近所の家いえが母に靴を作ってもらっていました。けれども、母は人から何も支払いをもらわず、ただで作ってあげます。一部の裕福な、心優しい家庭なら、ヒツジ1頭をくれました。ブーツの筒の部分は牛革で作ります。しかし、型をはめて縫います。まず丈夫で、つぎに底を重ね縫いして、まわりを赤くした鉄でアイロンがけをします。そして、さらに、白い布を3~4層貼りつけます。さらにその上から白い布を置いて細かく縫います。靴のゾーザイに模様をつけます。ブリヤート語にはロシア語の単語が多いのですよ。いま、それらはみなモンゴル語化しました。

おもしろいことと言えば、私は母と同じく、双子を産みました。しかし、母の産んだ双子は幼いころに亡くなったそうです。彼らの1人は男の子で、1人は女の子だったそうです。1人は母のおなかのなかで亡くなっていて、もう1人は生まれてまもなく亡くなったそうです。この点で、私は母親にしたがったと思います。私からも双子が生まれました。長女はゲレルで酉年、1958年に生まれました。2人めはゲレルト、子年です。3人めがボルド、寅年です。4人めがトゥムル、辰年です。5人めがバヤル、戌年です。ハスチョロー（家ではツァガンという）、戌年です。バヤルとハスチョローの2人が双子です。私が37歳のときに産みました。私の2人の息子は健康です。私の母から双子が生まれたときは、ロシアが入ってきたときでした。おそらく、1945年でした。母はおなかのなかで双子をもちながら、ゾーン・ソムのオラーン・ハルガナというところで療養していました。しかし、残念ながら、双子（男女2子）は亡くなりました。昔の人の話によれば、双子が2人とも男あるいは女の場合は、生き易いそうです。私の母のあの双子の場合は、1人が男で、1人が女だったので、生き延びることができなかったのだろうと私は思います。母は37歳のときに身ごもりました。私も37歳のときにこの双子をもちました。けだし、これはとてもおもしろいことです。私の双子はどちらも男の子だっ

たので、よく育って大きくなりました。

### 風俗習慣について

Q:「鉄の五徳の祭り」について話していただけますか？

N: ウシが1,000頭になったら、「鉄の五徳」をまつります。大きな去勢オスウシを1頭つぶして祭りをもよおします。子孫に財産を分けあたえます。招福儀礼をおこない、家畜の恵みを願って、ウシを神にささげます。ヤギが1,000頭に達すると、五徳をまつり、ヤギのために階段（階段とは、ヤギの囲いのなかに黒檀の木で階段をつくる。ヤギは上の方にのぼりたがるので、1,000頭に達するとただちに階段を用意する）を作っておけます。セテル〔首に布などかけて聖別化すること〕をした家畜は人にあたえたり、使ったりすることなく、汚れたものを載せることはありません。最後まで生きさせます。けれども、一部の家では、聖別化した家畜を自分たちで食べます。ただし、別の家畜にセテルを移します。〔家畜から家畜へ〕口先を合わせてセテルを移します。父の「鉄の五徳の祭り」でセテルをした家畜は特別な家畜でした。昼間にものが見えず、夜にものが見える、真っ白い目をもつ、禁忌のあるウシでした。そのウシが長いあいだセテルをつけていました。そのような特別なウシをセテルしたのでしょう。

ブリヤート人は娘の長子に財産の家畜をあたえる習慣があり、母方のおじがくれた家畜がよく繁殖して増えると考えます。母方のおじたちが、ハンガイ（ナンサルマの嫁ソヨルマの息子、アメリカに留学後、現在スイス在住）にあたえたウシはいま18歳で、すでに増えて、たくさんの子孫をもつにいたっています。

### 教育の仕事について

Q: あなたはいつ学校にいましたか？

N: 私はあわせて8年間学校にかよい勉強した者です。最初、1947年にイミンで学校に入りました。イミンの小学校で勉強したあと、1949年にシネヘンの学校に進学しました。そして1950年に南屯の学校に入りました。1952年から1955年まで、ハイラル第1中学校の教員クラスを卒業し、同年8月にイミン・ソムの赤い学校の教師になりました。イミンの赤い学校で、21年間教えました。そこで私は一生懸命働きました。私は本当に一生懸命働きました。8～9年、学校の教頭を務め、教育の仕事をしっかり仕切っていました。若かったし、身体も丈夫だったので、仕事に対してまじめで真剣な態度で全身全霊をささげて働いていた時期でした。私は教師の仕事をして35年しました。ソム中心の学校で、1976年まで教えていました。教頭の仕事を担当していたときに、私は教育の仕事をよくするため、国語、数学の研究グループをつくり、教師たちの授業を聞く規定をつくり、校長、教頭、一般教師たちが互いに授業を聴き合い、グループで議論し、経験を交換するなどの方法をとおして、先生たちの教育方法と能力、質の向上を強化したおかげ

で、生徒たちの基礎知識が向上し、成績が明らかに良くなりました。このように私たちの学校が1963年に全旗の先進的な学校として評価され、旗の教育局からわがイミン学校の教育、生徒の道徳、成績、規律など、すべての分野で成果をあげたと高く評価されました。これは、ただ私だけの功績ではありませんが、私が真剣に働いたのは本当です。私たちは学校の教育を強化することで、生徒たちの国語のレベルが旗全体で3位までに入っていました。教育の質を重視するほか、学校をうまく経営することを重視し、家畜を増やして、使役家畜をもち、草刈り機、草刈り場、野菜畑をもち、教員と生徒たちの生活の足しにしていました。のちに、また学校の牧場を設立し、畜群をもつようになりました。私たち女性教員たちは、仕事のあいまをみて、順番に世話をし、乳しぼりなどの仕事を担当していました。男性教員たちは、山に行き、越冬用の薪を用意し、草刈りに出かけ、家畜の牧草を準備するなど、学校を拡充していました。みんなで力をあわせて時間をかけて学校を拡充していました。当時の人びとにしてみれば、公の仕事というものは私の仕事よりも重要で、本当にもっとも重要だとみていました。

そして、私は1976年からホイ・ソムの病院の党支部の書記を5年務めました。私はどんな仕事をしてその仕事に責任をもつべきだと考える者です。病院の仕事も、私は同様に全身全霊をささげて務めました。こうしてホイ・ソムの病院が全盟級の先進的な組織として表彰されました。私は教師の仕事をしていたとき、1959年に、全旗の模範教員に選ばれ、表彰されました。1964年に、またイミン・ソムとエヴェンキ旗の2つのレベルの模範教員に選ばれました。1974年にまた、エヴェンキ旗から、学校を拡充した模範として表彰されました。人びとには目があります。私が努力した結果を人びとは評価してくれました。私は感謝すべきです。1980年の秋か南屯に転勤してきて、南屯の第5モンゴル小学校を設立し、校長を務めていました。2～3年後の、1983年に、この学校が南屯の第1小学校と合併し、私は学校の党支部の部長を務めるようになりました。この学校の仕事と、党の仕事に対して、私は同じく努力し、全身全霊をささげました。そして、1985年に、党と政府から私に25年以上働いたという名誉をあたえてくれました。同じく1985年に、私は転勤し、エヴェンキ旗の教育局の教育研究室に赴任し、教育研究員を務めました。そこで5年間働き、1990年の夏に定年をむかえました。現在、定年になって、家にいます。高級教師の称号をもっています。

全国と同様に、1966年からはじまった文化大革命という嵐にまきこまれ、学校の授業、教育もとどこおり、学校の校舎、机いす、すべての備品、帳簿などが破棄され、非常に残念なことになりました。教師たちは、つるしあげられるものはつるしあげられ、迫害されるものは迫害されました。私には「資本主義の道をあゆむ実権派」、実権派の家族、「(内外蒙)統一党」などの罪名をかぶせ、幼い息子と一緒に監房に監禁しました。息子が生まれてやっと2カ月のころでした。そんな赤ん坊を思いやることさえありませんでした。監房に連れて行き、監禁し、批判し、昼夜の別なく詰問し、睡眠も食もあたえら

れず、乳が出ませんでした。恐怖、疲労、飢餓が重なり、乳が出ず、幼な子がおなかをすかせて泣きながら5カ月のとき、監房で餓死しました。どれほど私が心労を味わったことでしょう。私は幼な子をうしない、気が狂いかけました。それから、その苦悩よりもひどいことに、私たちの学校が破壊されました。1970年の春から、教員の私たちはみな方法をさぐって学校を復興させる努力をしはじめました。私たちは仕事をしながら、みずから労働し、学校を建設し、破壊されたものを修復し、ひるまずに働きました。私は教師です。そのような困難な状況のもとで、みずから進んでイミン分校を復興させるために行きました。いま考えてみると、ほんとうに勇気があり、若かったのですね。家から寝具、食器、炊事道具、少しばかりの食料品をもって、ゲレルト、トゥムルの2人の息子を連れて、牛車にのって、イミン川をわたり、分校に行きました。ウールドナサンという先生と2人で一緒に牛車で行きました。そして、分校の復興作業に責任をもって取り組み、3年間働きました。当初、私たちは1つのモンゴル・ゲルを教室として授業をしていました。3つのクラスがあり、50人ちかくの生徒と4人の先生がいました。ウールドナサンと私の2人がいて、のちにゴムボ先生、チメグ先生という2人の先生がやってきて、私たち4人で一生懸命働きました。そして1976年の夏、私はふたたびイミン川中心学校に戻ってきて、校長を務めました。

私は夫と1956年に結婚しました。夫の名前はバルジトです。当時、夫はイミンのソム長で、私も黨員でした。私は1961年に党に入ったのです。文化大革命のとき、私たち家族は7つの場所に監禁されていました。私は妊娠していたときに監禁されました。やがて出産することになり、1966年に息子が生まれて2カ月になると、ふたたび監禁されました。そして息子は餓死しました。当時、天津から来た1人の知識青年の医者が出て、彼がわが子を診察したのですが、助けになりませんでした。わが子は私から離れて行きました。わが子を葬るとき、私には行く権利がありませんでした。私は子どもを抱いてザンダン先生に手渡し、わが子に良い場所をさがして安らかに眠らせてくれと頼みました。ザンダン先生がわが子を連れて行ったとき、うしろから紅衛兵がついていきました。息子が亡くなってから、私は気が狂いかけました。それでトゥムルを抱いているうちに、少し落ち着きました。わがトゥムルが胸のうちのよりどころとなり、私を救いました。当時、私たちは赤い学校に監禁されていました。赤い学校とは、赤いレンガで建てられた建物だったので、そう名づけられていました。外側は赤く、内側は水色の建物でした。日本時代の建物だそうです。そこに監禁されていたあいだ、寝具などまったくなく、食事もなく、家にのこった、食べるほどのものでもないものを食べて、命をつなぎました。家では父方のおばが子どもたちを世話していました。彼女は、私たちに少し料理を作ってもってきてくれていました。子どもたちには、あるじがなく、ゲレルトがやぶれたフェルト製の長靴をぬごうとしたら、針がなく、針にするために太い鉄線の先端を石の上において研いでいるのを見て、かわいそうで死ぬほどつらかったです。両親のいない孤

児のようになったわけです。当時、文字を知る知識人たちをみな捕まえて監禁していました。貧しく愚かな外からきた人びとに権利をにぎらせた時代だったので、何を言いましたか。言うことはありません。私は赤い学校で教師をしていたとき、クラスの担当と同時に、国語、算数などの授業を教えていました。1990年に定年退職しました。私は人生を教育事業に捧げた者です。35年間教え、合計21のクラスを卒業させ、567年の生徒を卒業させました。現在、私の生徒たちのなかには国内外で勉強している人が多くいます。盟や旗など各地でさまざまな行政の仕事をして、名を揚げた人もたくさんいます。私は生涯、教師だった者です。生徒たちが活躍しているのを聞くのが何よりも嬉しいです。

私の夫は1985年にホイ・ソムの書記として転勤しました。1985年に、まず牧畜局長として転勤しました。そのあとに旗の副旗長を務めました。1987年から1988年のあいだに人民代表大会常務委員会の主任を務めました。1992年に定年退職をむかえました。そして2008年12月28日に亡くなりました。急逝しました。もともと心臓病をわずらっていました。10年まえに、心臓にステント留置術をおこないました。それでも10年間なにも問題がありませんでした。しかし、突然、亡くなりました。相談することがたくさんあるのに、突然いなくなってしまうと、精神的にたいへんきついものです。夫の死後、私も具合がたいへん悪くなりました。一生、互いに頼りにして、良いときも悪いときもともに過ごしてきた、その人がいなくなると、肋骨が折れたように支えをうしなしました。それで、心身ともに衰えました。最近、子どもたちのおかげで快復し、いまはよくなってきています。

わが夫の実家はたいへん貧しい家でした。それで、小さいときに学校にあまりいけなかったと思います。夫が学んだ知識は、実のところ、小学校4年生レベルだと思います。しかし、本人はたいへん聡明で、何でも自分で習得する能力のある人でした。とにかく、バランスの良い、すぐれた人でした。身体づくりは、わが子トゥムルに似て、肉付きのいい、色黒な人でした。わが子トゥムルは父親似です。わがゲレルトは母方のおじたちに似ています。

## 日本人についての情報

Q: あなたはイミン地方に日本人たちが細菌を伝染させたということについて聞いたことがありますか？

N: 知ってはいます。それは大きな騒ぎになりました。細菌の伝染は、1942年から1945年まで、2～3年にわたってようやく止めることができました。これについて、夫はよく知っていました。夫が生きていたとき、私たち2人は数多くのお年寄りを訪ねて記録しました。それは何かの本に出ているはずですが。日本の侵略者たちが、非常に有害なことに、細菌戦争の実験をしたのですよ。彼らは熱性の伝染病をイヌの蚤をつうじて地方

で拡散させました。その細菌をもつ蚤を草原地方にばらまき、人びとに恐ろしい被害をもたらしました。一部の人によれば、日本人たちはウールド人たちの身体に伝染性の細菌を注射する実験をしたそうです。また一部の人によれば、彼らは秘密裏に食料倉庫あるいは井戸水に細菌の毒を撒いたそうです。その伝染病により、私たちウールド人がもっとも大きな被害を受けました。私は夫と2人で、あの年、80余歳の祖母アビト、祖父チャンガードルジ、ほかにもだれでしたっけ、多くのお年寄りから聞きましたよ。イヌの蚤がとびはねて、家のなかに置いてある水桶のなかに入り、黒くなるくらいたくさん死んでいたそうです。そんな恐ろしい細菌から伝染性熱病が広がり、多くの人が命をうしなしました。その伝染病はおもに私たちウールド人のなかで大いに広がりました。集落ごとに、一家全滅し、家系が断たれてしまった家もあります。両親が2人とも亡くなり、孤児になって生き残った家もあります。夫婦の片方がなくなったり、孤児になったり、苦難を経験し、大きな損害に見舞われました。夫と私は2004年秋、よく努力してこの事件を知っている多くの高齢者たちを訪ねて聞き取りをしました。完全ではありませんが、その記録によると、私たちが記録した43世帯から合計100余人が熱病にかかり、命を失っていました。それらの亡くなった人たちのほとんどが私たちウールド人でした。亡くなった101人を記録したなかから、95人がウールド人で、3人がダグール人、3人がエヴェンキ人でした。この数字は、私たち2人が調べた分だけです。聞き取り記録できなかった人も大勢います。あの伝染性熱病が私たちのウールド地域で2～3年蔓延したので、多くの人たちが亡くなりました。そして地元の医者やラマたちがさまざまな措置をとり、薬をもちいた治療をおこない、浄化するなどの努力した結果、伝染性細菌を消滅させました。1944年にさらに多くの人たちが亡くなりました。そして1945年、46年になると、ようやく伝染病のものを消滅させたそうです。

わがオールドたちは、以前、ペストに襲われて、たいへんな苦難を味わったそうです。それはかなり昔のことです。およそ1910年代のころ、ウールドたちがハル・ホジル湖、シネヘン川地域に暮らしていた時代に、ペストが蔓延し、多くの人たちがなくなったそうです。集落で、家族まるごと亡くなり、つないだままの子ウシが餓死し、囲いのなかの家畜が主人なしに草原をさまよい、他の人びとは伝染を恐れて家畜を回収しないままになっていたそうです。死んだ人を葬って家に戻るとまた家族が死んでいたそうです。それで、ほぼ旗全体のあとが絶たれるようになり、当時は有効に阻止する薬品もなく、生き残った人たちは仕方なく、まつるオボー〔土地神のよりしろとなる塚〕を捨てて、イミン川の方へ移動したそうです。それで伝染病を恐れて、人びとは近所づきあいを避けて、遠く離れるようになったそうです。家族全員が亡くなったものを葬る人もいません。一部の世帯では、家族全員死亡し、ゲルがそのまま残されたそうです。そして、ハル・ホジルの周辺では悪臭がただよっていた、と年寄りたちが話していたそうです。そして、地元の人びとが方法を考え、協議して、多くの騎乗者が来て、死んだ家畜と人の遺体、

宿营地と囲いなどのすべてを燃やしたそうです。そうしなければ、あの伝染病の蔓延を防ぐことができません。ますます広がり、多くの人にひどい被害をもたらす危険性があるからです。火で燃やして浄化し、伝染病のもとを絶ちきらなければ、ほかに方法がなかったのです。この2回の大きな伝染病の襲撃により、わがワールドの人畜に大きな被害をもたらしました。人口が大きく減少したのみならず、家畜財産、家財道具も減り、たいへん貧しくなりました。



## 10. ネンメイ

### 紹介

ネンメイ氏は、未年、1943年1月23日生まれである。エヴェンキ人で、父はトゥムルといい、戌年である。モンゴル語、中国語、満州語ができて、また日本語もできる。ノモンハン戦争に参加した人であった。ネンメイ氏は、知識人のような雰囲気をもつ人であった。すべてのことに対して説明するよう心がけ、自分たちのエヴェンキ語のほかに、モンゴル語、中国語、満州語を話す。

2010年8月16日の午前に初めてインタビューし、2013年7月に2度目のインタビューをした。インタビューはサランゲレル、ソヨルマ、小長谷有紀。

**Q:** さあ、あなたは私たちに経歴を話してくれませんか。あなたの生まれ故郷のこと、幼少時のおもしろいこと、氏姓、兄弟親戚、仕事などについて私たちに話してくださいませんか。

**N:** 私の名前はネンメイといい、未年で、1943年1月23日生まれのエヴェンキ人です。ハハル姓です。ハハル姓は、そのなかでまた多く分かれます。先に来たハハルたちをテヘ（定住という意味）、テヘ・ハハルといい、ニスゴン（小さい）ハハル、エドウク（大きい）ハハル、オロンチン（山の）ハハルがあります。オロンチン・ハハルとは、山のハハルという意味です。オロンチン・ハハルたちは、山からのちに下りてきました。私の父はトゥムルといい、ハハル姓で、戌年で、1910年に生まれた人です。父は教養のある人でした。モンゴル語、中国語、満州語を読み書きし、また日本語もわかります。そして、私の父は、ノモンハン戦争に参加した人です。当時、日本軍の中佐の階位をもつ、第8連隊の隊長でした。おそらく、ノモンハン戦争よりまえ、1930年代の日本の軍官学校で2年間勉強したそうです。ノモンハン戦争に参加して、のちに退役し、家に戻って牧民になりました。戦争に関して、よく話していました。そして、父は1965年12月に53歳で、病気で亡くなりました。父の経歴に関して、内モンゴルの歴史、フルンボイルの歴史にも書かれています。ノモンハン戦争に参加した内モンゴルの中佐の階位をもつ人は、唯一、ブグチソウ（トゥムル）であったと薄い緑の本のなかに書いてありました。

父は兄弟5人でした。本当は兄弟6人生まれましたが、1人の兄が早く亡くなりました。生き残ったのが、2人の兄、1人の弟、2人の姉でした。一番上の兄がテニヘ・ソムのザンギ〔ソム長に相当〕でした。もう1人の兄が牧民で、同じくテニヘ・ソムにいました。テニヘというのは地名です。現在、陳バルガの管轄にはいりました。テニヘというのはエヴェンキ語で、広いという意味のことばです。私たちはそこで長年にわたって暮らしましたが、1957年にここバヤンツァガン・ソムに移住してきました。父の弟がテニヘ・ソムの小学校の先生でした。姉は牧民で、5人の息子と1人の娘をもつ家で

した。

祖父ダマンダといい、当時、旗のガリダ〔副長官〕だったそうです。オゴルダ、カンマ、ザンギというのは、当時の官職の名前です。ガリダとは、満州語です。本当の言葉の意味からみると、片手という意味のことばです。ガリダ職位をもつ長官は、いくつかのソムを管理します。わが祖父も満州語、モンゴル語と、ロシア語もわかる人だったそうです。民衆から厚く信頼される人でした。牧民たちが家畜をうしなったりすると、あとから捜して見つけてあげるような、良いガリダだったとみんなに言われています。また、メイレンの職も務めていたそうです。私の祖父は、私の（生まれる）まえに亡くなりました。私が生まれたときに、祖父はすでに亡くなっていました。祖父は生前、子どもたちをすべて一緒に生活させていました。祖父は亡くなったあとに、兄弟たちが、みずからそれぞれ独立したそうです。私の祖父の時代に、大いに裕福になったそうです。それ以前、祖父の先人たちの時代には、それほど裕福ではなかったです。

わが祖母は、たいへん勤勉な人だったそうです。夜に、ポーブ〔揚げ菓子〕をつくっておいて、朝にパンを子どもたちにわたし、朝食を食べさせていたそうです。当時、うちの2番めの母方のおじが「おかあさん、わたしにパンの大きいほうをちょうだい」と言っていた、と祖母が話していました。わが祖母は、ヒサという名前の人でした。エヴェンキ人で、6人の子どもを産み育てた人です。祖父は祖母よりさきに亡くなりました。

わが母は、シャーマー（蝦米）という名前の人でした。中国人からもらった名前だそうです。母方の祖父母には子どもが夭折して定着しなかったそうです。母が生まれたとき、へその緒をハネネズミの筋で切ったそうです。そして、また死んでしまわないように、みずから名前をあたえることなく、中国人から名前をもらって、シャーマーという虫の名前があたえられたそうです。それで、母はようやく定着したそうです。それから、もう1人の男の子が生まれたそうです。母方のおじの名前をネメフバイルといいます。子どもが定着してたいへんよろこんだ上に、さらに男の子が生まれたので、ネメフバイル〔増加する喜び〕と名づけたそうです。母方のおじはモンゴル語、中国語、満州語の読み書きができ、テニヘ・ソムの小学校の教師でした。母シャーマーは子年で、1912年に生まれました。トゥブドゥン姓の人でした。1988年に76歳で亡くなりました。文化大革命のなか、父が早くに亡くなったので、日本軍の妻だったと、父のすべての罪を母にかぶせて、たいへん苦しませました。わが家のすべてのものを押収し、母を捕まえて監禁し、また殴りました。鬼を殺してもかまいません、とウマの背中から引きずり落として、殴っていたそうです。母はみずから言いません。苦しんでいたことをまったく話さない人でした。私はのちに、ほかの人から聞きました。父はウランホトの軍官学校にいたとき、母がついて一緒に行っていて、写真を見てみると母は素敵な洋服を着た美しい人でした。手袋をはめて、とても素敵でした。本当に裕福な上層社会の妻の雰囲気がありました。そのような軍の上官の妻でしたので、文化大革命が見逃すわけがありません。

両親から1人の息子が生まれて、3カ月で亡くなったそうです。それから子どもが生まれなかったそうです。私はよその家から養子にもらわれました。しかし、私はこれに関して人に話したくありません。まわりの人びとはほとんど知りません。私はいつも養父の名字を使っています。私にはもう1人の養子先の弟がいます。私たちは2人とも養子です。

私の生まれた家に1人の姉、1人の兄、2人の妹がいます。私はちょうどまんなかです。兄と姉の2人は牧民です。一番下の妹は医者でしたが、亡くなりました。上の妹は教師です。バヤンツァガーン小学校の教師です。1964年に実父が亡くなりました。実父が亡くなったとき、私は行きませんでした。当時、わたしは養父の心を壊さないようにと思っていました。それで行きませんでした。いま思うと、とても後悔しています。人が亡くなるとふたたびこの世に戻ってこないのだと、理解していなかったのですよ。当時、もし私が行っていれば養父はどう思うだろう、残念に思うだろうと気を使って、行きませんでした。

**Q:** あなたはご自分について話してくださいますか。実の父母もエヴェンキですか？

**N:** 実父はボロムジャヴという名前で、トゥブドゥン姓でエヴェンキ人です。実母はメンジホワールという名前で、ドラル姓でエヴェンキ人です。牧民でした。生まれた家は、山に行って木を伐採し、暮らしをやりくりしていた、貧しい家でした。私が生まれたとき、母方の祖母はハハル姓の女性だったので、自分の実家の親戚に養子に出しました。私の場合、ひとり養子に出されたことに関して、悲しんだり寂しがったりすることはありません。養父母が私にはたいへん優しくかったです。私が23歳のとき、養父が亡くなりました。亡くなるまで、私を1度も怒ることはありませんでした。私は父親というのは子どもを叱ることなく、怒ることのない人だと思っていました。しかし、のちに、よその子どもたちの父たちが子どもたちを叱ったり怒ったりすることがわかりました。それで、父が私をどれほど愛していたかと、ますますわかるようになりました。養母は私のことをたいへん愛するわりには、生まれた家と関係をもつことをいやがっていました。私が40歳を越えて、何人かの子どもをもつときになっても、実家をたずねようとしても、養母は1泊だけで帰ってくるよう言っていました。私はあんな遠いところに戻るので2泊して来ようと言いましたが、実母は私に対して「あなたは、養母を私よりも大事にしないさい。あの母を想う人はほかにいませんからね。私のことはあなたの兄弟たちが想ってくれますから。あなたは養母のことを思いやりなさい」というほど、優しい心をもつ母でした。

私の場合は、実家に対して不満や未練はありません。むしろ、養父母のことを想って、より大切にしています。実母は85歳まで生きました。70歳を越えてもウマに乗ってウシの放牧をしていました。また、物語などをよく語る人でした。

## 11. バトデルゲル

### 紹介

フルンボイルのエヴェンキ旗の人である。ダグール人。私たちがインタビューしたときに、旗中心の南屯にいた。彼は舞踏家で、芸術家で作曲家であった。文化活動家で、エヴェンキの歴史文化を研究家である。シャマニズムの研究、祭りイベントの司会者、エヴェンキ語、ダグール語、中国語、モンゴル語などの言語をあやつることで、ほかの人と異なる利点をもっている。仕事のあいまに英語、満州語をまなんだと簡単に自己紹介をしていた。彼もまたブリヤート方言を話せる。彼のもっとも有名な踊りは、シャマンの踊りであった。彼がシャマンの踊りを踊っていると、人びとは彼のことをシャマンだと錯覚することもある、と自分から私たちに話していた。バトデルゲル氏は、自身はダグール人だが、自分の子どもたちにはすべて母の姓をあたえてエヴェンキ族で登録したと話した。どうしてそうしたのかと聞くと、「私たちはこのエヴェンキ族自治旗に暮らしているので、エヴェンキ族として生きれば、子どもたちにとって有利だろう」と当初思っていたそうである。実際に、「私の選択は正しかったと思う。いま、私の息子の1人がエヴェンキ旗の副旗長になっている。もし、父の出自に応じてダグール族と登録していたら、このような機会があるかどうかわかりませんよ」と言って、明るく笑っていた。バトデルゲル氏はたいへん明るい性格で、ユーモアにあふれ、ことばのセンスがあり、そのうえ作家でもある。彼のもう1つの特徴は、多くの言語をあつかうことである。中国語、エヴェンキ語、モンゴル語をわかるのみならず、これらの言語で文学作品を書いていた。また、モンゴルのブリヤート方言をよく知っていて、歌や詩を書いていたと話していた。

私たちは2010年8月15日の午後にインタビューをした。2013年7月にふたたびインタビューし、前回のインタビューを校閲し、訂正をしてもらった。インタビュアーはサランゲレル、ソヨルマ、小長谷有紀。

### 生活史から

**Q:** あなたの経歴に興味をもって来ました。私たちに生まれ故郷、幼少時のおもしろいこと、氏姓、兄弟親戚、仕事などについて話していただけますか？

**B:** 私の名前はバトデルゲルで、1937年に生まれた者です。丑年です。オーラ姓です。オーラというのは、山という意味だそうです。私の祖先の名前はパンチャブと言います。1965年にサイハンツェツェグというエヴェンキ人の娘と結婚しました。妻サイハンツェツェグは1939年にホイ川のほとりで生まれた者です。卯年です。1959年にフルンボイルの医学校を卒業し、フルンボイル病院で看護婦の仕事をしていて、1962年にホイ・ソムの病院に転勤してきました。そこで、1972年まで働き、1972年に旗のパヤントホイ村の

病院に転勤し、2001年に定年退職しました。私たち2人には、1人の娘と3人の息子がいます。私たちの4人の子どもたちはみなエヴェンキ族として登録しています。末っ子はウーチーと言います。現在、旗の副旗長をしています。当初、私は彼にオチというモンゴル名をあたえました。それを漢字で武珍とあてました。いま、彼のオチという名前を知っているのは私しかいません。子どもたちの一番上が娘です。長女は5月1日に生まれたので、ウイー（五一）という名前をあたえました。現在、武一とあてています。旗の芸術連合会（文聯）で働いています。彼女は1966年5月1日の生まれです。長男は旗のテレビ局で働いています。テムツェドという名前です。1967年の生まれです。次男は内モンゴル歌劇院の交響楽団でチェロを演奏しています。名前はアルマスと言います。1968年の生まれです。三男はウーチー（オチ）で、1972年の生まれです。今年ちょうど40歳です。1993年に内モンゴル農業大学を卒業しました。彼の行った中学校は有名な学校でした。内モンゴル師範大学付属中学校を卒業しました。私の息子の、その年に受験した成績は、北京大学に入学できる点数でした。しかし、専門の農業がないので、北京大学に進学しませんでした。そして、専門の関心を重視し、内モンゴル農業大学に進学しました。子どもたちの状況はこんな感じです。

私は1952年から1955年まで、ハイラルの第一中学校で勉強し、卒業しました。1955年から1957年までのあいだに内モンゴル（フフホト）のモンゴル言語専門学校で勉強して卒業し、同じく1957年に内モンゴル芸術学校の教師になりました。編集学を専門に勉強しました。芸術学校では音楽学科で揚琴を教えていました。そうこうするうちに、エヴェンキに転勤してきて、オラーナムチル〔モンゴル歌舞団〕で働いていました。そこで20数年、働きました。そこで1985年まで働きました。1985から89年まで旗の文聯の副主任の仕事をしました。1989年の10月から、北のホイ・ソムの党委員会の書記の仕事に移りました。そこでまた10数年、働いて、1998年に退職しました。働いているあいだの、1962年から64年まで、内モンゴル師範大学モンゴル語学部で専門の研修を受け、モンゴル語本科の卒業証明書を取得しました。この一生に私は多くの歌を作りました。たとえば、「ツァヒルガーン・ゼールト（駿馬）」「四季の歌」「サールト・モリ（白馬）」「出会い」などの歌を作りました。「出会い」という歌はエヴェンキ語で作りました。「四季の歌」という歌はダゲール語で作りました。そのほかはモンゴル語で作りました。エヴェンキの賛歌という歌を私は中国語で作りました。「わが故郷」という歌はエヴェンキ語で作りました。「ホイ川の賛歌」もまたエヴェンキ語で作りました。「シネヘン・ブリヤートの賛歌」はブリヤート・モンゴル語方言で作りました。私がモンゴル語で書いた『光さす墓標』という小説は、1956年に『内モンゴル青年』という雑誌に掲載されました。この小説で何を書いたかという、1つの火事を消すために死んだエヴェンキ人の英雄的な行為を主題にして書きました。スルンという名前の実在人物の実際の行為を書きました。彼はもともとソロン旗の青年団委員会の書記でした。そして、彼は1956年に亡く

なりました。私は小説を書くときに、スルンという主人公の名前を変えて、作品にして書き上げました。バヤントホイ村の西側で発生した野火を消化しました。そして、毅然とした英雄として亡くなりました。また、『田舎の女医』という小説を書きました。『雨の夜』という小説も書きました。

1998年にフルンボイルの雑誌に『マナンティン・タル（霞の平原）』という中編小説を掲載しました。これは、反日英雄マソルというエヴェンキ人の実際のことを主題にして書いた中編小説です。1944年に日本の監獄で殺害されました。マソルは牧民でした。彼は日本に強く抵抗していた人です。日本人たちは彼を捜索して1939年に逮捕しました。彼は日本人に捕まえられて監禁され、たいへんな苦労を経験し、リンチを受けて殺害されました。日本人たちは、マソルと一緒に捕まえて監禁した数人に、1942年、有毒細菌を注射し、家に帰しました。それで、その伝染病が蔓延し、200人あまりのエヴェンキ人が亡くなりました。おもに、1942年から1944年のあいだに前後しておよそ80数人のエヴェンキ人が亡くなりました。そして合計しておよそ300人あまりのエヴェンキ人が前後して亡くなりました。けだし、これらの300あまりの人たちは、70年間におよそ1000人までに増えるべきだったと思います。当時から現在まで少なくとも2代にわたっています。エヴェンキの人口増加にはたいへん大きな被害になったのですよ。2度目には、ロンゲーというエヴェンキ人にまた有毒細菌を注射しました。彼は故郷に戻って、毒病が蔓延し、先ほど言った70数人が亡くなったのです。これらの真実の歴史を主題に、私は『マナンティン・タル』を書きました。作品は作品です。真実の歴史として、毒を注射して多くの人たちの命を無駄にしたことを思うと、本当に悪いことですよ。

その伝染病の症状は、発熱し、食欲が減退するのだそうです。そして、発熱すると40度まであがり、身体中に黒や赤のさまざまな色の斑点が発生し、口がただれ、わずか数日のあいだに死んでしまうそうです。当時、エヴェンキ人たちが世帯ごとに亡くなりました。亡くなった人たちを家財道具と一緒にすべて燃やしました。燃やすしかほかに方法がありませんでした。急性の伝染病なので非常に速く蔓延しました。伝染した人はすぐに亡くなります。

ホイ・ソムではこんなできごとがありました。一部の先進的な若者は、当時、革命を夢見ていました。このとき、モンゴル国が独立したので、モンゴルの秘密工作員がやってきて、宣伝工作をおこないました。彼らのなかにモンゴル人がいました。また地元のエヴェンキ人もいました。たとえば、当時のイミン・ソムのエヴェンキ青年ソンヘーブという人は、革命の影響でモンゴル国にわたりました。のちに彼はモスクワの東方大学で勉強して卒業し、地元に戻ってきました。のちに一部の人が彼のことを知って日本に報告し、日本人たちは彼を捕まえようとしたら、彼は逃れてウランホト（王爺廟）まで行きました。彼は地元のエヴェンキ人のあいだで、もっとも早く革命に参加した人として評価されていました。ソンヘーブはモンゴースタード一姓の人です。1905年の生まれで、

牧民の子どもで、のちに文化大革命のときに亡くなりました。

## ブリヤート人たちの歴史文化について

Q:ブリヤート人たちがシリングルに移住したことをご存知ですか？

B:わかることはわかりますよ。ブドゥーン・リンチンという人がいました。彼はロシアのブリヤート地方からシネヘンに来てから、シリングルへ行って、1939年にはパンチェン・ラマが列車で来てシリングルを経由しました。当時、ブドゥーン・リンチンは70数世帯をつれてシリングルにいました。そしてパンチェン・ラマがシリングルについたときに、拝謁してシャビ〔帰属民〕になったそうです。そして、パンチェン・ラマは同情し、土地を割譲してブリヤート旗を作りました。当時、歌われていた歌があります。その歌では、「色とりどりの馬群は川のほとりの草がお気に入り、この人びとが話しています、リンチン貴族がお気に入り、ボドンガ〔モドンガという地名のこと。頭韻をふむためにMがBになっている〕の人びとが話しています、ボグド〔パンチェン・ラマのこと〕の群れがお気に入り」。この歌はブリヤート人たちが歌ったと推測されます。リンチンについていかず、シネヘンに残ったブリヤート人たちが歌ったのだらうと思います。これはブドゥーン・リンチンをからかったものです。これについて、ツォクティン・ジャムスから聞いてもいいでしょう。ツォクティン・ジャムスは今年80歳です。ブリヤート人です。うわさによれば、『シネヘンのブリヤート人たち』という本を書いたそうです。私は1987年10月に『ブリヤート民謡集』を中国語で内モンゴル人民出版社から出版しました。また、1991年にヌマ先生（ブリヤート人）と共同で『ブリヤート民謡集』という（モンゴル語の）本を同じく内モンゴル人民出版社から出版しました。私は歴史家ではありません。作曲をします。エヴェンキの歴史文化について関心をもって調べています。シャマンの文化にも大いに興味があります。さまざまな結婚式や宴会の司会をします。エヴェンキ、ダグール、モンゴル、中国などのことばで話すことによって、他の人に比べてかなり独特な長所があると言えるでしょう。仕事のあいまをぬって私は英語や満州語を勉強しました。また、地元のブリヤート方言を話すことができます。私には言語的な才能があります。わかるとは言いませんが、勉強したと言えば良いでしょう。わが家は少々、言語的な才能のある家系です。家系のなかでは、父の兄ピングがシャマンでした。口上がたいへん堪能な人でした。エヴェンキ、ダグール、モンゴルの3つの言語でシャマンをしていました。彼の才能が私に譲られたようです。父の兄はピン・サマンと呼ばれていました。シャマンには12の神がいます。それらを熟知した人を大シャマンと言います。9回の試練を越えて大シャマンになります。大シャマンには12枝の帽子をかぶせます。55の天のうち、50の天はいのる神で、5の天はまつる神です。44の天のうち、40がいのる神で、4がまつる神です。私はシャマン舞踊を何度も演出しました。1997年に「走出森林（森林から出る）」というテレビ連続ドラマで、私はシャマンを演

じました。これは私が最初にシャマンを演じたもので、それ以降つづけて、シャマンの踊りを演出しました。私には一着の特別なシャマン用の衣装があります。シャマンの衣装といっても、もっとも重要なのは太鼓で、それさえあればいいわけです。私はシャマンの歌や踊りのうちおよそ80数曲を知っています。

日本人たちが毒病をまいてエヴェンキ人に大きな被害をもたらしました。しかし、ブリヤート人たちには被害をもたらしませんでした。日本人たちは、ブリヤート人たちとは親密であると言われていました。実際にも、あの急性の伝染病の毒をブリヤート人には注射しなかったのです。エヴェンキ人やウールド人はみなあの伝染病に感染しました。これは1つの事件です。もう1つは1940年代初めに、いろいろな勝敗があり、最後のあがきが大きな戦争になることを予想し、ブリヤート人たちを大きな戦乱から逃れさせるために動員して移住させたそうです。彼らをシネヘン地方から移住させ、興安嶺を越えさせてホーリングルに送っていたそうです。そのまえ1941、42年に、シネヘンから移動し、興安嶺を越えてホーリングルに移住していました。ホーリングルのブリヤート人たちはたいへん豊かな草原をもち、たいへん豊かな生活をしていると言われていました。そのためにホーリングルへ移動したい人が増えていました。本当に、日本人がブリヤート人を動員し、みずから引率して移動させていたことは事実です。しかし、どのような目的で移住させていたかをだれが知っているのでしょうか。本当に、戦乱から逃れさせるために安全な場所へ送っていたのか、ほかに何かの目的があったのか、わかりません（ふたたびインタビューしたときに、ブリヤート人たちがこれを読んで誤解するかもしれないと警戒し、削除しようとしたのですが、しかし、私たち編者は同意を得て削除しませんでした）。

シャルフーという人はブリヤート出身の人です。バルガ西旗の人です。私たち2人は同級生です。よく知っています。私たち2人は1952年から同級生でした。彼は学校にいたとき、有名な力士でした。とても正直な人でした。何かあれば直接、話をします。はっきりした人でした。彼の家は裕福だったかもしれません。1953年の冬休みに家に帰り、学校に戻ってくるとき、2つの大きなタンスをもってきました。しかし、タンスの鍵を開けないようにしていました。ある日、私は隣にいて、「このタンスを開けませんか」というと、彼は「開けよう」と言って、全員に1つずつヒツジの骨付き肉をくばりました。20数人全員にあげました。たいへん裕福な子どもでした。私たちはたいへんよろこんで、その肉を食べました。1953年、学校に音楽舞踊のクラブが作られました。私は、黒い弦楽器を演奏します。シャルフーは歌が上手です。彼は音楽舞踊の部員リストに入っていなかったの、先生に頼んで入れてもらいました。しかし、のちに彼はやめました。1952年から55年のあいだに、2度にわたって学校の相撲大会で優勝しました。またハイラル市の学生相撲大会でも優勝しました。

学業について言うと、私たちのなかではゴンボスレンの成績がもっともよかったです。



シャルフの成績は中ぐらいでした。彼は他人のことをよく助けます。シャルフの弟にラマサンという人がいました。彼はしょっちゅうきて兄からお金をもらっていました。あるとき、2人は喧嘩になり、弟をひっぱたいて返しました。弟が正門を出て去っていると、シャルフが私に「きみが行って彼を連れ戻してくれ」というので、私が連れ戻してくると、少々お金をわたして返していました。シャルフは優しい人で、また他人のまちがいを黙認できません。あるとき、サッカーの試合で、ルールを破っていた人に対して、シャルフはルールを守っていないと教えました。学生たちはみなシャルフのことを、バルガ西旗〔新バルガ右旗〕の有名な金持ちの息子だと知っています。生活の面で多くの人を助めました。病気の人を病院につれて送り、食べさせるなど、助けていました。家庭の状況がよく、心の優しい人です。1963年にトラックで私たちは西旗に行き、ある食堂に入り、食事をしようとしたら、シャルフがやってきて私たちと挨拶し、私たちにごちそうしてくれました。シャルフの妻マンジルマは、白い紙に1点もないほどの清い心の持ち主です。おとなしい性格です。シャルフはすべてを仕切ります。歌が上手です。絵は下手です。美術の試験では、他人に描いてもらって提出していました。先生たちにばれないように、マイナス3からプラス3あたりの評価をもらっていました。彼はまったく絵が描けないのです。私は数学が苦手なので、ゴンボスレンのそばに座って写していました。そうしてなんとかマイナス3からプラス3あたりの評価をもらっていました。若い時代の学校の生活というのはとても懐かしいものです。シャルフはいつもマンジルマをつれて歩きます。当時、わたしはヨーイーという娘が好きでした。しかし、告白しないうちに、バダラーが彼女をつれ歩いていました。それで、私たちはバダラーを殴りました。いま思うと、なんなのでしょう、彼に何のまちがいがあるのでしょうか。のちに、ヨーイーという娘はバドラーと結婚せず、別の人と結婚しました。

## 12. バルサン

### 紹介

バルサン氏はシネヘンのブリヤート人である。昔、シリングルのホーリングルを経由し、青海省まで行った経験のある人であった。私たちは他の高齢者にインタビューしているとき、西に行ったブリヤートについてはバルサン氏がよく知っているで紹介された。そこで、私たちはブリヤート旗中心の南屯にある彼女の家を訪問した。

2010年8月17日午前に初回のインタビューをし、2013年7月16日にふたたびインタビューをした。インタビュアーは、サランゲレル、ソヨルマ、小長谷有紀、バイガル。

### 生活史から

**Q:** では、私たちに経歴を話してくれませんか。生まれ故郷、幼少時のおもしろいこと、氏姓、兄弟親戚、仕事に関して、話してくれませんか。

**B:** 私の名前はバルサンで、午年で、1930年に生まれ、ボーハイ・ホアサイ姓です。私の父の名は、ボルゴダイ・ナンジドといいます。1945年に、わが家はホーリングルへ行きました。当時、私は15~16歳でした。私たちは両親と祖母と弟のガルサンツェレンがいました。私たち5人はシネヘンを発ちました。なぜ移動していたのか、私は当時わかりませんでした。両親についてよろこんで行きました。しかし、行ったことで私たちは数少なくない困難を経験しました。私たちは青海の西寧まで行きました。そこより先に行って、チャカという地域に着いて、数カ月暮らしました。そして、1945年にシネヘンに戻ってきました。そのほかに、青海の南の、内モンゴルのウラド中旗に着いてしばらくそこにいました。そこより向こう、エジネにも行きました。そこから、青海へ着きました。青海には、ツェベンジャヴィン・バルジュールという家がありました。青海にたどりついた私たちはその家と知り合いになりました。そして結局、シネヘンに戻ってきたとき、父と私と弟の3人が帰りました。母と祖母はそこで亡くなりました。母の名前はトンゴンといいます。シャライド姓の人でした。地元を離れて2年経つたたないかの1947年、シリングルにいたとき、母は病気で突然亡くなりました。祖母の名前はボディといいます。母が亡くなった翌年の1948年に祖母も亡くなりました。そして、弟と父と私の3人でさらに向こうへ行きました。

当初、私たちは30~40頭のウシ、かなりの家畜をもって行きました。1947年に、家畜を「パルー」と呼ぶ八路軍に取り上げられました。そして、家畜もなく、なにもなくなり、戦乱から逃れて先へ進みました。家畜をなくしてから、他人の家の家畜を放牧し、狩猟するなどしてなんとか暮らしていました。そうこうするうちに、こんどは解放したと言われて、地元に戻っても何も問題がないと言われ、出てきた人たちが少しずつ戻っているという情報を聞いて、シネヘンに戻ってきました。25歳で地元に戻ってきて、私

は嫁に行きました。

私は戻ってきた翌年の1955年、ルブサンツェレンというハムニガン [エヴェンキ族のこと。ツングース系] と結婚しました。夫はバイゲット姓です。巳年で、1929年の生まれで、私より1つ上の人でした。私が嫁いだとき、姑がいました。義父はすでに亡くなって、いませんでした。私たちはシネヘンのハルガナで結婚しました。姑の名前はセデンジャヴというブリヤート人でした。彼女には10数頭の家畜がありました。夫ノルブサンツェレンは公務員（公安局特派員）でした。夫は日本の学校で勉強していました。そして、彼は西ソムで働いていました。私は往来しているあいだに、人に教わってモンゴル文字を覚えました。私の両親は、移動の道中も私たちに文字を教えることを忘れてはいませんでした。それで私もけっこう文字を知っている範疇に入ります。私はハルガナ村にいましたが、家はソムの中心地にありました。そして、1956年に私はソムの病院の看護婦の仕事に就きました。

夫と私のあいだには2人の子供がいます。息子の名前はガンジュールジャヴといい、同じく巳年で、父親の37歳のときの子です。1965年に生まれ、東西スムが合併してシネヘン・ソムになったとき、村の副村長を務めて、定年退職しました。息子には1人の息子がいます。嫁の名前はミデグで、同じくブリヤート人です。息子のガンジュールジャヴは父の血統にしたがい、ハムニガンとして登録しています。ガンジュールジャヴの姉はナランチメグといい、申年で、1956年生まれだと思います。いま、西ソムにいて牧民になりました。婿はジャルガルというブリヤート人でしたが、もういません。亡くなりました。ナランチメグには、1人の息子、2人の娘、あわせて3人の子供がいます。3人の子供はみな結婚して独立し、ナランチメグは息子と一緒に住んでいます。

私は、看護婦の仕事を20数年して、1980年代に定年退職しました。いま、退職しましたが、年金をもらっています。

シリングルからさらに向こうへ行くときの、困難と言え、食べるものがなく、困りました。家畜財産をすべて取り上げられました。それで餓死寸前だったと思います。シリングルからさらに向こうバヤンノール [盟] のウラド中旗に着いて、他人の家の家畜を放牧し、少しずつものをもらえます。そこからさらに進んでエジネに着きました。そこからさらに進んでホニチ川という場所について、さらに進んで西寧に着き、クンプム寺 [塔爾寺] に着いて、さらに進んでチャカというところに着いて、1～2カ月暮らして戻ってきました。戻るときに蘭州まで車で来て、蘭州から列車で北京に来て1泊し、北京から直接列車でハイラルにきました。戻ってから親族の家に行きました。そうして親族たちが助けて、小さなゲルを建ててくれました。それで、徐々に自立していきました。私たち西へ行ったブリヤート人たちに、国からの支援はまったくありませんでした。親族の支援を受けて、戻ってきた翌年に嫁ぎました。

私の姑セデンジャヴは、私が嫁いでまもなく亡くなりました。1～2年経ったか経た

ないか、おそらく1957年のとき亡くなったと思います。60数歳だったと思います。

## 13. エルデン

### 紹介

エルデン氏はイミン川のワールド人である。1935年に生まれ、亥年の人であった。私たちがインタビューするとき、エルデン氏は、足の具合がよくないと、アパートに住んでいた。私たちは土地を失って手のひらのような広さのアパートに暮らしている、とユーモアあふれた冗談を言っていた。エルデン氏は故郷を愛し、民族出自を愛する人であった。

2010年8月17日午前に初回のインタビューをし、2013年7月16日にふたたびインタビューをしようとしたとき、すでに亡くなっていた。インタビュアーはサランゲレル、ソヨルマ。

### 生活史から

**Q:** では、あなたの経歴を話してくれませんか。生まれ故郷、幼少時のおもしろいこと、氏姓、兄弟親戚、仕事などについて話してくださいませんか。

**E:** 私の名前はエルデンで、今年76歳です。亥年で、ガルゾド姓です。私はイミンのワールドのザイ・ソムの人です。イミンのワールドたちには、ウジー・ソム、ザイ・ソムという2つのソムのワールドがあります。ここのワールドをあわせて22の氏姓があります。私の祖父はバンゲージャヴ・オゴルダという人でした。旗長の地位にあり、たいへん裕福で、教養もありました。父の上の兄ヘーシングという人は、フルンボイル盟の総督長官の書記でした。父は祖父の1人息子でした。ヘーシングおじはよそからもらった祖父の養子でした。父には1人の妹がいました。母はザーマド姓です。母方のおじたちはみな亡くなりました。日本の細菌兵器でみんな亡くなりました。私の1人の母方のおじもその被害をうけ、わが家にいました。兄と私もその病気に感染し、母方のおじが世話をしていました。あの有毒細菌に感染して、私たちワールド人たちは家族ごと亡くなっていました。母の名前はヤンジマと言います。母方のおじはバトスフと言います。父の名前はジャミヤンです。私の両親は2人とも寅年でした。父は1954年に亡くなりました。母は私が5歳のときに早く亡くなりました。母が亡くなったとき、妹はまだ揺かごにいたそうです。

私たちワールドたちは、概して大きな災難に遭いました。30年代、新疆のワールドたちは大勢亡くなりました。ペストで世帯ごと亡くなったそうです。ワールドはフルンボイルに来てからも細菌兵器で亡くなりました。細菌兵器でブリヤート人たちは死にませんでした。なぜブリヤートが死ななかったかという、ブリヤート人たちは日本人たちと親しい関係だったからです。当時の日本の第7、第8師団の病院に、ブリヤートの女医、看護婦たちがいました。サザイニヤムという医師がいました。また、もう1人の看

護婦がいました。彼らの医師はウルジーバトと言います。あの2人が来て、細菌に感染したウールドたちを見に来ました。しかし、彼らは塗り薬、飲み薬があるにもかかわらず、もってこなかったで、彼らも感染しました。そして彼らは急いで戻りました。日本時代、ブリヤート人たちはたいへん尊敬されていましたよ。興安西省〔興安北省〕のもっとも上の長官にブリヤート人〔ウルジン将軍〕を任命しました。日本人たちはブリヤート人たちと特に親密でした。なぜなら、彼らはロシアから来たからです。ツァガヤの兄バトージョンという人がいました。ツァガヤが私に注射し、私は発熱し、病気になりました。当時、細菌性の病気が蔓延すると注射するという布告が出ていたそうです。それで、私たちは行って注射してもらいました。

シネヘン地方はもともと私たちウールドの土地でした。細菌兵器のまえに、昔にも1度、大きな伝染病が流行し、私たちウールドたちが亡くなり、ヒツジの群れを放牧する人が残らず、つないだ子ウシをほどいてやる人がいなくなるほどだったそうです。細菌兵器のときにも、ウールドたちの家畜は持ち主がなくなり、あたりをうろついていたそうです。感染など気にしないブリヤート人たちが自分のものにしていました。ブリヤートには医者やラマが多く、よくお祓いをする人たちです。ウールドの寺に300人のラマ僧がいました。アルバジン医師が私たちに「あなたたちは墓や屍体をさわらないように、また伝染しますよ」と教えていました。アルバジン医師は私の命を救った人ですよ。私の肺には穴があいていました。アルバジン医師は私に良い治療をしました。「この注射が終わったら、家に帰りなさい」と返すとき、「オーノの霊泉に行き、40日霊泉を服用し、早朝に山を歩き、新鮮な空気を呼吸し、昼間に胸部を日にあてて横になりなさい」と教えました。それで、わたしはアルバジン医師の指示どおりにしたので、肺炎が治りました。アルバジン医師は、ブリヤートの有名な医師です。ボトンゴード・ワンチグ・アルバジン医師は、日本の医科大学で勉強し、卒業した、とても有能な医師です。内モンゴル医科大学の教授、すぐれた技術をもつ医師で、私の命を救った神さまですよ。

ナムジル、ダンザンは兄弟です。ダンザンと私はハイラルの完全小学校〔国立全日制小学校のこと。かつて農村部では教師不足により年次や科目数の限定された「不完全」小学校も存在した〕で一緒でした。私の実家は田舎で、私は家で暮らします。ドルブン・ホンホルという、祖父のふるさとです。のっぼのボルドの父が、ボルドと私の2人をウールド人のラマのシャビ〔弟子の僧〕にしました。私は8歳だったと思います。そうこうするうちに、やがて日本学校に入れられました。当時、赤い学校と呼んでいました。赤いレンガで建設されたので、赤い学校と名付けられていました。そうこうするうちに、ある日、1つの飛行機が来ました。突然、ドンと音がしました。そして、日本人の先生が「あ」とびっくりし、「ロシア軍が来た」と言っていました。そして、私たちを家に帰しました。私たちが家にむかう道中、川をわたると、丘の上に車がたくさん止まっていました。みているうちに銃声がありました。ハダが何人かの子どもをつれて行っていると、

小さな車がやってきてハダを連れて行きました。数日後、ハダは戻ってきました。そのとき、ハダの家に行くと、手を負傷していました。ロシア軍が1人2人入ってきて、日本人はいるかと質問し、家にバターがあれば取って行きます。人を銃殺はしませんが、外に出てイヌは銃殺します。1つの軸に2頭の馬で曳かせた車で、1人のロシア人が来ていました。

私には2人の兄、1人の妹がいます。もうみな亡くなりました。私が1人残っています。赤い学校で勉強し、5年生になってこの南屯に来て、引き続き6年まで勉強して、病気になって家に帰りました。そして、ふたたび学校に行かずに牧民になりました。私のブリガードでは、石炭を採掘し、放牧地が壊されて、こんなふうになってしまいました。それで、私たちはアパートに住むようになりました。良いことです。去年、風力発電所をつくると言われました。けれども、若者たちが認めません。お金をくれないとさせませんと言っています。また、草刈り場に大きな車が来て、土地を壊しています。風力発電所とふるさとを交換しないそうです。これは正しいと思います。わが若者たちはよくやっています。土地をうしなえば、手のひらほどの広さのアパートに住むほかいた仕方なくなりますよ。鉄道に沿って電線をひいているそうです。大きな車がやってきて、土地を掘っているそうで、2つの車を捕まえたそうです。いまどうなっているかよくわかりません。もうイミンの放牧地はなくなりました。放牧地がなくなったら、どうすれば良いのでしょうか。

1958年、私たちの地元で大きな洪水になりました。そのとき、モンゴル・ゲルのなかのものは妻子が持って行き、ゲルは男たちがもちあげて、何一つ被害なく移動しました。土地さえあれば、何があっても大丈夫です。

1冊の本があります。読みましたか？ダムビマーという人が書いた本です。その本に、バイトヨゴという青海の場所があると書いてありました。そこにブリヤート人が暮らしているそうです。民謡には、「バイトヨゴ、ナインナワ [伝説上の始原の地]」という歌詞があります。青海モンゴルの帽子がブリヤートのそれに似ているのは、ブリヤートのまねをしたからかもしれません。ブリヤート帽子がなぜそのようなかたちかというと、西チベットに「スーリン・ダツァン」という寺があるそうです。そこにいた活仏がブリヤート人たちにそのような帽子をあたえたと言われています。

注記：エルデン氏は2013年の清明節に亡くなった。インタビューで出てきた一部の名詞について彼の息子ダシニマに確認した。

## 14. ドルゴル

### 紹介

ドルゴル氏は、新バルガ西旗のサイハントル・ソムのフフ・ウンドル・ガツァの牧民である。現在、旗の中心アルタン・エメール鎮にいる老人ホームのなかのゲルに住んでいる。ドルゴル氏は、たいへんな苦勞をした人であった。しかし、よく話をしてくれる、親切なお母さんであった。ドルゴル氏は、インタビューのときすでに70歳だと言っていた。このモンゴル・ゲル地区に暮らす老人たちがひまな時間に繩をよってつくるようなちょっとした仕事をして、ソムのみんなのために少しでも力になろうとしている、と話していた。ドルゴル氏も繩をなっていた。

私たちは2010年8月13日の夜、最初のインタビューをして、2013年7月16日にインタビューをするために訪問したところ、すでに亡くなっていた。インタビュアーは、サランゲレル、ソヨルマ。

### 生活史から

**Q:** あなたの経歴を聞きに参りました。生まれ故郷、幼少時の思い出、氏姓、兄弟親戚、仕事などについて話していただけますか？

**D:** 私の名前はドルゴルです。実家はサイハントル・ソムです。わが姓はホイゴル・ツァガタンです。父の名前はオルゴンと言います。卯年の人でした。私には1人のアンバイがいました。アンバイとは、父方のおじのラマ僧のことです。おじラマは亥年です。おじはドゴルジャヴ長官をよく知っていました。パンズ [販子。商人を意味する中国語]・ボルの家で長年にわたってヒツジ飼いをしていました。そのとき、ドゴルジャヴ長官と知り合ったそうです。パンズ・ボルはたいへん聡明な人だったそうです。あらゆるものに対して「ザラハイ [決然 jueran か? ]」と言っていました。ザラハイとは、必ず、絶対という意味のことばです。わがアンバイのことは「シャル・ラマ」と呼ばれていました。本当の名前はゾーライと言い、あだ名がシャル・ラマでした。パンズ・ボルはザラハイ (本当に) 良い人だったと、おじのアンバイは言っていました。アンバイとは父方のおじのラマのことです。私の田舎では、ラマ僧になったおじのことをアンバイと尊称する習慣があります。

母は、父と21歳のとき結婚したそうです。当時、父方のおじのラマ僧が、パンズ・ボルの家でヒツジの放牧をしていました。そして、賃金の代わりに私にきれいな民族衣装を作ってくれたとアンバイが言っていました。パンズ・ボルの息子は少々問題児だったのか、あるいは正常ではない子だったようです。あるとき、ワンチンという人が、1人のロシア人と4人のヒツジ飼いを、パンズ・ボルの弟、息子と家畜を追ってオトルに出かけたそうです。満州里のてまえのシェーリン・ゴビという場所に着いて宿営し、越冬し



たそうです。ボルさんは場所を選んでゲルを建ててあげて、家に戻ったそうです。ボルの息子はツェベーンという子でした。ある晩、寝ていると、頭上で銃声でした。それで驚いて外に出てみたところ、ツェベーンという子が発砲していたそうです。それで、ツェベーンを荷車に乗せて移したそうです。4人のヒツジ飼いとおじラマがいたと思います。だれとだれがいたか私はわかりません。

私のアンバイは、ゴンゴル旗長、アムバン・ヨルホー [総督のヨルホー]、ヨンジョン・ハボン [副ソム長のヨンジョン] のヒツジも放牧していたそうです。そして、ヒツジを放牧していたとき、痩せたラクダに乗っていたそうです。あるとき、ヒツジを追っていました。ウマに乗った1人の人がアンバイに会いにきました。アンバイ・ヨンドンがラクダに乗っているのを見て、自分の鞍かけを取ってラクダのほうにかけました。そのウマに乗った人はトゥデブという人でした。当時の人びとはとても良い人たちでした。

私の父の弟はモーフブンという人でした。先ほど話したアンバイは父の兄でした。母が嫁いだとき、モーフブンという弟は病気でした。25歳でした。母のしゅうとめはセレンジャヴという名前でした。嫁に対して厳しい人だったそうです。私の祖母ですよ、セレンジャヴという人は。母は彼女の嫁です。

『グン・ゾザーン・ウドル・ホノグ (長い年月)』という本が出版されました。ドゴルジャヴの本です。ドゴルジャヴの本は、当時、北のロシアからブリヤート人女性がやって来て、パンズ・ボルの家で長く使用人をしていました。わがアンバイも長年にあたってヒツジを放牧していました。3年から5年は放牧していたと思います。ボルさんはもともと貧しい人でした。子どものころ、他人の家の家畜を放牧し、雑事に使用され、他人の家の隊商に同行するなどして、なんとか暮らしていました。ヨンジョン・ハボンのヒツジを放牧していました。そうこうしているうち、家に帰るときにヨンジョン・ハボンのヒツジの寝床からヒツジの糞を持って帰ったそうです。ヒツジの糞を持って帰ってダラルガ [招福袋] に入れました。家畜の恵みを持っていき、ダラルガに入れてまつたそうです。それで裕福になった、と言われていました。パンズ・ボルという人はたいへん勤勉でとても頭の良い人でした。ボルの妻はたいへん良い人だったそうです。ボルのツェベーンという息子はだらしない子だったそうです。そして、北から来たブリヤート女性の息子シャルフーを養子にとって、家財を譲ったそうです。シャルフーはパンズ・ボルの家系を継いだ人です。

文化大革命のときに、パンズ・ボルの妻は、息子夫婦と一緒に、新しい金持ちとして批判されました。パンズ・ボルは早く亡くなっていました。彼はまさに自分の両手で一生懸命働いて裕福になった人だったそうです。人をむさぼって財産をもつようになった人ではないと言われていました。しかし、文化大革命というのは、裕福な人を悪者扱いにするものでした。

わが父オルゴンは、満州里の周辺で徘徊している日本のスパイとして捕まえられ、ウ

ランバートルに送られました。のちに、わが父はダンザンという人と脱出してきました。1940年代にロシア、モンゴルの軍隊が入ってきて日本人を捕まえていました。わが父はウランバートルで刑務所に入れられたとき、ダランギーン・ダンザンという人と一緒にいました。そして刑務所のなかで知り合いになり、話し合っ、2人で脱出してきました。のちに、ダランギーン・ダンザンはふたたび捕まえられて行ったそうです。私の父はダランギーン・ダンザンのおかげでふるさとに帰ってくる事ができたと言っていました。ダランギーン・ダンザンは、パランの養子でした。私の父は私が6歳のときに捕まえられて7歳になったときに脱出してきました。父はふたたび1953年に逮捕され、監禁されて、1956年に釈放されました。日本のスパイとして逮捕されました。そして、戻ってきってから、体調が悪く、47歳の若さで亡くなりました。

わがアンバイはボルの家に戻ると、「私は現在、ナムハイ・ボドルに座って善を積んできた」と言っていたそうです。アンバイはボルの家で長年ヒツジ飼いをし、少々財産をもつようになったそうです。それで、私の家は300頭のヒツジ、30頭ちかくのウシをもつようになったそうです。ある年の大晦日の夜のこと、母はヒツジをまとめに行ったそうです。父は当時、日本軍の指揮官でした。2人の妻がいたそうです。私の母は第1夫人でした。第2夫人もいたそうです。その夜、私の母は第2夫人と2人でヒツジをまとめに行きました。第2夫人は真っ白なウマに乗っていたそうです。2人がヒツジをまとめて移動させていると、数人の兵隊がやってきたそうです。第2夫人は母に「大勢の人が来ています。このまま戻りましょう」と言ったそうです。それで、母は「家畜を狙う人はいますが、人を狙ってきたりはいしないでしょう。私たちは家畜をさっさと移動させましょう」と言って、家畜を移動させたそうです。そうするうちに、まさに大勢のウマに乗った人たちがやって来て、第2夫人のそばを通ると、[彼女の]ウマにムチをあてて、[第2夫人を]連れて行ったそうです。連れて行った人は、ヤンズガン・ジャミヤンという人でした。同じ地元の人でした。私の母は赤い絹の服を来ていたそうです。そしてその人がしばらく「畜群を」追っていましたが、[ロシア・モンゴル軍の]銃声が3度響くと、あのヘール・ハルザン[額に白い毛のある栗毛のウマ。連れ去った人のウマ]に乗った人は、[連れて行った第2夫人を]そのままにして逃げたそうです。そうして母は逃げたそうです。母は「ボグド山に向かって死のう」と思って走り、背の高いシャグシグという草[葦。イネ科ヨシ属]のなかをボグド山に向かって、落馬して隠れたそうです。シャグシグのなかで横になり、人や家畜の物音が消えた夜更けになって起き、家に戻ってきたそうです。それであの300頭の家畜、30頭近くのウシはハルハに連れて行かれたそうです。これは大晦日の夜のできごとです。そうして、全家畜をうしなつたアンバイが探しはじめました。

私のアンバイ、母、弟のバザルたちは、文化大革命のなかでたいへん苦しみました。1986年、ようやく名誉回復されました。弟のバザルは、ハイラルの学校に行つて卒業し

てきて、ソムの会計係になっていました。のちに、旗に転職しました。私の弟は腎臓の病気を患っていました。

100歳のなろうとしているソメヤさんの弟はビンバー、ソメヤの息子はミグメルといって、ザンギ [ソム長] でした。ミグメルの息子はマジグといい、旗役所に勤めていました。私は35歳で嫁ぎました。文化大革命を終えて、ボグドオール [ボグド山という意味]・ソムのフルン・ガツァのバドラハという人と結婚しました。バドラハの長男ボルドが13歳、次男がいくつでしたっけ？長女バルジマは25歳でした。このような3人の息子をもつ人と結婚しました。当時、主人は45歳でした。私より10歳年上の人でした。13歳の息子ボルドは草原の移動学校に通って文字を学習していました。ドゴルスレンという人が授業を教えていました。のちに学校に出しました。草原の移動学校にはおそらく2年かよったでしょう。私が嫁いだとき、姑は60数歳の人でした。

私は35歳で嫁になり、8年後に息子に嫁をもらいました。翌年に孫が生まれました。3人の孫がいます。孫たちは2人が男の子、1人が女の子でした。のちにみずから望んで離婚しました。なぜなら、私は嫁になるとき、1人の自分の子を実家に残して行きました。その子を私は弟の養子にしていました。のちに弟が亡くなりましたので、仕方なく離婚して、その子と一緒に暮らそうとしたわけです。離婚した翌年に、夫は亡くなりました。私の実子も37歳で不幸にも亡くなりました。そして私は孤独な独り身になりました。今年、私は70歳になりました。2009年に息子のボルドが来て、正月を一緒に過ごしました。私がいま居る場所は、実家のふるさとです。サイハンタル・ソムのホホ・オンドル・ガツァで暮らしています。1995年の夏、私は実家に戻ってきました。その秋に夫が亡くなりました。私は両親から兄弟6人でしたが、私は上のほうで、現在、1人だけ残っています。年間800元の年金をもらい、このような生活保障を受けています。また時々、よそに行って、家の番をし、わずかばかりのお金をもらいます。2人の弟の嫁が行きっています。たった1人の息子が独立しないうちに亡くなりました。

## 風俗習慣について

Q: 地元の風俗習慣について話してくれませんか？

D: 私たちバルガの習慣は特徴的ですよ（これについて詳しく聞こうとしたが、その次の訪問の際には亡くなっていた）。

## 15. セレン

### 紹介

女性。今年65歳。1945年の春に生まれ、酉年である。シネヘンのブリヤート・モンゴル人。ハルガナ姓で、シネヘン・ソムのテメーン・フズール・ガツァの牧民である。現在、120～130頭の小型家畜と、18～19頭のウマ、24～25頭のウシをもっている家だそうである。現在、家畜をよその家に頼んで、自身は末子と一緒に西ソム中心で定住生活をしている。

2009年7月22日にフルンボイルのエヴェンキ旗の中心、南屯でインタビューした。インタビュアーはサランゲレル、ソヨルマ。

### 生活史から

Q: 自分の家系、生活の様子を話していただけませんか。

S: 私の祖父はアムガランという人でした。祖母の名前は知りません。ロシアのブリヤートにいたそうです。祖母はこちらに移住してきませんでした。祖父母の息子ワンジルが私の父親です。私たちは兄弟5人でした。1番上の兄はダワーという名前で、2番めの兄はダルマです。3番めが私ツェレン（長寿という意味のチベット語）です。4番めが弟のバルタンドルジでした。ジャムスランの家に養子に出されました。末っ子の妹はニマー（バルジニマ）と言います。両親は私たちすべてにラマ僧から名前を請うてつけたそうです。すべてチベット語の名前です。1918年のころ、ロシアで赤軍と白軍のあいだの内乱となり、母が16歳のときにウマに乗ってこちらへ逃れてきたそうです。母は現在、生きていれば94歳であるはずで。母は1人で父方のおじについて来たそうです。父方のおじの名前はシャラブと言いました。母の名はドゥルマです。ウマに乗って逃げてきて、戦乱が落ち着いて故郷に戻り、両親と再会しようと思っていたそうです。しかし、時代というのはそんなに簡単なものではなかったので、戻ることはできませんでした。父は、母よりかなり先にシネヘンに来ていたそうです。私の両親はここシネヘンに来て知り合ったそうです。母には2人の弟がいたそうです。2人の弟はずっと幼く、こちらと一緒に来ることができませんでした。母はその家の養女でした。あの2人の弟は、その家の実子だったそうです。のちに、上の弟アユーシがドイツ・ロシアの戦争に参加して亡くなりました。下の弟はビャンバジャヴという人でした。

母のドゥルマは辰年でした。2人の弟は母よりおよそ12～13歳、年下でした。その家には子どもが生まれなため、私の母を養子にもらっていました。母を養子にもらったあと、2人の男子が生まれたそうです。1990年に私のダワー兄さん、ダルマ兄さんの2人が母を連れてロシアのブリヤートに行き、下の弟と会わせようとしてきました。しかし、当時、すでに弟たちは亡くなって2年が経っていました。そして弟の妻のルハムと会う

てきました。弟の嫁には2人の息子、1人の娘がいるそうです。長男はシャラブと言って、あとをついだそうです。次男はリンチンといい、現在、モスクワで医師をしているそうです。娘はツェツェグマといい、学校の教師でしたが、体調をくずして自宅で療養しているそうです。私も妹ニマーの一家4人と一緒に5人でロシアのブリヤートを訪問してきました。おもにアガのブリヤートに行き、母の弟たちの子孫たちと会ってきました。母の弟の1人娘のツェツェグマが2人の娘と3人で暮らしています。夫と離婚したそうです。

父方の親戚というと、メデグマが1人でウランウデに暮らしていました。夫を亡くし、子どもはいません。メデグマとワンジルの2人は、いとこにあたります。現在、メデグマが生きていればおそらく60歳前後だと思います。彼女は、タワー兄の長男ダンダルに財産をゆずりわたそうと呼び寄せたそうです。しかし、ダンダルは行きませんでした。なぜなら、ここに就職している人でしたから。彼はここの宣伝課で働いています。ダンダルはおよそ40数歳で、内モンゴルのモンゴル語専門学校を卒業した人です。

父ワンジルは戌年の人でした。いま生きていれば102歳だったはずです。ロシアからこちらへ来て、偽満軍に入りました。父には兄弟4人、姉妹1人がいて、合計6人きょうだいでした。ロシアの赤軍と白軍との戦争で、1番上の兄が殺され、のこった4人のきょうだいを両親がここシネヘン地方に送りました。こちらに来た4人の1番上のがヨンドンという人でした。2番めがガルサンジャヴというラマ僧でした。1965年に亡くなりました。3番めがわが父ワンジルでした。1945年7月に父は捕まえられました。最初はモンゴルに連れて行かれて監禁され、のちに包頭に連れてこられて、釈放されずに亡くなりました。4番めがチョイジヤルサンといい、同じく1945年に捕まえられました。彼はロシアに連れて行かれて監禁されたそうです。そして1989年にロシアで亡くなりました。しばらく監禁されてやがて釈放され、ロシアのアガのブリヤートの地でやはりラマ僧になっていて、1989年に亡くなったそうです。上のおじヨンドンは、1956年に父と同じ年に亡くなりました。1番上のおじのヨンドンは、私たちを養いながら亡くなりました。おじヨンドンには妻子がなく、同じゲルに住んでいました。父が逮捕されたあと、私たちの生活をささえ、養って育ててくれました。

私の夫はナイダンという人で、未年で、私より2歳年上の人です。私たち2人は牧民です。私たちには6人の子どもがいます。1番上の子が男でガルサンニヤム、やはりシネヘンの牧民で、2008年にロシアのブリヤートのウランウデ市に行きました。つい最近、ウランウデでレストランを開業しました。2番目めが娘でガルサンドゥルマといい、未年で、生きていれば40歳すぎで、2年まえに病気で亡くなりました。3番めが男でガルサンジグミドといい、現在、あとをつぎ、父と一緒に家畜を放牧しています。牧民です。嫁トンガラグは教師です。彼らには息子が1人いて、亥年で、今年、14歳です。中学校で勉強しています。4番めが娘のガルタハムといい、子年で、夫はドゴルスレンといい、

2人の娘と一緒に2008年、ロシアのプリヤートにわたり、現在、ウランウデにいます。5番めがツェンゲルという娘で、寅年で、現在、満州里で旅館を経営しています。6番めがツェレンマという娘で、辰年で、35歳です。嫁に行き、夫をリンチンといい、2人とも牧民です。1人息子がいて、チョイノンといいます。

**Q:** 文化大革命のとき、どんな状況でしたか？たいへん苦しみましたか？

**S:** たいしたことありません！文化大革命のなかで、牧主の妻として母をかなり批判しました。上の兄のこともやはり牧主の息子としてかなり批判しました。ほかはたいしたことありませんでした。1967～68年から批判を開始しましたが、わが家のゲルを押収することなく、中の家財道具は押収しました。そうして、空っぽのゲルが残されていました。私の服まで取り上げられて、衣服がなくなり、少々あわてました。おじのダワーやダルマは、ゲルまで取り上げられました。そして1年あまり、ものがなく、苦しみました。のちに返してくれました。

## 16. セベルドルジ

### 紹介

セベルドルジ氏はたいへん学識のある人であった。私たちが初めてインタビューしたとき、書齋で本を読んでいた。彼はモンゴル語と中国語のほかに、満州語も知っている。本棚の上に、いくつかの満州語の本があった。「私は子どものときから、読書が好きでした」と自己紹介した。その地域の多くの人が彼のことを「セー先生」と敬称し、「たいへん知識のある人」「たいへん学識のある人」と賞賛していた。そこで、私たちはわざわざ彼をたずねてインタビューをした次第である。

私たちは2010年8月13日の夜に、セベルドルジを初めて訪問し、インタビューをした。2013年7月16日にふたたびインタビューをした。インタビュアーは、サランゲレル、ソヨルマ、小長谷有紀。

### 生活史から

**Q:** あなたの経歴に興味をもって来ました。生まれ故郷、幼少時のおもしろいこと、氏姓、兄弟親戚、仕事などについて話をしてくださいませんか？

**S:** 私はもともと新バルガの西4旗の南東部に位置するホボート・ホホ・テルグーン・ソム（鑲藍第1旗）のグイツレグ姓のウルジーの次男として1931年に生まれた者です。私のふるさとは、フルン湖の南岸、ポイル湖の北岸、オルシオン川の西岸沿いで、バルガのボグド山の南北の麓を往来して遊牧していました。

私の父は1895年に生まれ、ウルジーという名前でした。母は1910年に生まれ、バヤルという名前でした。私たち兄弟は9人でした。私には3人の姉、1人の兄がいて、3人の弟と、1人の妹がいます。実家は当時の中ぐらいのレベルの生活の家でした。およそ400頭のヒツジ、40頭のウシ、およそ10頭のラクダ、3～4頭の騎乗用のウマがあり、生活は足りていました。他人を雇う必要がなく、他人に雇われる必要もなく、自分たちでまとまった生活のできる家でした。私たちが子どものころ、祖母は、たくさんの孫たちに囲まれ、彼らの教育に大いに貢献しました。祖母は1941年に74歳でこの世を去りました。当時、私の兄と姉たちは20歳ちかくになり、家事に慣れて、役に立っていました。父はおよそ20歳から、国境警備隊の十戸長でした。満州語は普通に話せたそうです。軍の仕事で10年しました。のちにソムのボシュグ〔旗の公文書伝達係〕の仕事で10数年こなしました。ボシュグというのは、いまどきのことばでいうと補佐の仕事です。父が若いとき、私たちの地元には公立学校がありませんでした。父は幼少時、地元の知識人に満州文字を教わってもらい、文字を知るようになったそうです。父は48歳のとき、「年をとりました、体調が悪い、公務をやめよう」と請うて、公務を引き渡し、家に帰って本当の牧民になっていました。当時は子どもたちが大きくなり役に立つようになっていたの

で、父が家の仕事にみずから携わることもなく、老後には読書をしていました。父は仏教を篤く信仰していて、彼の読む本はたいい仏教関係でした。『チョイジド・ダギニ（天女）物語』『ドルジジョドバ』『サランホホ物語』『オシャンダル・ハーン物語』『ウイリン・ウル・ノモルソン語録』『物語の海』『モロン・トイノ物語』といった書籍がありました。当時、わが地域では、黄教（チベット仏教の黄帽派）がたいへん普及していました。2人の息子がいれば必ずどちらかがラマ僧になっていました。4人の息子がいれば2人がラマ僧になっていました。私の兄がラマ僧でした。私の上の弟もラマ僧でした。この2人は7歳のとき、ラマの修行をするため、学校には行きませんでした。小さいころから、チベット語の教典を学びました。のちに識字運動のもとで、モンゴル文字も学び、文字を知るようになりました。彼らは若かったため、のちに還俗し、世帯をもち、子どもをもつようになりました。父は1957年に亡くなりました。

母は聡明で勤勉で、理解力があり、裁縫がうまく、器用な人でした。彼女は子どもたちを自分のような人に教育することができたため、姉たちはみな勤勉として有名な牧民女性たちでした。3人の姉たちはみな17歳のとき、昔の慣習どおり、両親が決めたところへ嫁がせました。私たちの3人の弟妹（1人は妹）は幼かったので、みな学校へ入り、教育を受けました。弟のアディヤスレンと私は同じ家に長く一緒にいました。私は40歳で、弟が30歳になるまで一緒にいて、その後離れました。

## 学歴

Q: 教育を受けた経歴を紹介していただけませんか？

S: 私は7歳から満州文字からはじめて、満州語の『テイシウ』『センゲー』『エンドウレンゲ』を教わり、理解することなく暗記していました。のちに、これら3冊の本のモンゴル語版を教わり、暗記しました。しかし、私の家庭教師のシンド・ザンギは、私に満州文字をモンゴル語で訳すことを教えませんでした。のちに私はホポート・ホボ第2ソムのワイラン（ビチクチ [ワイランは満州語、ビチクチはモンゴル語で書記のこと]）、ジャンジャーギーン・ホルローに弟子入りし、モンゴル文字を学びはじめました。この文字には、上・中・下に位置する3つの変形があるので、文字を識別するのが簡単でした。ホルロー先生は私に文字を教えおわるとすぐ、小学校の3～4年生用の国語の2冊の教科書を教え、それが終わったとき、私は文字を熟知し、いろいろな本が読めるようになっていました。ホルロー先生は私に「たくさん本を読んで、熟練するためにつねに努力しなさい」ととくに教えていたことは忘れがたく、家で父が読んでいた宗教の本を読みあさり、文字を熟知するようになったため、幼い頭に宗教の知識を吸収し、信仰深くなり、数珠をもって教典を読むような子どもでした。とにかく、私は生涯、すべての人間と動物をいとしく思いやる心をもつ人として育てられたのは、幼少時に読んだ書籍たちが直接影響をあたえた結果です。



1940年から46年のあいだに、私は旗の小学校で勉強しました。私が小学校におよそ7年間勉強した歴史がある者です。1940年に小学校に入り、1947年に卒業して中学校に進学しました。当時、わが小学校の生活はたいへん悪い状態でした。食の質は悪く、飢えていて、木製の寝台の上に子どもたちが一緒に寝ます。寝床には蚤がいます。そうするうちに、疥癬にかかり、学校に入った2年目に家に戻りました。病気がなおってから、学校に戻り、引き続き勉強しました。1945年に日本が負けたとき、私は5年生でした。1946年に6年生になり、1947年の春にハイラルの第1中学校に入り、勉強しました。そして、当校の教師クラスを卒業し、西旗に来て小学校の教師になりました。

私が小学校にいたときは、ちょうど日本の侵略者たちがわがふるさとを占領していた時代だったので、学校で国語、数学、日本語のような3つの授業を勉強していました。音楽、美術、体育などの副科目がほとんどありませんでした。小学校に入るまえに、私の国語の基礎がよかったので、小学校時代には優秀な生徒に数えられ、いつも嬉しく思っていました。私たちの小学校で勉強した歴史は、本当に飢餓の歴史でした。年間、ヒツジ4頭、偽満のお金で30元が徴収されます。それで、学校の食事は朝、夜同じく粟粥でした。病気で1年間家に戻ってふたたび学校に戻ると、さらに食事が悪くなっていました。学校には多いときで80人あまりの生徒がいました。ときには、料理人が肉を買って行って戻ってこなければ、それを理由に食事を作りません。料理人が料理を作らないので、生徒たちは食なしで夜をすごし、食べられません。おなかがすいて死にそうになります。日本語、モンゴル語、算数の3つの授業が中心でした。美術の授業もあったのですが、教師がいないので、教えてくれませんでした。音楽の授業も教えてくれませんでした。ときどき体育の授業はゴー・シャルフという先生が来て教えるので、良かったです。体育の規則を教えて、早く力をのばしてくれました。整列の練習、そろって歩く、命令に合わせて行進するなどの基本を教えていました。このゴー・シャルフというのは17歳の若い先生でした。私たちの学校に来てから2年もすると、徴兵されて軍隊に行きました。数年後、私はある図書館にいたとき、突然、1人が私の肩をたたくので、振り返るとあの体育の先生でした。「名前を忘れましたが、だれでしたっけ？私の生徒だったよね」と彼は話しました。彼はモホルト（モリンダワー）のダグール人でした。あの先生は西旗の小学校に来て本当に私たちの体育の授業をよく教えてくれました。当時の日本語を日本人の先生が教えていました。当時、日本語をよく勉強し、良い基礎を作りました。日本語の先生はイサクラという先生でした。しかし、日本が敗戦したので、日本語も不要になり、やめました。私はいまたいへん後悔しています。算数も放棄しました。のちに、師範学校を卒業して来たジグジドスレン先生が来て算数を教え、私たちをかなりよく指導していました。四則演算を半年で教えました。中学校に入るようなレベルに達しませんでした。私たち10数人の生徒たちは入学試験を受けましたが、ほとんど合格できませんでした。私のほかにもう1人、あわせて2人だけが中学校に進学し

ました。各地から来た生徒たちのなかから、合格しなかった子どもたちを予備クラスに入れて勉強させていました。中学校の3年生になったとき、師範クラスというのが設立されたので、私は師範クラスに入って勉強し、卒業しました。小学校時代には最優秀であると慢心していました。しかし、中学校になると全クラスのなかで17位になり、落ち込みました。私より小さい子と比べても成績が悪かったので、思えば思うほど悔しく、泣いていました。そして努力して、次の年には良くなりました。小学校で教えたとき、私は3年生の後半からはじめて、彼らの算数を教えました。私には自信がありませんでしたが、中学校の試験を受ける生徒たちの成績を少しでもよくするためになんとかがんばって教えて、4年生を卒業するときには、旗に生徒たちを連れて行き、試験に参加させました。1人をのぞいて全員が他のソムの生徒よりも高い点数を取りました。私の努力が無駄にならなかったと喜びました。

1947年2月から1950年2月までの3年間に、ハイラルの第1中学校で勉強し、教師のクラスを卒業しました。1950年3月から1950年8月までに内モンゴルのモンゴル語専門学校で勉強し、卒業しました。1957年9月から1960年7月まで当学校に残って教えました。このあいだに、私は内モンゴル大学の夜学部を卒業し、高等専門教育の卒業証明書を取得しました。1960年9月から1965年8月まで、ハイラルの第1中学校で教えました。この間、私は内モンゴル師範大学の通信教育部で3年間勉強し、大学の卒業証明書を取得しました。そしてわたしは、読書の好きな人に分類されます。職場でもみずから学び、つねに向上することを心がけていました。

私より年上の人は、昔のことをよく知っています。母方から有名な学者を2人輩出しました。母方のおじの知能が甥にしみこむということわざがあります。私のこのわずかな知恵は母方の血筋かもしれません。父は家庭教師から文字を教わり、それほどの知識人ではありませんでした。しかし、宗教関係の本をよく読んでいました。私も定年になってから、たくさん読書するようになりました。宗教の本もよく読みます。宗教については不思議に思います。趙国の歴史は500年つづきました。ヨーロッパではローマの歴史がもっとも長いと言われていました。イスラムには1600年の歴史があります。仏教は2000年あまりの歴史があります。キリスト教にも2000年あまりの歴史があります。世界ではどれだけ発達した国でも宗教を消すことができません。大学の学者たち、金持ちたちは信仰が篤いものです。たとえば、ヨドさんは大学を出ても五台山に行ってラマになったそうです。それで、私は宗教を不思議に思うわけです。

父は老後に仏教関係の本をよく読んでいました。母の祖父がソムのワイラン（書記）でした。たいへん教養のある人だったそうです。母の祖父はトクトフという人で、彼の息子はミジギン・ミンジトといいます。私の母方のおじです。母方のおじの学識は甥に現れると言われます。母は文字を知りませんが、とても記憶力の良い人でした。父は私に「テイシウ」を教えていたとき、母はそばで聞いて記憶していました。母は集会に参

加して、幹部たちがまちがった発言をしていたことを家でよく話していました。母のもの名前バグマでした。自分の両親からもらった名前です。嫁に来てからバヤルという名前になったそうです。バグマという名前は、父の忌避する名前でした。ラマ僧から名前を請うと、ウルジーの妻にはバヤルという名前をあげようと、バヤルになったそうです。父は60歳まで生きました。しかし、母は長生きしました。1901年に生まれた人で、1984年に亡くなりました。80歳生きました。私の母はダランゴード姓の人でした。ホーチ・ダランゴードと言います。私はヤディ・ダランゴード姓です。ソヨルマ先生、あなたはゴチド（ゴシド）姓だったでしょう？

Q: あなたはハイラル第1中学校を卒業して、進学しませんでしたか？

S: 当時、全内モンゴルに高等学校がありませんでした。私たちは中学校を卒業してから、進学する学校はありませんでした。当時、文字を知る人が少なく、全旗に教師や幹部がたいへん不足していました。若者たちが非完全小学校を卒業してすぐにも働いていました。非完全小学校とは、4年勉強するものです。さらに旗の完全小学校で2年間勉強すれば、完全小学校の卒業になります。学校に行かずに文字を知っているだけで先生にしていることもありました。当時、文字を知る人が少ないのでしかたありません。私は1950年に西旗のソムの学校で教えはじめました。のちに校長になり、のちに旗の小学校に転勤し、教えるようになりました。そうして、1954年に大学に行きました。大学に行きたいという私の申請に対して、旗長は許可しましたけれども、師範大学に出願しようとしたが、締め切りに間に合わず、申請できませんでした。こんどは医学校かモンゴル語専門学校だけがまだ間に合い、申請できる状態でした。それでモンゴル語専門学校に申請し、そこで勉強しました。そこを1957年に卒業し、この学校に残って教えました。フフホトで2年間働いて故郷に転勤しました。私には牧民の妻がいるので、故郷に近づかなければなりません。そして、1959年に故郷に戻り、ハイラルの第1中学校で国語の教師になりました。

それで私は作品を書くようになりました。なぜかという、人に作品の書き方を教えるくせに、教える人がみずから書かなくてどうする、と考えたからです。それで、私は各新聞雑誌に作品を掲載するようになりました。5年間教えながら、多くの作品を書きました。そうこうするうちに、フルンボイル新聞社に転職しました。新聞社に1964年に行きました。そこで17年働きました。そして1981年に新聞社から転職しました。新聞社ではまず編集者になりました。それから編集室の主任になり、その先さらに総編集長になっていました。1981年に旗の党委員会に転職して3年間働きました。そのあと、人民代表大会委員会に移って働き、1984年に、定年まえに退職しました。なぜ、定年まえに退職したかという、私たちが下りないと若者たちが出て来ることができないからです。私たち年寄りが人の場を占めてどうしますか。私はマジクと相談して、定年まえに早めに仕事をやめて休みました。妻と一緒に数年間、家畜を放牧しました。のちに、私

が64歳のとき、妻が亡くなりました。妻は私より2つ年下でした。62歳で亡くなりました。それから私は家の隅を占めて「おとなしく」本を読んでいます。

**Q:** 幼少のころのおもしろいことを話してくださいませんか？

**S:** 何を話して尽きますか。話は尽きません。もっとも印象的なのは、小学校で飢えた経験です。夏冬関係なく、1日2食しか出されません。ほとんど数切れしか肉が入っていない、薄い粟粥を食べていました。あるとき、孔子をまつて「一般にモンゴル人のあいだでは孔子をまつらないが、1940年の1度だけ実施された」1人に2切れの揚げ菓子がくばられ、その日は食事無しで過ごしました。1945年の秋に、学校の職員たちがヒツジを調達に行つて戻らないので、料理人が食事をつくらず、食無しで夜をすごしたことは1回だけでなく数回あったことをみずから経験しました。学校には1人の用務員がいて、その人が4～5日に1頭のヒツジを解体するとき、手つだった生徒に1個ずつ蹄の骨（褒美）を渡していました。手に入れた骨は、皮をむいて生のまま食べていました。つぶしたヒツジの毛皮についている脂肪をこそぎ取る生徒もいました。それほどめずらしい「収穫」を私は得ることができませんでしたが、得られるものなら得ようと、ヨダレを飲みこみながら見ていました。人は、飢えると食べることのほかを考えることができなくなるようです。昔は、獣脂にあきていたことや、おいしい食を食べていたことを振り返って思い出すようになるのですね。

**Q:** 生徒たちの食や学費などを徴収していましたか？

**S:** 毎年、食用のヒツジ4頭、偽満のお金で30元を徴収していました。この30元は3頭のヒツジの値段に近いものですよ。学費は安くはなかったということです。そのため、貧しい家の子どもの費用を捻出することができず、勉強する機会がなく、取り残されるわけです。にもかかわらず、学校の生活は困難で、管理が悪かったのです。1943年の夏、生徒たちに腐って緑になった肉を穀物と一緒に煮て食べさせて、生徒たちは全員おなかがいたくなり、下痢になり、セデン、シャンジミトブの2人が亡くなりました。私も20数日下痢して、死ぬほど寝込んで、ラマ医からモンゴル薬をもらってようやく生き残ることができました。

**Q:** 学校の生活はたいへんでしたね。民衆の生活は全体的にどんな状況だったのですか？

**S:** 半封建、半植民地的な社会なので、貧富の差があるでしょう。年寄りたちの話によれば、日本が私たちの土地を支配していた10数年は、歴史上、もっとも不安定な時代だったということです。家畜の税金は毎年上がっていました。生地や日用品が年々減っていました。生地といえば、白い洋布のほかにはなにもなくなっていました。それさえ量を規制して供給する貴重なものでした。糧食は完全に統制配給になったのみならず、のちには牧民たちがそれまで食べたことのないソバ粉やトウモロコシ粉を配給するようになりました。こんな粉をどのように調理して食べるか、牧民はまったく知らず、でたらめに料理して、仕方なくまずいままにしか食べることができませんでした。多くの家畜を

もつ裕福な人たちは比較的飢えることなく過ごしていたと思います。

日本の侵略者たちがここに来るとき、わが旗には60万頭あまりの家畜がありました。1945年に日本を倒したときには、23万頭の家畜が残っていました。これは歴史的に記録された数字です。日本が来るまえにわが家には400頭あまりのヒツジ、40頭あまりのウシをもち、この地域では中流の生活をする家でした。1945年になると、200頭足らずのヒツジと20頭足らずのウシをもつ貧しく暮らす生活になっていました。軍馬を徴発する数は年々増えていました。5頭しかウマをもっていなかったのがわが家からはウマを挑発しなかったのですが、1945年には5頭のウマから1頭を軍馬に提供しました。

### 当時の歴史的状況

**Q:** 日本が負けた直後にはどんな状況だったのですか？

**S:** 日本を倒した直後に、私たちの地域がだれの手に入るかという問題がでてきて、民衆はたいへん関心をもっていました。モンゴルに移住しようか？国民党の手に入ろうか？八路軍についていこうか？ということできざまな推測がでてきて、流言が広がっていました。1945年の秋冬は、流言飛語が充満したと言っても過言ではありません。東旗のホボート・ツァガーン（鑲白）の一部の人たちがボイル湖の北側のわが故郷を通過したのを、東旗がみんなで移動しているという噂が出て、私たちはどうすればいいか？移動するのか？しないのか？とウマで駆けつけて来て私の父に質問する人が増えていました。父は「移民しても良いことには出会いません。苦しんでも故郷で苦しもう」と答えていました。わが旗の西部に暮らしていたサンダグズという人がいました。彼はウマに乗って家々をまわり、故郷の人たちをモンゴルに移住するよう動員していたことに対して、わが旗長ゴンゴルジャヴは命令を出して、サンダグズを逮捕し、刑務所に入れたことにより、モンゴルへ移住する動きがおさまったそうです。このようにゴンゴルジャヴさんは、西旗の民衆を安定させるために地元の有識者たちに連絡をとり、彼らをとおして勢力をつよめ、仕事を展開していたのちに聞きました。ゴンゴルジャヴはのちに、盟の副長官になったのですよ。刑務所の監房を開放し、学生の宿舎にしてくれました。それでサンダグズを隣の監房に監禁し、彼は夜になると叫ぶので、女学生たちが怖がっていたと言われています。

**Q:** 東旗の一部の人びと西旗の領地をとおってモンゴル国に移住した状況に対して、西旗の人びとも同調しなかったのは、ゴンゴルジャヴの業績であると、あなたはみなすわけですね。

**S:** そうですね。ゴンゴルジャヴさんはまさに当時の騒乱から地元の安定を守ったのみならず、多くの人びとの命を危険からすくった恩人である、と言っても過言ではありません。ソ連の軍隊が入って来ると、旗の中心アルタン・エメールにいる全人口が分散しました。数日後、ゴンゴルジャヴはみずからの運命がどうなるか知らず、恐れてはいたも

の、逃げて何になろうか、逃げてどうしようもないので、出頭することに決めて、旗の中心にいたソ連軍の責任者を訪問し、モンゴルの大臣ルハムスレン、ダワージャヴたちが来ていたので、直接、面会しました。そして「私は日本の統治のもとで限界のある権力を持っていたのですが、旗長をしていました。どんなまちがいがあろうとも責任をとるつもりでやってきました……」などと話して、モンゴルの代表は「あなたが日本のスパイでないなら、旗長のままでかまいません。日本は必ず地元の人を使います。あなたはみずから出頭したのがよかったです。あなたはいま、地元の仕事を継続してください。管理業務を継続してください。まず何より先に、日本のスパイ、軍隊、警察だった人たちのリストを提出する必要があります。これらの人たちを法律で処分すべきです」と言われたゴンゴルジャヴは、「日本のスパイは法律でさばいてもいいです。軍隊と警察は旗の任命で強制されて任務を執行していた人たちで、好んで日本のために働いたわけではありません」というようにみずから責任をとって説明したので、スパイは捕まってモンゴルへ連れて行かれましたけれども、軍隊や警察だった人たちは捕まりませんでした。ちょうどこのときに、私たちのとなりの新バルガの東旗の旗長だったベグズという人は、ソ連軍が日本軍を負かしに来たとき、田舎の家に逃げ出して、旗の中心に戻ってこないままにしているうちに、モンゴル側が東旗の日本人スパイを逮捕するのみならず、軍隊や警察にいた人たちを全員逮捕し、100人あまりの人たちがこの時代の混乱の犠牲として気の毒にも長年にわたって苦難を味わい、あるいは命を落としました。

Q: あなたの父は地元を守るという見識をもちながら、みずから回りに影響をあたえていましたね? これについてはゴンゴルジャヴさんと連絡をとりあっていたのでしょうか?

S: それについて私は知りません。子どもでしたから。父はゴンゴルジャヴと知り合って関係があったことを私は知りませんでした。ゴンゴルジャヴの指示を他の人が父に伝えた可能性は否定できません。私の父はいわゆる有識者の1人でした。1947年にウランホトで内モンゴル自治政府が設立された5月1日の大会に、父は西旗の代表で参加し、ウランフーを代表に選出する票を投じたそうです。1950年の10月1日の第1回の建国記念行事に、父は西旗の代表として参加し、毛主席を代表とする党と政府の指導者たちと面会し、北京の工場や観光地を見学しました。この2つの重要な会議に対して西旗から父を代表に任命した理由は、1946年の騒乱のとき、地元の人びとを安定させたのはある程度父が影響をおよぼした結果だからだろうと、考えています。父は盟の模範労働者になっていました。模範のメダルを弟が大事にしていました。

## 仕事の経歴

Q: あなたは自分の仕事の経歴を話していただけますか?

S: 私の仕事の経歴は非常に簡単です。若いころは、小学校、中学校、中等専門学校などで10数年教えました。私は教師の仕事をやめようとはまったく思っていませんでした。

しかし、1965年8月に盟から突然、公文書が来て、私をフルンボイルの新聞社に転勤させました。当時、私は新聞雑誌にいくつかの作品を掲載していたので、そうなったのだと思います。本当は、私は作家ではなく、若いときに物を書く人が珍しかったので、新聞社が私に目を付けたようです。

**Q:** あなたは仕事に努めたので、社会的に名誉を得たのではないですか？

**S:** 私は何をしても一生懸命する人間です。小学校で教えていたとき、旗レベルの模範教師として2年連続選出されました。盟レベルの模範教師としても2年連続選出され、自治区レベルの模範教師として1年選出されました。フフホトのモンゴル語専門学校にいたときにも表彰されました。社会主義を建設する若い優秀者に選出されました。のちにハイラルの第1中学校で教えたときには、4年連続して市の優秀教師に選出され、みな模範となりました。教えるときにしっかり教える先生になろうと関連する書物や雑誌を読んで、みずから向上させることを心がけていました。私の努力をみんなが高く評価し、私を模範教師に選んでいました。小学校の教師だったとき、私は自治区級の模範教師に選ばれ、表彰されていました。小学校で教えていたあいだに、ハイラル市の優秀労働者会議に毎年、選出され、参加していました。新聞社に転勤したあと、編集者、記者、編集課長、副総編集長などのポストをこなしていました。1981年8月に地元の新バルガ西旗の党委員会の副書記長として転勤し、1985年に旗の人民代表大会常務委員会の副主任の地位にいて、1986年に退職しました。

## 家庭の状況

**Q:** 家族について簡単に紹介していただけませんか？

**S:** 私の妻はマジクスレンといい、私より2歳年下です。学校に通って勉強をしたことがなく、勤勉でおとなしく誠実な牧民女性でした。私が小学校を卒業するまえ、旧社会の古い習慣にしたがって、私の両親が決めて、私たち2人を天窓のあるゲルのなかに頭を近づかせて1つの家庭にしました。私たちには4人の子どもがいて、2人の息子と、2人の娘がいます。長男は公務員です。この長男には1人の息子と1人の娘の2人の子どもがいます。私の2人の娘は牧民で、現在みな旗の中心で暮らしています。長女には1人の息子がいて、次女には2人の息子がいます。彼らはみなそこそこの生活をしています。次男は内モンゴルの仏教学校を卒業し、わが旗のダシボンサク寺でラマ僧になっていました。病気で亡くなり3年経ちました。現代のラマ僧なので、妻子持ちで、1人娘が中学生です。

## 老後の現在

**Q:** あなたは地元でもっとも高齢の知識人です。いまもぼんやり過ごさずに、本から離れられないと聞きました。何か作品を書いていらっしゃいますか？

S: 私は子どもたちの生活に少しでも足しになろうと、何とか家畜をもたせようと思って、56歳のとき定年まえに退職し、妻と7～8年家畜を世話しました。1994年に妻が亡くなったあと、私はつねに家にいて家の隅を守るようになりました。若いときに勉強しよう、向上しようとする習慣をつちかいました。年をとった現在でも、ひまつぶしに本を読むようになりました。作品を書くことはできません。ただぼんやり過ごそうとしても社会は私にそうさせないようです。旗盟市地区さらに中央モンゴル語放送局がインタビューを取ろうと記者が訪ねてきます。あなたたち3人のような研究者がやってきて、いろいろ質問します。旗の何かの集会に年寄りが必要になったら、私を参加させます。作品を書きはじめている若者たちが原稿を持って来て校閲してください、修正してください、助言をください、ということもあります。近年、地元の作家たちの書いた本に、彼らの依頼により、5冊の本に前言を書いてあげました。いまでも、旗の文化歴史資料を整理編集している人に、校閲の面でできるだけ手つだっています。

私は晩年、社会に貢献しているということで、旗の党と政府の責任者から、2009年に道徳模範として表彰状を贈られました。

Q: あなたはこれほど高齢でもパソコンを使っていらっしゃるようですね。

S: もともとパソコンを習おうと思ってはいませんでした。それでどうするということですか。こんな年になって。いまになって目にも悪いといわれているのに。しかし、もう年寄りになった私の弟子たちが80歳を祝う盛大な会をもよおし、コンピュータを記念に贈ってくれました。ちょうどこのとき、わが旗の老幹部局の年寄りたちのためのコンピュータ教室が催され、3週間の授業がありました。それに参加して勉強し、初歩的な使用方法を身につけ、コンピュータでひまをつぶすようになりました。あなたたちのように多くの機能を完全に使うことはできません。モンゴル文字、漢字の入力方法はわかります。怠け者なので、なかなか熟練することはできません。年寄りの生徒たちのおかげで、当代の新しいものを知ることができました。

Q: 幼少時にたくさんのお読みになりましたね。どのような本に興味を示していたのですか？

S: 私が子どものときに読んでいた本には、『天女物語』という本がありました。ある人が死んで地獄に落ちて罪を犯した人たちがどう苦しむかを見て戻ってきたという粗筋の作品です。また、『サランホホ物語』『モロムトイ物語』『アシャダラ物語』『ウイリン・ウリグ・ノモルソン物語（ラインボラ）』などの本をすべて読んで宗教に深く親しみました。しかし、私は俗人ですので家畜を屠る必要があります。ほかに屠る人がいないのでしかたありません。しかし、私は家畜を屠るのが好きではありません。それで私は両親をたいへん悩ませていました。ユムダシン・セデヴたちもこの本をよく読んでいました。『ウイリン・ウリグ・ノモルソン物語』はバヤルサイハンの息子が写し書いたそうです。ガーダの父バヤルサイハンボルゲドの父バヤルサイハンの2人は、家庭教師でした。た



くさんの弟子がいます。私の家庭教師は、ジャンヴィン・ホルローという牧民でした。当時、ソムの書記でした。ソム長の本や書類を読んで書けと言われたものを書いていた人でした。ジャンヴィン・ホルロー先生は私にアルファベットを教えたあと、『テイシウ』『セングー』『エンドゥレンゲ』などを教えました。『テイシウ（人々）』とは満州語でそれぞれ『正しい規律を守らせる40項目の秀典』『セングー（老人）』というのは『年長知識人の家庭教典』、『エンドゥレンゲ（仏）』とは『仏の教えの理解実践の書』です。『正しい規律を守らせる40項目の秀典』というのは、40項目の社会的教訓の本です。『エンドゥレンゲ』には16章があります。同じく4つの教えです。この3冊をすべて私は満州語とモンゴル語で教えてもらいました。『テイシウ』と『セングー』の2冊は父に教わりました。『エンドゥレンゲ』はセングー・ザンギ（ソム長）に教えてもらいました。およそ1年間ついて勉強しました。その家について移動しながら教えてもらいました。セングー・ザンギの息子も学んでいました。しかし、その子はあまり勉強しませんでした。

ゴンゴルジャヴ、シャグダルジャヴは兄弟です。1917年に移動した人びとのことをよく書きました。デー・ゴンゴルは『家畜を知る方法』という本を書きました。彼は偉い人ですよ。大臣級の人でした。外国の大使館で長年勤めました。ドイツの大使館にいました。ロシアの大使館にもいました。デー・ゴンゴルはもともとバルガ人ですよ。バリヤーチ（接骨医）に関する本を書いていると聞きました。本人もバリヤーチです。

文化大革命のときに、すべての本をだめにしました。ブドゥーン・ナムジルという人がいました。1950年代に彼は旗の文化教育課の課長を務めていました。当時、上から指示が出て、古い本を集めて旗で保存するようになりました。それで、ブドゥーン・ナムジルが西旗の知識人たちから古本を集めてきていました。ブドゥーン・ナムジルもまたたいへん教養のある人でした。あれらの古い本をソモル〔細長い袋〕で運んで来たそうです。しかし、文化大革命のさなかに、それらの本を積み上げて燃やしたそうです。そのことをシー・バトが話していました。サンディ・ザンギという人もたいへん教養のある人でした。私は1970年にキャンペーンに行きました。1970年8月から1971年5月まで私は西旗のハーンオール・ソムに行って、党を整理する作業班に参加して働きました。ハーンオール・ソムの5つのガツァで実践しました。当時、3階級の幹部で形成された作業班が行きました。ツォグ・ザンギは封建的な幹部ではない、と報告をしました。この報告書は私が書きました。第1に、新旧社会の境目でソム長になり、封建勢力が弱まった時代にソム長になった人です。第2に、彼は新しい社会でつねにおとなしく誠実によく働きました。第3に、過去、悪いことをした記録が1度もありません。民衆は彼に対して何1つ恨みを持っていません、と書きました。

けだし、毛沢東の路線を完全に否定してはいけません。世のなかのものごとには善悪両面があるのと同様、毛沢東の思想にも2面性があります。若者たちが、当時の状況をよく理解せず、すべてを批判し、逆らって否定しています。それは正しくありません。

まちがいを批判し、正しいことは評価すべきです。歴史というものは時代の流れに合わせて書き換えてはいけません。ありのままに書くべきです。そうでなければ、のちに役に立たないものになります。何に対しても正しく評価することが大事です。いまから見ると、毛沢東時代の政策には、少なくとも2つの良いことがあります。1つは識字運動により、多くの人が文字を覚えたことです。文盲から多くの人が脱出しました。これは良いことでした。あるとき私が校長の家を訪問して話をしていると、校長の生徒だった知識青年が田舎で仕事をしたあとふたたび大学生になって挨拶に来て、そして彼らは田舎に行った収穫を話していました。当時、私には深い印象を残した話がありました。たとえば、1つは、草原の牧民たちは視力がよく遠くを見ることができると言っていました。2つは、歯が良い、アーロールやホロートのような固いチーズを普通に食べます。高齢者も歯がいい、と言っていました。3つは、農耕村落の農民と異なります。彼らはみは文字を知っている、と言っていました。それらの大学生に私は感銘を受けました。本当に毛主席の文化文字学習、文盲をなくす政策は良かったのですよ。そのおかげで、私たちの牧民たちはみな文字を覚えていました。毛沢東の思想のもう1つの良い面は、国を守る衛生運動を推進したことです。当時、各家を訪問して衛生状況をチェックしていました。衛生状況が良い家には旗をあげて、衛生状況を制度化しました。全世帯が洗面台をもつようになりました。全員が手ぬぐいをもつべきだという運動は先進的でした。こんな良いことだったのですよ。私たちはすべてを否定してはいけません。

Q: インタビューを受けていただき、ありがとうございました。

S: 感謝されるようなこと、何がありますか。何もありません。研究者や学者にとっては時間が重要です。無茶苦茶なことを言って、みなさんの時間を無駄にしたかなと心配しています。

注記：テイシウ、センゲー、エンドゥレンゲという3単語は満州語である。3冊の書名の冒頭の単語でその本のことを指すという習慣が一般に定着していた。3冊の書名をそれぞれモンゴル語にすると、

- ① テイシウは、人々に良い規律を守らせる40項目に関する重要書
- ② センゲーは、年長知識人の家庭教育の本
- ③ エンドゥレンゲは、私の教えを理解し実践させる本

説明：「日本民族というのは不思議な人たちですね。侵略の歴史を理解していない面があります。私が話していることは本当のことです。嘘はまったくありません。日本の悪口を言っているわけではありません。実際にあったことだけを話しています」と、彼は電話をかけてきて何度も説明した。

## 17. セデヴドルジ

### 紹介

本当は、ツェデヴドルジ（バルガ方言でセデヴドルジ）というそうである。ボグドオール・ソムの牧民であった。現在、旗の中心アルタン・エメール鎮の老人地区のモンゴル・ゲルで暮らしている。地元の人びとが彼女のことを小さいときから、略してセデヴと呼んできたそうである。セデヴ氏は、男まさりに、乗馬を好み、競馬を見るのも好きで、若いころ、競馬用のウマを調教していた。ウマの心理について熟知し、競馬用のウマをみずから選別し、調教していた。セデヴという名前は、一般モンゴル語ではツェデヴとなる。

私たちは2010年8月12日の夜に初回のインタビューをし、13日の午後にくたたびインタビューをした。2013年に7月16日に3度目のインタビューをした。インタビュアーはサラングレル、ソヨルマ、小長谷有紀。

### 生活史から

**Q:** あなたの経歴に興味をもって訪ねてきました。私たちに生まれ故郷、幼少時のおもしろいこと、氏姓、兄弟親戚、仕事などについて話してくださいませんか？

**S:** いいですよ。私の名前はセデヴと言います。東部モンゴルの人たちは、私をツェデヴと呼びます。私の実家は、イフゾーン姓です。私はハーンオールのドゥルム・ソムのマグナイ・ガツァに生まれました。巳年で、1941年10月の生まれだそうです。私の幼いころはボルホログ（灰色の子ヒツジ）と呼ばれていました。セデヴドルジという名前はラマ僧があたえてくれました。母から私たちは兄弟4人でした。わが家は裕福でもなければ、貧乏でもなく、中流でした。私のまえには子どもが生きのこらなかつたそうです。そして、私をなんとか生きのびさせたそうです。私は9歳のときに、ツァガンノール小学校に入学し、5年間勉強しました。のちに私は下の兄弟たちが幼いため、仕方なく家に戻り、兄弟の面倒をみました。それから、酪農場で2年働いていました。人工授精の仕事をしているうちに、20歳でボグドオール・ソムに嫁ぎました。父は国境警備隊にいて、気づかないうちに国境を越えて捕まり、モンゴル国に行きました。2度と戻ってはきませんでした。私の父は、モンゴルにわたり、向こうで家庭をもち、娘が1人いるそうです。のちに、1958年に父は1度帰ってきました。それ以降2度と帰ってきませんでした。ウランバートルの精神病院で働いていたそうです。父の名前はアディヤオチル・ジュグデルガラヴと言います。ガラヴは父の愛称だったと思います。父の3人の弟たちはすべてラマ僧でした。いつも家で読経をしていました。ザス経を読み、福を招いていました。長い場合は、8～9日間、読経します。1～2日の場合もあります。わが家には400～500頭の家畜がいました。父の弟の1人はドゴルジャヴという人でした。オラーナム

チル [モンゴル歌舞団] にいて亡くなりました。ドルジという弟は健在です。最近、ボヤンデルゲル記念歌唱大会に2度参加しました。「父の乗る灰色のウマ」という歌が大好きです。「父の乗る灰色のウマ」というのは、このように歌います。「父の乗る灰色のウマは、馬群のなかで目立ちます、兄弟が多くても両親にはおよびません、母の乗る母色のウマは、群れのなかで目立ちます、姉妹が多くても両親にはおよびません」という歌詞です。ドゴルジャヴ、ドルジ、サンダンドルジという名前の、父の3人の弟がいました。1人の妹は牧民でした。両親からは私の上に6人の子どもが生まれてすぐ亡くなり、私がようやく生きのこりました。どのように生きのこったかという、物語のような話があります。子どもが定着しないので、両親がラマ僧をたずねたところ、この家の屋根が見えないほど離れた遠いところへ行って暮らしてみなさい、と言われたそうです。それで、私が生まれたとき、母は私を生きのびさせるため、家を出て遠くへ行き、よその家のそばの宿営地の近くで、簡易テントを立て、その家に使われ、お布施をもらいながら、家々をたずねて、食料を請うて食べていたそうです。私を産んでから、母はどのように家々をたずねて乞食のように13年過ごしたそうです。私が幼いときに父は行ってしまいましたよ。知らずに国境を越えて、こちらに戻ることができなかったそうです。それで、私は13歳まで母とともに物乞いしながら暮らしました。ときには幼い私が行って物を乞います。人びとを訪ねて物を乞うと、家畜の頭や足先、内臓をもっぱらもらいました。そうして、手に入ったものを食べるのに飽きたので、私は内臓を食べるのは嫌いです。ゆで肉が好きです。当時、そう簡単に手に入らないので、母は他の家のウシの乳をしぼり、なんとか暮らしていました。そうこうするうち、私は13歳で母と2人で、ふたたび父の両親のとなりのゲルに戻ってきました。私たちの父は当時、家にもういませんでした。父の母、つまり私の祖母がいました。祖母は長生きをしました。85~86歳で亡くなりました。母は75歳まで生きました。

私は1961年から1994年までハロール・ガツァの婦人連合会の主任を務めました。人民代表として3年選出されました。私は公務に30数年たずさわりました。私は公務に熟達しました。私はまわりの人びとを動員し、うまく導くことができます。人びとも公共の仕事がうまいと私を褒めていました。わがガツァの人びとはいまだに私のことを共産党のためによくがんばると話しています。いまでも、この老人ホーム地区にいる老人たちを動かし、みんなのために少しでも役立つことをしようと努力しています。

## 風俗習慣について

Q: バルガに、何か特別な習慣があるか、話してくださいませんか？

S: ソーノム・タタルガ [乳製品づくりの道具]、籠と熊手、エルギネギーン・シャトー [タンスの足]、男用のウマ取り竿を牛糞の上に置いてはいけない、という習慣があります。結婚の習慣という作法が多いのです。私は1960年に結婚しました。夫は賃金労働

者でした。ボグドオール・ソムのソム長でした。私は嫁になり、田舎で、義父、2人の義母、2人のアンバー（ラマ僧）と一緒に1つのゲルに暮らしていました。私の嫁ぎ先は大家族でした。私たちはエルヘト山で結婚しました。私たちバルガの習慣では、祖母が私を嫁ぎ先に送ったかえりに、祖母を婿が送りかえすという儀礼がありました。しかし、祖母は私に送らせました。私の義父が60歳のときに私は嫁ぎ、祖母は私を送ってから戻るときに、私の服の裾を斧で押さえて、発つときに私は娘を連れて帰ります、これほど遠いところに行っていく返してくれるかわからないと言って、外に出て待っていました。それで、私の義母は、私の服の裾を押さえていた斧を取って、「さあ、祖母を送ってこい」と言って私を外に出しました。私が祖母を送って実家に戻ったとき、実家ではスープを出してくれて、私を帰しました。本当に実家に泊まってはいけない習慣があるそうです。それで私は実家から出かけるとき、泣きそうでしたが、泣かずに齒をくいしばって行きました。私はとにかく意思が強く、はっきりした性格で、公共の仕事をこなす才能があり、口が堅く、袋の口を閉じたように口が堅く、心の強い人間だと言われています。苦勞を語らず、自分のなかに封じる人間だと言われます。私は本当に苦しみを飲み込むことのできる人間です。

私には4人の息子、1人の娘がいました。4人の息子をもつと、五徳の4本の足として縁起が良いものです。しかし、私の息子は2人亡くなりました。2人の息子が生き残っています。1人は足が悪く障害をもっています。私の長男はザナルといい、寅年でした。肝臓病で亡くなりました。次男はオヨンビリグで辰年でした。やはり突然、よその家に入ったとたん、ひっかかって倒れて亡くなりました。三男はホビスガルトで、午年で牧民です。足に障害があるというのは彼です。妻はザルガーフーといい、やはり障害をもっています。2人とも障害者です。四男はホヤグで、寅年です。もう1人バルジナサンという名の娘が、亥年でした。やはり、よその家の嫁になって亡くなりました。そして、1年後に夫が亡くなりました。私は何度も死をまのあたりにしました。子どもと死別するのはつらいものです。しかし、つらいと言ってどうなるものでしょうか。涙を内側へ飲み込みます。夫の名前は、ブヘスレンでした。17歳で就職した人です。40年はたらいで、58歳の若さで亡くなりました。丑年で1937年に生まれた人でした。私より3歳年上でした。いま、生きていてもおかしくない年齢です。

私は5人の年長者の面倒をみながら、最期をみとりました。義理の父には2人の妻がいました。つまり、私には2人の義理の母がいたということです。2人の妻から、それぞれ2人の息子、1人の娘がいました。義理の父には6人の子どもがいました。また2人のアンバイ（ラマ僧）がいて、人の多い、比較的貧しい家でした。私が嫁ぐまえには、ポーズ〔肉まんじゅう〕を作って食べたことがないと言っていました。私たちバルガの習慣では、嫁いだならば嫁ぎ先に投げられた石、という言い方があります。嫁ぎ先の状況に合わせて義父母を尊敬し、大切にしなければなりません。母は生涯、義父母の面倒

を見て義父母を長生きさせました。私の父はモンゴルにわたって他の妻をもらって帰ってきませんでしたが、母は実家に戻らず、義父母の世話をしました。

私の嫁ぎ先は、夕食として3種類の料理を順番に作っていました。1夜めは刻み肉入りうどんもしくは刻み肉入り飯、2夜めは肉うどん、3夜めはゆで肉で、この3種を順番に作ります。私の義父は、子どもたちを叱るとき「漢族商人のように、腹をたたいて、口をあけると食べて、目をつむると寝て、昼間まで寝て、洪水になるまで放尿して」と叱っていました。私は嫁なので朝一番に起きて、夜一番最期に寝ます。つねに寝不足でした。しょっちゅう居眠りをしていました。

嫁でしたけれども、男の仕事もします。義父の乗るウマを捕まえてあげます。主人が勤めに出ているため、[男手がなく]義父が戻ってくると私がウマを受け取っていました。義父があちこち出かけるので、朝早く馬群に行行って乗用馬を連れてきます。その道中でも居眠りします。寝るのが遅く、起きるのが早いので、いつも寝不足です。2人の義母はきつい人たちでした。恐れて敬してきました。夜も靴を脱がずに寝ていました。ヒツジ・ヤギの出産期には、義母が咳払いをしているうちに外に出なければ、叱られます。一生涯、嫁ぎ先に気を使って敬してきました。義母は仕事にきびしくても、私が出産したときには、とても世話をしてくれました。私が子どもを産むたびに、1カ月間ほこりをたてず、仕事をさせず、よく面倒をみて、療養させました。そのおかげで、私はいま丈夫で健康に暮らしています。産後の療養が良ければ、持病までなおるというのは本当です。

人びとは、厳しい義母の手元にいたので、嫁にも厳しくなるだろうと言っていました。しかし、私はそうしません。みずから経験した苦勞を人に経験させたくないと思っていました。みんなより先に起きて食事を用意します。全員が寝たあとに最後に寝ます。嫁ぎ先の人たちの寝具を用意し、足を布団で巻いて寝かせてから、最後に寝ます。嫁ぎ先では、人が多く、義父、2人の義母、ラマ2人、合計5人を気持ちよく寝かせて、寝具を整えてあげます。そのため、睡眠が足りないので、家畜の放牧に行くとき、馬上で寝ていました。水汲みに行く途中でも寝ます。牛車で水を運びます。牛にくびきをつけて車に座って寝ます。牛車は水場に到着して止まると目がさめて、水を汲んで家に戻る道中また寝ます。牛車が家のまえに着いて止まると目がさめて、水をおろします。義母の隣にいと、こわくて目がさめます。義母は生前、私の服を夫の服と一緒に置かせません。ほかのエルヘネグ[タンス]に置きます。私には実家からエルヘネグをもたせませんでした。帆布で作った4角のある袋を1つ作ってくれました。私はこれを嫁ぎ先の家のエルヘネグのうしろに置いて、靴やズボンをしまっておきます。義母が私に1つのエルヘネグを空けてくれました。私はそれに服を入れていました。夫の服、私の服、子どもたちの服をどこに置くかは、義母がすべて見えています。裁縫について義母は厳しかったです。夫は第一夫人の息子です。私たちはイフ・エージ(大きい母)と呼んでいまし

た。大きい母はたいへんしっかりした人でした。一方、小さい母は優しくった感じです。

わが家には、幌車がありました。移動するとき、子どもたちを幌車に載せて、荷車列の先頭を歩きます。わたしはメネン平原を移動します。ボイル湖の西に位置するメネンから、ボダート・タルというところがあります。メネン平原は向こう、おそらくハルハの境とつながっています。サイハン・タル地域には、フレイ・タルという場所がありました。フレイ・フング湖とも呼んでいました。わが家はそのあたりを移動して宿営していました。冬になると、移動して、ヘルレン河の北側にいました。私はウマが大好きな人間です。競馬を見るのが好きです。また、競争馬を調教するのが好きです。競馬ウマの調教というのは非常に繊細な仕事です。ウマの体力に応じて調教する期間が決まります。痩せた、体力のないウマだと、長期間の調教が必要となります。肥えたウマはしっかり調教しないと、レースで「黒くなる」と言います。競馬に出て「黒くなる」と、2度と体力が戻らないと言います。痩せて弱くなります。ウマを調教するときは、早朝、日が昇るまえに、ウマを動かし、霜のついた草を食べさせます。日が昇ったあとは、覆いをかぶせたままで走らせ、汗をかかせます。汗をのぞいてから、水をやりませす。そのあと、つないで減量します。午後もまた少々食べさせて、歩かせませす。芯まで太ったウマはよく減量させませす。何度も競馬に出たことのある慣れたウマなら、レース中に騎手が落馬してもレースを続行ませす。うしろにいるウマから距離があくと、少々原則して、体力を保持ませす。うしろのウマが追いつこうとしたら、まるで騎手がいるかのように加速し、先頭に向かってゴールませす。そんなふうにして走ってくるウマを見ると、本当に感動し、涙が出ませすものでした。ウマというのは本当に賢い動物です。どんなに遠くへ行っても、ふるさとの空気、水、草のにおいを識別しながら、戻ってませす。ウマの宝というのは、主人に対して、ふるさに対して、なつく動物です。

競馬に出てきたウマをゴールで急に止めてはいけません。ゴール付近で、ウマに乗った年長者たちが待っていて、乗ってきた子どもたちをウマの背中から取り上げておろして、ウマを連れていませす。徐々に減速させ、汗をさませしてから、ウマを止ませす。そうしなければ、全速で走ってきたウマを急に止めると、脚が充血して、2度と乗れなくなってしまう。脚が充血してしまいます。いまどきの若者たちは、レースに走ってきたウマを急に止めて、子どもを下し、歩きながら連れていませす。これはたいへん不適切です。こんなふうにするとウマの足がダメになってしまう。風俗習慣というのはこのように理由のあるものです。

ウマのレースには5種類あります。成長したウマのレース、5歳ウマのレースなどのようにあります。私は競馬を見るのが大好きです。毎年、ボグド山の祭りに行って、競馬を見ませす。競馬のウマを見ると、私は心からよろこびませす。それで、私の子どもは「お母さん、あなたは女性なのに、なぜこんなに競馬が好きなのですか？」と聞いてませす。私は子どものときから競馬が好きでした。

私たちにはいろいろな風俗習慣があります。バルガの結婚について話してくれと、数日まえにも人がたずねてきました。知っている限りを話します。結婚の儀礼には、娘の近隣まわりという興味深い習慣があります。幼少のとき、私は父方のおばに付いて、ある家に訪ねて行ったことがあります。父方のおばは嫁ごうとしている娘に近隣まわりをさせていました。その家は、嫁ぐ娘の親族にあたります。嫁ごうとする娘を親族たちの家いえにあちこち訪ねさせていました。娘が親戚の家について、裁縫の仕事をしているうちに、婿の側が来て、娘の帽子を押さえて、娘を外に連れ出し、両側から奪い合います。娘は泣いているべきです。奪い合って、婿の側がそこから娘をウマに乗せて連れて行きます。娘の側が近隣をまわるというのを解釈すると、一方で、娘が嫁ぐことを親戚に知らせるものではないでしょうか？他方で、婿側から娘を隠している意味もあるでしょう。そんな習慣がありました。

### 老人地区の状況から

Q: いま住んでいる老人地区について話をしていただけませんか？

S: 私はこの地区に来て6～7年たちます。2005年9月25日にここに来て、2人の孫を学校に通わせていました。予備クラスに通学させていました。いま、あの2人の孫は大きくなりました。いまもう1人の9歳の子供がいます。いま私のそばに3人います。

私はガツァ委員会のメンバーです。現在、この老人地区には50軒のモンゴル・ゲルがあります。これら50軒の責任者です。私は73歳になりました。この地区にいる老人たちのなかでもっとも年長が86歳、もっとも若いのが58歳です。これらの老人たちは私を信頼し、私に相談します。よっぱらいの喧嘩になっても、私を呼びます。それで、私は老人たちの信頼をそこなわないように、がんばっています。高齢者には私も世話します。わずかながらも手つだいます。私は生涯、年寄りの世話をする運命にあるようです。嫁ぎ先で5人の年寄りを世話して最期をみとりました。いま、自分が年をとったのに、老人を管理する仕事をするようになりました。そうしてここにいるわけです。ここにいる長所は、水道電気が無料です。とはいえ、私はただいるわけではありません。自分の得意を活かして、何かをする、羊毛をほぐして縄をなう、などします。みんなで年間4,000～5,000元をかせぎます。となりにツーリスト・キャンプがあります。おそらく10軒ほどのゲルがあるでしょう。そこに乳製品を供給します。またモンゴル料理を作ります。私たち3人をそこで働かせています。最近の話では、私たちをアパートに住ませるそうです。冬と春にアパートに住み、夏と秋にモンゴル・ゲルに住ませるそうです。本当かどうかわかりません。いまのところ、私たちの旗には、牧民のためのアパートはありません。もしアパートに引っ越ししたら、いまのような便利さはなくなるかもしれません。



## 18. オノン

### 紹介

オノン氏は、フルンボイルのエヴェンキ旗のバヤンツァガーン・ソムの人、エヴェンキ人である。彼は近年、民間の口承文芸の面でたいへん努力している、と地元の人びとが話していたので、私たちは捜してインタビューをした。しかし、オノン氏はたいへん謙虚な人であった。「私はなにもたいしたことはしません。いまからしようとしているだけです」とたいへん謙虚に話していた。彼は定年退職したあと、ハイラルに暮らし、余暇を利用して、エヴェンキの民間口承文芸、文化を収集整理し、モンゴル語、中国語に翻訳するなどの仕事をしている。

私たちはインタビューするとき、オノン氏は旗の中心、南屯の娘の家に来ていました。私たちは2010年8月11日の午前中に初回のインタビューをし、2013年7月ふたたびインタビューをした。インタビュアーはサラングレル、ソヨルマ、小長谷有紀。

### 生活史から

Q: あなたの生まれ故郷、幼少時のおもしろいこと、氏姓、兄弟親戚、仕事、子どもたちなど、生活、作品を紹介していただけますか？

O: 私の名前はオノンです。オノン河のオノンです。亥年で、1935年の生まれです。エヴェンキ旗のバヤンツァガーン・ソムの人です。父はロシアの赤軍が入ってきたとき、道案内をして、日本軍の駐屯しているところを教えていたので、日本人に殺されました。そして、私の父は「亡くなった英雄」と命名されました。私には1人の弟がいました。彼を父の2番目の兄が養子にもらって育てました。父の亡きあと、母は他の人と結婚したので、私を学校にかよわせ、「亡くなった英雄」の後裔つまり孤児とみなして、全費用を国から支給し、学校にかよわせました。党と国から面倒をよくみてくれました。私の夫は通遼後旗のホルチン人でした。ポー王旗の人です。モンゴル人です。私はフフホトの内モンゴル専門学校で勉強して卒業しました。卒業後、内モンゴルの党校で6年間教えました。そして、のちに、夫が肺結核にかかり、おおいに衰弱していました。当時、私は夫をしっかり治療するために、空気がきれいで水がよく、野生動物の肉が豊富であれば、結核を直すのに良いと考えて、地元に戻りたいと、内モンゴルの党委員会の組織部に申請して、地元に戻ってきました。そして旗に戻ってきて、婦女連合会で働いていました。また、旗の文化局長を務めて、みずから望んで「文聯」（文学芸術連合会）に移って働いていました。そこでもまた責任者でした。そして、エヴェンキ文学芸術連合会から定年退職しました。地元に戻ってきて、きれいな空気を吸って、私の夫の肺結核はすっかりよく治りました。しかし、のちに、夫は臍臓の病にかかり、亡くなりました。夫の名前はトゥムルと言います。モンゴル人です。私たちはおないどして、亥年です。

1935年生まれです。モンゴル国に行った中国建築作業班の通訳を務めていましたが、1958年に戻ってきました。のちに病気になり、わが故郷に転勤してきました。エヴェンキ旗の青年団委員会、旗の裁判所などで働いていました。そこから旗の公安局に転勤し、当局の政治委員をしているときに亡くなりました。

父の名前はニンデンジャヴでした。丑年で、1913年生まれの人でした。父はバインツァガーン・ソムのエヴェンキ人でした。ノモンハン戦争に参加しました。戦時中に日本軍の医師だったそうです。ノモンハンの戦争で軍医を務めたと、戦争に関して話すとき、日本〔関東軍〕側からはまず先頭にモンゴル人を行かせていました。モンゴル国〔モンゴル人民共和国〕にはモンゴル人を殺さないようにという宣伝のビラが撒いてあったそうです。父はモンゴル文字を知っていたので、そのビラを読んで、戦争を嫌うようになり、戦場でモンゴル国側がこちらの軍の先方ではなく後方を攻撃していたため、日本人が大勢負傷していたそうです。「私がなぜ日本人を治療するのかと、日本の死人にしたがって3度逃げて、2度つかまり、戦争に送られ、最後に逃げ切って地元に戻った」と話していました。のちに、父はハイラルの病院で医師を務めていました。ロシアの赤軍が来たとき、父は道をよく知っていたので彼らを案内し、そのため日本軍に殺害されました。父は亡くなる時、私の弟のトムビリグは生後3カ月でした。父の死後、ロシア軍が家に来て、母と私たち3人を見舞って、父に「犠牲となった英雄」という表彰を残すとともに、黒いぶちの子ウと母ウシ（日本の焼き印がある）、1頭のウマ、25頭のヒツジを父の兄ソモジャヴにわたし、弟の家族の面倒をよくみるように、と話しました。1945年に父が亡くなり、1946年に父の兄も病気で亡くなりました。そして、私たちは孤児として残りました。当時、3カ月だった弟は、A型肝炎に感染し、額が黄色になり、顔が識別できなくなり、目しか見えないような状態でした。そこで、あのロシア人たちに紹介状を書いてもらってヤクシという町に行き、そこでロシア医師に診てもらおうと3日もすると早くも治りました。

私には現在4人の子どもがいます。3人の娘、1人の息子で、長女の名前はガリナ、子年、1960年生まれです。長女の婚はモンゴル人でした。結婚して、最初の娘を妊娠して2カ月のとき、夫は交通事故で亡くなりました。それから娘を産み育てるため、再婚しませんでした。あの娘の名前はソロンゴワで、北京外国語大学で英語の専門を卒業しました。現在、バーというものを開業し、経営しているそうです。私営です。公務ではありません。次女の名前はイリナで、寅年で1962年の生まれです。夫はエヴェンキ人でした。彼は他の女性と交際していたので、わが娘は離婚しました。1人の息子がいました。彼はいま母親と一緒にいます。彼は大学を出て、現在、自動車学校に通っています。正式にはまだ就職していません。三女の名前はマリナで、巳年で1965年の生まれです。三女はフフホトにいます。夫は中国人です。1人息子がいます。息子は今年、大学に入学し、鄭州大学に入ったそうです。私の末っ子は男で名前はウエンシャン（文勝）とい

い、1967年生まれです。現在、エヴェンキ旗の文化、スポーツ、ラジオ、テレビ局で責任者をしています。嫁もエヴェンキ人です。私は現在、この息子と暮らしています。息子には1人息子タジがいますが、現在、南昌の航空大学に通っています。

### 作品について

**Q:** あなたはたくさんの口承文芸を集めて出版された、と聞いています。それについて話していただけませんか？

**O:** そんな多くありません。少しだけしています。2008年に「エヴェンキ族民間故事集（上）（下）」という本を出しました。エヴェンキ語をラテン文字にして、中国語に翻訳して出しました。2010年には「エヴェンキ族のことわざとなぞなぞ」という本をエヴェンキ語、モンゴル語、中国語の3語を合わせて出しました。

## 19. ダワーダグワ

### 紹介

内モンゴル大学のバドマーギーン・ダワーダグワ教授はモンゴル語研究で著名な学者の1人である。私たちはフルンボイルのさまざまな民族の口述史を収集する過程で、ダワーダグワ教授に何度かインタビューしようとした。しかし、私たちがハイラルに行ったときには、ダワーダグワ教授はフフホトにいと聞き、フフホトに行ったときにはハイラルにいとのこと、会えず残念であった。しかし、今回、フルンボイルにいらっしやった。何度も約束してハイラル市内に一時的に滞在していた家を訪問し、インタビューをすることができた。定年退職後、ダワーダグワ教授はあいかわらず、忙しくしている様子であった。机の上に本の山があり、私たちに進呈しようとした自伝が見つからないくらいであった。そもそも研究者には、退職というものがない。まもなく母校（ハイラル第1中学校）の90周年記念行事が開催されようとしている。そこで話すスピーチを用意するため、忙しくしているとのことであった。

私たちは2013年7月17日の午後、ダワーダグワ教授のハイラル市内のご自宅でインタビューをした。インタビュアーは小長谷有紀、サランゲレル、ソヨルマ、バイガル。

### 生活史から

**Q:** あなたの経歴を聞いて訪ねてきました。私たちに、生まれ故郷、両親、兄弟親戚、幼少時のおもしろいことなどを話してくださいませんか？今年おいくつですか？

**D:** 私は現在80歳になろうとしています。戊年で、1934年10月2日の生まれです。現在のシネヘン西ソムのハルガナで生まれました。父は当時、チチハルのモンゴル師範学校で勉強していました。わが盟の有名なお年寄りで100歳を越えてなくなったチョー・ドゴルジャヴと同級生でした。父はそこから長春〔当時、新京。満州国の首都〕にある佐藤の学校〔話者によれば、ホルチン方言のモンゴル語を話す日本人が新京に移って来て、私立の日本語学校を短期間、運営していたとのこと〕に行き、日本語をしっかりと勉強しました。東北地方のモンゴル学校の日本語コンテストで父は2位に入りました。チョー・ドゴルジャヴが1位でした。父はそこからシリングルのザブサル〔現在の化徳〕というところに教師として赴任しました。私は幼かったのです。母は田舎で家畜の面倒をみていたそうです。そして、父が地元に戻ったかということ、おそらく1940何年に帰ってきたでしょう。当時、フフホトに連合政府ができて、彼らを日本人が捕まえようとしていました。そして、将軍階級をもつ父の友人が、逮捕されるかもしれないからすぐ逃げなさい、と言いました。それで父はふるさとに戻り、エヴェンキ旗の民政科に勤めました。当時は、南屯にいました。私は母と草原にいました。

私は7歳のとき、シネヘン・ソムのそばの学校に入りました。横山という日本人の先

生がいました。日本語を教えずに、私たちと遊んでいました。私たちの日本語の授業は、松本という女性の先生が教えていました。1年たつと、私は南屯にいる父のそばに行きました。そして、寄宿舎に入り、バイントホ鎮にあるウレムジ小学校に4年生まで勉強しました。そうこうするうちに日本が敗戦し、私は学校をやめて田舎の家に戻り、牧民になりました。父は旗からさらに盟に転職しました。私が牧民になっているあいだに、モンゴル国の新しい文字を学びました。この間、独学をやめませんでした。私は1949年にふたたびハルガナの学校に入りました。当時の先生たちによると、私は4年間学校に通っていなかったため、学んだことをすべて忘れていたのだらうと思われていました。そして、ダグール人教員のダムディンスレン先生が私に「あなたは長年、学校に通わなかったので学んだことを忘れたでしょうね」と言い、2年生に編入させました。本当は私の勉学の基礎は良く、成績は良かったのです。私は独学をやめなかったため、私の成績は小学校4年生レベルから下がってはいませんでした。そういうわけで、私は2カ月勉強しているあいだに、毎月飛び級して、すぐにふたたび4年生になりました。私は小学校に最初入ったときに、1年から入りませんでした。2年から入りました。田舎にいるとき、家でモンゴル文字と算数を教えてもらっていました。わが家には1人の老人がいました。ジャルサライギーン・ジャルサンといいます。ツォール・ダツァン [堂] あたりから来た教養のある人です。ブリアート語をラテン文字で表記していました。1950年にハイラルのフルン小学校の5年生を半年、学んで、私はハイラルの第1中学校に進学しました。中学生たちの学ぶ内容は非常に少なかったです。おもにバルガの子どもたちを連れてきて識字させていました。彼らは年長の人たちでした。新しく設立した小学校は非完全小学校だったので、1950年になるとふたたび当時のハイラルのフルン小学校の5年生で学び、当時、シネヘン学校からフルン学校に勉強にきていた学生たちの成績は高かったため、すぐに5年生を卒業し、小学校の6年生に直接入って勉強しました。1952年にフルン小学校から試験で合格し、「ハイラル第1中学校」で勉強しました。この学校で6年間勉強しました [これで中学校、高校を完全に卒業]。当時の教育部の規定どおりに、第1外国語にロシア語を選んで勉強し、ロシア人の先生にロシア語を教してもらいました。

私が本当につづけて勉強したのは第1中学校でした。1951年から57年まで6年間勉強しました。ロシア語をよく勉強しました。ソ連の付属学校からロシア人をまねいてよく勉強しました。当時は英語を教えず、第1外国語といえば、ロシア語を教えていました。

1955年に中学校を卒業し、高校に進学することになりました。当時、私たちのクラスのみならず、全内モンゴル、さらに西部の新疆、東部の吉林、黒龍江、南から遼寧省などから、中学校を卒業した人びとも試験で受け入れていました。当時はまだ高校が少なかったのです。わがクラスの34人から試験を受けてわずか14人が進学しました。当時、ハイラルの第1中学校で勉強していたとき、私はロシア語のレベルを高める目的で、市

内のロシア人の家に間借りしていました。ロシア人の子どもたちと一緒に遊んだり、勉強したりして、ロシア語を向上させようと思いました。そして、実際に、ロシア語の読み書きと会話が大きくレベルアップしました。

そして1957年に高校を卒業しました。当時、私は22歳でした。1957年3月、卒業生に関する最初の決定が出されていました。当時、高校卒業生から、成績と個人の意志に応じて、外国おもに当時のソ連に留学させていました。当時、学校から私の成績にもとづいて、ソ連のウラル鋼鉄大学に留学させるよう派遣しました。しかし、ちょうど中ソ関係が悪くなったため、高卒生の留学を中止することになりました。さて、それで私はソ連に留学することができなくなりました。当時は内モンゴル大学が設立されたばかりで、特別進学生を募集していました。先生たちは私にそこへ行くよう直接推薦することになりました。私に一応受験はさせるけれども成績を見もせずに入學させてくれました。私はセンター試験に参加し、内モンゴル新聞にその試験結果が公表されると、3位でした。試験結果を見たとしても進学できました。

**Q:** いいですね。それでフフホトの大学に行きましたね。当時のフフホトは小さい町でしたか？

**S:** そうです。小さい町でした。バスもありませんでした。2つの木の軸のある幌車、馬車がありました。ここから学校へ行くとき、直通列車がなく、ハイラルから列車に乗って、ハルビンに着き、三棵樹 [ハルビン東駅、特急あじあ号の終点だった駅] から北京に行き、北京からフフホトに行っていました。当時、北京、チチハル間の鉄道はできていませんでした。ハルビンで7泊し、北京でまた7泊して行きました。当時、私は北京で建国記念日の記念行進に参加しました。民族大学の学生たちの列に入って、天安門広場で毛主席の姿を拝しました。フフホトに着きました。フフホトは当時、たいしたことのない田舎町でした。村のような小さな町でした。ハイラルは小さくてもフフホトよりきれいな町でした。ハイラルは昔からさまざまな民族、いろいろな国が往来していたところで、ドイツ人、ウクライナ人、トルコ人、タタール人、みないました。都市計画もすばらしいものでした。4つの車輪をもつ車は、都会の金持ちが乗るようなきれいな車でした。

**Q:** 当時の内モンゴル大学はどのような感じでしたか？どの学部に入學されたのですか？

**S:** 私はモンゴル言語文学学部に入學して勉強しました。当時のおもな先生たちは、みなハルハ [モンゴル人民共和国] から招待した先生たちでした。タヤー、ロブサンバルダン、ウルジーホタグなどの先生がいました。ロブサンバルダン先生は私の先生です。ハルハの先生たちは3年教えて帰国しました。そのあと本国の先生が引き継ぎました。それほど授業することなく、みな政治運動に参加するようになりました。「四清運動」が展開されていました。

1962年に卒業することになったとき、ある日先生が私を呼んで、学校で教えさせるこ

とになりました。「あなたはまず家に帰り、9月に来てください」と言いました。そして私は草刈りをして、9月になって教師になりました。当時、学校の成績と全面的な能力を基準に、私を内モンゴル大学モンゴル語言語学部として私を先生として残すことになったわけです。当学校に私は1962年から2007年まで合計47年教えました。私は学校に残って、一般言語学、言語理論の授業を教えはじめました。ハルハの教科書をウイグル式モンゴル文字に転写し、印刷して学生たちに配っていました。当時、ほかに教科書がありませんでした。

のちに、「四清運動」が展開し、貧富を区別するということになりました。当時、私たちを南ゴビと接していた場所に送りました。ちょうど、バヤンノールの北部にある場所に、わが校の人びとを送りました。私は牧区の出身なので、私に牧区出身の数人の学生を連れて国境近くに牧畜作業の管理をするよう行かせました。政治には関与する必要がありません。当時、国境はありましたが、モンゴルと中国の牧民が1つの井戸で家畜に水をやっていました。モンゴルの南ゴビの牧民がラクダに水をやりに来ていました。彼らは夏の暑いときにも、フェルトの靴をはいていました。私たちとまったくちがっていて、興味深いことでした。私たちは不思議に思っていました。しかし、暑い夏に本当はフェルトの靴がいいそうです。そこに私たちは半年滞在し、秋に新入学生がくるとき、大学に戻りました。それで、文化大革命のときに、若い教師たちが田舎に行って、収穫作業に従事していました。当時、フフホトではソバを栽培していました。私たちは片手にカマをもち、小麦を収穫していました。小さいころ、実家は田舎にあり、耕作していたので、初めての経験ではありませんでした。文化大革命の最中、私は大学の食堂で手伝うよう命令されていました。

それで、私は学生たちに言語研究の基礎理論、近代モンゴル語、一般言語研究理論などを教えていました。モンゴル語の大学院の授業も担当しました。その間、内モンゴル自治区の教育長の指示により、大学のモンゴル語の教科書を編集し、8つの省と自治区のモンゴル語に関連する仕事を牽引しました。

2005年12月23日に、内モンゴル大学モンゴル研究学院の功労教師として表彰されました。おもに学校の規定により、モンゴル語研究に対する貢献が評価されました。

## 私生活について

**Q:** あなたの家庭生活について話してくださいませんか？いつ結婚なさいましたか？

**D:** 土地改革が終わって、人民公社のときに結婚しました。妻は盟の師範大学を卒業し、シリングで教えていました。のちに内モンゴル大学に来て、キリル文字を教える教師となりました。現在、内モンゴル大学のチメドルジ教授は彼の弟子でした。キリル文字を学びました。私の妻は私よりも先に教えていました。60余年、教師をしていました。もともと彼女は70年代に仕事をやめる予定でした。しかし、80年代になってようやく退

職しました。なぜかという、当時、大学院修士課程、博士課程の学生を教えることが重要となり、授業をする必要があったからです。

妻は生前、子どもたちと一緒にロシアを訪問しました。私は行こうとして行けなかったウラル鋼鉄大学を訪問、見学しました。

私は兄弟8人でした。私はいちばん上です。私の下に7人の兄弟がいました。1人は病気で亡くなり、他はみな健在です。私の足が少しいたかったのですが、貂油でつくった薬を塗ってよくなってきています。現在、「モンゴル人たちの文化の変遷とグローバリゼーション」というテーマで仕事をしています。



## 20. アリマ

### 紹介

新バルガ旗のボグドオール・ソムの牧民である。現在、旗の中心のアルタン・エメール鎮にある家に住んでいる。私たちが最初にインタビューしたとき、彼女は98歳であった。しかし、頭は明晰で、身動きが軽く、100歳ちかいほどの高齢とは信じられないほどであった。70歳を越えた娘さんがそばにいたので、信じるしかなかった。3年後の2013年の夏、私たちがふたたび訪ねたときには、101歳になられたアリマ氏は3年まえとほとんど変わらなかった。やはり明晰で、トランプで占いをしていたか、何をしていたかわからないが、私たちが訪ねたとき、ベッドのうえに座って、1人でトランプカードを並べていた。

2010年8月12日の昼に初回のインタビューをし、13日の午後、ふたたびインタビューをした。2013年7月16日に3度目のインタビューをした。2013年8月31日に4度目の補足的インタビューをした。そのとき彼女はベッドの上でキрил文字の本を読んでいた。インタビュアーは、サランゲレル、ソヨルマ、小長谷有紀。

### 生活史から

Q: あなたの経歴に興味をもち訪ねてきました。生まれ故郷、幼少時のおもしろいこと、氏姓、兄弟親戚、仕事などについて話してくださいませんか？

A: 私の名前を簡単にいうとアリマです。(もともと彼女はアユーシュという名前で、アユーシュという名前がアリマになった理由を聞くと、忌避のある名前なので、忌避しているうちにアリマになったと答えました。もともと夫もアユーシュという名前だったので、アユーシュという名前を忌避することになったそうです。) フイツリン姓です。ユムスレンギーン・アリマといいます。今年99歳で、子年で、1912年生まれです。生涯、牧民でした。昔の仕事はいまとちがっていました。家畜の仕事で成長した人間です。当時の人びとというのは、両親の教えにしたがいます。両親の家は裕福でした。たくさん家畜をもつ家でした。父は寅年で、母は卯年でした。母の名前はソリと言います。私たち姉妹は6～7人で、唯一の男の子は亡くなりました。1人の姉は長寿でした。90歳で亡くなりました。妹も89歳で亡くなりました。父は55歳で亡くなりました。1930年代に亡くなりました。母は私が15歳のときに亡くなっていました。母は父の第2夫人でした。私にはさらに2人の小母がいました。1人の小母の名前は同じくソリと言います、もう1人はホルローと言います。1人の母は出産直後に亡くなりました。もう1人の小母には娘がいました。

私は10数歳のとき、嫁に行きました。双方の親が相談して結婚させました。いま人によっては私を売られた女性だと言います。双方の親たちが商売をしたというわけです。

嫁に行くとき、夫の側には1軒のゲルと鉄製ストーブがあるような空っぽにちかいゲルでした。北に小さなタンスがあり、タンスの上に小さな仏像のある、そんな家でした。私は実家から五徳を持って行きました。この家にすべてのものが私と一緒に行きました。牛糞籠まで私についてきました。牛車4台、1つのシンゲレク〔移動用タンス〕がありました。シンゲレクというのは牛糞を積む車のことです。

私は嫁になり、炊事をします。家畜の番をします。家畜の出産の世話をします。夫は若くしてなくなったので、男の仕事も女の仕事もすべてします。夫が亡くなったあと、2度と結婚しませんでした。嫁ぎ先で一生すごしました。義父は1937年に亡くなりました。70歳歳でした。祖母は1947年に亡くなりました。90歳越えました。義父も70歳越えました。義母も70歳越えました。私が20歳歳のときに夫が亡くなりました。私の義父はプレプヤンサンと言い、ハボン〔官職名、現代なら副ソム長〕でした。よく読書をし、教養のある人でした。モンゴル語、満州語の読み書きができます。義父はハボンだったので、2人の妻がいました。ウシ飼い、ヒツジ飼いなどの使用人が大勢いました。夫の死後、義父が私を実家に帰しませんでした。それで一生、嫁ぎ先で家事をして過ごしました。キリル文字（新文字）を私は娘のスリエから学びました。義父の読んでいる本のなかに、『エルテニー・サン・ソバシティ』という本がありました。文化大革命のなか、あの本と私の数珠が亡くなりました。それで文字の勉強をやめました。もしそうでなければ、私はもっと勉強したでしょう。西へ行けば、フレー〔ウランバートル〕にたどりつき、東へ行けば、オタイ〔五台山〕に着きます。私の父は、西旗ではナンバーワンの金持ちで、家畜の多い人でした。『バルガ簡史』に載っています。義母はドルマージャヴと言います。私の夫の名前はアユーシュと言います。私たち2人は名前が同じでした。私の名前も同じでした。それで、嫁ぎ先ではその名前が忌避され、私の名前はアリマと呼ばれるようになりました。

7月3日に「親睦会」をしていました。これはボグド山の祭りをさしています。ボグド山をまつるとき、供物を献上し、「ザサー」を僧に読んでもらいます。家で山の神をまつります。山の神とは、まさにボグド山のことです。私たちはボグド山の仏をまつります。いまだにまつる儀礼をします。家で秋になると山の神をまつります。昔、山の主の像がありました。文化大革命のときに亡くなりました。3日まつって終わらせます。おもに秋の8月に祭ります。「ザサー」を3日間読経させて終わります。ボグド山の祭りには競馬と相撲をしていました。弓の射撃はのちにあらわれました。最初はそんなものはありませんでした。

私が6歳のとき、私たちの地元の一部の人たちがハルハ〔モンゴル人民共和国〕に移住しました。16歳のとき、丑年に彼らは戻ってきました。おそらく1920何年かに戻ってきました。フレーとは、いまのサイハン・タルの西側のことを言います。ハルハの地になります。いまは往来しなくなりました。フレーとは丸い柵のような場所です。ポロン・

デルスという地名です。もともとそれはハルハの土地でした。その向こうには山がありました。私たちはかつてウジムチンまで移動していました。秋に雪が降ると、ウジムチンに向かって移動していきます。春になれば移動して戻ってきます。当時、日本が入ってきたので、ハルハのほうに行かなくなりました。のちにハルハに行くにはお金を払うようになりました。

娘はハイラルの中学校を卒業し、内モンゴル大学の物理学部を卒業し、ジリムの学校で働いていました。のちに、体調をくずして、旗の政府に転勤してきました。

## 風俗習慣について

Q: 地元の風俗習慣について話をしていただけませんか？

A: 子どもの髪を切るという儀礼があります。子どもの髪を切るとき、日を選びます。バルガの婚姻儀礼では、夜に集まって嫁を朝連れ出して渡します。母は娘について行って3泊して戻ります。夫人服というのがあります。これは結婚後に着ます。嫁に行くとき、髪の毛を髪留めで挟むものです。いまのように立ててつけません。私は夫の顔を知らずに嫁ぎました。夫は私より2つ年下でした。おそらく、寅年の人だったと思います。嫁いってから義母とはたいへん相性がよかったです。私たちは一緒にヒツジの放牧をします。出産の補助をします。冬はオトル〔出張放牧〕をします。雪が多かったのです。昔は雪嵐が強かったのです。

夫の兄弟というと、2人の姉、1人の妹がいました。嫁いだとき、2人の姉は他家の嫁になって出ていましたが、1人の妹がいました。祖父母もいました。新しい嫁がやってくるなり、義父のゲルの天窓を開けてあげます。朝のお茶を持って行ってあげます。数日そのようにしているうちに、義父は「もういい」と言ってやめさせました。嫁と義父のあいだでは、直接、もの手渡しをしてはいけません。仲介の人が渡すか、嫁が机の上に置いて義父が机上から取るという習慣があります。人びとは私が長寿なので、何を食べているのですかと聞きますが、私は80を越えてから、寝るまえに酒を少し飲みます。私は宴や集会が好きです。しかし、私が若いときには、女性は結婚式や寺に行きませんでした。いまは女性もよく行くようになりました。当時は、どうしても必要なときだけ行きました。そうでなければ行きません。人の妻は寺には行きません。進物をタンス箱のうえに置きます。寺に向かっておがめばよし、とします。女性たちは1950年代からあちこち歩き回るようになりました。

嫁ぐとき、両親が夫人服を作ってくれます。当時、ホルローというザンギがいました。父がザンギになるとき、多くの貴族がやってきました。私は14歳でした。1人がウマを連れて来て、貴族たちを乗せていると言いました。その人にも1頭のウマをあげます。ザンギ、ハボン〔ザンギはソム長、ハボンは副ソム長に相当する〕など5人の貴族をウマに乗せます。

ハルハに2人の活仏がいました。そのうちの1人ゾンガサブダンと言います。寺の法会を見学するために旧正月15日に集まってまつりをしていました。アルタンオチルバトというもう1人の活仏がいました。メルゲン・ラマとよばれていました。2人はわが家に近い人たちでした。私が最初にオタイに行ったとき、私は8歳でした。姉は10歳でした。私たちは4人で一緒に行きました。父母、もう1人の母方のおじ、4人でラクダの車で張家口に行き、そこからさきは車で行けないとのことで、そこから北京まで行き、北京から行きました。

緑色の壁の裏に沿って歩いて南側の門からオタイ〔五台山〕に入っていました。往来におよそ1カ月かかります。最初は1人の活仏が亡くなったので、その遺骨を仏塔におさめるために行きました。80年代以降、私は毎年、オタイに行きました。およそ10数回オタイに行きました。この年になって、いままで見たことのないものを見ました。行ったことのないところに行きました。もういいです。

Q: あなたは民話を語りますか？

A: どんな民話を語るというのですか。「民話の海」を話すことは話していました。私の話し方はつまずいたり、ひっかかったりして、上手に話せません。完全な物語はありません。もうすっかり忘れしました。「サランホホ」を語っていました。「ノミンバヤスگران・ハーン」なんていうのも話していましたが、もう忘れしました。

1956年に私たちの地元に運動がありました。時勢が少しずつ変わっていきました。私たちのこちら側の国境警備隊の司令官たちと、向こう側の国境警備隊の司令官たちは、わが家で一緒に酒など飲んでいました。常に行き来して、関係がよかったです。しかし、数年後にハルハとまったく往来してはいけなくなりました。集団化があり、ヘルレン国営牧場が建設され、私は牧場の責任者になりました。牧場になるときに、口上で交渉し、家畜を統合し、私たちは公務員になりました。牧主たちのすべてを牧場の責任者にしました。それで、給料をもらいます。3世帯が合わさって最初に牧場を設立しました。3世帯はみな親戚でした。のちに多くの世帯が加わって増えました。現在私たちはボイル・ソムに編成されました。土地に限界があり、狭くなったので、家畜の数が少なくなっています。各家に放牧地が配分されたので、互いの放牧地に入ってはいけません。入ったら債務が発生します。ウマ、ウシが他人の放牧地に入ると、家畜を捕まえて売りさばかれてしまいます。いま、ウマの利用価値もなくなってしまいました。現在、家畜の恵みを享受できなくなりました。

当時はゾド〔凍害・雪害〕が多かったのですが、草刈りということがなかったので、雪害になると移動して避けて行きました。放牧地が広く、移動も自由でした。わが家はウジムチンまで移動していました。ほとんど境を越えてハルハの領地に入出入りしていました。私が15歳のとき、ハルハに行ったのが最後で、それ以降はハルハに出ていません。

私には2人の子供がいます。娘の名前はスリエと言います。きのとのい（乙亥）、

1935年の生まれです。下は男の子でビムバと言います。子年です。牧場の職員でした。現在、牧民です。私が26歳のとき夫は死にました。ビムバは夫の弟から養子にもらいました。ビムバの妻シャグサルと言います。チベット語の名前（おがむという意味）です。辰年で、1940年生まれです。白い辰年です。ビムバは赤い子年です。姉のスリエは裁縫をします。器用でした。夫が亡くなったときに、1人の子は3歳、もう1人は2歳だったと思います。

もともとメネン平原というのは、いまの牧地からハルハの領土につづいています。いつのころか、ある日、淡い黄色い車に乗った人がやってきて「あなたたちはすぐに移動しなければなりません。移動しなければハルハの総督がやってきて連れていく、とされています」と言って、立ち去りました。それで急いでこちらにやってきて、放牧地を失ったわけです。

毒のある水を家畜が飲むと死にます。現在、放牧地にはまったく家畜のない人がいます。放牧地を手に入れるため、お金を払わないと手に入りません。これはどういうことでしょうか。私は外の仕事をよくしていました。家の家事もよくしました。一生をこのように過ごしました。人民公社になってから、私の仕事もあなたの仕事になり、あなたの仕事も私の仕事になったので、仕事はなんでもしなければならなくなりました。

私は実家にいたとき、裁縫はほとんどしませんでした。ウマに乗ってあちこち外の仕事にしていました。子どものころからそうでした。私は冬に結婚しました。冬の寒さのなかで嫁になったとき、義父に型に切ってあった布を渡され、縫うように言われました。それで私は縫ってあげました。義父は私の縫った服を着ていました。私は物事をすぐに覚えるほうです。裁縫をそんなふうに覚えました。私は人の靴を見ながら、自分にフェルト製の靴を縫って履いていました。人にも物を縫ってあげていました。私の誕生日はちょうどボグド山をまつる日でした。旧暦の7月3日です。不思議でしょう。ボグド山をその日にまつります。

私たちのふるさとはいへん素晴らしいところです。水と草のバランスがよく、いろいろな植物が生えていました。ポトゥーリ [イネ科ウシノケグサ属]、ターナ [ユリ科ネギ属]、ゴゴド [ユリ科ネギ属]、マンギル [ユリ科ネギ属]、ヒャアグ [イネ科エゾムギ属]、ヒャルガナ [イネ科ハネガヤ属]、デルス [イネ科ハネガヤ属]、シャリルジ [キク科ヨモギ属]、フムール [ユリ科ネギ属]、テメーン・フフ [カガイモ科カモメヅル属]、シヘル・オブス [甘草。マメ科カンゾウ属]、アルタルガナ [キク科アキノキリンソウ属]、モリン・シャリルジ [キク科ヨモギ属]、ウラルジ [カヤツリグサ科スゲ属]、ノホイ・ホショー [バラ科バラ属]、ノツォルガナ [ムラサキ科]、ハルガイ [イラクサ科イラクサ属] などたくさんあります。ノホイ・ホショーでお茶をつくります。ガンガ [シソ科イブキジャコウソウ属] という植物、アギ [キク科ヨモギ属] という植物がありました。それらを香にします。雷がなると、香を焚きます。ツァヒルダグ [アヤメ科アヤ

メ属]という植物もあります。青い花です。モイル [バラ科サクラ属] という実があります。家畜のみならず人間も食べます。ヘレーニー・ヌド [ユリ科クサスギカズラ属] という草もあります。小さな赤い実のなる植物です。黒いたねがあり、家畜がよく食べます。

## 21. スリエ

### 紹介

アリマ氏の娘である。新バルガ西旗のボグドオール・ソムの牧民の家に生まれた人である。いま定年退職して、旗の中心アルタン・エメール鎮にある自宅で暮らしている。私たちが、インタビューしたとき、淡い色のコートを着ていたスリエ氏は、100歳に近い母親のそばに座っていた。ものしずかな老女をみてすぐに、昔の教養のある人の雰囲気を感じられた。私たちは初回のインタビューをするときに、母のアリマ老人は98歳で、70数歳の娘が母のそばにいるということが、どれだけすばらしい運命だろうとうらやましいほど幸せに思われた。インタビューしているうち、スリエ氏は本当に多くの本を読み、知識豊かな人だとわかった。自分の生まれ故郷のことを紹介するうちに、地名について、「50年代にボグドオール・ソムという名前を公私合作によってケルレン牧場という名前になりました。80年代からフルン・ソムに変えました。2005年にボイル・ソムに変わりました。2009年からアルタン・エメール鎮という名前になりました」と話し、責任者が変わるたびに地名が変わっていたそうである。地名を無茶苦茶に混乱させている。本当は地名を変える必要がないと私見を話していた。スリエ氏は西旗のバルガたちのなかで初の大学卒業生である。1962年に内モンゴル師範大学に入学し、数学物理学の専門を勉強した。彼女は自分のことを「読書の禁断症状のある人」と言っていたとおり、一生涯の勤めのなかで読書の習慣を捨てることがなかった。地元では、本から離れなかったことで有名な人であった。

私たちは2010年8月12日の夜、初回のインタビューをし、13日の午後に2度目のインタビューをした。2013年7月16日に3度目のインタビューをした。インタビューアはサランゲレル、ソヨルマ、小長谷有紀、バイガル。

### 生活史から

**Q:** あなたの経歴に興味をもって訪問しました。あなたの幼少時のおもしろいことを紹介していただけませんか？

**S:** 私は1935年の生まれです。1947年に13歳で小学校に入学しました。この西旗の小学校に入りました。そのまえに、家でウマに乗り、家畜の放牧をしていました。勉強していませんでした。1950年の春に小学校を卒業し、中学校に進学しました。ハイラルの中学校に入りました。フルン中学校とも言います。漢族、モンゴル族の学生が一緒でした。当時、馬車、牛車、ラクダ車で、ときにウマに乗ってハイラルの学校に通学をしています。当時、3月1日に学校がはじまりました。昔は、新学期は春先にはじまっていました。私たちが小学校に行ったときも、家畜の出産期が終わったら学校に行き、秋に学校を休んでいました。生徒たちは春と秋に休んで、家の仕事を手つだっていました。1947

年の秋から、ハイラルの第1中学校という名前になりました。名前を変えたあとで、9月1日から学校がはじまるようになりました。その年の6月に朝鮮戦争が勃発し、「飛行機、大砲で朝鮮を支援する」というスローガンがありました。当時、私たちは新しい学校を建設するために木材や土を運んでいました。もともと小学校は6年間で卒業するものでした。しかし、私は2度飛び級し、4年で卒業しました。1952年に中学校を卒業して、高校に進学するとき、その年、ウランホトに師範学校を設立しようとして、私たちの2クラスの高校生をみなそこに連れていきました。その学校に着いて、クラス分けをし、一緒に行った子どもたちはみな幾つかのクラスに分散して入学しました。当時、ゾーオド(昭烏達)やバイリン(巴林) [いずれも、現在の赤峰市内] から学生が来ていました。私は数学、物理学のクラスに入り、クラス担当の先生はゾリグトで、彼は私たちの数学、物理学の先生でした。その学校は新しく設立されたので、多くの先生たちが生徒たちと一緒に移動しました。現在、ハイラルにいるドグソル、フフホトにいるユンシャー、ダームレンたちは私の同級生です。

1954年に、ウランホトの師範学校を卒業し、ジリム盟のホルチン左翼後旗のジャルガラン中学校に行って教えました。私たちの数学、物理学のクラスから、4人がそこに配属され、そこで教えました。当時、すべてが国によって配属されていました。私はそこで1年あまり働いて肺結核になり、1年休んで、地元の旗に転勤してきました。1957年に転勤してきて、わが旗の文化局に勤めました。文化大革命のとき、私をダライゾーン(ダシマグ)・ソムの小学校で教えさせました。10数年後に、旗の婦女連合会に来て働きました。1981年に婦女連合会で働きながら、そこで1983年に定年退職しました。婦女連合会で書記の仕事をしていました。定年退職してから、20数年、義母のそばにいました。義母の世話をして、ボグドオール・ソム(当時はすでにヘルレン牧場になっていました)の田舎にいました。

私は1957年に地元に戻って結婚しました。夫の名前はサンボーと言います。ヘルレンという牧地の生まれで、同じく私たちの旗の牧畜局で働き、1986年に定年退職し、田舎に戻りました。

祖父はたいへん教養のある人でした。祖父の書籍を文化大革命のなか、没収されてしまいました。ミシグドルジの本に書いてあります。実家に1冊『エルデニ・トプチ(蒙古源流)』がありました。わが祖父の本です。それが現在、政府顧問のバザルの手元にあります。祖父にはまた『物語の海』のような本がありました。『ダラーエヒ・ノム』『サランホホ伝記』がありました。文化大革命のなかでなくなりました。私はもともと地理学に関する本を読むのが好きでした。地理にはたいへん興味がありました。学校でも地理の授業を担当していました。いまは歴史の本に興味をもつようになりました。また旅行に関する本も読みます。わがバルガの歴史に関する本に、ソンドイの『陳バルガ[旧バルガ]人の歴史』、ミシグの『バルガの簡史』、ハルハの『アブダラバインのバルガ』



などの本があります。トプシンニヤムの書いた『バルガの起源』にわが母方の祖父のユムスレンに関して書いてありました。彼のことを管理専門家として評価していました。実際に、牧畜生活において、管理ができれば裕福になれます。わが地元には、チョー・ドゴルジャヴなどの物書きがいます。

義父はワンチンという人でした。チベット語とモンゴル語を熟知している人でした。のちに、ヘルレン牧場の責任者にもなっていました。本を仏壇のまえにまつていました。本を読む人たちがつきつき回し読みしていました。シャグザ、ボディ、旗長などのような人たちが、よく本を読んでいました。ジャムバル先生はよく物を書いていました。ノモンハン戦争についても書いていました。いま、多くの本が出ました。ソヨルマの家には古い本があったそうです。文化大革命のあとにもあったそうです。

わが義母はサヒャーという人でした。申年で、バルガ人でした。同じく長生きしました。1997年に90歳で亡くなりました。夫は兄弟4人でした。2人の兄、1人の妹がいました。上の義兄の名前はタンガドと言い、ラマ医でした。卯年の人です。1人の娘がいます。2000年に76歳で亡くなりました。あの兄の妻はドルゴルという人でしたが、兄より先に2000年に亡くなりました。現在、娘は牧民です。下の義兄はプヘーと言います。申年で、獣医でした。兄嫁はツェンドバザルといい、助産婦です。多くの子どもの取り上げました。病院で働いていました。また、バヤンデルスというソムの病院で働いていました。1人の息子がいましたが、その息子は亡くなりました。現在、息子の2人の子どもがいます。夫の妹はザンドラーという名前で、子年でした。旗の百貨店で働いていて、病気で1976年に亡くなりました。30数歳の若さで亡くなりました。彼女の夫もザンドラーという名前の人で、離婚していた。2人のあいだに1人の娘がいました。オユンという名前で、オユンも亡くなりました。彼女のボディ、ポロルという2人の息子がいます。オユンの父ザンドラーは北京に転職し、中央放送局のアナウンサーになっていました。彼は離婚したあと、別の人と結婚しました。あのザンドラーは中央民族大学付属中学校で教えているソヴドの父ですよ。ソヴドの兄ビャンバはここ西旗にいたとき、生まれました。夫の妹ザンドラーの娘オユンは、あのソヴドの異母姉になります。同じ父をもつ姉妹ですよ。オユンの2人の息子は現在、あの母方のおばのソヴドを知っているかどうか、わかりません。

わが家には6人の子どもがいます。3人の息子と3人の娘です。長女はナランといい、亥年です。次女はサランといい、寅年です。三女はスチンといい、亥年です。長男はツォルモンといい、辰年です。次男はゲンデンといい、酉年です。三男はトゥメンといい、丑年です。

中学校で勉強していたときに、私たちのクラスにラシドノロヴという先生がいました。サランゴワ先生が担任でした。ダゲール人です。オユントというのは音楽の先生です。

## 22. セムジド

### 紹介

ブリアート人。1942年生まれ。午年。初回のインタビューのとき、70歳近い方だった。出自をよく知る人であった。とても話し好きで、記憶力の良い人で、幼少時に行っていた場所の名前をはっきり覚えていた。彼女は1988年、40歳過ぎのときに、大学の通信学部を卒業し、大学に入りたいと思っていた子どものときの夢を実現させたと喜んで話していた。私たちは彼女の勇気に感銘を受けた。

2010年8月17日の午後2時から初回のインタビューをし、2013年7月16日にふたたびインタビューをした。インタビュアーはサランゲレル、ソヨルマ、小長谷有紀。

### 生活史から

Q: さて、私たちに経歴を話していただけますか？生まれ故郷、幼少時のおもしろいこと、氏姓、兄弟親戚、仕事に関して話していただけますか？

S: 私はバヤダイホグドゥン姓です。名前は、ジャラヴィン・バドミン・ユムスレンギン・ダランギン・サンジイシン・セムジドです。母は、バータルザヤー・ハルガナ姓で、ソート・アビドイン・イフツェレニイ・ボドジャヴィン・オドムバルという人でした。父はアガ寺院のラマ僧でした。そして、ロシアの赤軍と白軍との内戦時代に、アガ地域から出てモンゴル国に入っていたそうです。そうこうするうちに、モンゴル国で粛清時代になり、ラマ僧たちを殺し、逮捕しはじめたときに、モンゴル国から逃げ出し、1931年にここシネヘンに逃げてきました。母は当時、アガのシャバルティン・ボロムというところから同じく1931年に姉、義理の兄、と一緒にこちらに出てきたそうです。そして、両親は、シネヘンで結婚したそうです。母は12人と一緒に来たそうです。バルガ西旗のシャグナ・ダンビという家に着いたそうです。そして、つづけて母はハイラルに来て、パンチェン・ラマが来ていたのに遭遇したそうです。そして、パンチェン・ラマに供物を献上したそうです。一緒に来た姉と、義理の兄が、シネヘンにいて、母は西旗に行って働きました。母は以前、ある人と結婚していたそうです。そしてその人と離婚して40年代に父と結婚したそうです。そして私は1942年に生まれ、午年です。ちょうど1942年2月10日生まれました。そして私たちは1942年の秋、ホーリングルに移動しました。私は当時、赤ん坊だったそうです。道中はたいへん困難だったそうです。私たちはやっとホーリングルにたどり着き、そこは本当に素晴らしいところだったそうです。1945年、私が3歳で、外で遊んでいると、「銃をもったマンガド（ロシア人）が来た！」と家へ向かって走っていたそうです。そのとき、ダンビージャルソンという親戚のラマ、ラムバイ（ラマのアンバイ）がいました。彼は「子どもの目には見えるのです」と言って、移動することに決め、王爺廟に行き、そこで発熱し、病死したそうです。そして、1945年

の秋に、ロシア軍が日本を押さえるために来ました。1946年には父が重病にかかりはじめ、そしてすべての仕事を母1人でこなすことになりました。ある日、私が花を積んでくると、父がいなくなっていました。母に、どこへ行きましたか?と聞くと、仏の国に行ったと言われました。仏の国はどこですかと聞くと、遠いところだと答えてくれました。父は寝たきりなのにどうしてそんな遠いところへ行けるのかと思い、父のことを搜索し、しつこく聞いて母を困らせていました。そして、母は、幼い子どもと苦勞しながら、先に進んで、シャンディーン川に着いて戦闘になったそうです。母と私は去勢オスウシの牛車に乗って移動していました。ジャルガル姉が2人の子どもたちと一緒に移動していたそうです。私たち2人は彼らと一緒に移動していました。私の実父と一緒に出てきたそうです。シャンディーン川の戦闘で、ジャルガル姉は負傷しました。2人の子どもがいました。母は飛び降りて足を包んでいました。足から血が流れていました。

タイプス旗の北側に大きな岩がありました。私たちはそこに下りて、1泊しました。そのとき大きな戦闘になり、銃撃戦になりました。私は母と2人で歩いて行って、歩きながらタイプス川に着きました。川のほとりに着いて少し休憩して、水を飲もうとしたら、突然1人が来て、「あなたたちブリヤートのせいで私たちが被害を受けた」と言いました。それで川のほとりに出て、泊まっていた場所に戻ってくると、ボロクチン爺さんとその孫のドグイマ、2人の娘の4人がそこにいました。彼らをだれも撃たなかったと言っていました。タイプスで家財道具、家畜のすべてをなくし、そこから張北に行きました。そこに着いて、さらに張家口に着くと、ノローという伝染病が蔓延しました。その病気は乳をしぼる人には伝染しないそうです。母は大丈夫でした。私はその病気にかかりました。そして、ゴンガーという失明したブリヤート人ラマからチベット医学の薬をもらってなりました。顔をかいてはいけない、風にあたってはいけない、2週間は外に出てはいけない、と言われました。私たちと同行していたのはサンジンダルツ、プリンバト、ラドナジャヴィン・ドンドグ、ロブサンギン・ツェレンドルジなどの人びとでした。彼らはモンゴル語、日本語のわかる人たちでした。父は亡くなるときに、2つのことを言い遺しました。1つは、仏の国に行って必ず礼拝しなさいと話したそうです。2つめは、娘に学問させなさいと話したそうです。そうして私の母は人に頼んで、私に文字を教えました。ツェレンドルジという人が私に文字を教えました。そうするうちに私は病気になりました。人びとはさらに進み、私は母と2人で張家口に残りました。病気が治ってから、アメリカの宣教師たちの車で最後尾の人たちに合流し、一緒に向こうへ前進し、陰山山脈の北側のウラド中旗に着きました。そこに高い緑のテントを立てて、数世帯が1つのテントで暮らしていました。

ジャルガル姉さんの2人の子どもは、あの伝染熱病で亡くなりました。ガルダンラマ、アユーシュなどの人びとが私たちをラブラン寺に巡礼に行きますか?と聞いたそうです。そして父の遺言どおり、母と私2人で彼らについて向こうに行きました。ロボンチャム

ボ [阿貴廟, 内蒙古自治区バヤンノール市] の西側を通過して先へ進みました。そして向こうが見えない深い砂漠に入りました。暑いなか、あの砂漠のなかでのどが乾いてたいへんでした。道中、とある家からグゼーに入った酸乳をもらいました。それを飲みながら進みました。おおよそまる2日歩いて砂漠を出ました。砂の向こうに、緑の葦のある深い水のほとりに、葦の根が深いところまで見えます。川のほとりに近づけないほど深い緑の水でした。怖くて近づけませんでした。ウシも喉が乾いて飲みたがっているでしょう。あれはたぶん、ジャランという [バダジリン] 砂漠だったと思います。さらに進むと葦がありました。ウシはそれらの一部を食べますが、一部を食べません。あの葦は毒でした。一部のウシは下痢していました。ガルダンラマはウシたちと村に居残りました。ウシたちが疲れて歩けなくなりました。母と私の2人は義理の兄アユーシュと3人で歩いていると、モノーセレンジャヴというラマ僧が私たちにむかえにラクダを連れて来ました。そして、私たちは一緒に進みました。あのラマ僧は少々肉を持っていました。私はたいへんおなかをすかしていたうえ、長いあいだ肉を食べていなかったで、食べたがっていたと思います。あのラマ僧は先に1つの場所を指して、そこに早くつけば肉をあげる、と言います。それで6歳の私は疲れを忘れて急いで歩いたことを覚えています。肉をなんとか食べようと先を急ぎました。行って、夏河を下って行って、およそ2カ月行くと、ラブラン寺に着きました。ウルジンの妻が、チメド、センジドマという2人の娘と一緒にそこにいました。私たちはまずそこでおがみしました。

そこに着いて、母はラマ僧たちに服を縫ってあげて、2人はなんとか生活しました。わが母は寺の庭を五体投地でまわります。8回まわって礼拝すべきだそうです。寺の外側をまわって五体投地を8回完成させて、足の距離でまた1週しておがみます。そして、ラブラン寺でおおよそ1年あまり暮らしました。母は昼間に服を縫います。私はラマ僧にものを分けます。そして1年あまりそこにいて、のちにそこからさらに進んで甘州というところで2カ月暮らしました。甘州はいまの張液です。そこにいたとき、母と私たち2人は、ハンダマサンという女性の活仏をおがみしました。そのハンダマサンの女活仏は幼い子どもでした。私たちが着くと、遊んでいました。そして「巡礼者が来ました」というと、急いで席にはいのぼっておとなしく座りました。そのように幼い女子の活仏をおがみしました。そこから私たちはふたたびラブラン寺に戻りました。

さらに向こうへ、ホルソスン活仏の農場にやってきました。私たちは野生のゲチゲン [薬用ニンジン] を掘って来て、ゆでて食べます。チメド姉さん、センジドマ姉さんたちと一緒にゲチゲンを掘りました。ある日、行ってゲチゲンを掘っていたら、カササギが鳴きました。チメド姉さん、センジドマ姉さんたちは、「ダシニヤムが来たようだ、カササギが鳴いた」と話していました。そして掘って帰ったら本当にダシニヤムが来ていました。そして、解放され、シネヘンが平和になったことを聞きました。

一緒に行動していた人びとが、ダシニヤムと一緒にシネヘンに戻りました。母と私は

残りました。ラブラン寺にさらに1年住んで、戻ってきました。そこにいるあいだに、私はチベット人の子どもたちと遊んで、チベット語を話すようになりました。母の裁縫の仕事の通訳ができるようになっていました。母は裁縫の仕事で少々お金を貯めたでしょう。そして、1951年に2頭のウシを売って、ほかにも少しのものを売って、多少のお金をもちました。また、ラマ僧たちが少しお金を寄付してくれ、私たち2人の帰還を助けました。ラブラン寺から蘭州に向かうとき、ロバに乗って、ウマに乗って、ラバにも乗って行きました。母と私の2人は、ラブジャイン・セブジド、バーヴィン・ダシ夫婦、ミジドジャヴ親子など、7人と一緒に来ました。ラブラン寺から6日間移動して、蘭州に着きました。1人の商人が私たちを連れて道案内をし、役所を紹介してくれました。蘭州の政府機関は上に報告したのかどうか、私たちを逃げ出した人たちと知って重視し、彼らが専門の人を派遣し、私たちを連れて八路軍の車で蘭州から西安に送り、西安でも旅費を出してくれました。西安に到着すると、私たちをホテルに入れました。私をそのホテルに残して、母たちは政府に行きました。出かけるとき、「外に出てはいけない、迷子になりますよ、迷子になったら置いて行きますよ」と言いました。私がホテルの門に出ていると、人びとは町の人々が踊りながら練り歩いていました。私は興味をもち、彼らのうしろについて行きました。うしろを振り返りながら進み、来た道を覚え、ホテルを覚えているつもりでした。そして、見て帰っていると、母は向かいから呼んで手を振っていました。彼らが政府から戻ってきたら、ホテルに私がない、と言います。母はびっくりして走り出したそうです。私は幼かったのです。そこから出発するときにも、1人が私たちを連れて北京に着きました。その中国人が、北京から私たちを列車に乗せました。そして私たちはハイラルに直接到着したそうです。ラブジャーギーン・セブジド、母、私たちが一緒に来ました。バルジニャムという人が母と私たち2人を連れて、親戚のところへ送ってくれました。私たちは親族と会いました。母はさまざまな仕事をしました。姻戚サンピルのところでウシ飼いをし、ゴンビンバザルおじの家でヒツジ飼いをするなどです。

母は北京で私に小さなノートを買ってくれて、道中100以下の数を教えてくれました。帰ってきたあと、1953年、ラクダ車でハルガナの小学校に送りました。そのとき、学校に入って卒業するまで無料でした。党と政府の大恩です。このような大きな恩に、報うことができるかどうか常に考えます。両親の恩をどうやって返そうかと考えます。母は1人で苦勞するうちに病気にかかりました。なんとか高校を卒業し、母の病気を治療させるために、学校を出て母の看病をしました。私はたいへんな勉強好きです。大学に進学したいと希望していました。そして、のちに通遼の民族大学の通信学部で勉強し、本科を卒業した証明書をもらいました。私は通信教育で勉強していたとき、すべて自分で書いていました。

Q: あなたはチベット語をまだ覚えていらっしゃいますか? 地元に戻ってどんな仕事を

しましたか？結婚しましたか？何人の子どもがいますか？

**S:** チベット語をつかわないので、ほとんど忘れてしまいました。1つや2つの名詞しか覚えていません。私はハイラル第1中学校を卒業して、小中学校の教師をした経験があります。ブリガードでメスウシを担当しました。経理係も担当していました。最終的に、1970年代から物理の先生として長年働きました。私は1967年に結婚しました。2人の息子と、2人の娘がいます。

## 23. ドルジハンダ

### 紹介

1940年ハイラル市生まれ。ブリヤート人。中国内モンゴル自治区の現在のフルンボイル市エヴェンキ旗の畜産局に30年間、勤めた。

1990年に定年退職し、両親の故郷であるロシアのブリヤートへ移住することを決めた。現在、ブリヤート共和国のウランウデ市に暮らしている。2013年の春、東京に暮らす娘を訪ねて来日したドルジハンダ氏にインタビューをした。1回目は2013年5月24日に国立民族学博物館でインタビューし、翌6月14日に2回目、東京でインタビューした。

インタビューア―は、小長谷有紀、サランゲレル。

### 生活史より

**Q:** あなたの出身、幼少のころのこと、仕事やお子さんたちのことなどについて話してくださいませんか？

**D:** 私の名前は、スレンジャビーン・バラバリン・ドルジハンダと言います。バートルジャン・ハルガナ姓の人です。1940年の辰年生まれです。生まれたのが秋だと覚えていた祖母は、私の誕生日を9月20日にしました。

私の父は、フルンボイルのシネヘン東ソムの人でした。名前はバルバラで、母の名前はザリマと言います。私の母は、満州国の興安北省の満鉄病院で看護師として働いていました。私の父は、満蒙軍の兵士でした。私たちは姉妹2人でしたが、私の姉は病気にかかり、子どもころに亡くなりました。私の父は兵役を終えて、生まれた故郷に戻りましたが、私の母ザリマがついて行かず、ハイラルに残って仕事を続けました。そのように両親は離ればなれになって、最後には離婚しました。それで、私は母と祖母とハイラルで暮らしました。1940年、母はモンゴル国のダシバルバル・ソムからハイラルに来たグリンテヘという人と一緒に暮らすようになりました。私の父も再婚して、2人の娘が生まれました。

私の母方の祖父をザプリンと言います。祖父は、いまのロシアのチタ州の人です。ポールジ [ロシア名ボロジャ] のハラシベル村に生まれ育ちました。当時のロシア皇帝の御医を勤めていた、ピョートル・バドマエフというブリヤート・モンゴル人がブリヤート・モンゴル人の若者たちを集めて、サンクトペテルブルクで教育を受けさせられていました。祖父もサンクトペテルブルクの学校に行って、勉強をさせられたそうです。

しかし、サンクトペテルブルクに留学したブリヤート・モンゴル人の学生たちはキリスト教徒になることを拒んで、はるかアガの故郷まで帰還しました。祖父は1919年ころ、アガより南下して、満州里に定住したそうです。1921年にロシア革命が起きて内乱がはじまり、さらに大勢のブリヤート・モンゴル人が満州里に移住しました。私の祖父は口

シア語がとても達者だったので、商売をしながら通訳なども勤めました。しかし、祖父は病気で亡くなりました。祖母と母の姉のドリマの2人がロシア人の裁縫の仕事をして生計を立てたそうです。

私の母のザリマは、満州里のロシア語の高校を卒業したのち、1930年ごろにウランウデに行って医学専門学校に入学しました。しかし、学業を続けずに1931年に満州里に戻ってきました。ウランウデから故郷に戻った時期は、ちょうどチベットの活仏パンチェン・ラマがフルンボイルにいらっしゃった時期と重なりました。母は代表に選ばれて、活仏にハダグ〔儀礼用の絹布〕を差し上げたそうです。私の母のザリマは、知的でまた色白で美しい人だったと言います。彼女の美しさにちなんで、人びとは生まれた女の子にザリマと名づけたそうです。

母は日本語も少し覚えて、当時の日本人医師がいる満鉄病院で看護師として働いていました。私の継父グリンテへは満蒙軍の兵士でした。彼は、1939年のハルハ川戦争（ノモンハン事件）に参加しました。母親が仕事に行くあいだ、ロシア人の保母が私の世話をしました。私は5歳までロシア語しか話せなかった、とのちに祖母から聞かされました。母は1944年に、病院で脳の伝染病にかかって亡くなりました。母は1914年、虎年生まれでしたので、亡くなったときは30歳未満でした。母は知的で、美しい女性でみんなに尊敬される人でした。母が亡くなったのは、当時のとても複雑な社会背景があったと思います。

私は自分の母について少ししか覚えていません。まるで夢のようなぼんやりとした記憶があるのみです。仕事から帰ってきた母のポケットにいつもお菓子をさがして、小さな手を入れて探っていたことを覚えています。また、真冬のなか、映画館に行くことになって、母が私を毛布で息が苦しくなるほどくるくる巻いたことをよく覚えています。母の口紅でお化粧をしようと小さい自分が鏡のまえにすわって、顔を赤くなるまでに塗ってしまったこともあります。

私と祖母の2人だけの生活がはじまりました。祖母は1880年生まれの辰年の人です。祖母の名前はバルジマと言います。バルジマは、ラマ僧からもらった名前ですが、本名はなんだったか私は聞いていませんでした。祖母は、自分の小さいときのことをよく語ってくれました。オノン川のほとりで生まれた祖母は、少女のころ、ヒツジの放牧をしました。女の子だから、裁縫ができるようにと、ヒツジを放牧するあいまに、皮の手袋を作ってくるように大人に言いつけられました。真冬のなか、手指が真っ赤になって痛かったと話していました。祖母は、裁縫の仕事は苦勞が多いので、「頑張って勉強すれば、自分で買えるから、針仕事をせずに済むよ」と私に言い聞かせました。ナマサリーン・ザブリンと結婚してから、ロシアの国境近くに暮らしていました。1919年に、満州里に引っ越してきて暮らしました。祖母と私は、ちょうど60年離れていました。祖母が60歳の年に私が生まれたのです。祖母には2人の娘がいて、私の母は2番目の娘になり



ます。母の姉であるドルマは1942年に病気で亡くなりました。

祖母は「あなたがいるから、私が生きているわ。でなければもう死んでいるわ」と繰り返し私に言いました。

母が亡くなったその冬、私と祖母の2人はハイラルから離れて南屯で冬を過ごしました。その冬、私の継父であるグリンテへはツデンという名前の女性と再婚しました。そのころ、ロシアから「赤」がやってくるというデマが流れるようになりました。1945年の春、「赤」から逃げるために、人びとが財産を牛車に積んで西へ移動しはじめました。継父たちは西へ移動するために、家からいろいろな物を運び出しました。

私は、母の洋服など〔生母の持ち物〕を継母に渡さない、と大泣きして、継母の手から奪い返したことを覚えています。私と祖母は20頭ぐらいのウシと30頭ぐらいのヒツジとともに村に残され、大人たちは遠く西へ向かって出発しました。当時、「赤」がやってくると険しい空気が流れていて、人びとはひどく不安になっていました。私たちは、家にある写真を焼いたり、はさみで切ったりしました。継父が満蒙軍の軍服を着ている写真が問題になると思ったからです。

ある日、私の実父であるバルバルがやってくる、私と祖母を自分のゲルの近くまで移動させました。私の父と再婚した女性はマハランツイン・ハンダと言う名前でした。父とのあいだに娘が2人生まれました。1人は早くに亡くなりましたが、長く生き残ったほうの名前はスペルマと言います。私より4歳年下の妹になります。私の父のバルバルは、兄弟4人でした。1番上の兄はバルダンという名前です。バルダンおじさんはたいへん有能な医師でした。2番目の兄はバラハルと言います。父の弟バルジニマは満蒙軍に従軍していました。バルジニマの妻はビャンバという名前です。父の母である私の祖母がまだ生きていました。私のことをとても可愛がってくれました。

1945年の夏、父は私と祖母のために、シネヘン寺の近くにあったシネヘン小学校のすぐ隣にゲルを建ててくれました。私は、シネヘン小学校によく遊びに行きました。小学校の子どもたちが朝礼をして、日本の天皇を象徴する旭日旗に向かって礼をしていました。先生たちの名前はほとんど覚えていませんが、1人だけ、テムチグ先生を覚えています。

1945年8月9日早朝、ソ連軍がハイラルを攻撃しはじめました。祖母が私を起こしました。「たくさんの飛行機が飛んできている」と祖母は私に言いましたが、まだ5歳の私は、何が起きたかまったく理解していませんでした。「戦争になりました」と言って学校は解散になりました。私たちは、父の夏営地に移されました。人びとはみなどこかに隠れました。残されたのは、私と祖母と目の見えない3人でした。祖母は、目の見えない人に食べものを持って行ってあげました。私たち3人には、どこにも逃げるところがありませんでした。あちらこちらに殺された人びとの死体が横たわっていました。

満蒙軍の第7師団、第8師団の兵隊もやってくる、だれもないゲルのなかのものを

持って行きました。ある日、1人のモンゴル人兵士が祖母にむかって「馬の鞍を出せ。出さないと殺す」と言って、銃を見せました。祖母が「あなたは自分で探し出せ。殺すなら、この子を殺してから、私を殺せ」と答えました。そうしていると「老人と子どもを脅かすな」と將軍のような人がやってきて、その兵士を追い返しました。朝になって、ウシの乳をしぼっているとき、大勢の日本人兵士がやってきました。「寺はどこだ、どこだ」とたいへん慌てたようすで質問していました。人びとはしぼった牛乳を日本人兵にあげて、寺の方向を教えていました。そのあと、人びとは乳をしぼりおわると、また、すぐにどこかへ隠れてしまいました。私は、遠くから亡くなった日本人の死体を見たことがあります。また、馬からおりて、その死体のそばに長くいる人がいました。それは、金菌を取ろうしているのだと、みなが話していました。

うわさの「赤」のソ連軍がやってきたのです。彼らは車でやってきて、ゲルのなかに入って、ものをぜんぶひっくり返して、何かさがしていました。ロシア語のできる祖母が、何をさがしているかと聞くと、「銃をさがしている」と言いました。ロシア人は銃が見つからない代わりに、私の手に持っていた小さな鏡を奪おうとしたとき、私は大声で泣き出しました。祖母は、できるロシア語を全部使って怒鳴り散らしたところ、そのロシア人は私に鏡を返して、祖母の針仕事の道具を見つけて持ち去ったそうです。祖母には針1本しか残しませんでした。おかしいことですが、ロシア人兵士には、針仕事の道具が必要だったのでしょかと思えます。

ソ連軍と一緒にモンゴル国〔モンゴル人民共和国〕の軍隊も来ていました。モンゴル国の軍隊は、満蒙軍の兵だった私の父とその弟のバルジニマをモンゴル国に連行しました。モンゴル国ドルノド県のチョイバルサン市の監獄に入れられました。父は1946年に獄死しました。父の弟で、私のおじになるバルジニマがツウルトムという名前のブリーヤート・モンゴル人と2人で監獄から脱出し、フルンボイルまで帰ってきました。バルジニマおじは帰ってきてから、祖母と私と一緒に暮らしました。叔父から父が監獄で亡くなったことを知り、自分が完全に孤児になってしまったと分かりました。

モンゴル国から逃れてきた者をさがして捕まえようとするので、おじのバルジニマは、さらに遠くへ逃げることになり、現在の中国の青海まで逃げて行きました。しかし、青海の海西州のウラン県というところで共産党に捕まって、労働改造と称しておもに採石場でチベット人と一緒に強制労働させられました。バルジニマおじが妻とハイラルに戻ってきたのは1985年のことです。おじは釈放される時、お茶とハダグ〔儀礼用の絹布〕をもらいました。私は、1989年、青海に行く機会があったので、何の罪もないおじが10数年も収監されたことを青海の政府機関に問いつめたことがあります。そのとき、「あなたのおじが生きて戻ったことを良かったと思え」という答えをもらいました。

おじは青海で養子をもらっていました。名前はダシザブと言います。おじはフルンボイル、ハイラルに戻ってきましたが、養子についてはきませんでした。ダシザブの実の親

は、青海から遠く離れたフルンボイル草原に息子を行かせたくなかったそうです。私は青海に行くことがあり、ダシザブが面倒をみてくれたことがあります。彼は、ウラン県の獣医局の局長になっていました。ダシザブは、私のことを「お姉さん」と呼び、車を運転して青海のいろいろなところを案内してくれました。ダシザブは、仕事でフルンボイルを尋ねてきたこともあります。1度、医者と一緒に2人で来たご連絡がありましたが、私は会うことができませんでした。

おじのバルジニマはシネヘンに戻ってから、妻のビャンバさんと養女のツェツェグと3人で暮らしました。1992年に亡くなるまで養女のツェツェグは、おじのことをたいへん良く世話してくれました。生活も豊かになっていたので、おじは最後の数年間、人生でもっとも安定した時間を過ごせたと思います。1988年におじのバルジニマが妻ビャンバとロシアのアガ地区のボールジに里帰りしたことがあります。そのとき、バルジニマの妹にあたるハマツレンマに会いました。ハマツレンマは私のおばになります。彼女には7人の子どもがいます。現在、ウランウデで元気に暮らしています。おじは、長年離ればなれになっていた妹と会ってとても感激したそうです。「また、ロシアに会いに来るから」と妹に約束しましたが、実現することができず、1992年に亡くなりました。妻のビャンバさんは、いま、90歳を過ぎましたが、ブリヤート共和国の首都ウランウデで暮らしています。

おじは、1990年に私たちが初めてロシアを訪問したとき、「ロシアのアガは、私の生まれ故郷だ。私も帰りたい」と泣いたことがあります。私は、ロシアに定住するようになってから、おじの願いを思い出して、ロシアに連れてくるつもりでしたが、彼はすでに亡くなっていました。残念でした。

私は、1990年にロシアのブリヤート共和国に移住しました。そして、モンゴル国のウランバートルを訪問しました。私の実父のバルバルがモンゴル国ドルノド県のチョイバルサンの監獄で亡くなったことを聞かされていたので、詳しいことを知りたいと思っていました。知り合いの人を通じて調べてもらった結果、確かに父は1946年に亡くなったことを確認することができました。父は取り調べの時、自分に2人の娘がいることを述べていました。しかし、記録にあるのは、父が再婚してから生まれた娘たちの名前であって、私の名前ではありませんでした。私は、父についての書類に娘として署名しました。父のモンゴルでの死亡はこうして確認されたのです。

私の家族の歴史はきわめて複雑でした。私の母が亡くなってから、継父は再婚しました。そして、「赤」が来るからといって青海省海西州のウラン県のツゲ湖まで逃げて行きました。1965年に、フルンボイルに戻ってきたのです。同じような運命をたどったブリヤート・モンゴル人は大勢いました。継父が帰ってくる時、連れて行った妻は別の人と結婚していて、継父はセミジデと言う名前の女性と再婚して、青海から2人で帰ってきたのです。シネヘン・ソムのホリボーで暮らしました。2人のあいだに子どもがいな

かったので、養子のジゲメドルジと養女のムンフツェツェグをもらいました。私のことを「娘」だと認知してくれました。そのとき、私はすでに結婚していました。私の夫は嫌がらずに一緒に継父に会いに行ってくれました。私たちには血縁関係はありませんでしたが、家族のように仲良く暮らしました。私の継父は手先がとても器用な大工でした。とても働き者でしっかりした人でした。グリーンテへは1992年に、亡くなりました。養子のジゲメドルジは、今、フルンボイルで暮らしています。彼は結婚して2人の娘がいます。養女のムンフツェツェグは結婚して、家族と一緒に、ロシアのアガで暮らしています。サイハンの長男がウランウデのプライベート学校を卒業して、モスクワの第一医学大学の大学生になりました。

私の同父異母の妹ツベルマについて話します。彼女は、ずっと牧民暮らしをしました。彼女の夫は事故で亡くなりますが、子どもが5人いました。彼女は病弱で1990年のはじめごろに亡くなりました。次女のサイハンは、バリヤーチ〔接骨師〕でしたので、ウランウデで大勢の人を治療して、有名になりました。サイハンは、さらにモスクワで開業して、妹の2人も連れて行きました。一番下の妹セレジマがモスクワでプライベート料理の食堂を経営しています。

私を4歳から15歳まで育てた祖母は、1956年3月14日に亡くなりました。私の両親が死んでから、私は祖母と2人だけで暮らしていました。私たちには20頭ぐらいのウシがいました。また、50頭ぐらいのヒツジ、馬車が1台ありました。私たちの暮らしは、それほど苦しいものではありませんでした。祖母が私のことを大事に育てて、孤児だからといって嫌な思いを少しもさせませんでした。祖母が亡くなって、世の中でたった1人になって、私の人生が変わりはじめました。

## 私の学歴と仕事

さて、1947年の秋、私は新設される小学校の近くに、祖母と2人でゲルを建て、春の入学を待っていました。待っているあいだに、モンゴル文字のできる人に家で教えてもらっていました。冬がすぎても、春になって、7歳の私は、シネヘン東ソムのハルガナ小学校に入学しました。私は、学校に入るまえに読み書きができたので、3年生に編入されました。ハルガナ小学校は、シネヘンにできた初めての学校です。2年間ハルガナ小学校にいて、私は南屯の小学校に転校しました。南屯小学校で6年生まで卒業してから、ハイラルの第1中学校に入学しました。1952年～1958年まで6年間、高校を卒業するまで、ハイラルの中学校庭のなかにモンゴル・ゲルを組み建てて祖母と2人で暮らしました。家畜を人に預けて放牧してもらいました。祖母は裁縫の仕事続けました。田舎からハイラルに来た人びとが私たちのゲルに泊まっていくことがよくありました。祖母は、私の小さい時から孤児だからといろいろなものをたべさせられませんでした。私は、5歳の時に、豚肉を食べて、ひどく病気になることがあります。それから、一生、豚肉

をたべることはありませんでした。祖母は私に「勉強に集中しろ」と言って一切家事もさせませんでした。「あなた自身は偉くなりなさい。あなたの代わりにすべてしてあげるから」と祖母が言いました。

暗い小さなゲルのなかで、祖母が来客とおしゃべりしているのをほんやりとやりすごしながら少女時代を過ごしました。ゲルを訪問している人のなかに、祖母の弟の娘のツェベグマおばさんも来ていました。ツェベグマおばさんは、私の中学校のモンゴル語の先生であったブレンサイン先生と結婚しました。ブレンサイン先生は、内モンゴル大学の先生になったとき、家族と一緒にフフホトで暮らしていました。文化大革命がはじまると、ブレンサイン先生はいろいろ非難されるようになりました。身の危険を感じたツェベグマおばさんは、娘を連れてモンゴル国へ行き、一家は離ればなれになりました。ツェベグマおばさんの数奇な運命について、日本の有名な歴史作家である司馬遼太郎が『草原の記』という本で紹介しました。また、鯉淵信一先生の『星の草原に帰らん』という本に詳しく書かれています。私も、ロシアに移住してから、1992年にウランバートルでツェベグマさんと再会しました。

学校で私はスポーツ万能で勉強も良くできました。また、1952～1958年のあいだに、クラスの少年隊員の大隊長になっていました。1955年の高校受験のとき、私たちのクラスから2人だけ合格しましたが、その1人が私でした。全学級から6人だけ高校試験に合格しました。当時、内モンゴル自治区のなかではハイラルにだけ高校がありました。ですから、自治区の各地から学生が入学してきました。ウランホトから来たバトアルビン、サッカーとバスケットボールが得意でスポーツ万能で人気者でした。彼は高校のクラスの体育と文化活動の代表を務めました。1953年に新疆から41人の学生たちが入学してきたこともあります。高校受験のとき、大半の学生は帰郷しましたが、残った20人ぐらいが私と同じクラスになりました。

私は冬になるとスキーとスケートに明け暮れました。1957年1月、私たち10人ぐらいの学生は内モンゴルの代表になって、吉林省通化で開催された全国冬期運動会に参加しました。私は、スキー競技で銅メダルを取りました。それから、私は毎年試合に参加する資格を取りましたが、大学受験になって参加できなくなりました。私は、歌を歌うのもとても好きだったので、コーラスのサークル活動もしていました。本当に楽しい学生時代でした。

私は、学校での成績が良かったので、学校からの推薦で大学に入学することになっていました。同級生たちが必死になって大学の受験勉強をしていました。しかし、私は毎日遊んでいました。いま、そのことをとても後悔しています。私は孤児だったので、親身になって私のことを考える大人がまわりにいませんでした。ツェベグマおばさんたちはフフホトに引っ越しするとき、私を連れて行くつもりでしたが、祖母が反対しました。私と離れて暮らしたくなかったのだと思います。

大学で推薦入学ではなかったら、私の成績では北京の大学にも入学できたのはまちがいありません。しかし、内モンゴル牧畜大学の畜産関係の勉強をした私は、女性にとっては体力の要る、きつい仕事を選んだこととなります。私は、結婚してからも赤ん坊をおんぶして、馬に乗って、畜産の現場へかけつけることが多かったので、つねに後悔の思いが心にありました。

内モンゴル牧畜大学は、1952年に創立されました。私は、1958年に入学しました。私の同期生は漢族の学生が多かったです。北京から来た学生も多かったです。また、インドネシアとベトナムから来た華僑の学生で、医学大学に志願して不合格になった生徒が入学してきました。学校がはじまった途端にしばしば労働に出されました。地方で農作業をさせられました。また、大学の牧場で肥料を加工しました。昼には鉄を溶かしました。夜になると大学の先生たちを批判する大会がありました。先生がつるしあげの対象になり、学校は勉強する場所ではなくなっていきました。

「大躍進」という政治運動がはじまって、鉄で作られたすべてのものを壊して溶かす作業をさせられました。鉄の生産でアメリカとイギリスを追い越せというスローガンが流行した。毎日ラジオでは、1ムー [6.67アール] で5,000キロの麦を収穫したとかの放送が流れました。大学の先生たちの作った教材を批判して、学生たちが自分で教材を作成するようになりました。

1960年に、突然、食料が何もなくなりました。学校の食堂には食べるものが何もありません。しかし、学校が牧畜大学だったので、私たちは実験に使用していた豚肉を焼いて食べるようになりました。私は大学の牧場で乳しほりを担当していました。ウシにあげるえさのニンジンとをみんなで奪いあって食べました。ウシにえさをあげるとき、そのえさの半分を人間が食べてしまったのです。しかし、しぼった牛乳を飲むことを思いつきませんでした。いま、考えると本当にバカだったと思います。

飢饉がすすんで、女学生のほとんどは生理がなくなりました。また、足が腫れて、歩けなくなりました。教室まで歩けないので、学校側からは、学生を横になって寝させて体力を消耗しないようにじっとしているよう勧告しました。

1961年の春、私たちは全員、大青山の牧場でヒツジの出産を手伝う仕事をさせられました。30人の学生のうち20人が家畜から病気が感染し、入院しました。病気のなったのは、ほとんど華僑の学生でした。私はかからずに済みました。

大学の先生たちが少し仕事に戻って働けるようになりました。先生たちは右派と言われて、たいへんいじめられました。けれども、私たち学生に熱心に授業をしました。本当にいろいろよく教えてくれました。しかし、右派と言われた2人の若い講師は病気にかかって、42度の高熱をだして苦しんでいるのに、だれも助けようとしなかったことにとてもショックを受けました。同じ人間なのにひどい扱いをすることが心底いやでした。

## 結婚

私は1962年4月に学生結婚をして、7月に2人一緒に大学を卒業しました。私の結婚相手は、ハイラルの同じ高校に通っていた、バトアルビンというトゥメド・モンゴル人です。私たちは、同じハイラルの高校にいました。私が牧畜大学に入学したとき、彼は、すぐ近くにある師範大学に入学しました。彼は歴史の勉強が好きでしたが、地主の息子であるという出身が影響して、スポーツ学部には入れませんでした。バトアルビンの父親は、ウランホトで有名な大地主でしたが、全財産が没収されたので、彼の生活は私よりも貧しいものでした。私は、孤児だからと言って、毎月19元の生活援助金をもらっていました。毎月の食費が13元でした。残った6元で生活用品を買います。私たちは、大学が違いましたが、いつも一緒にいました。その時、フフホトには、それほどたくさんの建物がありませんでした。道路は土でした。バスもなかった時代です。私たちは、歩いて町に行きました。古楼というところに屋外の映画館がありました。香港や外国の映画が上映されることもありました。私たちは映画館まで歩きました。宿舎に戻るときはズボンがいつも土と泥まみれになりました。けれども若い私たちには楽しい時間でした。

私たちは1962年4月に結婚しました。夫の2番目の兄の説得によって、私たちは大学を卒業するまえに結婚手続きをしました。私は妊娠していて、長男がおなかの中にいました。夫は師範大学のスポーツ学部を優秀な成績で卒業して同学部に講師になりました。私の就職先はシリング盟の気象局になっていました。私は、夫と離ればなれになったうえ、シリングまで行くことに怒りを感じました。私は妊娠のため、悪阻がひどかったので、とうとう生まれ故郷のハイラルに帰ってしまいました。故郷で、大学で学んだ知識を生かして、畜産局に就職し、30年間働きました。

1962年12月16日、私はフフホトで出産するつもりで職場から休暇をもらいました。私は南屯からハイラルに行って、友達の家泊まって、翌日にフフホトへ出発するつもりでした。しかし、その夜、おなかが痛くなって出産しました。長男が1カ月も早く生まれたので、私たちはフフホトへ行かずに南屯に戻りました。1963年7月1日に、私の夫もフフホトからハイラルに転職してきて一緒に暮らすようになりました。その年、夫の両親がウランホトから引っ越してきて、亡くなるまで私たちと一緒に暮らしました。夫のバトアルビンは、兄弟15人の一番下の末っ子でした。しかし、15人の中で生きて大人になったのは5人だけでした。

夫の家族について簡単に述べたいと思います。私の義理の父ボラグは、中国が成立する前に、現在の内モンゴルのウランホトで、たいへんお金持ちな大地主でした。しかし、新しい政権がはじまって全財産が没収されてしまいました。衣食住に困るようになった夫の両親は、私たちと一緒に暮らすようになりました。孤児だった私にとって、にぎやかな大家族は夢だったので、義父母と暮らすことをとても快く思いました。

義理の父は性格が穏やかでたいへんに暮らしの知恵のある人でした。義理の両親は私に、家事のやり方を教えて、子どもの世話までしてくれました。フルンボイルの美しい草原の景色にすっかり感心して、「なんと美しい土地だ。ずっとここで暮らせばいい」と話していました。2人の老人は本当に気ままに私たちと暮らして、質素ながらも幸せな老後生活ができたと思います。

夫の兄弟について話します。夫の一番の上の兄はバトバヤルという名前です。バトバヤル兄さんは、満州の興安軍官学校を卒業して、モンゴル語日本語の特級通訳の資格を持っていました。彼は、内モンゴル人人民党の本当の党员だったので、政治運動のなかでたいへんな目に遭ったのでした。文化大革命を生きぬくことができず、定年退職までウランホトのラジオ局に勤めました。夫の2番目の兄は満州の師範学校を卒業しました。シリング盟で働いて暮らしました。89歳で元気でいます。3番目の兄は、興安軍官学校の少年隊員でしたが、日本敗戦のあと、瀋陽の軍医大学に入学して、卒業後、軍医になりました。現在の内モンゴルのバヤンゴル盟で働いて暮らしました。2007年に亡くなりました。義父母は、最初は、夫の3番目の兄をたよって行きましたが、嫁との折り合いが良くなかったため、結婚したばかりの、末息子になる、つまり私の夫のところにやってきたのでした。

義父は早起きの人でしたので、しぼったばかりの新鮮な牛乳で乳茶を作って飲むのが大好きでした。生活のやりくりが得意な彼は、私たちにいろいろな暮らしの知恵を教えました。出張で留守が多い夫に頼ることなく、生活できるようになったのは、義父母のおかげでした。義父は、私たちの子どものなかで次男をとっても可愛がりました。祖父と孫2人がいつも同じ布団に寝起きしていました。当時、めずらしいお菓子を手に入れたら、他の子に隠しながら、次男にあたえました。次男も、おじいさんこでしたので、大地主を批判する会合で、祖父の隣に初めから終わりまで立って批判を受けたのでした。義父は、性格の穏やかでお人好しでしたので、文化大革命の時に、たいへんな目に遭うこともなく、1973年に食道癌で亡くなりました。私は、義父の亡くなった夜をよく覚えています。きれいな夜空に銀のまるい皿のような月が光って、夜なのに昼のように明るかったものです。

義母はオユンチメグという名前でした。名字は金でした。いまになって考えると満州族の出身だったと思います。義母は1968年に病気で亡くなりました。

2人ともフルンボイルの私たちのところで亡くなったのです。当時の葬式は、火葬でした。たくさんのお香を積みかさねて、亡くなった人をその上に乗せて火葬をしていました。1988年、私と次男は、仏教の本山として有名な五台山の墓に義父母を納骨しました。

私は、1962年にバトアルビンと結婚してから、5人の子宝に恵まれました。1962年の長男、1965年の次男、1969年に双子、1971年に次女が生まれました。1968年に生まれた双子は男子と女子でした。しかし、女子は生まれたてまもなく病死しました。私は、娘



を失ったことで精神的に大きなダメージを受けました。娘の墓の所で泣きやまない私のことに夫は困ってしまって、住んでいたシネヘンシ西ソムから遠く離れた小さな村ハルガナに引っ越しました。

## 文化大革命とその後

私の夫は、大学の仕事を捨ててハイラルに来たことを後悔しました。もし、フフホトで頑張って仕事を続けていれば、出世したものだろうにと、よく繰り返しました。

1966年、文化大革命がはじまって、私たちの知り合いや同級生たちが次つぎと投獄されました。ハイラルの中学校でいっしょにいたバルガ人のノルジンさんは、モンゴル国から留学して帰ったばかりで、おさない子どもと一緒に投獄されていました。私と夫も、フフホトで仕事をしていたら、投獄されたに違いないと思いました。

夫の働いていた学校では、学生たちが教師に、「大字報」を張りはじめました。それから、まもなく、学校では完全に授業が停止し、他の職場でも仕事をしなくなり、毎日「闘争の会議」に参加するようになります。

1968年に革命委員会が成立されて、正式な「掘肅運動」がはじまりました。内モンゴル人民党員を掘り出して肅正するというものでした。辺境のハイラルでも政治運動がますます激しくなったものです。一部分の人は「5・7幹部学校」に入れられて、「労働者宣伝隊員」に教育されました。この「労働者宣伝隊員」のメンバーというのは、教育を受けていない、清掃員、あるいは無職の漢人ばかりでした。私たちモンゴル人を1969年1月13日までに、内モンゴルと外モンゴル「統一党」の党員と「内モンゴル人民党員」がだれそれであること、また、自分が何人の党員を養成したことなどを言わせるのがこの「宣伝隊」の任務でした。私の夫は毎日呼び出されて会議に参加します。ある日、帰ってきて「私は、共産党員になりたいと申請してなることができなかった。すると、今日は申請せずに、内モンゴル人民党員になっていた」と言って笑いました。私は、双子を妊娠していて、出産予定日が近づいたので、ハイラルに行きました。私は、ハイラルの友人の家に泊まりましたが、友人は汎革命の人を泊めた、と言われました。私は、仕方なく他の知人の家に行きました。すると、また、人がやってきて、「あなたは、子どもを産むことを理由にして、反革命の活動をしている」とさんざん怒られました。そして、ハイラルのホテルでみんな会議をしていると聞いた私は、ホテルに行き、リーダーの1人に「これから2人の統一党員を産むつもりでいる」と話しました。その人は「そんなことを言うな。あなたがこれ以上困らないように彼らに言ってあげるから、早く産婦人科に行きなさい」と言いました。当時、どこの党員であると言わなければ拷問にあっていました。しかし、「内モンゴル人民党員」「統一党員」だと認めれば、痛い目にあわずにすむというので、夫は私の職場に行って、「ドルジハンダは統一党の党員だ」と書いてきました。また、そのとき、拷問にかけて苦しめた何人かの名前も統一党の党員だ

ったと書いたそうです。いま考えるととてもおかしいようなことですが、当時は命にかかわる大問題でした。

ハイラルの病院もおなじような状況でした。私の友だちでもあるタナーさんは産婦人科の医師でした。病院はほとんど機能していない状況でした。タナーさんはときどき会議から抜け出して、私のようにすを見に来ます。「大丈夫ですか。どうですか。我慢してね、また来るから」と言って、すぐ、会議に戻りました。いま思えば、しかたがなかったと思います。1月25日、タナーさんのおかげで双子が無事に生まれました。いろいろ医療条件が悪かったので、5月に双子の片方の女の子が病死しました。

私は、赤ん坊が生まれたばかりでも、家事をすべて自分でこなさなければなりません。夫も義父までも会議に呼び出されて、延々と仲間を「党员」にするのが仕事であるという日々でした。私はとうとう病気になって入院してしまいました。しかし、病院の医師たちが捕まえられるので、治療をしてくれる人はだれもいません。そうこうするうちに、私の娘が亡くなったことで、私は、精神的におかしくなっていました。

私たちには5人の子どもが生まれました。双子の1人が亡くなっています。いま4人の子どもがみな大人になって結婚しました。ロシアに移住してから、ロシアパスポートをもらいました。ロシアの人は、みんな姓と名前を使用していました。私たちがモンゴル語の名前だけを書くと、いろいろな不便があったため、パスポートをもらうとき、必ず姓をつけることになっていました。そのため、私たちの子どもが父の名前バトを姓にして、バトエワになりました。呼びやすいように名前まで変えました。

娘を亡くして、悲しんでいた私に、1971年の冬、元気な女の子が生まれました。1月の寒い朝でしたが、産婆が娘を私の腕に抱かせたとき、私の心の中はとても明るくなるような気がしました。亡くなった娘が戻ってきたような気がして、とても嬉しかったです。1976年になり、文化大革命が終わって、私たちの家族は、ハルガナから南屯に引っ越してきました。生活も少し安定してきました。

内モンゴルの畜産関係の大きなプロジェクトとして、全家畜の品種鑑定をしました。私の大学時代の先生とフフホトの内モンゴル畜牧科学院の技術者たちと協力して仕事をしました。私たちは、フルンボイルのシネヘンの牛馬を鑑定して、精密なデータを収集しました。シネヘン馬を国家基準に鑑定したのです。私はもっとも基本的な初歩的な測量などの作業をしましたが、それが高く評価され、1983年に高級技術者という称号をあたえられました。「内モンゴルの家畜品種調査研究」という調査報告が本になり、1980年に出版されました。私の整理した資料がシネヘンの博物館とウランウデの博物館に展示されました。

**Q:** シネヘン・ブリヤートに関して話してください。

**D:** 私は、ブリヤート人たちの歴史についてそんなに詳しくは知りません。年寄りのブ

リヤート人から少しずつ聞かされたことがあります。シネヘン・ブリヤート人も自分の歴史について記すことも最近、多くなりました。あくまでも、私の個人的な見解ですが、数少ないブリヤート人がお互いのことを「強盗」とか言わないようになってほしいと思っています。

シネヘン・ブリヤート人は何度も移住したことがあります。たとえば、ロシアのアガからモンゴル国のドルノド県、ヘンティ県にもブリヤート人が住んでいます。シネヘン・ブヤート人は、ロシア革命後、迫害から逃れて、フルンボイルにきました。当時のアムバンはダグール人でした。成徳公の「ブリヤート・モンゴル人もおなじくモンゴル人だよ」ということばを聞いて、シネヘン川の沿岸に暮らすように土地をあたえました。それは、1920年代のことです。1945年にソ連軍がハイラルを攻撃しました。それ以前、すでにブリヤート・モンゴル人は、うわさを聞いてシリングルまで逃げて行きました。そのとき、率いていたリーダーの名前をリンチンドルジと言います。また、あだ名で「大きなリンチン」と呼ばれました。彼のことを「強盗」と書いている本がありますが、私はちがうと思います。むしろ、彼は正しい道を選んだはずです。リンチンドルジは、博作儀將軍をたよって北京まで行きましたが、捕まえられました。彼はロバ車に金を積んで台湾に逃げようとして捕まった、という伝承がありますが、確かかどうかわかりません。リンチンドルジは、ロシアで教育を受けた、教養の高い人物だったと言います。

## ロシアへの路

1990年4月30日、私は夫と次男を連れて初めてロシアの土地を踏みました。私は仕事の休暇を取って観光ビザでロシアを訪問しました。定住などのことを考えず、ただ、初めての海外旅行を楽しみました。国境を越えて、私たちはザバイカルスキーという町に着きました。とても清潔で静かな駅でした。私たちは、途中で知り合ったブリヤート人医師の家に行きました。彼はとても親切に私たち家族を自宅に招いた。その晩、チタへ行く列車に私たちを乗せました。

次の朝、私たちは、チタ駅に着きました。しかし、チタからウランウデに行く列車を待っているあいだ、言葉が通じないので、食べ物すら買うことができませんでした。身振り手振りでなんとか買えました。駅でブリヤート人の顔の人を見ればすぐに「あなたはブリヤート人ですか」とブリヤート語で声をかけて、やっとウランウデへ行くチケットを買って、列車に乗りました。5月1日の午後、ウランウデに着きました。駅で、私たちに招待状を出した家族が待っていました。それから、1カ月間、私たちはたくさんの友人たちと知り合って招待されました。

6月のはじめごろ、私たちは、モスクワへ向かいました。シベリア鉄道に乗ってから、5日目にモスクワに着きました。列車の中で食事が美味しくて、とても愉快的な旅でした。私たちは、シベリア鉄道に乗ってモスクワを往復するあいだに、ロシアの広大で素晴ら

しい景色を満喫しました。旅費も高くはありませんでした。モスクワとレニングラードの商店には商品があふれて、安価でした。

私たちは、ロシア製の品質が良く、素敵なデザインのコートを買いました。モスクワの赤の広場でレーニン廟に行きました。レーニン廟には外国人観光客が多かったです。クレムリンとアルバート通りを観光しました。そして、私たちは、レニングラードのエルミタージュ美術館を半日見学しました。レニングラードにあるブリヤート人僧侶アグワン・ドルジーエフ [アグワン・ハンボ] の建てたグンゼチョイネイ寺にも行きましたが、その日は休みでしたので、とても残念でした。

モスクワからウランウデに戻った時に、私の両親の親戚の人びとは噂を聞いて、みなチタ州のアガ・ブリヤート自治管区からウランウデに来て、私たちに会いに来ていました。

6月の末ごろ、私たちはアガ・ブリヤート自治管区に行って、親戚たちに会いました。人びとの話を聞くと、昔ソ連を訪問した観光客は行くところが制限されていて、移動するときは許可をもらわなければならなかったそうです。しかし、私たちは自由に行きたいところに行くことができたので、規制はそれほど厳しくなくなっていたような気がします。

私たちは、チタ州のアガ・ブリヤート自治管区にある私の母の生まれた村を訪れました。その村の名前は、モゴイト区のハルシベルと言います。私たちが到着した時期はちょうど村の60周年の行事と重なって、いろいろな行事を見ることができました。飛行機から落下傘で飛び降りるのを見て本当にびっくりしました。みなさんは、私たちが中国から来たと聞いて、少し遠慮しているような気がしました。私にとって、母の親戚に会うのはとても嬉しいことでした。

ただし、少し困るようなこともありました。私の父の親戚たちとゾガライで会いました。私の父の兄の子どもバドマとも会いました。私の父の家族は南へ移動するとき、何か理由があって、おじバルチルの妻と子を故郷に残して行ったのです。バルチルおじはアガに帰る途中で行方不明になりました。また、一番下の3カ月の娘を養子にだしてから、南へ移住したと言います。私がおじの妻に会ったとき、彼女はとても憤慨しました。「私のことを1,000頭のヒツジと2人の子どもと置いて行ったのがあなたたちだ。いまごろになってよく会いに来たね」と問いつめられました。私は「私の責任ではありません、私も理由を知りたいわ」と正直に答えました。私は自分の親の親戚たちがソ連で裕福に暮らしていることを知りました。家族ごとに自動車を運転していて、大きくて広い木造の家に住んでいました。みな高等教育を受けていました。学校は小学校から大学を卒業するまでに公共教育でした。医療医も国が負担していました。女性は55歳（3人子どもがいる場合）で定年退職になります。男性は60歳に定年になります。年金をみなもらっていました。ソ連の70年代の社会主義制度は社会の安定と繁栄をもたらしていました。

私たちはアガ・ブリアート自治管区からまたウランウデに戻りました。するとパスポートを管理しているところから声をかけてきて、「ソ連での定住を希望するなら、定住の青色のパスポートを申請できます」と説明をしました。私たちは早速ロシアの定住を申請して定住のパスポートをもらいました。師範大学を卒業した次男がヘジンゲ盟の中学校で教師として就職しました。職場から新しい木造の家をもらって、家具も安く買うことができました。1990年の7月のことです。

私たちは帰国してから、退職手続きをして、家と財産を処分してから、完全にロシアに移住しました。私は、子どもたちが2つの国で暮らしていたら、両国関係が悪くなった場合、会えなくなってしまうことを恐れて、できるだけ一緒に暮らさなければと考えました。そのため、私は、フフホトに既に就職して、生活が安定していた長男の家族までロシアに移住させてしまいました。

しかし、ロシアの経済状況は日々悪化しました。私たちが初めて訪問したときと違って、食品も日用品も不足しました。ロシアでの生活はそれほど簡単なものではありませんでした。私たちにとって、早速、自分の家を買う必要がありました。夫は、私の反対を聞かず、ウランウデの中心に古い木造の家を買いました。それが、やがてたいへん正しい選択であることが証明されました。子どもたちが町に往復する拠点ができ、孫たちも交通が便利のためによく行き来したのです。家はウデ川の流れる見える美しい景色の丘の上にあります。

1990年の冬のことです。ウランウデで全世界のブリアート人の大会がありました。モンゴル国の東方県ダシバルバル・ソムからブリアート人の歌舞団が参加していました。その歌舞団のバルジッドと言う名前の女性は、私の継父の弟の娘であることが分かりました。バルジッドは歌舞団の責任者でした。彼女は、私たちにモンゴルへの招待状を出してくれました。

そして、正月が過ぎてから、私の娘のゴアと一緒に列車に乗って、モンゴルへ向かいました。私たちは、列車でウランバートルに到着してから、ウランウデに知り合ったモンゴル人のデンデブさんのアパートに泊まりました。彼らの家は中央郵便局の近くのアパートでした。デンデブさんの妻パドマさんはヘンティ県のブリアート・モンゴル人でした。翌日、私たちはウランバートルの空港からドルノド県のチョイバルサンへ飛行機で発ちました。娘は初めて飛行機に乗るのでとても怖がりながらも嬉しそうでした。チョイバルサンに到着するとバルジッドのご主人のザミヤンさんがむかえに来てくれました。チョイバルサン空港の近くに空き家みたいな建物がたくさんありました。ソ連軍の家族が住んでいた住居でしたが、ロシア人は皆引き上げて帰国したそうです。

チョイバルサンからダシバルバル・ソムまでワゴン車で行きました。むかえに来た若者たちも一緒に乗りました。私たちの旅はとても愉快なものでした。車が草原の路で走っていると両側に何百頭、何千頭のカゼルが走りすぎました。道中、皆の歌声と笑い声

が絶えませんでした。娘が歌を歌うように言われ、歌えないので恥ずかしがりました。ブリヤートの民謡をととても上手に歌う人びとにととても親しみを感じました。ダシバルバルへゆく途中、牧草は膝の高さまであって豊かな牧草地が広がっていました。真冬なのに、雪はわずかししか降っていません。ここの牧民は、夏にたくさんの草刈りをしなくても、家畜十分な食べ物があるんだなと思いました。

ハイラルからダシバルバルを訪れてきた初めてのシネヘン・ブリヤート人として、私たち母娘は大歓迎されました。ダシバルバルには、私の継父になるグリンテへの弟とその子孫が暮らしていました。本当に大家族でした。その弟の息子チョクトさんには10人の子どもがいて、1人だけが女子で、他はみんな男子でした。私たちは大いに歓迎されました。

人びとは家族ごとにヒツジ1頭を用意して私たちを歓待しました。旧正月が近くなっていたので、皆たくさんのポーズ〔肉まん〕を作って、自然の冷蔵庫のなかで山盛りを用意していました。私たちは家をたずねるごとにポーズを食べ、飽きるほど食べました。夜になると、人びとはソムのクラブに集まって、蒸留酒を入れた大きなやかんから杯に蒸留酒を注いで、肉を食べて、歌を歌いました。ダシバルバルは文芸の面でも発展していました。モンゴル国の有名な芸術者ジャルガルサイハンと大作家ロドイダンバはいずれもこの出身でした。ソムには小さな博物館があって、ブリヤート人たちの歴史、生活風俗習慣を展示していました。

私たちはとても楽しい1週間を過ごして、チョイバルサンに戻りました。チョイバルサンに住んでいた親戚の皆さんが3頭の羊肉を箱に入れてくれて、私たちは羊肉と一緒にウランバートルへ発ちました。ウランバートルからウランウデに戻りました。

## ツェベグマさんと再会

1991年の夏、私たちは、再びウランバートルを訪れて、ツェベグマさんと再会しました。ツェベグマさんは私の祖母の弟バルダンの娘でした。ハイラルにいたとき、私と祖母の住んでいたゲルによく遊びに来ていました。

私たちはウランバートルの郊外のダンバダルジャーにある家にきました。ツェベグマさんと再会して、私たちの今まで暮らした、ロシアに移住したことを話しました。ツェベグマさんは私の娘を見て、「この子には祖母ザリマの面影があるね。だけど、ザリマのほうがかもっと背が高かったよ」と言いました。ツェベグマさんの婚のパートナーツォグトさんはモンゴル文化芸術大学の学長でした。娘のイミナは、東ドイツでコンピュータを学んだ博士でした。今、モンゴル科学技術大学の教授になっています。ツェベグマさんは、日本の歴史作家、司馬遼太郎の書いた『草原の記』の主人公です。彼女の一生は自由のために戦った一生です。また、日本とモンゴルの文化交流に大きな貢献したために、日本の天皇から勲章をもらったそうです〔1999年、勲五等宝冠章〕。私たちは、ウ

ランバートルで再会してから、私の娘のことで大変お世話になりました。

ツェベグマさんの娘婿になるバートルツォグトさんが私たちにモンゴルで定住する手続きをしてくれました。娘のゴアがウランバートルに残って、モンゴル語日本語通訳の仕事をしました。ハルハ・モンゴル語をまだよく話せないうえ、日本語も上達していないので、苦勞することもありました。しかし、娘の仕事先からアパートまで与えてくれて、私たちはウランバートルで住居ができたことを喜びました。

ツェベグマさんは2004年の3月15日に亡くなりました。私は、ツェベグマさんの亡くなる前に、ウランバートルへ会いに行きました。その時に病気で弱っていたツェベグマさんから、モンゴル文字で手紙を書くよう頼まれました。その手紙は、イギリスに暮らすダゲール人のオノン・ウルグング宛ての手紙でした。私と長男がウランウデからウランバートルに行って葬式に参加しました。ツェベグマさんの人生は、モンゴル民族のために、また、自由のために懸命に頑張った人生でした。私にとって、彼女は生きていく模範になっていました。

## ロシアでの生活

1992年にロシア大統領になったエリツィンがフランスを訪問し、ロシア帝国時代に海外に亡命した人びとの子孫にはロシア国籍を与えるようにすると宣言したのでした。私は母の生まれたアガ自治管区のハルシベル村に行って、母の出生証明をもらいました。私はその証明書を持ってパスポートを管理している役所に行きました。「あなたはロシア国民ですから国籍を回復することになりますが、あなたの夫と子どもも国籍を選択する権利がある」と説明を受けました。私は、子どもたちと別の国に暮らしてバラバラになりたくないと思い、全員にロシア国籍を申請しました。2001年に、夫もロシア国籍になりました。

1994年、娘も結婚してから、モンゴルからウランウデに戻って、プリヤート国立大学の東洋学部就職しました。プリヤート大学は、東洋学部を作ったばかりでしたので、私の娘ゴアは初めての日本語講師だったと思います。彼女は5年間大学で働きました。その関係で日本の大阪に留学することになりました。大学で働いているあいだにロシア語の勉強もしました。

家族がバラバラになって、違う国で暮らすようなことをできるだけ避けてきましたが、一緒になってからも、私たちの暮らしは楽なものではありませんでした。

私たちと同じようにフルンボイルのシネヘンからプリヤート人が移住してきました。子どもたちを学校に入れて、大人たちがさまざまな仕事につきました。

中国の服装、雑貨がバザーで飛ぶように売れました。満州里から安い値段で商品を買ってきて、ウランウデの青空市場で倍に値段にして販売することが多かったです。しかし、ロシアの混乱した経済がだんだん軌道に乗ってくると商品の販売の取り締まりが厳

しくなり、人びとがだんだん正規のビジネスをするようになります。ロシアから木材の輸出がとても盛んになった時期もあります。

ブリヤート民族の特徴的料理は人気があって、人びとが食堂を開くようになっていきます。いまはフルンボイルからロシアに移住したブリヤート人の、1つの家族が1つの食堂を経営しているぐらい人気すごいものでした。「シネヘン・ポーズ」というブランドができたぐらいに、ウランウデからさらにロシアのなかでも美味しい料理として有名になりました。

1993年、私たち、フルンボイルから来たブリヤート人たちが「同郷会」という協会団体を作りました。私たちは、この団体を作ったのが、お互い助け合う意味がありました。私たちは、ロシアに引っ越してきた理由について以下の3つにまとめました。

- ① 私たちは祖先に土地にいつも帰りたいたいという気持ちがありました。
- ② ブリヤート・モンゴル人の他の民族の人々と結婚せず、少ない人口の中で通婚することが多かったです。そのために、血縁がだんだん近くなったことが子孫の成長に悪い影響を与える可能性が出てきました。
- ③ 国際情勢の中でロシアも中国も昔と違って、比較的自由に行き来することができるようになりました。

この3点は、私が「同郷会」を設立する会議で述べた内容です。私たちはお互い助け合って、問題があった場合にみんなで協力して解決することが設立の目的でした。具体的には、毎年、旧正月などに集会があります。年長者の皆さんに挨拶をして、また、よく頑張っている若者を奨励したりしました。私は初代の代表を務めました。私の次はブリヤート人でモンゴル相撲の選手だったトゥグテムが仕事をひきつぎました。それから若者たちが続けてがんばっています。今年は設立20周年の記念活動があります。この協会の存在がブリヤート共和国の伝統文化習慣を復活させることに大きな貢献をしました。

シネヘンのブリヤート・モンゴル人は、ブリヤート共和国では、ほとんど忘れられて着なくなっていた民族衣装を復活させました。ウランウデのブリヤート人の民族衣装の全部がフルンボイルからきたシネヘン・ブリヤート人が裁縫しました。また、モンゴル・ゲルで暮らす文化をブリヤート共和国のブリヤート人たちに紹介して思い出させたのです。ブリヤート・モンゴルの昔からの民謡を歌って、国民的な歌手になったシネヘン・ブリヤートモンゴル人がいます。ロシアのすぐれた教育環境のもとで一番恵まれたのがシネヘンから来た子どもたちでした。彼らは、進学して、モスクワ、サンクトペテルブルク、ノボシビルスクなど有名な大学に進学することができました。もし、フルンボイルにいたとしたら、考えられないことです。ブリヤート共和国の教育環境が良かったことが私たちの最大の収穫です。

2000年の春、私は甲状腺をわずらい、ハイラルに戻って治療してもらいました。最初



はどんな病気か診断できず、痛になったと思われていました。体がとても弱くなったので、しばらく、ハイラルで休養していました。私たちの子どももみな自分の家庭があり、生活も安定してきました。私たちも定期的にハイラルに戻ることもあったので、南屯でアパートを買いました。夫と2人でときどきハイラルにも戻って、過ごすことがありました。2013年の1月2日に、私の夫が南屯の病院で亡くなりました。76歳でした。亡くなるまえの夜に突然、「ロシアの家に帰りましょう」と言いました。私は、「そうですね。春になったら、帰りましょう」と答えました。それが私たちの最後の会話でした。また、夫の遺言になりました。夫の魂はロシアの大地に戻ったと私は思っています。

夫と私には世界を旅行する夢がありました。それは実現できませんでしたが、私たちもできるだけ、いろいろなところに行きました。私の妹スベルマの次女サイハンはモスクワに暮らしています。私たちは彼女がウランウデに帰っているあいだ1カ月間モスクワに滞在しました。私たちは、名所を訪れて、美味しい料理を食べて、楽しい時間を過ごしました。

また、2001年の夏、私たち夫婦でモンゴルへ行きました。ウランバートルから近いテレルジでツェベグマさんが2004年に建てたキャンプで1週間過ごしました。キャンプには外国人がたくさん訪れてきて、にぎやかでした。ウランバートルからチョイバルサンに飛行機で行きました。さらに、チョイバルサンから飛行機でハイラルまで行きました。

2012年5月、私たち夫婦で娘が暮らす東京を訪れました。当時、夫は不調でしたが、日本料理を食べ、東京の名所を訪ね、楽しい思い出をたくさん作りました。

私たちは結婚してから50年一緒に暮らしました。青少年時代から戦争また、いろいろな政治運動のなかで翻弄されながら、人生の半分以上を過ごしてしまいました。ゴルバチョフのペレストロイカによって、共産主義を実現させるという虚無な夢から目覚めて、自分の祖先の土地に戻る決心をして、バイカル湖岸に帰ってきました。現在、広大で豊かな自然、美しい山やま、大らか人びととやさしい人情などにすっかり溶け込んでプリアートの大地に暮らすようになりました。

## 24. ガルサンドルマ

### 紹介

ガルサンドルマ氏はシネヘン・ブリヤート人である。長年にわたって教育事業にたずさわってきた人である。エヴェンキ旗南屯のブリヤート小学校では、教頭を務めていたそうである。また、旗の教育局にも勤めていた。のちに、当時の政策に応じて牧民になったそうである。私たちが初回のインタビューをした時、ガルサンドルマ氏は76歳であった。3年後にふたたびインタビューをしたときも健康で明晰なままであった。

2010年8月17日の午前に初回のインタビューをし、2013年7月16日の夜にふたたびインタビューをした。2013年8月29日に3度目のインタビューをした。インタビュアーはサラングレル、ソヨルマ、小長谷有紀。

### 生活史

**Q:** では、経歴を紹介していただけますか？ご自分の生まれ故郷、幼少時代のおもしろいこと、氏姓、兄弟親戚、お仕事などについてお話しいただけますか？

**G:** 私の名前はサンボギーン・ガルサンドルマと言います。1934年生まれ、酉年です。1947年に女子養成クラスで勉強し、1948年春にハイラルの中学校に入りました。その予備クラスで勉強していました。そこからさらにジャラントン（扎蘭屯）に行って師範学校で勉強しました。当時、私たちの数学、国語2つの授業の先生はダランタイ、サラングワの両先生でした。その2人の先生が私たちを連れてジャラントンの師範学校に行きました。私たちを連れて行って、また連れて帰ってきました。そこで私は1952年7月に学校を卒業しました。1952年に卒業して帰ってきて陳バルガ旗のテネヘン・ソムに配属され、そこで教えました。1953年の秋にそこからエヴェンキ旗に転勤してきました。そして南屯完全小学校で教えました。のちに教頭の仕事も担当しました。当時の教え子に、ソヴド、ホヴドなどがいました。教え子たちはいつも「ガルサンドルマ先生はいい先生です」と話していました。私の教え子たちはいま偉くなっています。

当時、働く若者たちを田舎に安住させる「安家落戸」という政策が推進されていました。その政策の呼びかけに応じて、私は1963年に田舎に行きました。私はバヤンホショー・ガツァに行きました。そして今までバヤンホショー・ガツァで暮らしています。私はバヤンホショー・ガツァに来て牧民になりました。50円の月給をもらっていました。バヤンホショー・ガツァで牛乳をしぼる仕事に従事しました。文化大革命のなかではよく批判されましたよ。それはもうとにかく。

私はモドガン・ハルガナ姓です。サンボーは私の養父です。父のフルネームはチュルーニー・ジャヴィーン・サンボーと言います。それより上、大分上にハヴダイという人がいたそうです。当時、父のサンボー家ではおよそ200頭のヒツジ、50～60頭のウマ、20

数頭のウシをもつ、そんな家でした。大金持ちではないけれども、暮らしぶりは中流の家でした。養母はホアサイ姓で、ジャヴィーン・ゴンビーン・メンデグという名前の人でした。午年でした。1950年に45歳で、病気で亡くなりました。養父母には実子がなく、よそから2人の子どもを養子にむかえました。それはルハムスレン兄さんと私の2人です。2人の養子兄妹でした。兄は現在90歳になりました。養母は早く亡くなったため、兄と私たち2人はよその家でお世話になっていました。トリ・マハラズという家でお世話になっていました。養父は未年で、50歳を越えてなくなりました。養父が亡くなったとき、兄と私はすでに大きくなってそれぞれ結婚していました。養父は1965年になくなりました。実父は私が生まれたとき、すでに亡くなっていたそうです。実母は90歳まで生きて1984年に亡くなりました。

私は1953年の冬に嫁ぎました。ジャムスレンギーン・ボルドという人と結婚しました。夫は旗の公安局に勤めていました。文化大革命のとき、旗の政治協商委員会（政協）に勤めていました。のちに1990年に亡くなりました。養父のジャムスレンは早く亡くなっていました。夫がわずか2歳のときに亡くなったそうです。養父はシャライド姓でした。養母はドルゴルという名前の人でした。養母はシャライド姓だそうです。養母は母が実家にあずけた子でした。夫は3人兄弟で、1人が養子に出され、2人が実家で育てられました。夫は長男でした。そのため夫が実家の跡を継ぎました。まんなかの息子を養子に出しました。末子が家にいるとき、私たちは結婚しました。私の嫁ぎ先はかなり貧乏な家でした。私は嫁として嫁いだ当時、10数頭の家畜、2～3頭のウシをもっていました。養母は私たちと一緒に暮らしながら1980年代に消えました。私たちブリアート人は、亡くなることを消えると言います。

私の実父母から、私たち兄弟10人が生まれました。実父の名前はサンピルと言います。実母の名前はドルゴルと言います。実母の前の夫はマハラズと言います。マハラズとのあいだに5人、サンピルとのあいだにも5人の子どもが生まれました。マハラズの5人の子どもは、ハンダマ、ヤンジマ、ブジド、ドラムジャヴ、ゲレグニマと言います。ゲレグニマはラマ僧でした。ドンドグ、ドルマ、バドマ、ニマ、私たち5人はのちの父の子どもです。のちの父の名前はサンピルと言ひ、私の実父です。サンピル父はもともとロシアにも家庭がありました。ロシアからこちらに来るとき、ロシアに1人の娘を残し、1人の娘を連れ出してモンゴルに残して来たそうです。ロシアに残した娘は今も健在です。顔が私たちととても似ています。

私には8人の子どもがいます。4人の息子、4人の娘がいます。最初の3人の子どもは病院で生まれました。ほかは家で生まれました。1番上の子はセテムジドと言ひ、午年で1954年に生まれました。小学校の教師でした。2番目はアルゲルという息子、未年で、1955年に生まれました。シネヘン西ソムの党支部の書記、旗の牧畜局の副局長、南屯の政治協議委員会の主任、書記でした。そこで定年をむかえました。3番目はダンダ

ルと言い、申年で1956に生まれました。4番目はトゥンガラグと言い、戌年で1958年の生まれです。バヤンホショー・ガツァの牧民です。その次にセンデルという娘は兔年です。旗の政治協議委員会で働いて、のちに退職しました。給料をもらったまま退職するという政策にしたがって仕事をやめました。もともとは事務室のタイプライターを勤めていました。今は何もする仕事がなく、給料をもらったまま「いわば年金」でいます。その次の子はツェンゲルという娘で、あなたたちがご存知です。ダシニャムの妻です。辰年で、1964年生まれです。イミン・ソムで牧民をしています。その次がツェンデという娘、1971年の生まれです。西ソムにあるノタグ〔「ふるさと」の意〕幼稚園で働いています。

もともと子どもたちの父親、私の夫も、旗の人民代表大会常務委員会の主席を勤めながら定年をむかえていました。そのために息子、娘がそこに働いているようです。

注記：ガルサンドルマ老人はみづからの養父母の名前について、私たちの2度のインタビューで異なる名前を話していた。初回では、養母はホアサイ姓で、ジャヴィーン・ゴンビーン・メンデグという名前の人だったと話した。しかし、のちのインタビューで養母の名前もドルゴルだといい、実母と同じだと話していた。養母には2つの名前があったとも考えらる。プリアートの女性には2つの名前をもっている事例が多く見受けられる。実家で使っていた名前を嫁ぎ先で変えることは一般的である。さらに興味深いことに、養母もドルゴルという名前であることである。もし、養母が本当にドルゴルという名前だったとしたら、ガルサンドルマ氏の実母、養母、養母の3人が同じ名前だったことになる。